

# 富士宮市の自然

第二次富士宮市域自然調査研究報告書

富士宮市





## 発刊のことば

～豊かな自然を守るために～



富士山麓に広がる自然，豊富な湧水。その中で，富士宮市民は快適で潤いのある生活を営んでおります。

この豊かな自然を次の世代に残すことは，私たちに課せられた使命とも言えます。そのために，自然の実態をよく掴み，理解することが必要です。

市では，昭和59年から富士宮市域自然調査研究会にお願いし，その研究を進め，昭和63年3月に「富士宮市の自然（第一次研究報告書）」を発刊しました。

それに引き続いて昭和62年からは，変化する自然の実態を把握するため，第二次富士宮市域自然調査研究をお願いし，以来7年にわたる調査研究に取り組んでいただきました。

その成果がまとまりましたので，このたび「富士宮市の自然（第二次研究報告書）」として発刊することになりました。

「富士山と共に歩む水と緑の国際文化都市」を目指す富士宮市として，この報告書が市民・関係者の参考となり，富士山麓自然環境の保護に対する意識が，いっそう高まっていくことを期待致したいと思います。

終わりに，この調査研究にご尽力下さった自然調査研究会員の皆様をはじめ，資料提供など調査にご協力下さった皆様方に心より感謝申し上げます。

平成7年3月

富士宮市長 渡 辺 紀



## 目 次

## 発刊のことば

## 〔地形・地質〕

I 西富士地域の地形・地質について .....	1
ま え が き .....	1
1 富士山の概要 .....	1
a 地 形 (裾野とその利用) .....	1
b 地 質 .....	1
c 湧 水 .....	2
2 西富士地域の概要 .....	2
a 根原周辺地域 .....	3
b 麓道路と国道の合流点 (料金所・グリーンパーク) 地域 .....	3
c 猪之頭から内野の地域 .....	4
II 浮遊性有孔虫からみた富士川中流地域の層序 (中間報告) .....	8

## 〔陸生動物〕

は じ め に .....	21
提 言 .....	21

## 〔獣 類〕 (哺乳類)

1 調 査 方 法 .....	23
2 調 査 地 域 .....	23
3 調 査 結 果 .....	23
(1) 天 神 山 .....	23
(2) 朝 霧 周 辺 .....	23
(3) 人 穴 上 (ジャンボリーゴルフ場南) .....	23
(4) 佐 折 .....	23
(5) 猪之頭西及び田貫湖周辺 .....	23
4 む す び .....	23
5 足形鬼橋付近の調査結果 .....	23

## 〔鳥 類〕

は じ め に .....	27
---------------	----

## II

1 調査地域	27
2 調査, 記録方法	27
3 調査結果	27
(1) 朝霧高原地域	27
(2) 富士山二合目地域	33
(3) 富士山五合目地域	37
(4) 田貫湖周辺地域	40
(5) 浅間大社, 潤井川周辺地域	45
(6) 明星山, 白尾山周辺地域	50
(7) 富士桜自然墓地公園のカナダガン	55
(8) 田貫湖東地域特別調査	57
(9) 天神山地域特別調査	61
(10) 足形鬼橋付近の野鳥生息状況	65
4 提    言	65

### 〔昆    虫〕

#### I 〔鞘 翅 目〕 (甲虫類)

はじめに	67
1 調査方法	67
2 採集方法	67
3 調査結果の科別リスト	67
特別調査1 表富士の特徴的な甲虫	80
特別調査2 朝霧牧草地の甲虫	82
特別調査3 富士山西斜面のアリガタハネカクシ類の分布	87
特別調査4 富士宮のホタルについて	90

#### II 〔鱗 翅 目〕 (蝶類)

はじめに	99
1 調査方法	99
2 調査地域	99
3 調査結果	99
(1) 天神山地域	99
(2) 田貫湖・小田貫湿原周辺地域	100
(3) 富士山一合目「富士山麓山の村」地域	102
(4) 大倉ダム上流の佐折地域	102

(5) 猪之頭, 麓, 朝霧高原 .....	103
(6) 上井出周辺 .....	105
(7) 人穴周辺 .....	105
(8) 調査環境別調査結果 .....	105
4 む す び .....	106
5 ヒョウモンチョウ類の分布と生育地 .....	106
はじめに .....	106
(1) 調査地域と調査方法 .....	106
(2) 各種の分布と生息地 .....	106
6 足形鬼橋付近の調査結果 .....	109
7 富士見小学校におけるオオムラサキの飼育活動 .....	110
はじめに .....	110
(1) 飼育活動の経過 .....	110
(2) 飼育状況 .....	111

### III〔直 翅 目〕(バッタ類)

はじめに .....	115
1 調 査 方 法 .....	115
2 調 査 結 果 .....	115
3 地域別生息状況 .....	119
4 個別生息状況 .....	119
5 富士山の大宮林道, 吉原林道付近の調査報告 .....	121

### IV〔ト ン ボ 目〕(トンボ類)

田貫湖と小田貫湿原のトンボ .....	123
はじめに .....	123
1 調 査 方 法 .....	123
2 採集と観察の記録 .....	123
3 トンボ相の特徴と考察 .....	127
4 足形鬼橋付近の調査結果 .....	127

### 〔水生動物〕

#### 〔魚 類〕

はじめに .....	129
1 調 査 結 果 .....	129

## 〔水生昆虫〕

芝川水系の水生昆虫 .....	133
-----------------	-----

## 〔気象〕

はじめに .....	135
1 観測地点及び観測項目 .....	135
2 観測地点の選定理由 .....	135
3 気象観測を継続するために .....	137

## 〔気温〕

1 調査方法 .....	139
2 データ処理方法 .....	139
3 観測地点 .....	139
4 調査結果 .....	139
(1) 観測地点別気温の変化 .....	139
(2) 観測地点別気温の極値 .....	141
(3) 年較差 .....	142
(4) 夏日・冬日等の日数 .....	143
5 気温を観測して .....	144

## 〔降水量〕

はじめに .....	145
1 観測地点 .....	145
2 観測方法 .....	145
3 データ処理方法 .....	145
4 統計期間 .....	145
5 降水量の概況 .....	145
6 各地点での年変化 .....	145
(1) 月平均降水量 .....	145
(2) 年次別降水量 .....	145
7 季節と降水量 .....	145
8 調査結果 .....	145
(1) 月別降水量 .....	146
(2) 年次別降水量 .....	150
(3) 季節別降水量 .....	150



## 〔風〕

1 調査方法	151
2 観測地点	151
3 観測方法	151
4 データ処理方法	151
5 統計期間	151
6 調査結果	151
(1) 各地点の年変化	151
a 風向	152
b 風配図	159
c 風速	163
(2) 季節と風	164

## 〔雲〕

1 調査のねらいと方法	167
2 資料処理方法	167
3 観測地点	167
4 調査結果	167
(1) 月別の富士山の見え方	167
(2) 気圧による富士山の見え方	167
5 雲を観察して	169

## 〔植 物〕

調査結果	171
1 県境付近の植物	171
2 天子ヶ岳の植物	173
3 根原地区の植物	175
4 東海自然歩道（根原～建設大学校前）の植物	177
5 朝霧高原の植物	178
6 猪之頭の植物	184
7 小田貫湿原の植物	185
8 白糸の植物	189
9 天神山自然観察の森の植物	196
10 天母山の植物	199
11 富士山新五合より遊歩道の植物	200

12	西白塚周辺の植物	201
a	夏に見られる植物	201
b	秋に見られる植物	203
13	粟倉周辺の植物	204
14	富士宮北高校西側から富士宮西高校南側の畑の周辺の植物	205
15	人穴小学校周辺の植物	207
16	白尾山（白尾台）の植物	208
17	潤井川両岸（青見橋から富丘橋まで）の植物	211
18	明星山の植物	214
19	貫戸東側の丘陵地の植物	216
	あ と が き	219
	富士宮市域自然調査研究会研究員名簿	220



# 地形・地質

加 納 實  
遠 藤 英 男  
植 松 征 矢  
惟 村 勝  
小 林 睦  
小 川 賢 之 輔  
(特別研究員)



# I 西富士地域の地形・地質について

## まえがき

地形・地質部会は、今後、各企業の開発計画の拠点となると予想される朝霧高原について、津屋博士の富士火山地質図（1968）をもとに、主として国道139号線を中心とした地域の調査巡検を行なったので報告する。

## 1 富士山の概要

### a 地形（裾野とその利用）

典型的なコニーデ火山である富士山の山容は、極めて美しい放物線を描いて広い裾野の地形を形成し、東は丹沢山地及び箱根火山に、西は天子（毛無）山地に、北は御坂山地及び都留山地に、南は愛鷹火山に接し、緩やかに傾斜した広い高原を作っている。この山容の美しい放物線も、よく見ると海拔1,200～1,500mのあたりで若干折れ曲がっているのに気付く。この地点が、旧登山道のおよそ一合目に当たる。この折れ曲がったあたりから、富士山の裾野とみることができる。

富士山の裾野は、北側は山林が多く、東側（御殿場側）は、広大な草原であり旧陸軍の演習地であったが、戦後自衛隊の演習地に広い地域が使用されている。またゴルフ場にも利用されている。東名高速道路の御殿場インターがあり、最近裾野インターの開設や国道246号線の整備が急速に進み、最近大企業の進出が目立つ。それに比べて南側（富士市側）は、道路整備があまり進んでおらず、昔から植林及び農地（畑地）に広く利用されている。またゴルフ場にも利用されている。南側から西南の富士宮市側は植林及び農地（畑地）に利用されている。西側は広い草原で旧陸軍の演習地であったが、戦後入植者が開拓し酪農の牧草地や放牧地として広く利用されているが、草原の所も多い。ゴ

ルフ場としても利用されている。

### b 地質

富士火山の構造は、津屋博士（1968）の研究によって明らかにされた。これによれば、富士火山は外見に似合わず複雑な構造をしている火山である。つまり、新第三紀中新世の地層の上に形成された小御岳火山、その上に古富士火山、その上に富士火山が噴出したという三重構造の火山であるという。

小御岳火山は、標高1,700mくらいよりスバルラインの終点（富士山五合目）小御岳神社（標高2,300m）にかけて、露出しているだけである。小御岳神社のあるところが小御岳火山の中央火口の西の壁にあたるという。とすると小御岳火山は2,300m級の火山としてそびえていたことになる。

岩質は、愛鷹火山初期の噴出物に似た塩基性安山岩であることから愛鷹火山（越前岳1,504m）や箱根火山（1,439m）と、ほぼ同時代の更新世中期（十数万年前～数十万年前）に活動したと考えられ、小御岳火山が2,300m級と考えるとかなり大きい山体であったと推定することができる。

この小御岳火山の山体は、洪積世末（約8万年前）に現在の富士火山の中心付近に火口をもつ古富士火山の噴出物（玄武岩質の岩塊や火山砂、集塊質泥流など）によって殆ど覆われている。この集塊質泥流のような火山噴出物は火口からかなりの高温で噴出されたもので古富士火山は洪積世末の氷河の最盛期であった。したがって噴出物によって、氷河は溶かされ、水蒸気爆発をおこし噴出物は砕かれ、溶かされた氷河の水とともに泥流が発生した。泥流は火口より各方面に流れた。北東は桂川に沿って流れ、南は星山丘陵をつくり更に駿河湾に流れ込む（推定）という流動性に富んだものである。古富士火山の集塊質泥流の岩質は、主として

カンラン石・普通輝石・しそ輝石などを含む玄武岩である。この集塊質泥流は、固結度が高く不透水性であるから湧水の基盤となっている。

その古富士火山噴出物の上を、富士火山の噴出物が覆っている。富士火山の噴出物は、ある時は大量の溶岩を火口から四方八方に流し、あるときは火山礫や火山砂・灰を大量に噴出し、これを何回となく繰り返し、現在の美しい姿をつくり上げたのである。

津屋博士は富士火山噴出物を旧期溶岩類・中期溶岩類・新期溶岩類と分けている。

### c 湧水

富士山の裾野に広がる高原一带には湧水は殆どない。これは新富士火山の噴出物は、比較的透水性が高いからである。古富士火山の集塊質泥流と新富士火山の溶岩の接しているその末端の地表に露出しているところに、比較的多く湧水を見ることができる。これは、新富士火山の噴出物が比較的透水性が高いのに対し、古富士火山の集塊質泥流が不透水層をなしているからであり、この様子は白糸の滝及び陣馬の滝で観察することができる。

湧水の従来の説では、地下における古富士泥流などによる不透水性表面の等高線の谷の所に地下水が集まり流下し、地表に表れて湧水となるとされていた。ところが、この地下川の説だけでは説明のつかない現象があらわれた。

それは、富士宮市立図書館の建設基礎工事で掘削したところ自噴し、湧玉池の湧水やその周辺の井戸水が枯渇または極端に減少した。また、地下水の汲み上げによって、上流地区の湧水が枯渇・減少したところもある。

湧水が、地下川を流れ下り地表に現れ湧出するメカニズムならば、地下川の下流の地域で汲み上げることによって、上流の地域水が枯渇することはないはずである。

また、平成3年9月長く続いた大雨の時（富士五湖の水面が異常上昇した時）猪之頭水源地では、大雨の

一週間後、湧水が異常に増え約一箇月以上も続いた。しかも水温は10°Cで変化はなかった。このことは、単に雨水が地下に浸透して湧水として湧き出るという簡単なメカニズムだけではないと考えられる。

このことについて、静岡大土隆一名誉教授はボーリングのコアや孔内の湧水の様子及び湧水の分析などの結果、次のように説明している。

『新富士溶岩のコアを詳しく調べてみると、緻密な溶岩部分を中心にその上下に多孔質部分最上部が破碎されてクリンカー状になる溶岩のサイクルが重なっており一つのサイクルは一回の溶岩流（単層）を示す。ところによりそれが幾つか重なっている。溶岩単層と単層の間のクリンカーないし多孔質部分から湧水している。つまり、この部分が地下水の通路である。このところに、地下水が滞留しており、その詰まった水が上部の圧力で押し出され湧出する。

しかもトリチウム（半減期12年）によると50年位前の水が現在湧出している。』という。

このようなことから、開発による地下水の汚染については、すぐに現れることもあろうが、50年位後に現れることもあり得るので、開発については行政当局の十分な検討が必要となってくる。

## 2 西富土地域の概要

富士山の西斜面の裾野が、その西に急峻にそそり立ち南北にのびる第三紀中新世からなる天子山地に接し、北は山梨県境、南は白糸滝・上井出あたりまでのおよそ15kmの地域を西富土地域という。その中央部には、西にそして南に緩やかに傾斜する高原状の地形が広がる。このあたり一帯が朝霧高原であり、この朝霧高原は草原がほとんどを占め、昔から『遠ッ原三里』と呼ばれ富士の巻狩りの地として、音止の滝・曾我兄弟の隠れ岩などと共に歴史的によく知られている地である。

この地域は富士火山及びその寄生火山の噴出物で覆われ、表土は浅く、農耕地、植林など農林業には適し



ない所が多い。

溶岩の分布状態は、地質図にあるように南（白糸滝付近）から北に、白糸溶岩・横手沢溶岩・富士見橋溶岩が低地を流れ、その間に古富士火山噴出物（泥流・砂礫）が島状に取り残されたように分布する。更にその北に猪之頭溶岩・朝霧溶岩、その北に大室山から流れ出た根原溶岩、これらの溶岩が国道139号線の両側にちょうど瓦を並べたように上に上に重なっている。そして、それら溶岩流の東側に、南（上井出付近）から北に大沢の扇状地堆積物・犬スズミ山から流れ出た犬スズミ（人穴）溶岩・本体溶岩といわれる菖蒲沼溶岩・二ツ山から流れ出た二ツ山溶岩が分布する。

これら溶岩流は、流動性に富むため溶岩の末端に急斜面を作ったり、表面が早く固まり、内部の圧力が高くなり上に押し上げられ溶岩からなる円頂丘、つまり溶岩塚（ショウレンドーム）を作ったり、また何回かにわかれて流れ出たために階段状の地形を作ったりして、平坦な高原に、局地的に起伏を作っている。

朝霧高原一帯は、上に述べたように溶岩で覆われており、湧水はなく富士山には大小数多くの沢があっても、流水はなく空沢で大雨の時のみ大量の流水が見られ、時には氾濫をおこし大量の土砂を流したりする。これに対し、西側の南北にのびる天子山地にはいくつかの沢があり、大小の扇状地を作っている。その沢にはかなりの流水がある。しかしその沢の作った扇状地の途中で地下に浸透し空沢となってしまう。湧水地域は、水源地で知られる猪之頭より南の地域であり、水源地を源とする芝川に沿って湧水が多い。

#### a 根原周辺地域

根原地域一帯は根原溶岩に覆われ、朝霧溶岩とは数メートルの標高差がある。根原溶岩は輝石を含むカンラン石玄武岩で斑晶質であり、朝霧溶岩はカンラン石玄武岩で斑晶が小さく肉眼でも判別できる。根原集落から北には樹木があり植林もあるが育ちはあまり良くない。この地域及び南の平坦地は表土は浅く、国道の東側は西側に比べて特に浅い。この地域では、表土が

流れ込んで比較的厚くなっている土地で高原野菜を栽培している程度で、改良して牧草地として利用しているほかは草原である。

根原の南一帯は、西南にかけて緩やかに傾斜する地域であり、建設大中央訓練所及び朝霧ゴルフ場もある。西側の天子山地の扇状地に接するあたりは低地で、平成3年9月の大雨の時の冠水の跡が各所にみられた。この時は東海自然歩道の一部も冠水したと思われる跡もあった。

根原の西のA沢には、かなりの水量があり貯水池を作り貯水しているが、水がかなりオーバーしている。水資源に乏しい朝霧高原の開発には、今後第二貯水池の設置も必要になってくるであろう。また、貯水池から溢れた水は数メートル流下し地下に浸透している。こうしたことから、地下水の汚染に十分注意する必要がある。

#### b 麓道路と国道の合流点(料金所・グリーンパーク)地域

料金所のある一帯は、広大な平坦地である。牧草地や放牧地として利用されている。このあたりに点在していた溶岩塚（ショウレンドーム）が土地利用などの改良工事のため取り壊されてしまったものもある。特に料金所すぐ東の国道沿いにあった溶岩塚は資源として保存すべき一つであった。

料金所のあたりは、朝霧溶岩の下部の猪之頭溶岩で猪之頭水源地の北の急斜面まで続いている。猪之頭溶岩の中でも、輝石を含むカンラン石玄武岩と無斑晶のカンラン石玄武岩があり、津屋博士は前者を猪之頭溶岩I、後者を猪之頭溶岩IIとIIIに分類している。また野外活動センター・ジャンボリーゴルフ場から人穴一帯には犬スズミ溶岩が分布する。この犬スズミ溶岩は流動性に富み楕状丘的地形を成し、昔から富士講信者の修業の聖地（聖穴）として知られる人穴風穴や日本最長（総延長約2,139m）の三ツ池穴もこの溶岩である。また、犬スズミ溶岩は輝石を含むカンラン石玄武岩である。

麓集落の西には、かなり水量のある沢があり、急峻

な天子山地から押し出された扇状地がある。この沢の水も扇状地の途中で地下に浸透し普段は空沢となっている。したがって、地下水の汚染については、十分な注意が必要である。この沢の水も乏水地帯の朝霧高原の資源として、やがては利用する時がくるであろうと思う。

また、麓の裏山には武田氏が採掘した金山がある。金山への道の途中山腹の飯場跡と思われる石積などから、当時かなり繁栄していたことがうかがえる。この鉱脈は、岩体の割れ目に岩罅の末期である鉱物を含んだジュースが充填してできた金銀の鉱脈である。鉱道の中には、当時そのままと思われるくらい保存のよいものがあり、歴史的遺産としての観光資源の一つであろう。(写真参照)

金鉱山への道は荒廃して、所々はっきりしないが、金鉱山跡への略図は資料の通りである。



金鉱山採掘跡

### c 猪之頭から内野の地域

この地域は、前述の(a)(b)の地域と異なり各所から多量の水が湧き芝川の源となっている。水温 10°C の豊かな水は養鱒場やわさび田に利用されている。

猪之頭水源地あたりは、猪之頭溶岩の末端近くで、猪之頭溶岩の中または下部、古富士泥流との境から湧出しているであろうが露頭の確認は困難である。陣馬の滝では猪之頭溶岩と古富士泥流との間から湧出しているのが見られる。猪之頭溶岩の下部は横手沢溶岩で、この溶岩は古富士泥流の上を猪之頭から内野さらに原・熊久保地域まで流下している。

横手沢溶岩について、津屋博士は横手沢溶岩を3つに分類し、横手沢溶岩Iを普通輝石カンラン石玄武岩、横手沢溶岩IIを紫蘇輝石普通輝石カンラン石玄武岩、横手沢溶岩IIIをカンラン石玄武岩としている。横手沢溶岩IIIは無斑晶であるので肉眼で判別できるが、横手沢溶岩IとIIについては肉眼では判別できない。古富士泥流は、芝川に沿っての西側台地一帯に分布しており、水を浸透しにくい(不透水性)ので小田貫湿原、田貫湖、花鳥山脈の池などの受け皿のようになっている。また、育成試験場の台地にも分布している。

足形の鬼橋付近には甌穴(ポットホール)があり貴重な観光資源の一つである。

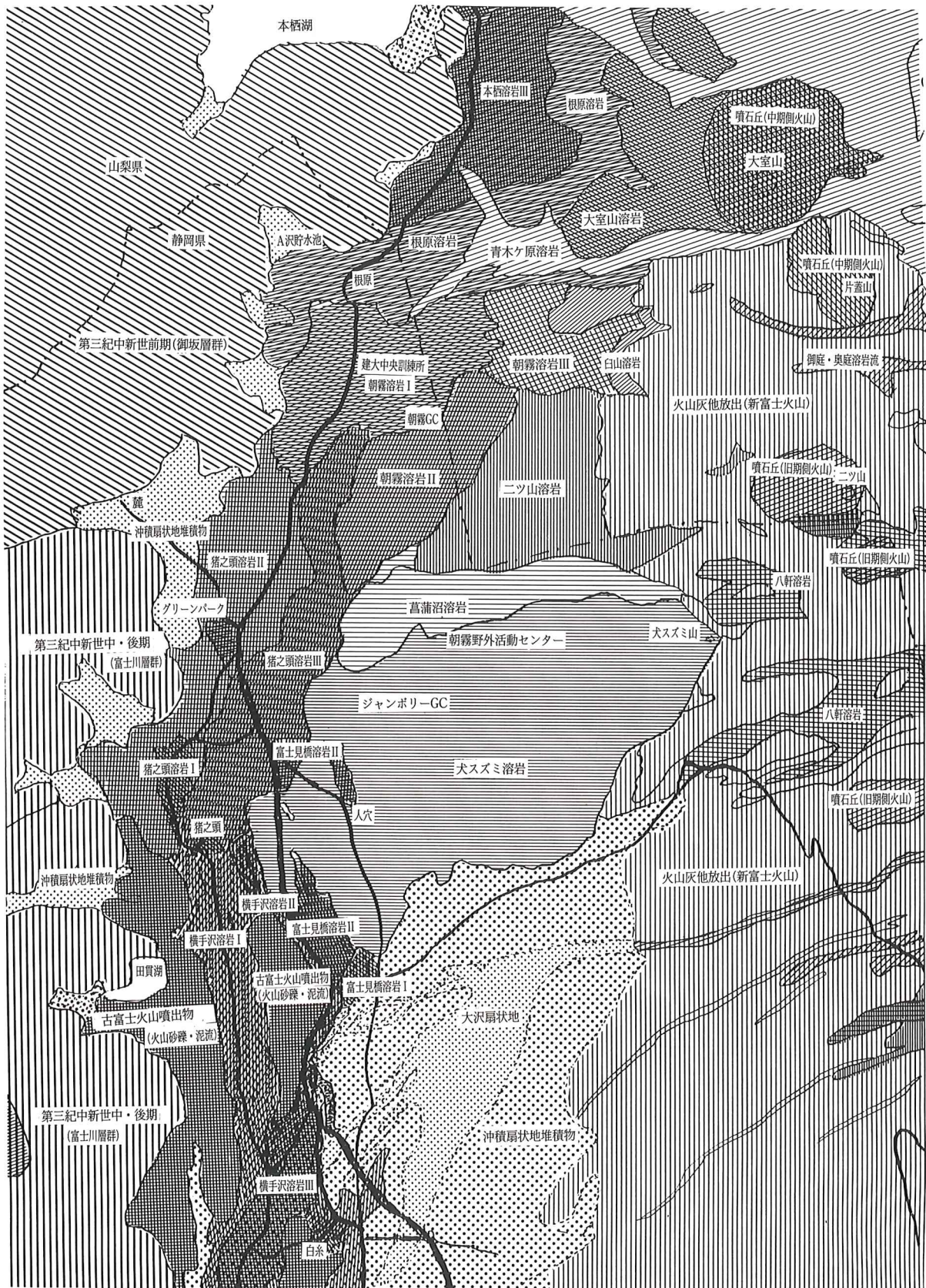
以上、主として国道139号線周辺を中心にしての朝霧高原について津屋博士の地質図をもとに調査巡検報告を書いたが、未開発の広大な草原や灌木の土地がある。こうした地域だけに、企業の開発計画は出てくると思う。そうした時の対応のためにも、水資源、自然の造型である滝、溶岩塚(ショウレンドーム)、甌穴(ポットホール)、溶岩トンネルなど、また歴史的遺産をどのように保存し、どのように活用するかの行政の青写真をつくるべきである。規制を盾に行政の構想を先送りしてはならないであろうが、規制のある今こそ時間をかけて構想を練ることが必要であると思う。

(加納 實)

## 参 考 文 献

- 1 竹内正辰(1956)：富士山の山容に関する解析的考察 静大教研報
- 2 津屋弘達(1971)：富士山 富士山総合学術調査報告書 富士急行KK
- 3 土 隆一(1985)：静岡県其自然景観－その地形と地質－
- 4 富士宮市域自然調査研究会(1988)：富士宮市の自然(第一次富士宮市域自然調査研究報告書) 富士宮市
- 5 土 隆一(1992)：富士宮市北部朝霧地域地下水調査研究報告書
- 6 土 隆一(1992)：静岡の地球科学－新第三紀研究の発展のために－
- 7 諏訪 彰(1992)：富士山 －その自然のすべて－





朝霧高原周域地質図 (津屋博士1968原図)

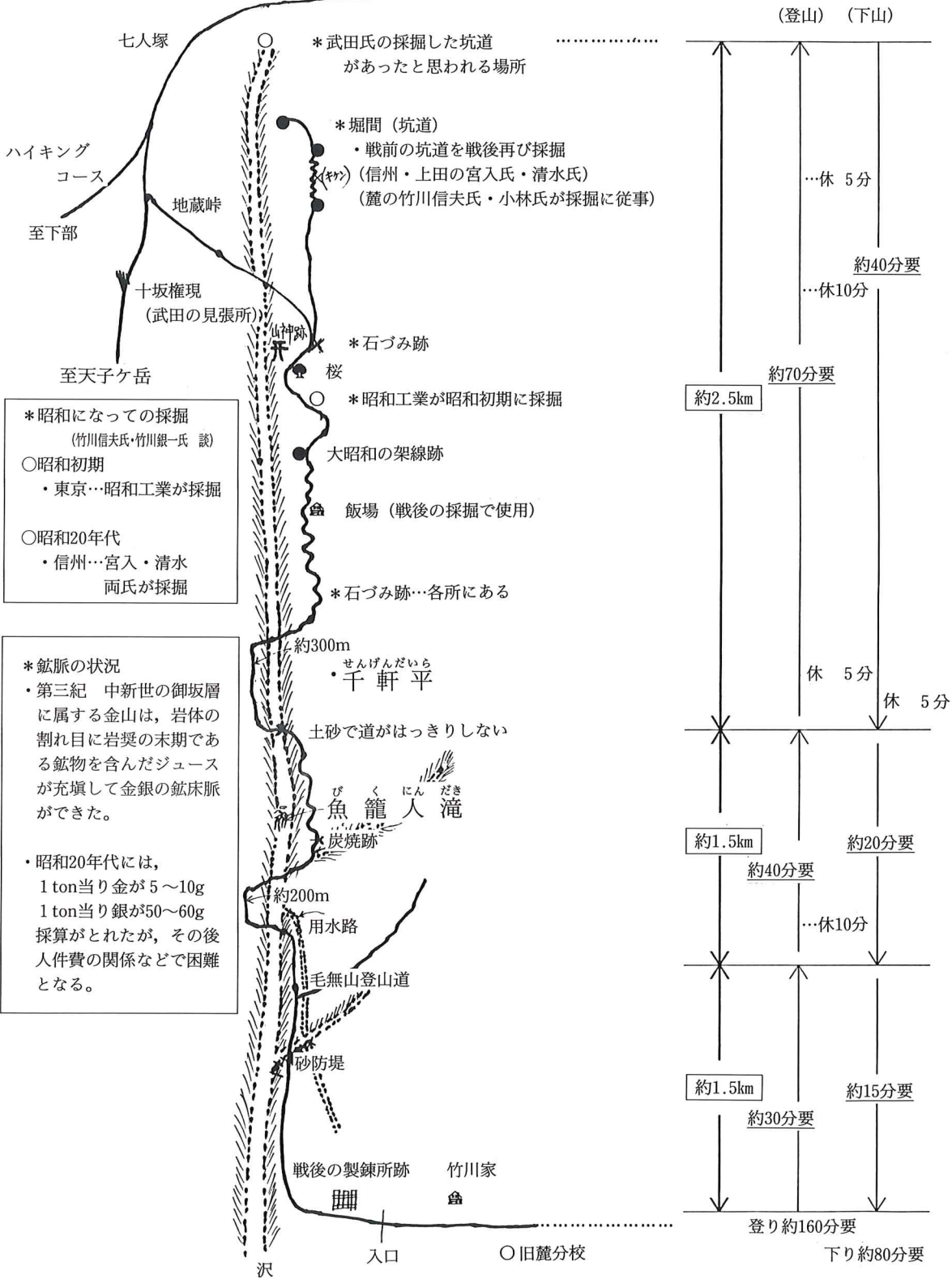


(資料)

ふもと かわやま 麓・金山 金鉱山跡への略図

毛無山

(大森衛氏の資料1984を参考にする)



\*昭和になっての採掘  
(竹川信夫氏・竹川銀一氏 談)

○昭和初期  
・東京…昭和工業が採掘

○昭和20年代  
・信州…宮入・清水  
両氏が採掘

\*鉱脈の状況

・第三紀 中新世の御坂層に属する金山は、岩体の割れ目に岩漿の末期である鉱物を含んだジュースが充填して金銀の鉱床脈ができた。

・昭和20年代には、1 ton当り金が5~10g 1 ton当り銀が50~60g 採算がとれたが、その後人件費の関係などで困難となる。

## II 浮遊性有孔虫からみた富士川中流地域の層序

### — 中間報告 —

#### はじめに

静岡県中・東部から山梨県南部にかけての富士川流域には、新第三系が広く分布しており、この地域の地質学的研究は、井上 (1934), 大塚 (1938~1955), 松田・水野 (1955), 松田 (1955~1961), 徳山明 (1971) 等多くの人々によってなされている。

この地域の浮遊性有孔虫化石の研究については、身延以北の富士川上流地域において氏家 (1976), 千地・紺田 (1978), 狩野・北里・鈴木 (1985), 尾田・秋元 (1987) 等なされているが、身延以南については、茨木 (1981) など数が少ない。今回、主として富士川中流地域の第三系で採取された浮遊性有孔虫を検討した結果と、比較検討のため、この地域と連続した富士川上流地域の富士川左岸の地層について (若干の地点で) 調査した結果を報告する。

なお、調査はまだ継続しており、地質図が完成していないのでこの地域の地層名については松田 (1961) に従うものとする。

この調査にあたり、浮遊性有孔虫の鑑定について御指導と御助言をいただいた東北大理学部の斎藤常正教授に厚く御礼申し上げます。

#### 試料の処理

主として硫酸ナトリウム法を用いて処理した。硬い岩石についてはこの方法を繰り返し行った。試料は地層と直交するルートに沿って採取し処理したが、変質していたり、硬かったり、内部まで風化がすすんでいたりするものが多く、予期していた以上に有孔虫が採取できなかったため、地層の境界の時代についてはほとんど決定できなかった。

#### 浮遊性有孔虫による地質時代の検討

地層名は松田 (1961) による。

○飯富・下部・身延地区

和平凝灰岩

切石の対岸の互層から

*Globorotalia birnageae* BLOW

*peripheroronda*

BLOW&BANNER

*peripheroacuta*

BLOW&BANNER

*praemenardii*

CUSHMAN&STAINFORTH

*quinifalcata*

SAITO&MAIYA

など 26 種を同定した。N 10 と考えられる。

出口凝灰質砂岩泥岩層

下部町一色東方の互層から

*Globorotalia birnageae* BLOW

*fohsi praefohsi*

BLOW&BANNER

*peripheroronda*

BLOW&BANNER

*praemenardii*

CUSHMAN&STAINFORTH

*quinifalcata*

SAITO&MAIYA

など 28 種を同定した。N 11 と考えられる。

## 竹之島砂岩泥岩互層

びょうぶ岩東方富士川左岸の凝灰岩のすぐ上位の互層から

*Globorotalia fohsi praefohsi*  
BLOW&BANNER  
*peripheroronda*  
BLOW&BANNER  
*praemenardii*  
CUSHMAN&STAINFORTH  
*panda* JENKINS  
*qunifalcata*  
SAITO&MAIYA  
*rikusyuensis*  
Takayanagi&Oda

など 29 種を同定した。N 13 と考えられる。

## 波高島泥岩層

波高島西方富士川左岸の互層から  
*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globigerinoides subquadratus* BRONNIMANN  
*Globorotalia opimacontinua* BLOW  
*siakensis* LEROY

など 26 種を同定した。N 14 となる。

## 上之平互層

椿草里西方の互層から  
*Globigerinoides subquadratus* BRONNIMANN  
*Globorotalia praemenardii*  
CUSHMANN&STAINFORTH

など 7 種を同定した。N 10 から 13 である。

## 八木沢泥岩

御持川のれき岩層中の互層から  
*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globoquadrina venezuelana* (HEDBERG)

など 7 種を同定した。

## 丸滝れき岩

桑柄川の厚いれき岩層中の互層から  
*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globoquadrina dehiscens*  
(CHAPMAN.PARR&COLLINS)  
など 11 種を同定した。

## 波木井互層

身延町光子沢北のシルト層から  
*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globoquadrina dehiscens*  
(CHAPMAN.PARR&COLLINS)  
*Globorotalia merotumida* BLOW&BANNER  
など 10 種を同定した。N 16 と考えられる。

## 鷹取火砕岩

相又川左岸の火砕岩中の互層から  
*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globoquadrina dehiscens*  
(CHAPMAN.PARR&COLLINS)  
*plesiotumida* BLOW&BANNER

など 19 種を同定した。N 17 初めと考えられる。

## ○南部・富沢・芝川・富士宮地区

## 久遠寺泥岩層

船山川の船山温泉北西の互層から  
*Globorotalia archeomenardii* BOLLI  
*birnageae* BLOW  
*peripheroronda* BLOW&BANNER  
*qunifalcata* SAITO&MAIYA

*Orbulina universa* d'Orbigny  
など 22 種を同定した。N 9 と考えられる。

戸栗川の釜の口東の互層から

*Globorotalia birnageae* BLOW

*peripheroacuta* BLOW&BANNER

*quinfalcata* SAITO&MAIYA

*Orbulina* *universa* d'Orbigny

など 17 種を同定した。N 10 上部と考えられる。

#### 勝坂泥岩層

富岡（内船駅北方）北西，林道中の背斜軸の東翼の互層から 17 種，西翼の互層から 20 種を同定した。

東翼の互層から

*Globorotalia peripheroronda* BLOW&BANNER

*praemenardii*

CUSHMAN&STAINFORTH

西翼の互層から

*Globorotalia birnageae* BLOW

*praemenardii*

CUSHMAN&STAINFORTH

*peripheroronda* BLOW&BANNER

*praescitula* BLOW

*quinfalcata* SAITO&MAIYA

*zealandica* HORNIBROOK

*Orbulina* *universa* d'Orbigny

などが産出しいずれも N 9 と考えられる。

同じ林道のさらに北の互層から 12 種を同定した。

*Globorotalia archeomenardii* BOLLI

*praescitula* BLOW

等から N 9 から 10 と考えられる。

#### 十島互層

芝川町尾崎北の富士川右岸の互層から

*Globorotalia fohsi lobata* BERMUDEZ

*fohsi praefohsi* BLOW&BANNER

*praemenardii*

CUSHMAN&STAINFORTH

*praescitula* BLOW

*quinfalcata* SAITO&MAIYA

など 18 種を同定した。N 12 と考えられる。

南部町井出 下井出の富士川左岸の互層から

*Giobigerina druryi* Akers

*Globigerinoides subquadratus* BRONNIMAN

*Globorotalia opimacontinua* BLOW

*praemenardii*

CUSHMAN&STAINFORTH

*siakensis* LEROY

など 17 種を同定した。N12 から N13 と考えられる。

芝川町下稲子 神矢野北の沢の互層から

*Globigerina nepenthes* TODD

*Globoquadrina eximia* TODD

*Globorotalia opimacontinua* BLOW

*siakensis* LEROY

など 18 種を同定した。N 14 初めである。

南部町八木沢の北西の林道沿いの互層から

*Globigerina nepenthes* TODD

*Globorotalia opimacontinua* BLOW

*siakensis* LEROY

など 16 種を同定した。N 14 である。

上述の地点のさらに北の互層から

*Globorotalia juanai* BERMUDEZ&BOLLI

*lenguaensis* BOLLI

*merotumida* BLOW&BANNER

など 21 種を同定した。N 16 である。

井出駅北北西 富栄橋南 750 m の富士川左岸の互層から 16 種を同定した。

*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW

*conoidea* WALTARS



南部町八木沢北西の寄畑火砕岩の下位の互層から

*Globigerina nepenthes* TODD

*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*conoidea* WALTARS

など 13 種を同定した。N 16 から N 17 と考えられる。

#### 町屋互層

富士川流域の矢島付近の互層から

*Globorotalia conoidea* WALTARS

*conomiozea* KENNETT

*plesiotumida* BLOW&BANNER

など 18 種を同定した。N 17 と考えられる。

東根熊南南東の互層から

*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW

*conoidea* WALTARS

*merotumida* BLOW&BANNER

*plesiotumida* BLOW&BANNER

など 18 種を同定した。N 17 と考えられる。

#### 万沢互層

清水市宍原 後山の北東の互層から

*Globorotalia linguaensis* BOLLI

*plesiotumida* BLOW&BANNER

など 25 種を同定した。N 17 と考えられる。

#### 徳間互層

南部町馬込川の集落に近い互層から 20 種を同定した。

*Globigerinoides ruber* (d'Orbigny)

*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW

*humerosa*

TAKAYANAGI&SAITO

*Neogloboquadrina pseudpachyderma*

(CITA, PREMOLI-SILVA and ROSSI)

また馬込川の四位橋付近から 17 種を同定した。

*Globigerinoides ruber* (d'Orbigny)

*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW

などからいずれも N 17 と考えられる。

富沢町下村東方の道路工事現場の転石から 17 種を同定した。

*Globigerina nepentes* TODD

*Globorotalia opimacontinua* BLOW

などから N 15 と考えられる。

南部町大和東方富士川右岸の互層から 10 種を同定した。

また、宮原の互層から 18 種を同定した。

*Globorotalia humerosa*

TAKAYANAGI&SAITO

*linguaensis* BOLLI

*limbata* (Fornasini)

*plesiotumida* BLOW&BANNER

などから N 17 と考えられる。

#### 富士凝灰岩

井出の富士川左岸の互層から

*Globorotalia linguaensis* BOLLI

*Pulleniatina primalis* BANNER&BLOW

など 21 種を同定した。N 17 B である。

#### 島尻互層 (新称)

南部町島尻の南の寄畑火砕岩の上位の互層から

*Globorotalia plesiotumida* BLOW&BANNER

*tumida tumida* (BRADY)

など 15 種を同定した。N 18 と考えられる。

天子ヶ岳周辺 (地層名は明記されていない)

富士宮市佐折西方のれき岩層中の互層から

*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globorotalia merotumida* BLOW&BANNER  
 など 13 種を同定した。N 16 から N 17 と考えられる。

大倉ダム西の互層から  
*Globorotalia plesiotumida* BLOW&BANNER  
*Pulleniatina primalis* BANNER&BLOW  
 など 12 種を同定した。N 17 B と考えられる。

坂林西方のれき岩層中の互層より 12 種を同定した。

*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globoquadrina dehiscens*  
 (CHAPMAN.PARR&COLLINS)

芝川町稲子川上流の入山北の林道の互層から  
*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*opimacontinua* BLOW  
 など 12 種を同定した。N 16 と考えられる。

さらに北方の上位の互層から  
*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*merotumida* BLOW&BANNER  
 など 16 種を同定した。N 16 上部と考えられる。

稲子川上流入山の東の互層から  
*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*Pulleniatina primaris* BANNER&BLOW  
 など 8 種を同定した。N 17 B と考えられる。

#### ○清水地区

小河内累層  
 清水市小河内 逢坂の互層から  
*Globigerina nepenthes* TODD

*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*conoidea* WALTARS  
*plesiotumida* BLOW&BANNER  
 など 13 種を同定した。N 17 と考えられる。

小河内の坂本東の互層から  
*Globoquadrina dehiscens*  
 (CHAPMAN.PARR&COLLINS)  
*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*conoidea* WALTARS  
*plesiotumida* BLOW&BANNER  
 など 12 種を同定した。N 17 と考えられる。

小河内の番古の互層から  
*Globigerina nepenthes* TODD  
*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*conoidea* WALTARS  
*humerosa*  
 TAKAYANAGI&SAITO  
 など 16 種を同定した。N 17 から N 18 初めの間と考えられる。

小河内の番古の北東に延びる沢 れき岩層のすぐ下位のシルト層から  
*Globorotalia acostaensis acostaensis* BLOW  
*conoidea* WALTARS  
 など 9 種を同定した。N 17 と考えられる。

## 結果と考察

### 富士川上流地域 (松田 1961 の北部にあたる)

和平凝灰岩はN 10, 出口凝灰質砂岩泥岩層はN 11, 竹之島砂岩泥岩層の最下部がN 13, 波高島泥岩層がN 14, 椿草里西の互層がN 10 からN 13 の間, 波木井互層の下部がN 16, 鷹取火砕岩中の砂岩と泥岩の互層がN 17 初期と判明した。

従って, 出口凝灰質砂岩泥岩層と竹之島砂岩泥岩層に挟まれたびょうぶ岩凝灰岩はN 11 からN 13 までの間, 竹之島砂岩泥岩層と波高島泥岩層に挟まれた上之平互層はN 13 からN 14 の間, 波高島泥岩層と波木井互層に挟まれた丸滝礫岩層はN 15 かN 16 と推定される。鷹取山火砕岩を噴出させた主な火山活動はN 16 後期からN 17 初期の間であろう。

### 富士川中流地域 (松田 1961 の中部にあたる)

#### 相又川・船山川・戸栗川地域 (富士川右岸)

船山温泉付近の久遠寺泥岩層はN 9 で, 今までの見解と異なり, 勝坂泥岩層に対比されることがわかった。この地域では久遠寺泥岩層の上に鷹取火砕岩(N 16 後期からN 17 初期)が直接重なっているため, 少なくともこの地域では, 久遠寺泥岩層と鷹取火砕岩の関係は不整合である可能性がある。

#### 内船北部地域

内船駅の北, 高岡付近の林道には背斜構造が存在するが, その軸付近の互層はN 9 で勝坂泥岩層に対比され, この林道の北方の互層はN 9 からN 10 であることがわかった。また, 内船北東の主として泥岩と凝灰質砂岩からなる十島互層はN 13 からN 14 であることがわかったため, 富士川上流地域の竹之島互層か上之平互層に対比される。これより南方の井出付近までの地層の分布をみると, この地域では, N 9 からN 16 までの地層がほぼ整合的に分布していたものと思われる。

#### 寄畑から芝川までの富士川左岸

この地区での富士川層群万沢累層中の十島互層は,

遅くともN 12 からN 16 まで連続していることがわかった。万沢互層はN 16 からN 17 が主であり, 町屋互層はN 17 であった。また, 万沢累層中の富士凝灰岩はN 17 B であった。

この地区の十島互層の堆積が遅くともN 12 であるということは, 十島互層の下部が西八代層群に対比されることになり, 富士川上流地域(松田 1961 の北部)の富士川層群の堆積の始まりであるN 13 と一致しない。

寄畑火砕岩は, その直下の十島互層がN 16 なので鷹取火砕岩と同様N 16 からN 17 初期の間の噴出物であろう。

#### 南部・富沢地区 (富士川右岸)

富士川右岸付近に分布する徳間互層はN 16 とN 17 であり, 富士川沿いも同じである。しかし, 釜の口付近の戸栗川右岸に分布する徳間互層はN 10 上部であり, 徳間互層ではなくて船山温泉付近の久遠寺泥岩層の上位層である可能性もある。

#### 天子ヶ岳地区

天子ヶ岳付近は南北性の向斜構造をなすが, 向斜の東西に分布する互層はN 16 からN 17 であり, 南端の上稲子塩野の互層はN 14 である。

## まとめ

まだ不明の点があるが, 松田(1961)の地質図の地層の堆積時代を調べた結果が表1である。表2は今回の調査でわかった地層のおおよその絶対年代である。また, 参考として松田(1961)の富士川谷の層序を表3, 富士川谷の第三系を図1に示す。

なお, 大まかであるが, 今回の調査結果と地質調査の結果を総合し, 堆積時代の判明した地層をその走向に沿って延長してみたのが図2である。この図からこの地域に分布する新第三系は, 図3のように5つの地域に分けられそうである。

I 富士川右岸, 身延衝上断層の西側でN 9 やN 10 の地層の上に, 不整合にN 17 などの地層が重なってい

る地域。

- II 西方へ傾動したために、主としてN 9 からN 17?の地層の断面を示している地域。IIIの上部にあたる。
- III 深成岩に貫入されているが、主として平面的な東西性の褶曲構造を示している地域。IIの下部にあたる。
- IV 主としてN 17 まで堆積物が、当時の南斜面に堆積した地層。N 17 末期に西へ傾いたためやや複雑な構造を示す。
- V N 14 からN 17 までの比較的新しい地層が南北性の向斜構造を示している地域。

(植松征矢)

### 参 考 文 献

- 1 松田時彦(1961)：富士川谷新第三系の地質。地質雑, 67, 79~96.
- 2 西宮克彦・植田良夫 (1976)：山梨県の新第三系について～特にグリーンタフ変動地帯における層序と地質年代学的研究～。地質学論文集, No.13, 349~366.
- 3 千地万造・紺田 功 (1978)：富岡層群および西八代層群・静岡層群の浮遊性有孔虫による生層序～カプラン階についての考察～。日本の新生代地質, 池辺記念論文, 73~92.
- 4 茨城雅子(1981)：浮遊性有孔虫による南部フォッサマグナ新第三系の地質年代。地質雑, 87, 47~49.
- 5 尾田太良・秋本和実 (1987)：南部フォッサマグナにおける浮遊性有孔虫化石による地質年代。日本古生物学会 (1987) 年会講演。

- 1 松田時彦(1961)：富士川谷新第三系の地質。地質



表1 地層の堆積時代 (今回の調査 植松)

時代区分	富士川上流地域		富士川中流地域				N	
	中富・下部・身延	相又・船山・戸栗川 (富士川右岸)	内船北部地区 (富士川左岸)	南部富沢地区 (富士川右岸)	寄畑・井出・十島 稲子・芝川 (富士川左岸)	天子ヶ岳 上稲子		
鮮新世	N 19						19	
	N 18						18	
後期	N 17	鷹取火砕岩 波木井互層	波木井互層	徳間互層	富士凝灰岩 寄畑火砕岩	天子ヶ岳 火砕岩	17	
	N 16			万沢互層				
中新世	N 15	丸滝礫岩層	丸滝礫岩層			丸滝礫岩	15	
	N 14	波高島泥岩層 上之平互層 竹之島互層	十島互層			十島互層	14	
	N 13		?		十島互層		13	
	N 12	屏風岩凝灰岩					12	
	N 11	出口互層					11	
	N 10	和平凝灰岩					10	
	N 9	勝坂泥岩層	久遠寺泥岩層 (勝坂泥岩層)	勝坂泥岩層				9
	N 8							8

表2 地層の絶対年代

時代区分		絶対時代 (万年)	富士川上流地域	富士川中流地域					
			下部地区 身延地区	相又川 船山川 戸栗川 (富士川右岸)	内船地区 (富士川右岸)	寄畑～芝川 (主として) (富士川左岸)	南部・富沢 万沢 (富士川右岸)		
鮮 新 世		N 20							
		300							
		N 19							
中 新 世	後 期	N 18					島尻互層 (新称)		
		500							
		520							
中 新 世	後 期	N 17	鳥森山火砕岩	鷹取火砕岩	波木井互層	波木井互層	福土凝灰岩	寄畑火砕岩	万沢互層 町屋互層 徳間互層
		720							
		N 16							
		1020							
		N 15							
		1040							
	中 期	N 14	丸滝礫岩層		丸滝礫岩層				
		N 13	波高島泥岩層 上之平互層 竹之島互層		十島互層	十島互層			
		N 12	屏風岩凝灰岩						
		N 11	出口互層						
		N 10	和平凝灰岩	和平凝灰岩					
		N 9	勝坂泥岩層	久遠寺泥岩層 (勝坂泥岩層)	勝坂泥岩層				
前 期	N 8								
	1660								
	N 7								
	N 6								
	1760								
	1900								

表3 松田 (1961) 富士川谷の層序(一部)

時代 区分	地層区分		松 田 (1961)						N				
			北 部			中 部		南 部					
中 期	後 期	富 士 川 層	上 部	曙れき岩		相 又 累 層	篠 井 山 火 碎 岩	寄 畑 火 碎 岩	浜 石 岳 れ き 岩	貫 ヶ 岳 れ き 岩 高 瀬 互 層 高 根 山 火 碎 岩	N 17		
				静川砂岩層								川合野れき岩	
			身 延 累 層	烏森山火砕岩								鷹取火砕岩	
				手打沢泥岩層								月夜凝灰岩	
				波木井互層								篠井山火砕岩	
				丸滝れき岩								寄畑火砕岩	
	八木沢泥岩		葛沢火砕岩							N 16			
	中 期	群	下 部 累 層	し も べ 累 層	波高島泥岩層		久 遠 寺 泥 岩 層	徳 万 間 沢 互 累 層	福 士 凝 灰 岩 町 屋 互 層 万 沢 互 層 十 島 互 層	小 河 内 累 層	N 15		
					小内船火砕岩								
					上之平互層								
竹之島砂岩・泥岩互層													
新 世 期	西 八 代 層 群	常 葉 累 層	醍 醐 山 累 層	びょうぶ岩 凝灰岩層		御 殿 山 累 層				N 8			
				出口凝灰質 砂岩・泥岩互層									
				上一色火山 角れき岩層									
				一 累 之 瀬 層	和平泥岩層						月 安 見 山 橋 岩		
					勝坂泥岩層								
古 関 川 累 層													

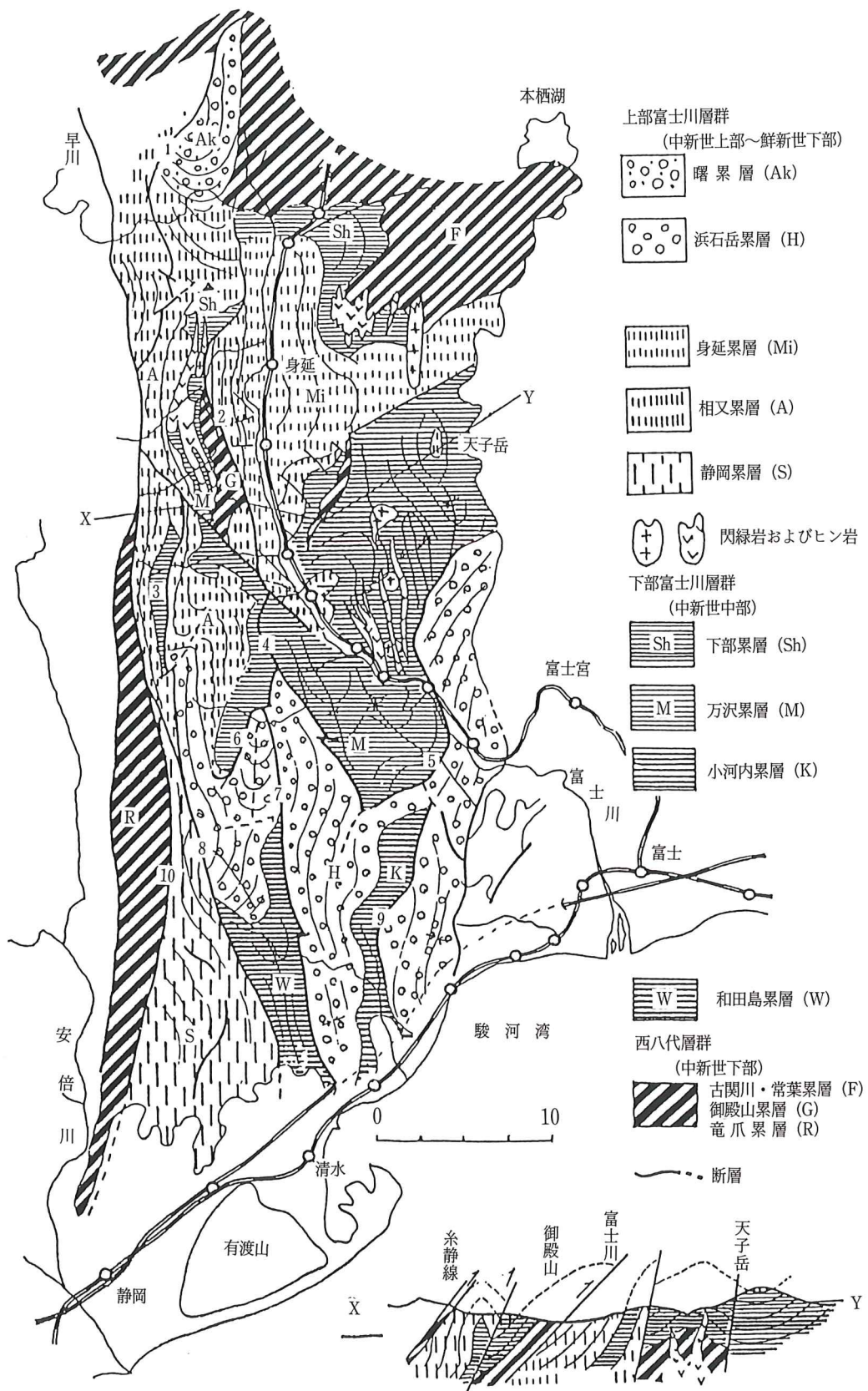


図1 富士川谷の第三系 (松田時彦集図による)

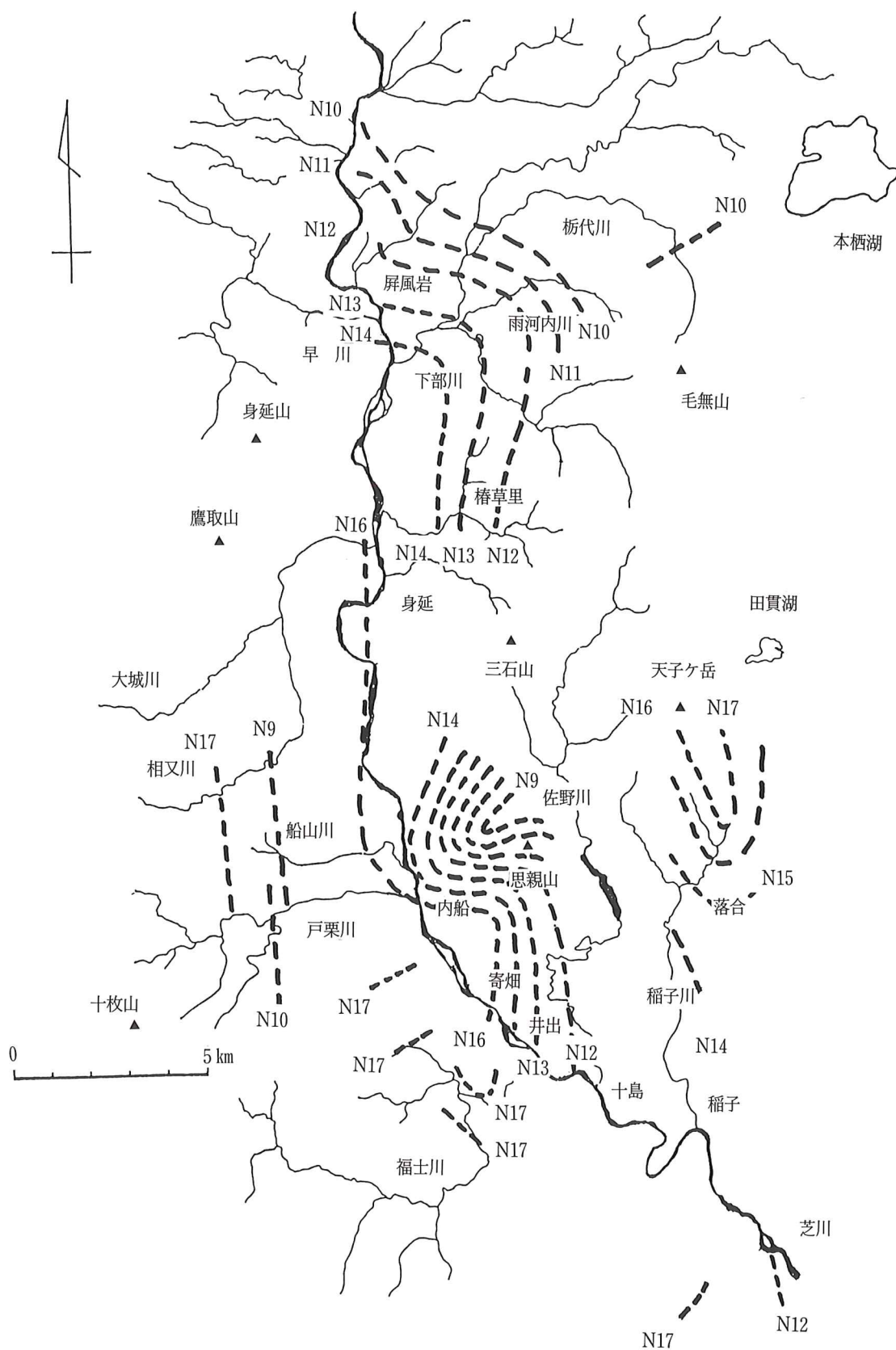


図2 推定される堆積時代別の地層の分布



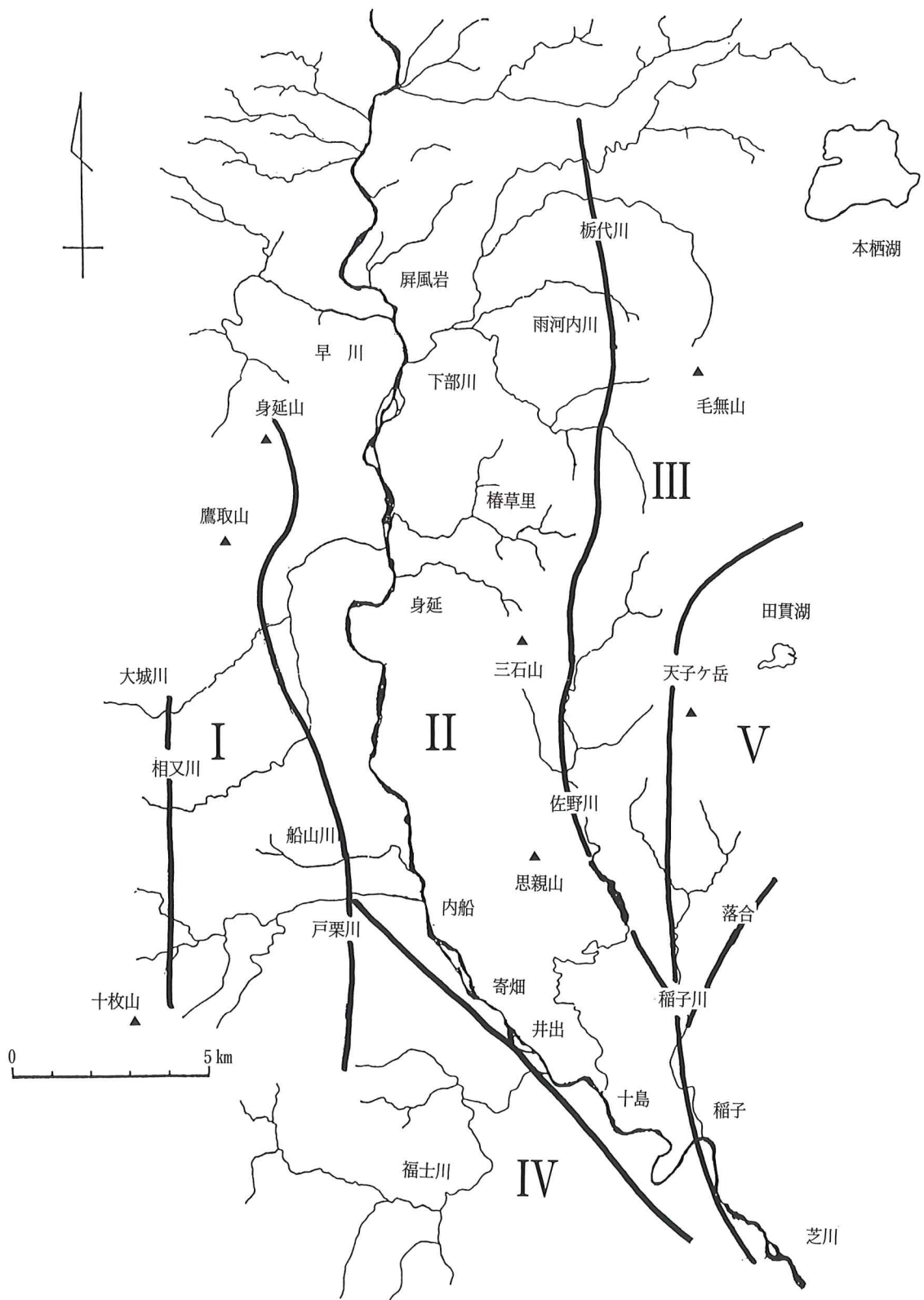


図3 図2より推定されるブロックの境界

# 陸生動物

日原章 (協力調査員)  
渡辺 徳重 平井 克男  
阿部 英秀 望月 進  
影山 秀雄 佐野 雅則  
城内 博 司





## はじめに

第一次報告を一步進めて、動物を分け、陸生と水生にしたので、ここでは陸生動物を取り扱った。

### 陸生動物

- 1 獣類(哺乳類)…………… 渡辺徳重
- 2 鳥類…………… 阿部英雄・影山秀雄
- 3 昆虫
  - ① 鞘翅目(甲虫類)…………… 日原 章
    - 特別調査1 表富士の特徴的な甲虫  
…………… 平井克男
    - 特別調査2 朝霧牧草地の甲虫  
…………… 望月 進
    - 特別調査3 富士山西斜面のアリガタハ  
ネカクシ類の分布…………… 望月 進
    - 特別調査4 富士宮のホテルについて  
…………… 佐野雅則
  - ② 鱗翅目(蝶 類)…………… 城内博司
  - ③ 直翅目(バッタ類)…………… 日原 章
  - ④ トンボ目(トンボ類)…………… 城内博司

## 提 言

環境に優しいオリンピックをうたったリレハンメル五輪の精神は長野へも引き継がれ、白馬村ではオオタカの営巣地保護条例を制定するという。ブラジルで世界環境会議が開かれてからは、平成5年4月「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(種の保存法)が施行、同年11月に「環境基本法」が成立する等、水やゴミ問題が行政の主たる課題となり、制度的にも一段と進歩してきた。

エコロジカル・ライフスタイルの中で、ネイチャー

デザインとして研究し、都市デザイン、環境デザイン、エコシティ等多自然型、自然復元型等、自然保護から環境教育へと変化し、地球環境と真剣に取り組むまでに至った。

ここでの提言は第一次と変わらず、次にこれを要約する。

- 1 除草剤、殺虫剤、有機洗剤の使用は避ける。
- 2 自然環境復元の工夫をし、人と自然との共存を基本とする。
- 3 川や谷筋の護岸を工夫し連続した緑地帯を設ける。
- 4 寺社林や公共施設の緑を年次計画を立てて増強する。
- 5 環境教育に工夫と努力をする。
- 6 調査と保護機関を設置し科学的データを蓄積し、説得力あるものを自らの手で持つこと。

新たに

- 7 調査は地域を特定し環境も含めた種数を記録し、少なくとも五年毎に比較可能なパターン化を試み、変化データを蓄積し、変化の因果関係を解析可能にする。
- 8 新設既設の公園や護岸は、動植物も人と共に親しめるような自然環境復元を試みる。
- 9 市民の森(木、草、池)を経営し多くの人々の余暇を自然と親しむ場として創出する。
- 10 公私の林野に池、草地、落葉樹林地を設けさせ、水関係の浸透と保水を図る。
- 11 開発と保護の間で問題が起こった時は、保護や調査者と協議し知恵を出し合う機関を設け、話し合いの中から解決する慣習をつくりあげる。



# 獸 類 (哺乳類)

渡 辺 徳 重  
野 沢 孝 満 (亡H 3 . 8 . 26)



## 1 調査方法

市内在住のよく山を歩く友10人の協力をいただき、報告された内容を参考に調査した。

## 2 調査地域

天神山、朝霧周辺、人穴上（ジャンボリーゴルフ場南）、猪之頭西及び田貫湖周辺、佐折

## 3 調査結果

### (1) 天神山

棲んでいる動物 タヌキ

出没する動物 タヌキ

### (2) 朝霧周辺

棲んでいる動物 キツネ、タヌキ、ノウサギ、  
ジネズミ

出没する動物 ツキノワグマ、シカ、イノシシ、  
タヌキ

### (3) 人穴上（ジャンボリーゴルフ場南）

棲んでいる動物 キツネ、イタチ、ノウサギ、  
リス、ノネズミ

出没する動物 シカ、タヌキ

### (4) 佐折

棲んでいる動物 キツネ、ノウサギ、リス、ハ  
クビシン

出没する動物 ハクビシン、イノシシ

### (5) 猪之頭西及び田貫湖周辺

棲んでいる動物 キツネ、タヌキ、ハクビシン、  
イタチ、ノウサギ、リス

出没する動物 イノシシ、シカ、ハクビシン

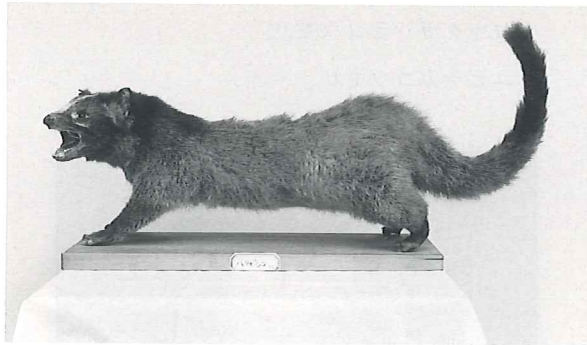
## 4 むすび

調査をはじめた頃よりキツネ、タヌキ、ハクビシンが多く確認されるようになり、市南西部で確認されたハクビシンは北上を続け、猪之頭の西部でも見られるようになった。

本州中部以北に生息するオコジョが富士山の標高1,000 m以上の森林内で確認された。

原野・牧草地にノネズミが増加した。

野犬・野良猫が増加した。



ハクビシン（井之頭小学校所蔵）

## 5 足形鬼橋付近の調査結果

周囲は民家が迫って古来からの街道沿いの地域なので、大型なものは出現していない。

この地域は、芝川沿いであることや、川の両側がかつては崖で自然の雑木林であったこと、西は深く天子山系に連なり、東は富士の裾野に連なっていたことから、生物相は、平地、草原、山地と連続することによってかなり豊かであり、山間地と人里地の境に相当する位置づけができる。

○ 近くに出現していたもの

### ① 耕地や山林から

イタチ

アカネズミ

ジネズミ

ハタネズミ

カヤネズミ

コウベモグラ（大型）

ハクビシン

### ② 草原から森林地帯へ続くところ

イノシシ

ノウサギ

キツネ



タヌキ

③ 森林（大杉，木のうろ）

ムササビ

④ 周辺洞窟等から

キクガシラコウモリ

コキクガシラコウモリ

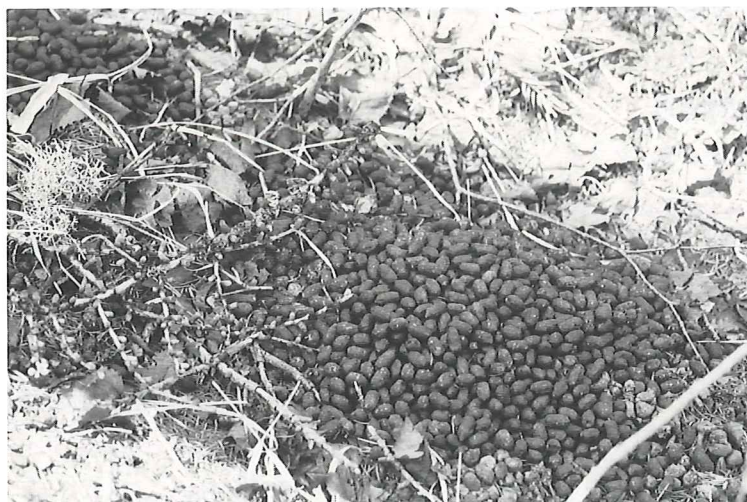
ユビナガコウモリ



かつて富士山麓に生息したという  
ニホンオオカミの頭骨  
(裾野市立富士山資料館蔵)



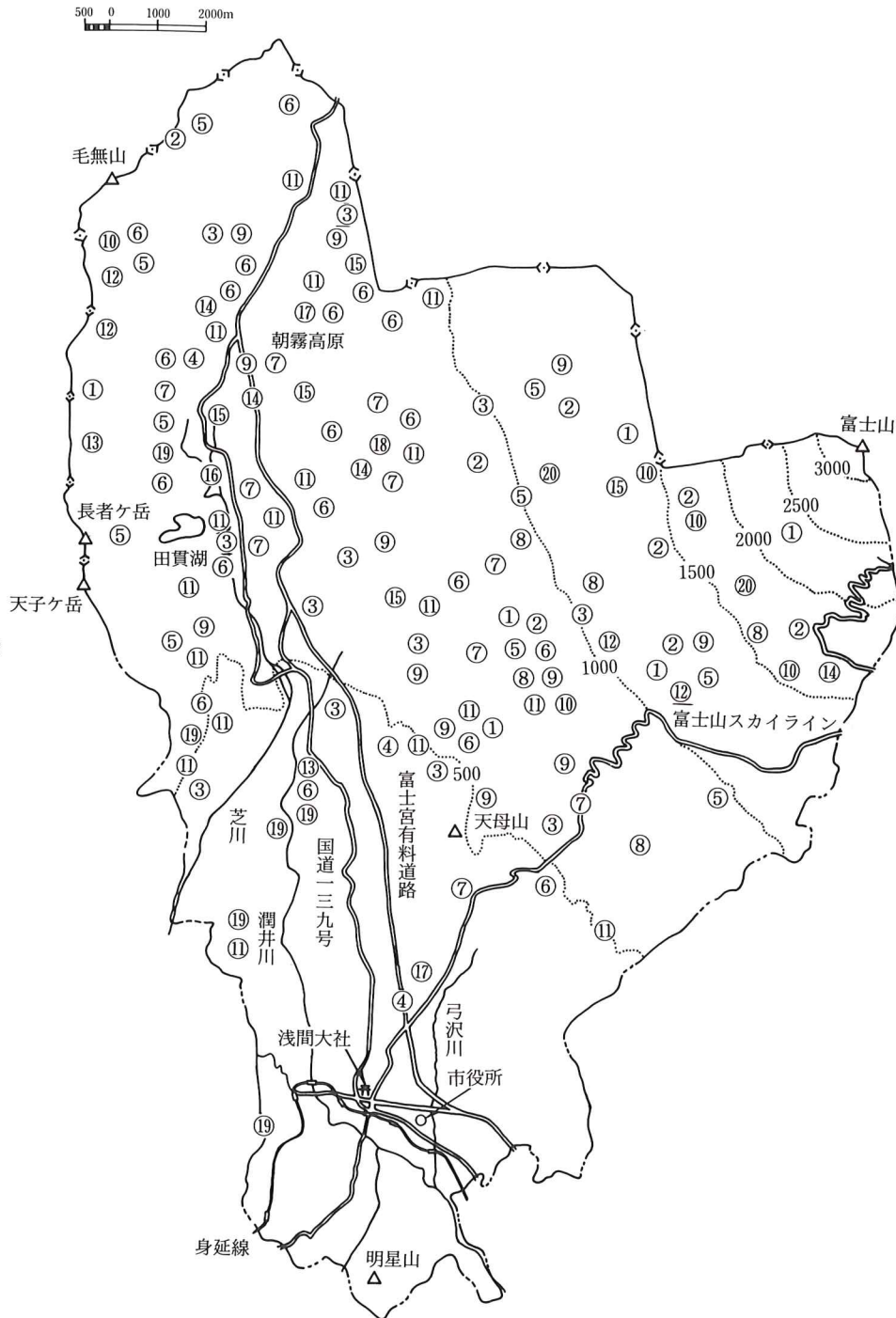
イノシシの糞 93.8.7 富士山



カモシカの糞 93.5.29 富士山五合目



- ① ツキノワグマ
- ② シカ
- ③ タヌキ
- ④ アナグマ
- ⑤ イノシシ
- ⑥ キツネ
- ⑦ イタチ
- ⑧ テン
- ⑨ リス
- ⑩ カモシカ
- ⑪ ノウサギ
- ⑫ モモンガ
- ⑬ ムササビ
- ⑭ ヤマネ
- ⑮ モグラ
- ⑯ カワネズミ
- ⑰ ハタネズミ
- ⑱ モモジロコウモリ
- ⑲ ハクビシン
- ⑳ オコジョ



富士宮市内に生息する獣類の調査 個体発見個所図



# 鳥 類

阿 部 英 雄  
影 山 秀 雄



## はじめに

この調査は先に実施した富士宮市域野鳥生息状況調査『第一次調査』（1981～1985年）を基に、1986年以降の『第二次調査』、さらにその後の調査を加えた前後12年間に及ぶ調査結果をまとめ、未済の部分の調査、未確認鳥類の確認、訂正や発見、また自然の開発や環境の変移などによる鳥相社会の栄枯盛衰の原因の追及を行った。

### 1 調査地域

- (1) 朝霧高原地域
- (2) 富士山二合目地域
- (3) 富士山五合目地域
- (4) 田貫湖周辺地域
- (5) 浅間大社、潤井川周辺地域
- (6) 明星山、白尾山周辺地域
- (7) 富士桜自然墓地公園のカナダガン
- (8) 田貫湖東地域特別調査
- (9) 天神山地域特別調査
- (10) 足形鬼橋付近の野鳥生息状況

調査地域(1)～(6)は第一次調査と同一であるが、さらに第一次調査では報告していない(7)『富士桜自然墓地公園のカナダガン』、(8)『田貫湖東地域特別調査』、(9)『天神山地域特別調査』、(10)『足形鬼橋付近の野鳥生息状況』の結果を加えた。

### 2 調査、記録方法

調査方法は基本的には第一次調査の継続であるので、これに関しては『富士宮市の自然』（第一次富士宮市域自然調査研究報告書）を参考にしていきたい。記録は第一次調査報告（市域内の総科、総種類目録）とは異なり各調査地域ごとに、年ごとの確認羽数を4種類の記号で、生態は6区分に分類して記号で記した。

調査地域別の目録は、これを見ることによっていつ

何処の地域に行けばどんな鳥たちを観察できるかを知ることと同時に、地域ごとの鳥たちの増減と自然環境の変化とを照らし合わせることによって鳥社会と環境との相関関係を推測することができる。

#### (1) 生息数を表す記号

- ・極少数 (△) …観察例が、生息数の少ない種では1～2羽、多い種でも1羽以上5羽未満である。
- ・少ない (○) …1回の調査での観察例が5羽以上10羽未満である。
- ・普通 (◎) …数は多くないが1回の調査で10羽以上は観察できた。
- ・多い (●) …観察例が多く、1回の調査で25羽以上観察できた。

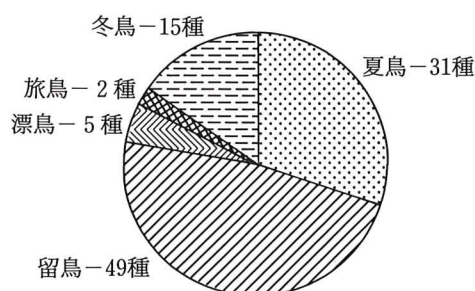
※観察されなかった種に関しては空欄とした。

#### (2) 野鳥の生態を表す記号

- ・留鳥 …… 留 ・夏鳥 …… 夏 ・旅鳥 …… 旅
  - ・漂鳥 …… 漂 ・冬鳥 …… 冬 ・迷鳥 …… 迷
- （第一次富士宮市域自然調査研究報告書参照）

### 3 調査結果

#### (1) 朝霧高原地域



34科 102種

朝霧高原では1971年（昭和46年）頃迄はセッカ、コヨシキリ、オオジシギなどは草原の何処でも出会うことができたが、現在ではほんの一部の地域でしか彼



等を見ることはできない。原因はこの地域の原野の大部分が牧草地に替わってしまったことと同時に、1960年代末の農薬による昆虫の減少、汚染された餌による雛の死亡や親鳥の産卵数の減少があげられる。

今回の調査で記録が無くなったウズラ（朝霧高原鳥類目録1・No.17）は、まだ少数が生息しているとの狩猟者からの報告があった。

1987年以降、草原で繁殖する夏鳥のチゴモズの姿が見られなくなった。（朝霧高原鳥類目録2・No.49）これは生息環境の変化と共に、カッコウの託卵が繁殖の障害となり減少したと思われる。

日本では富士山麓が繁殖の南限とされているノビタキが朝霧高原南部に位置する世界ジャンボリー跡地で、1987年（昭和62年）から姿を消した。山菜採りなどの人間の営巣地への立ち入りと、写真マニアによる営巣期の親鳥の追跡が考えられる。現在では他の場所で1～2番がわずかに繁殖しているだけになってしまった。

新たに生息が明確となった種にクマタカとイヌワシがある。（朝霧高原鳥類目録1・No.13, 14）今回の調査の中でクマタカは2回観察されているし、日本野鳥の会静岡支部の山田氏の観察では山梨県境の『雨ヶ岳』方向より飛来するという報告を受けている。根原付近は野兎、キジ、ヘビなどが多く生息しているので、この辺りが採餌場になっていると思われる。なおイヌワ



朝霧高原で繁殖するアカモズ

シは、1945年（昭和20年）頃までは毛無連峰に生息していた記録もあり、最近も何人かの野鳥の観察者によってこの地域で観察されている。

第一次調査では30科76種が確認されたが、第二次調査では未調査であった毛無山麓調査の結果、オオルリ、エゾムシクイ、オオアカゲラ、シロハラ、メボソムシクイ、コガラ、ゴジュウカラ、ヒガラ、ヤマドリ、チョウゲンボウ、ヒメアマツバメ、フクロウ、イワヒバリ、セグロセキレイ、シメ、クイタダキ、ハクセキレイ、ツミ、ハイイロチュウヒ、クマタカ、イヌワシも加わり33科97種と3科21種増加している。しかし、チゴモズ、セッカ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ウズラ、ノビタキ、オオジシギ、ヨタカ、イワツバメなど、生息調査以前に比べると現在ではまったく姿を消してしまった種や、20年前に比べると10%以下にも減少してしまった種も多い。朝霧高原の看板とも言えるノビタキ、オオジシギ、ウズラを失うことになれば、鳥に関して言えば朝霧高原が持つ大きな魅力を失うことになる。この鳥たちを守ることができるのなら同時に他の野鳥も保護される事になる。

調査地域内は草刈り、伐採、道路や草原の整備などで安定した自然環境を保っている地域が少なくなったためか、広い生息圏を持つ種を除いてほとんどの鳥たちが減少している。また、自然の俗化により増加するトビ、カラスでさえも増加していないという事は、自然の残骸化が進行しているとも考えられる。行き過ぎた開発行為に対しては元の自然に回復させるなどの処置をとり、鳥たちのためだけでなく人間のためにも自然の支配する環境を保護すべき地域である。

この地域では第二次調査以降の調査を含め34科102種の野鳥を確認している。

## 朝霧高原鳥類目録 1

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
1	サギ科	チュウサギ						○	夏	上空
2		アオサギ						○	留	〃
3	ガンカモ科	カナダガン	○	○	○	○	○	○	留	本文(7)参照
4		カルガモ	○	○	○	○	○	○	留	全域
5	ワシタカ科	トビ	△	○	○	○	○	○	留	全域
6		オオタカ	△	△	△	△	△	△	留	森林, 草原
7		ハイタカ	○	△	△	△	△	△	留	〃
8		ツミ					△	○	留	〃
9		ノスリ	△	△	△	△	△	△	留	〃
10		ハイイロチュウヒ					△		冬	草原
11		チュウヒ					△		冬	〃
12		サシバ	△	△	△	△	△		夏	秋の毛無山上空
13		クマタカ	△	△				△	留	根原
14		イヌワシ				△	△	△	留	〃
15	ハヤブサ科	チョウゲンボウ				△	△	△	冬	全域
16		ハヤブサ	△	△	△		△		冬	〃
17	キジ科	ウズラ							留	第一次調査に記録あり
18		コジュケイ	○	○	○	△	△		留	森林
19		キジ	○	○	○	○	○	◎	留	草原
20		ヤマドリ				△	△	△	留	毛無山
21	チドリ科	ムナグロ	◎	◎	○	◎	○	○	旅	アリーナ
22	シギ科	ヤマシギ	△	△	△	△		△	冬	森林
23		オオジシギ	○	○	△	○	○	○	夏	草原, 上空
24	ハト科	キジバト	○	○	○	○	○	○	留	全域
25		アオバト	○	○	△	△	△	△	留	毛無山
26	ホトトギス科	ジュウイチ	△		△	△		△	夏	毛無山
27		カッコウ	○	○		○	△	△	夏	全域
28		ツツドリ	△	△	△	△	△	△	夏	毛無山
29		ホトトギス	○	○	○	○	△	○	夏	全域

## 朝霧高原鳥類目録 2

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	~92	生態	備考
30	フクロウ科	フクロウ				△	△		留	森林
31		アオバズク	△	△	△	△			夏	〃
32	ヨタカ科	ヨタカ	○	△	○	△	△	△	夏	草原, 森林
33	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	△	△	△		△	△	夏	上空
34		ヒメアマツバメ	△	△	△	△	○	○	留	〃
35		アマツバメ	◎	◎	●	○	△	○	夏	〃
36	キツツキ科	アオゲラ	△	△	△		△	△	留	森林
37		アカゲラ	○	○	○	○	△	△	留	森林, 草原
38		オオアカゲラ					△		留	毛無山
39		コゲラ	△	△	△	○	○	○	留	森林
40	ヒバリ科	ヒバリ	○	○	○	○	△	△	留	草原, 牧草地
41	ツバメ科	ツバメ	○	○	○	○	○	○	夏	全域
42		イワツバメ	△	△		△	◎	△	夏	〃
43	セキレイ科	キセキレイ	△	○	△	○	△	△	留	全域
44		ハクセキレイ					△	△	留	〃
45		セグロセキレイ		△	△	△	△	△	留	毛無山麓
46		タヒバリ						△	冬	草原, 畑
47	サンショウクイ科	サンショウクイ	△	△	△			△	夏	森林
48	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	留	全域
49	モズ科	チゴモズ	△						夏	草原
50		モズ	○	○	○	◎	○	○	留	全域
51		アカモズ	◎	◎	◎	◎	○	◎	夏	草原
52	レンジャク科	ヒレンジャク	○	○	○	○			旅	森林
53	ミソサザイ科	ミソサザイ	△	△	△	○	○	○	留	毛無山
54	イワヒバリ科	イワヒバリ				△		△	漂	富士山西麓

## 朝霧高原鳥類目録 3

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
55	ヒタキ科ツグミ亜科	コマドリ	△	△			△	△	夏	森林
56		コルリ	○	○	○	○	△	○	夏	〃
57		ルリビタキ	△	△	△	△	△		漂	〃
58		ジョウビタキ	○	○	○	○	○	◎	冬	全域
59		ノビタキ	○	△	△	△	○	△	夏	草原
60		マミジロ	△	△	△	△		△	夏	森林
61		トラツグミ	○	○	○	○	△		留	〃
62		クロツグミ	○	○	○	○	△	△	夏	〃
63		アカハラ	◎	◎	◎	◎	◎	○	漂	森林, 草原
64		シロハラ				△	△	△	冬	森林
65		ツグミ	◎	◎	◎	◎	◎	●	冬	全域
66	ヒタキ科ウグイス亜科	ヤブサメ	△	△	△	△	△	△	夏	森林
67		ウグイス	◎	◎	◎	○	○	◎	留	全域
68		コヨシキリ	○	○	○	○	△	△	夏	草原
69		オオヨシキリ	△	△	△	△	△	△	夏	〃
70		メボソムシクイ				△	△	△	夏	毛無山
71		エゾムシクイ					△	△	夏	〃
72		センダイムシクイ	△	△	△	△	△	△	夏	全域
73		クキイタダキ					△		留	森林
74		セッカ	△	△		△	△	△	留	草原
75	ヒタキ科ヒタキ亜科	オオルリ					△	△	夏	毛無山
76	エナガ科	エナガ	●	△	◎	◎	◎	◎	留	全域
77	シジュウカラ科	ヒガラ	△	○	△	△	△	○	留	森林
78		ヤマガラ	△	△	△	△	△	△	留	〃
79		シジュウカラ	○	○	○	○	○	◎	留	全域
80		コガラ				△	△	△	留	毛無山
81	ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ				△	△	△	留	毛無山
82	メジロ科	メジロ	○	○	○	△	○	◎	留	全域
83	ホオジロ科	ホオジロ	◎	◎	◎	●	●	●	留	全域
84		ホオアカ	○	○	○	○	○	○	夏	草原
85		カシラダカ	●	○	○	○	○	◎	冬	草原, 灌木林



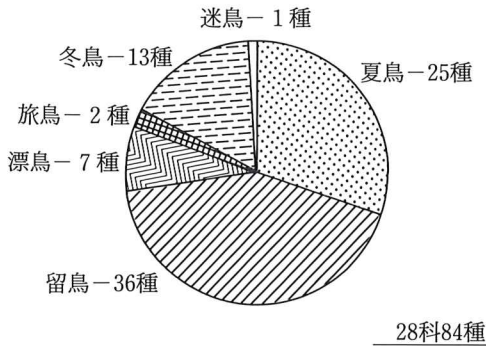
## 朝霧高原鳥類目録 4

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
86	ホオジロ科	ノジコ	△	△	△		△	△	夏	毛無山
87		アオジ	○	○	○	△	△	◎	漂	全域
88		ミヤマホオジロ				◎		△	冬	草原, 森林
89	アトリ科	アトリ	◎	△	△		△		冬	全域
90		カワラヒワ	○	○	○	◎	○	◎	留	〃
91		マヒワ	○	○	○	○	○	○	冬	〃
92		ベニマシコ	○	○	○		△	△	冬	灌木林
93		ウソ	○	△	○	△	△	△	漂	〃
94		イカル	○	○	○	△	△	○	留	全域
95		シメ					△	△	冬	〃
96	ハタオリドリ科	スズメ	◎	○	○	○	○	○	留	人家周辺
97	ムクドリ科	コムクドリ	△	△					夏	森林
98		ムクドリ	○	○	○	○	○	◎	留	全域
99	カラス科	カケス	○	○	○	△	△	○	留	全域
100		オナガ	◎	◎	◎	△	△	◎	留	〃
101		ハシボソガラス	◎	◎	◎	○	△	○	留	〃
102		ハシブトガラス	◎	◎	●	●	○	◎	留	〃
合計	34科	102種								

(△-極少, ○-少, ◎-普通, ●-多)



## (2) 富士山二合目地域



この地域は市域に於いて最も安定した野鳥の繁殖が観察されている所で、第一次調査までに27科78種の野鳥の生息が確認されていたが、第二次調査で1987年(昭和62年)以後ハチクマ、ノスリ、トラフズク、ヒレンジャク、キレンジャク、カヤクグリ、アカコッコ、キバシリの8種類が確認ができなくなったのが気掛かりである。また新たに確認された種としてノジコ、ホオアカ、ヤマシギ、アトリの4種がある。ホオアカなど本来草原にいるはずの鳥が林の中で見られるなどは乱れた環境を示す証しとも思える。

1986年に一回だけ記録のあったアカコッコ(富士山二合目鳥類目録2・No.46)は本来は伊豆七島にのみ生息する固有種であるが、この地で観察されたのは希に

ある迷行例と思われる。

富士山表口登山道では、ただ一箇所標高1,700m付近に相当量の湧水はあるが、その表流水もすぐに地下に浸透してしまい、何時も水が見られるのは幾筋かある沢の窪みに溜まる雨水のみで、自然の環境は広く深い鳥たちの生息に適した環境であるとは言いきれない。沢底の溶岩の窪みに周囲の環境に馴染む水場を作ることにより鳥獣の生息しやすい環境を整えることで野生動物の楽園を作ることができると思う。水のある二合目周辺ではカモシカの姿を見ることも珍しくなく、この辺りは野鳥にとっても楽園となっている。

第二次調査終了時点でこの地域の野鳥は28科84種であり、野鳥の宝庫の回復と維持を図りたい。



富士山二合目のルリビタキ

## 富士山二合目鳥類目録 1

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
1	ワシタカ科	ハチクマ	△	△	△				夏	森林
2		トビ	○	○	△	△	△	△	留	全域
3		オオタカ	△	△	△	△	△	△	留	森林
4		ツミ	△		△	△	△	△	留	〃
5		ハイタカ	△	△	△	△	△	△	留	〃
6		ノスリ	△		△				留	〃
7		サシバ	△	△	△	△	△	△	夏	森林, 上空通過
8	ハヤブサ科	ハヤブサ	△		△	△		△	冬	
9	キジ科	コジュケイ	△	△	△	△	△	○	留	森林
10		ヤマドリ	△	△	△	△	△	△	留	〃
11		キジ	△	△	△	△	△	○	留	森林, 草原
12	シギ科	ヤマシギ				△		△	冬	原生林内の草地
13	ハト科	キジバト	○	○	○	○	△	◎	留	全域
14		アオバト	△	△	△	△		△	留	森林
15	ホトトギス科	ジュウイチ	△	△	△	△	△	○	夏	森林
16		カッコウ	○	○	○	△	○	○	夏	〃
17		ツツドリ	△	△	△	△	△	△	夏	〃
18		ホトトギス	○	○	○	△	△	△	夏	〃
19	フクロウ科	トラフズク	△						冬	森林
20		コノハズク	△	△	△		△		夏	〃
21		フクロウ	△	△	△	△	△	△	留	〃
22	ヨタカ科	ヨタカ	△	△	△	△	△	△	夏	森林
23	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	○	○	○	△	△	△	夏	上空
24		アマツバメ	◎	◎	◎	◎	◎	○	夏	〃
25	キツツキ科	アオゲラ	○	△	△	△	△	△	留	森林
26		アカゲラ	△	△	△	△	△	△	留	〃
27		コゲラ	○	○	○	○	○	○	留	〃
28	セキレイ科	キセキレイ	△			△	△	△	留	全域



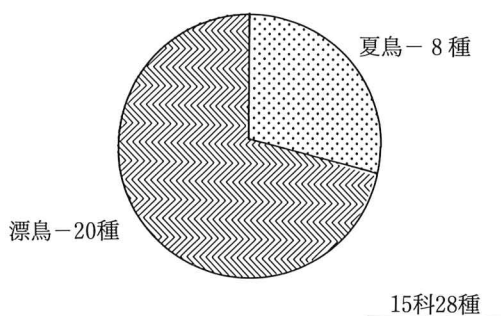
## 富士山二合目鳥類目録 3

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	~92	生態	備考
58	ヒタキ科ヒタキ亜科	サメビタキ					△	△	夏	森林
59	エナガ科	エナガ	○	○	○	◎	◎	○	留	森林
60	シジュウカラ科	コガラ	○	○	○	△	△	△	留	森林
61		ヒガラ	○	○	○	○	○	○	留	〃
62		ヤマガラ	△	△	△	△	△	△	留	〃
63		シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	留	〃
64	ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	△	△	△	△	△	△	留	森林
65	キバシリ科	キバシリ	△		△				留	針葉樹林
66	メジロ科	メジロ	○	△	○	△	○	◎	留	全域
67	ホオジロ科	ホオジロ	○	○	○	○	○	○	留	森林, 草地
68		ホオアカ					△	△	漂	〃
69		カシラダカ	△	△	△	○	○	○	冬	〃
70		ミヤマホオジロ	○	△	△	△	△	△	冬	〃
71		ノジコ					△	△	夏	森林
72		アオジ	○	○	○	○	△	○	漂	森林, 草地
73	アトリ科	アトリ					△		冬	全域
74		カワラヒワ	△	△	△	○	△	○	留	〃
75		マヒワ	○	○	○	△	○	○	冬	〃
76		ハギマシコ	○	○	○	△		△	冬	〃
77		ベニマシコ	△	△	△	△	△	△	冬	森林
78		ウソ	△	△	△	△	△	○	漂	〃
79		イカル	○	○	○	○	○	○	留	〃
80		シメ	△	△	△	△	△	△	冬	〃
81	カラス科	カケス	○	○	○	○	△	○	留	森林
82		ホシガラス	△	△	△	△	△	△	留	〃
83		ハシボソガラス		○	○	△	○	△	留	全域
84		ハシブトガラス	△	△	△	△	△	△	留	〃
合計	28科	84種								

(△-極少, ○-少, ◎-普通, ●-多)



## (3) 富士山五合目地域



標高2,400mのこの地域は富士宮市域の中で最も標高の高い調査地で、冬期は雪に埋まり鳥たちの姿はほとんど無いので調査は夏期のみに限られる。第一次調査では富士山頂でも見られるイワヒバリなど15科25種が確認されていたが、第二次調査で1960年以後この地域から姿を消していたコマドリが1989年7月(富士山五合目鳥類目録1・No.16)に宝永遊歩道で番で確認され、第二次調査後にアカゲラ、エナガ(富士山五合目鳥類目録1・No.6, No.21)を加えるなど、この地域で観察された野鳥は15科28種となった。

この地域の夏の訪れは市街地より約一箇月半程遅いのが普通で、鳥たちの繁殖も6月下旬から8月初旬まで。8月中旬の台風の後などメボソムシクイの幼鳥が遊歩道で凍死していた例もあり、鳥類の繁殖には失敗の許されないぎりぎりの環境である。

1989年と1990年は異常な寒さの続いた天候の不順な年で、両年とも7月になっても登山道は開通せず五

合目より上は雪の中。そのため調査を実施できたのは1989年が7月7日、1990年が7月12日からであった。7月中旬になって植物の緑が萌え始め8月に入って草花も樹木も緑に包まれたが、野鳥の囀りも繁殖行動も森林限界以上ではなかった。静岡大学の増沢先生は「森林限界の植物は生存にぎりぎりの環境にあるので、数年に一度このような寒波があることにより草木は体力を蓄えて次の年により種子を付ける。」と話されていたが、はたして2年続いた寒波は良い種子を結ばせることができるだろうか。野鳥たちは2年共アマツバメ、イワツバメ以外は雛を育てている姿は見られなかった。しかしこれは五合目付近のことで、500m下った七曲り付近より下では野鳥に関しては例年と比べて特に変わった様子はなかった。富士山では寒い夏には繁殖できない鳥たちがいることが今回の調査で初めて分かった。



富士山五合目のイワヒバリ

## 富士山五合目鳥類目録 1

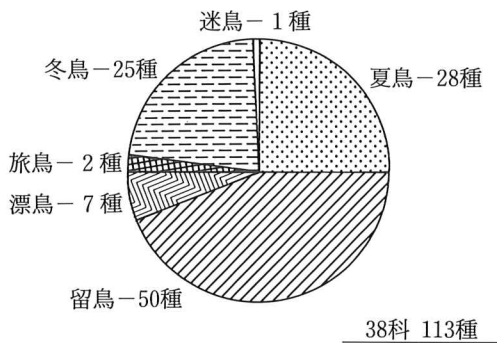
No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
1	キジ科	ヤマドリ	△	△	△				漂	森林
2	ホトトギス科	ジュウイチ	△	△	△				夏	森林
3	アマツバメ科	アマツバメ	●	●	●	◎	◎	◎	夏	上空, 溶岩帯
4		ハリオアマツバメ	○	○	○	△	△	△	夏	〃
5	キツツキ科	オオアカゲラ		△	△				漂	森林
6		アカゲラ						△	漂	〃
7	ツバメ科	イワツバメ	◎	◎	◎	△	○	○	夏	上空, 溶岩帯
8	セキレイ科	キセキレイ			△			△	漂	森林, 溶岩帯
9		ビンズイ	◎	◎	◎	○	○	◎	漂	森林
10	ミソサザイ科	ミソサザイ	○	○	△		△	△	漂	森林
11	イワヒバリ科	イワヒバリ	○	○	○		△	○	漂	カラマツ, 溶岩帯
12		カヤクグリ	○	○	○	△	○	△	漂	〃
13	ヒタキ科ツグミ亜科	コルリ	△	△	△		△		夏	森林
14		ルリビタキ	△	△	△	△	△	△	漂	〃
15		アカハラ	△		△				漂	〃
16		コマドリ				△			夏	〃
17	ヒタキ科ウグイス亜科	ウグイス	△	△	△	△	△	△	漂	森林
18		メボソムシクイ	○	○	○	△	△	△	夏	〃
19		クイタダキ	○	○	○	△	△	△	漂	〃
20	ヒタキ科ヒタキ亜科	サメビタキ	△	△	△		△		夏	森林
21	エナガ科	エナガ						○	漂	森林
22	シジュウカラ科	コガラ	○	○	○		△	△	漂	森林
23		ヒガラ	○	○	○		△	△	漂	〃
24		シジュウカラ	○	○	○	△	△	△	漂	〃
25	アトリ科	ウソ	○	○	○	△	○	△	漂	森林

## 富士山五合目鳥類目録 2

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
26	カラス科	ホシガラス	△	△	△	△	△	△	漂	森林, カラマツ帯
27		ハシボソガラス	△	△	△	△	△		漂	全域
28		ハシブトガラス	△	△	△			△	漂	〃
合計	15科	28種								

(△-極少, ○-少, ◎-普通, ●-多)

## (4) 田貫湖周辺地域



この地域は今回の調査地の中では唯一湖のある場所で、北は朝霧高原調査地域に接し、南は集落、田畑などのある地域を経て市街地に至る。また西に天子ヶ岳、東に芝川及び朝霧南鳥獣保護区と新設ゴルフ場に接する複雑な環境の地域で、そのため生息する野鳥も留鳥、漂鳥、旅鳥、夏鳥、冬鳥と種類数は多い。しかし鳥たちの盛衰も目立ち、ベニマシコ、クロジ、シメ、コムクドリ、サンコウチョウなどの姿が見られなくなった。逆に森林の鳥ツツドリやオオコノハズクが新たに観察され、日本では珍しい北米の鳥カナダガンが1985年に降定着繁殖して現在に至っている。カナダガンについては別途の如く。〔(7) 富士桜自然墓地公園のカナダガン〕参照。

1980年に田貫湖で観察されたヒシクイ、オオハクチョウ（田貫湖周辺鳥類目録1・No.6, No.7）については、この鳥が主に北日本から日本海側に渡来する鳥である事から特殊な例と考えられ、今回の調査では観察はされなかった。

芝川付近に新設されたゴルフ場周辺の特別調査に於いては1989年以降、オオタカ、ツミ、キジ、コジュケイ、アオバト、ヤマシギ、フクロウ、アカゲラ、ヒバリ、イワツバメ、アカモズ、コルリ、ルリビタキ、ジョ

ウビタキ、トラツグミ、キクイタダキ、サンコウチョウ、ヒガラ、ヤマガラ、ホオアカ、マヒワ、ベニマシコ、ウソの23種類が減少していることが判った。上記に於いてサンコウチョウはカケスによる繁殖妨害の被害が推測されるが、他はすべて森林原野山林の開発によるものと推測される。〔(8) 田貫湖東地域特別調査、(9) 天神山地域特別調査〕参照。

オオコノハズク（田貫湖周辺鳥類目録2・No.41）は、1988年に目的不明のカシミ網に掛かっていたのを発見され保護されたため生息が判明した。

ノジコ、エゾムシクイ、ホオアカ、サンショウクイ、アトリなどは減少傾向にあり、今後の生息環境の調査、保護が必要である。

第一次調査の結果からみると36科102種と調査地域内では科、種共に最も多く、野鳥の貴重な生息地であることが認められる。第二次調査とその後の調査の結果ではキアシシギ、カヤクグリなどを加え38科113種と増加はしたものの、生息数の結果からは大規模開発で受ける自然の被害と、少数ながら見られる小鳥たちの減少が明らかになった。今後ともこの科、種の数を減少させたくないものである。



芝川流域に住むヤマセミ



## 田貫湖周辺鳥類目録 1

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
1	カイツブリ科	カイツブリ	○	△	△	△	△	△	漂	田貫湖
2		ハジロカイツブリ	△	△	△	△			冬	〃
3	サギ科	コサギ	△	△	△	△	△	△	留	田貫湖
4		アオサギ	○	△		△	△		留	〃
5	ガンカモ科	カナダガン	○	○	○	○	○	○	留	本文(7)参照
6		ヒシクイ							冬	1980年に田貫湖で記録あり
7		オオハクチョウ							冬	〃
8		オシドリ	△	○	△	○	△		冬	田貫湖
9		マガモ	●	●	●	●	●	●	冬	〃
10		カルガモ	△	△	△	△	◎	△	留	田貫湖周辺
11		コガモ	○	△	△	△	△	△	冬	田貫湖
12		ヨシガモ	△	△	△	△			冬	〃
13		ヒドリガモ	○	△	○	○	△	△	冬	〃
14		オナガガモ	○	○	○	△	△		冬	〃
15		ハシビロガモ	○	○	△	△			冬	〃
16		ホシハジロ	○		○	△	△		冬	〃
17		キンクロハジロ	△	○	○	○	△	△	冬	〃
18		スズガモ	△	△	△	△	△	△	冬	〃
19		カワアイサ	△	△		△			冬	〃
20	ワシタカ科	トビ	△	△	△	○	○	△	留	全域
21		ハイタカ	△	△		△	△		留	森林
22		ツミ	△	△	△	△		△	留	〃
23		オオタカ	△	△		△	△	△	留	〃
24		ノスリ	△	△	△				留	〃
25	キジ科	コジュケイ	○	○	○	△	△	△	留	森林
26		ヤマドリ	△	△	○				留	〃
27		キジ	△	△	△	△	△	△	留	森林, 草原
28	クイナ科	バン	△		△				留	田貫湖
29	チドリ科	コチドリ	△	△	△	△	△		夏	芝川流域
30		シロチドリ				△	△	△	夏	〃
31	シギ科	キアシシギ						△	旅	芝川流域

## 田貫湖周辺鳥類目録 2

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
32	シギ科	イソシギ	△	△	△	△			留	芝川流域
33		ヤマシギ						△	冬	森林
34		オオジシギ	△	△	△		△	△	夏	草原, 上空
35	ハト科	キジバト	△	△	△	○	△	△	留	全域
36		アオバト	△	△	△	△	△		留	森林
37	ホトトギス科	ジュウイチ	△	△	△	△	△	△	夏	森林
38		カッコウ	△	△	△	○	○	△	夏	森林, 草原
39		ホトトギス	△	△	△	△	△	△	夏	〃
40		ツツドリ					△		夏	森林
41	フクロウ科	オオコノハズク			△				留	芝川付近で一例
42		アオバズク	△	△	△	△			夏	森林, 社寺林
43		フクロウ						△	留	森林
44	ヨタカ科	ヨタカ	△	△	△	△	△	△	夏	森林, 草原
45	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	△	△	△	△	△	△	夏	上空
46		ヒメアマツバメ	△	△	△	△	△	△	留	〃
47		アマツバメ	◎	◎	◎	○	○	○	夏	〃
48	カワセミ科	ヤマセミ	△	△	△	△	△	△	留	田貫湖, 溪流
49		カワセミ	△	△	△	△	△	△	留	〃
50	キツツキ科	アカゲラ	△	△	△	△		△	留	森林
51		コゲラ	△	△	△	△	△	△	留	〃
52	ヒバリ科	ヒバリ						△	留	草原
53	ツバメ科	ツバメ	△	△	△	○	○	○	夏	上空
54		イワツバメ	△	△					夏	〃
55	セキレイ科	キセキレイ	△	△	△	△	△	○	留	全域
56		ハクセキレイ	△	△	△	△	△	△	留	湖, 溪流付近
57		セグロセキレイ	△	△	△	△	△	△	留	〃
58	サンショウクイ科	サンショウクイ	△		△	△			夏	森林



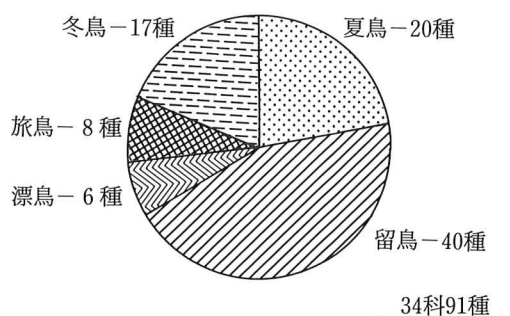
## 田貫湖周辺鳥類目録 4

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
86	シジュウカラ科	ヒガラ	○	△	○	△	△	△	留	森林
87		ヤマガラ	△	△	△	△	△	△	留	〃
88		シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	留	全域
89		コガラ					△		留	森林
90	ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	△	△	△	△			留	森林
91	メジロ科	メジロ	○	○	○	◎	◎	○	留	全域
92	ホオジロ科	ホオジロ	○	○	○	◎	◎	◎	留	全域
93		ホオアカ	△	△	△			△	漂	草原
94		カシラダカ	○	○	◎	△	◎		冬	森林, 草原
95		ミヤマホオジロ	△	△	△				冬	〃
96		ノコジ	△	△	△		△	△	夏	森林
97		アオジ	○	○	○	○	○	△	漂	全域
98		クロジ	△						冬	森林
99		ユキホオジロ	△						迷	草原
100	アトリ科	アトリ	△	△	△				冬	全域
101		カワラヒワ	○	○	○	◎	◎	○	留	〃
102		マヒワ	○	○	○	△	△		冬	森林, 草原
103		ベニマシコ	△	△	△	△	△	△	冬	〃
104		ウソ	△	△	○	△	△	△	漂	〃
105		イカル	○	○	○	△	○	△	留	〃
106		シメ				△			冬	〃
107	ハタオリドリ科	スズメ	◎	◎	◎	◎	◎	○	留	人家付近
108	ムクドリ科	コムクドリ	○	○	○				夏	森林
109		ムクドリ	◎	◎	◎	◎	◎	○	留	全域
110	カラス科	カケス	△	△	△	○	△	△	留	森林
111		オナガ	○	○	○	△	○	○	留	全域
112		ハシボソガラス	△	△	△	○	○	△	留	〃
113		ハシブトガラス	◎	△	◎	●	○	◎	留	〃
合計	38科	113種								

(△-極少, ○-少, ◎-普通, ●-多)



## (5) 浅間大社, 潤井川周辺地域



富士宮市の市街地中央に全国の浅間神社の総本宮である浅間大社とその森がある。境内の湧玉池からは富士山の湧水が流れ出て神田川となり、市街地の西南部を流れる潤井川に流入している。この一帯は、夏鳥、漂鳥、冬鳥たちの渡りのコースになっており、市街地にもかかわらず野鳥の種類は多い。

この地域での大きな変化として、浅間大社北側の森に大きなコロニーを作り繁殖していたゴイサギ（浅間大社, 潤井川周辺鳥類目録1・No.2）が1987年以後どこかに移動し、現在では極少数が夜間に池で小魚を漁る姿が見られる程度になってしまった。

近年潤井川流域がコンクリート護岸により整備されたが、一定の川幅を確保されたためかマガモ（浅間大社, 潤井川周辺鳥類目録1・No.7）がその数を増してきており、1989年以降キンクロハジロ、ホシハジロなど（浅間大社, 潤井川周辺鳥類目録1・No.11, No.12）のカモ類が休息や採餌をする姿も見られるようになった。また冬の間、野中橋から大中里周辺に多く飛来す

るユリカモメ（浅間大社, 潤井川周辺鳥類目録2・No.31）の姿もすっかりこの地域の風物となっている。

浅間大社の森に隣接した野鳥のための給水、給餌施設を施した庭には森に飛来する小鳥たちがしばしば立ち寄り、今までに記録された野鳥は22科35種。特に近年ではアカハラ、シロハラ、ツグミ、アオバト、ヤブサメ、メボソムシクイなどがよく見られる。またツミ、エナガ、ウグイス、メジロ、コジュケイ、アオバズクなどは森での繁殖が確認されている。

第一次調査で31科63種であったのが、第二次調査の5年間でオシドリ、カイツブリ、マガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、アオバト、ホトトギス、アカハラ、ミソサザイ、ヤブサメ、サメビタキ、ホオジロなど10科27種が追加確認され、第二次調査以後富士フイルム富士宮工場北側の水田地帯ではヒクイナ、バン、ケリ、チュウシャクシギ（浅間大社, 潤井川周辺鳥類目録2・No.19, No.20, No.24, No.29）などの湿地を好む野鳥が新たに確認されて34科91種となっている。



大中里の水田で餌を採るケリ

## 浅間大社，潤井川周辺鳥類目録 1

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
1	カイツブリ科	カイツブリ			△	△	△	△	漂	潤井川水門
2	サギ科	ゴイサギ	●	●	△	△	△	△	留	水辺
3		アマサギ	○	△	△		△		旅	水田，畑
4		コサギ	○	○	○	○	○	△	留	河原，水田
5		チュウサギ						△	夏	〃
6	ガンカモ科	オシドリ					△	△	冬	潤井川
7		マガモ	○	○	○	●	●	●	冬	河川，水田
8		カルガモ	○	○	○	○	○	△	留	〃
9		コガモ						△	冬	河川
10		ハシビロガモ						△	冬	〃
11		ホシハジロ				○	△	○	冬	潤井川
12		キンクロハジロ					△	○	冬	〃
13		ホオジロガモ	△						冬	1986年1月潤井川
14	ワシタカ科	トビ	○	○	○	○	○	△	留	全域
15		ツミ	○	○	○	△	△	△	留	森林
16	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	△	△	△	△	△	△	冬	全域
17	キジ科	キジ						△	留	大中里
18		コジュケイ	○	○	○	○	△	△	留	森林
19	クイナ科	ヒクイナ						△	夏	アシ原
20		バン						△	留	湧水池，水田
21	チドリ科	コチドリ	○	○	○	△			夏	河原，水田
22		イカルチドリ						△	留	河原
23		シロチドリ	△	○	△	△	△	△	夏	河原，水田
24		ケリ						△	冬	水田
25		タゲリ	△	△	△	△		△	冬	〃
26	シギ科	タカブシギ	△	△	△	△			旅	河原，水田
27		キアシシギ						△	旅	河原
28		イソシギ	△	△	△	△	△		留	〃
29		チュウシャクシギ						△	旅	水田
30		タシギ	△	△	△	△	△		旅	水田，河原

## 浅間大社，潤井川周辺鳥類目録 2

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
31	カモメ科	ユリカモメ	●	●	●	●	●	●	冬	河川
32		コアジサシ	△	△		△	△		夏	〃
33	ハト科	キジバト	◎	◎	◎	◎	◎	◎	留	全域
34		アオバト			△	△			留	森林
35	ホトトギス科	ジュウイチ	△	△	△	△			夏	渡り途中に通過
36		カッコウ	△	△	△	△		○	夏	〃
37		ツツドリ		△		△			夏	〃
38		ホトトギス						△	夏	〃
39	フクロウ科	アオバズク	△	△	△	△	△	△	夏	森林，社寺林
40	アマツバメ科	ヒメアマツバメ	△	△	△	△	△	△	留	上空
41		アマツバメ	◎	◎	◎	△	○	○	夏	〃
42	カワセミ科	カワセミ	○	○	○	○	△	△	留	河川
43	キツツキ科	アオゲラ	△	△	△	△			留	森林
44		アカゲラ						△	留	〃
45		コゲラ						△	留	〃
46	ツバメ科	ツバメ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	夏	全域
47		イワツバメ	●	●	●	●	●	●	留	〃
48	セキレイ科	キセキレイ	○	○	○	○	○	○	留	全域
49		ハクセキレイ	△	△	△	△	△	○	留	〃
50		セグロセキレイ	△	△	△	△	△	○	留	河川周辺
51		ビンズイ						△	漂	河原
52		タヒバリ	△	△	△	△	△	△	冬	河原，水田
53	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	●	●	●	◎	◎	◎	留	全域
54	モズ科	モズ	△	△	△	△	△	△	留	全域
55		アカモズ	△	△	△	△	△	△	夏	渡り途中に通過
56	レンジャク科	ヒレンジャク	◎	◎	◎	△			旅	渡り途中に通過
57		キレンジャク	△						旅	〃

## 浅間大社，潤井川周辺鳥類目録 3

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
58	ミソサザイ科	ミソサザイ				△	△	△	留	浅間大社の森
59	イワヒバリ科	カヤクグリ	△						漂	浅間大社の森
60	ヒタキ科ツグミ亜科	ノゴマ	△						旅	希な記録
61		ルリビタキ	△	△	△	△	△		漂	森林
62		ジョウビタキ	○	○	○	○	△	○	冬	全域
63		イソヒヨドリ	△	△	△	△			留	潤井川流域付近
64		クロツグミ	△	△	△	△	△	△	夏	森林
65		アカハラ		△					漂	浅間大社
66		シロハラ	△	△	△	△	△	△	冬	森林
67		ツグミ	△	△	△	◎	△	△	冬	全域
68	ヒタキ科ウグイス亜科	ヤブサメ				△	△		夏	浅間大社の森
69		ウグイス	○	○	○	○	○	○	留	全域
70		オオヨシキリ					△		夏	アシ原
71		メボソムシクイ	△	△	△		△	△	夏	渡り途中に通過
72		センダイムシクイ	△	△	△	△	△	△	夏	〃
73		セッカ	△	△	△				留	開けた草地
74	ヒタキ科ヒタキ亜科	キビタキ	△	△					夏	森林
75		サメビタキ				△	△		夏	浅間大社の森
76	エナガ科	エナガ	○	○	○	○	○	○	留	森林周辺
77	シジュウカラ科	ヒガラ		○					留	森林
78		ヤマガラ	△						留	森林周辺
79		シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	留	全域
80	メジロ科	メジロ	◎	◎	◎	○	◎	◎	留	全域
81	ホオジロ科	ホオジロ	○	○	○	○	○	○	留	森林，河原，草地
82		カシラダカ	△	△	△	△	△	△	冬	水田，河原
83		アオジ	△	△	△	△	△	△	漂	全域
84	アトリ科	カワラヒワ	◎	◎	◎	◎	◎	△	留	全域
85		イカル	○	○	○	◎	◎	○	留	〃
86		シメ	△	△	△	△	△	△	冬	森林，河原

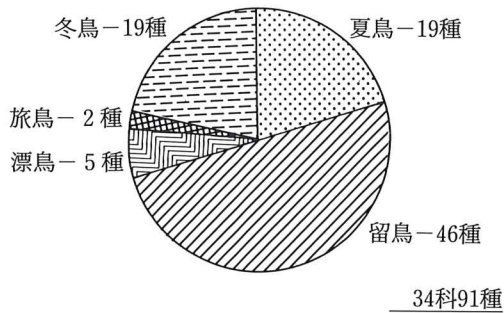


## 浅間大社，潤井川周辺鳥類目録 4

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
87	ハタオリドリ科	スズメ	●	●	●	●	●	●	留	全域
88	ムクドリ科	ムクドリ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	留	全域
89	カラス科	オナガ	○	○	○	△	○	○	留	全域
90		ハシボソガラス	△	△	△	△	△	△	留	〃
91		ハシブトガラス	△	△	△	○	△	△	留	〃
合計	34科	91種								

(△－極少，○－少，◎－普通，●－多)

## (6) 明星山, 白尾山周辺地域



この地域は、市域の南部より富士川左岸を川上に連なる丘陵地帯で、富士宮市域を南北に渡る鳥たちが必ず通過する位置にある。そのため春、秋の渡りの季節に連続して調査を行えば今以上の記録が期待される。



市街地の庭で冬を過ごすツグミ

市域の南端にある明星山と西端に近い白尾山とは富士川左岸に連なる良く似た環境にあるが、調査を行ってみるとそれぞれに相違のあることが判る。生息調査期間中に公園整備工事があり調査が期待に添わなかったのは残念であった。第二次調査において、現在全国的に生息数の減っているサンショウクイには出会えなかったが、1992年に行なったその後の調査で少数を観察することができた。(明星山, 白尾山周辺鳥類目録 2・No51)

1990年の調査においてすでに記録がありながら調査、確認できなかった鳥たちは、前記公園整備工事の影響のほかに富士山の天候異変が影響したものとも考えられる。第二次調査以後の調査を入れると34科89種と、富士山二合目地域よりも多い。

明星山は、第二東名高速道路予定路線が小明星の地下を通り富士川を渡ることになっているので、この付近の鳥社会に相当の影響と変化があるものと思われる。

最近になってこの地域がサシバの渡りのコースになっていることがわかり、10月10日を中心とした天気の良い日には上空を通過していくかなりの数のサシバが観察されている。(明星山, 白尾山周辺鳥類目録 1・No16)

## 明星山, 白尾山周辺鳥類目録 1

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考	
1	ウ科	カワウ						○	冬	富士川	
2	サギ科	ゴイサギ	◎	○	△	△	△	△	留	富士川	
3		コサギ	○	○	○	○	○	○	留	〃	
4		アオサギ	◎	○	○	△	○	△	留	〃	
5	ガンカモ科	オシドリ	△	△	△	△		△	冬	富士川	
6		マガモ	◎	○	◎	◎	○	○	冬	〃	
7		カルガモ	○	○	○	△	△	△	留	〃	
8		コガモ	○	○	○	○	○	△	冬	〃	
9		ハシビロガモ	△	△	△			△	冬	〃	
10		オナガガモ					○	△	△	冬	〃
11	ワシタカ科	ミサゴ						△	冬	富士川	
12		トビ	◎	◎	◎	◎	○	○	留	全域	
13		ツミ	△	○	△	△	△	△	留	白尾山	
14		ハイタカ	△	△					留	明星山	
15		ノスリ		△		△			留	〃	
16		サシバ						○	夏	秋の渡りに通過	
17	ハヤブサ科	ハヤブサ	△	△	△	△	△		冬	富士川	
18		チョウゲンボウ	△	△	△	△		△	冬	〃	
19	キジ科	コジュケイ	△	△	○	○	△	○	留	明星山, 白尾山	
20		キジ	○	○	△	△	△	△	留	〃	
21	チドリ科	コチドリ	○	○	△	△	△	△	夏	河川周辺	
22		イカルチドリ					△		留	〃	
23		シロチドリ						△	夏	〃	
24	シギ科	イソシギ	△	△	△	△	△		留	富士川, 星山放水路	
25		ヤマシギ	△	△					冬	明星山	
26		タシギ	○	△	△	△	△	△	旅	富士川, 星山放水路	
27	カモメ科	ユリカモメ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	冬	富士川	
28		セグロカモメ					△	△	冬	〃	
29		ウミネコ					△	△	冬	〃	
30		コアジサシ						○	夏	〃	





## 明星山，白尾山周辺鳥類目録 3

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
56	ミソサザイ科	ミソサザイ	△	△	△	△	△	△	留	森林
57	ヒタキ科ツグミ亜科	ルリビタキ	△	△	△	△	△		漂	白尾山
58		ジョウビタキ	○	○	○	○	○	○	冬	全域
59		ノビタキ						△	夏	秋の渡りに通過
60		イソヒヨドリ	△	△	△	△	△	△	留	富士川周辺
61		トラツグミ					△	△	留	森林
62		クロツグミ	△	△	△	△			夏	森林
63		アカハラ	△	△	△		△	△	漂	〃
64		シロハラ	△	△	△	△	△	△	冬	〃
65		ツグミ	◎	◎	◎	◎	○	○	冬	全域
66	ヒタキ科ウグイス亜科	ウグイス	○	○	○	○	○	○	留	全域
67		ヤブサメ	△	△	△	△			夏	白尾山
68		オオヨシキリ	△	△	△	△	△		夏	富士川
69		センダイムシクイ	△	△	△	△	△		夏	白尾山
70		セッカ	△	△	△		△	△	留	明星山，草地
71	ヒタキ科ヒタキ亜科	キビタキ				△			夏	白尾山
72		オオルリ				△			夏	〃
73		コサメビタキ						△	夏	〃
74	エナガ科	エナガ	○	○	○	◎	○	○	留	明星山，白尾山
75	シジュウカラ科	ヒガラ	△	△	△	△			留	白尾山
76		ヤマガラ	△	△	△			△	留	明星山，白尾山
77		シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	留	全域
78	メジロ科	メジロ	◎	◎	◎	◎		◎	留	全域
79	ホオジロ科	ホオジロ	○	○	○	○	○	○	留	全域
80		カシラダカ	○	△	○	△	△	△	冬	森林，河原，水田
81		アオジ	○	○	△	○	△	△	漂	全域
82		ホオアカ				△		△	漂	明星山
83	アトリ科	カワラヒワ	○	△	△	△	△	○	留	全域
84		イカル	○	○	○	△	△	△	留	〃
85		シメ				△	△		冬	星山

明星山，白尾山周辺鳥類目録 4

No.	科名	種名	86	87	88	89	90	～92	生態	備考
86	ハタオリドリ科	スズメ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	留	全域
87	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○	○	○	○	留	全域
88	カラス科	カケス	○	○	○	△	△	△	留	明星山，白尾山
89		オナガ	○	○	△	△	○	○	留	〃
90		ハシボソガラス	△	△	△	△	△	△	留	全域
91		ハシブトガラス	△	△	△	○	○	△	留	〃
合計	34科	91種								

(△-極少，○-少，◎-普通，●-多)

### (7) 富士桜自然墓地公園のカナダガン

1986年7月、墓地公園管理人の方より「昨年1月のある日、1羽のガンが池に降りたが片方の足を痛めているようであった。翌日連れの1羽が戻ってきて居着き、池の中の島で5月始めに5羽の雛を育てたがイタチか野猫に襲われ全滅した。今年また5羽の雛が生まれたが、昨年のあることがあるのでどうしたらよいか。」と電話で相談があった。早速調査に行くと、2羽の親鳥に守られて3羽の雛が池に浮いている。見えない2羽の雛は野猫か何かに襲われて見えなくなったとの事。

親鳥の足にリングは無く、籠抜けの可能性もあるので付近の心当たりを照会したが該当するところは無かった。昨年と今年の行動より、天敵さえ注意すれば繁殖増加は可能と思えたので十分注意することと、外部には一切漏らさないように依頼した。8月末には2羽の雛が翔べるようになり、残る1羽も2箇月程遅れて翔べるようになった。この年、最初の繁殖成功。

以後毎年、この2羽は決して5羽づつ雛を孵化させ、1羽から2羽づつ失いながら順調に増加してきたが、1988年に原因不明の事件で親鳥2羽と雛2羽の姿が消えた。しかし残った雛10羽は健在で、生まれた池と周辺の池や富士宮市唯一の湖である田貫湖などを行き来してこの地を離れなかった。

1989年の春は、最初に生まれた雛の3羽が自分たちの生まれた島の周辺で縄張り争いをする姿が見られたが、産卵はせず繁殖はなかった。7月末頃も10羽は変わらず、3羽と7羽に別れる事もあったが産まれた池に帰って来て無事に1989年の秋を迎えた。

1990年、産卵の季節が訪れた。3羽は昨年同様互いに争っているように見えたのだが、雄1羽と雌2羽の関係である事が分かった。2羽の雌が離れないので雄は雌の1羽が産卵し抱卵を始めると他の雌にマウント(交尾)し、2羽の雌が同じ島の両端で卵を抱くという奇妙な行動が始まった。しかしその結果は雌の抱卵が不十分だったのか雛の数は1羽の雌には1羽の雛、他の雌には2羽の雛が確認されたが、雄1羽では守り

きれず雛は相次いで姿を消していったとのことだった。

雛を失った3羽の親鳥が池を離れて2～3日が過ぎたある日、雛4羽を連れた別の2羽の親鳥が姿を現しこの池に居着いた。翔べるようになるまでに2羽の雛を失ったが2羽は残り、合計12羽になった。

その後、1991年には1986年に生まれた3羽(雄1羽、雌2羽)の内の2羽がペアとなり雛4羽を育て、1987年生まれ1組が3羽育てたが場所は不明。1987年生れの他の1組は繁殖に失敗している。

1992年春には1986年生まれ1組が雛4羽を育てたが、87年生まれ2組はいずれも繁殖に失敗。この時点で生息数23羽。

1993年4月現在1986年生まれ1組が抱卵中である。



カナダガンの親子

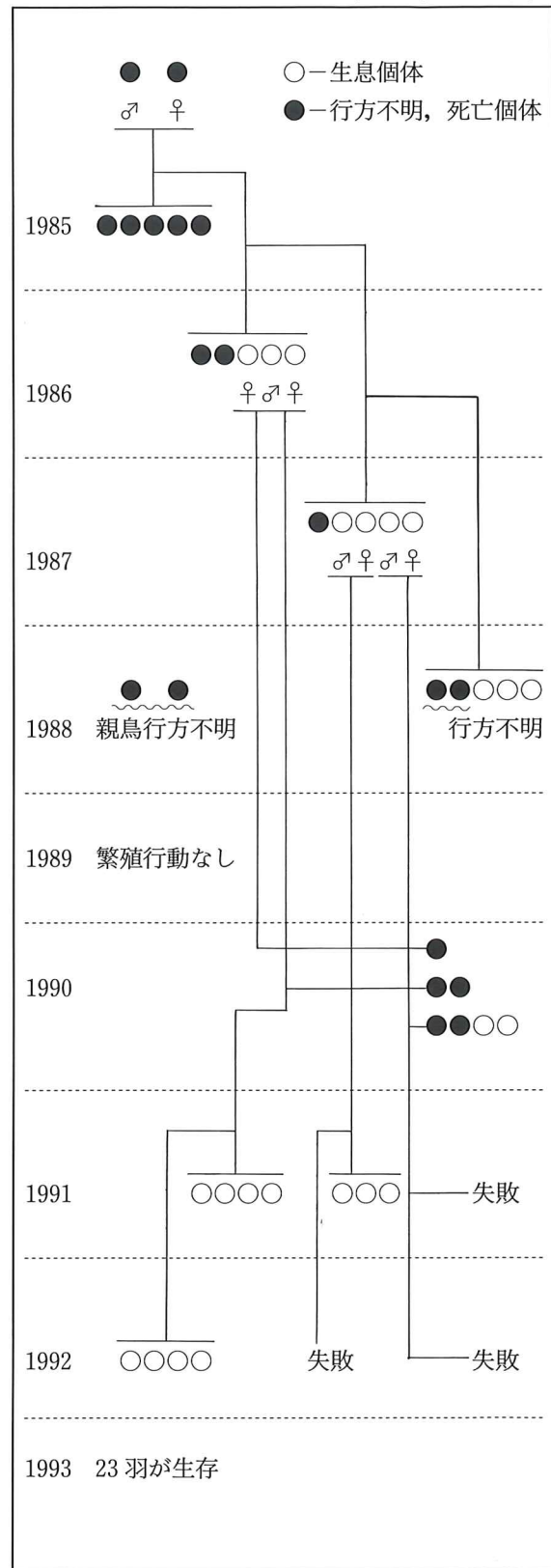
〔これまでに判ったこと〕

- ① 親鳥は2羽揃っていないと雛を天敵から守れない。
- ② 抱卵育雛は雛の採餌の都合か相当広い安全な草地が必要であること。
- ③ ペアはここでは同年生まれ同士でしかできていないことが判っている。今後変化があるかどうかは不明。
- ④ 未繁殖の若鳥は8月までは絶対に先輩のテリトリーには入れてもらえない。

⑤ この種はカナダガン〔英名：Canada Goose〕の亜種の中でも以前より日本に飛来例のある亜種名：クビワシジュウカラガン〔学名：Branta canadensis leucopareia〕や亜種名：ヒメシジュウカラガン〔学名：Branta canadensis minima〕ではなく、これらより体も大きく（体長90cm：採餌中に計測）胸の色も全体に白色味の強い北米産の基亜種〔学名：Branta canadensis canadensis〕と思われる。

富士桜自然墓地公園のカナダガン繁殖状況表

〔1993年4月現在〕





## (8) 田貫湖東地域特別調査

### 概 説

田貫湖鳥獣保護区東地域は約 10 年前まで雑木林二次林と草原の混交する自然環境の豊かな地域で、その東の雑木林や檜の林の急坂を下ると芝川の清流になる。川の右岸は昔からの野鳥観察コースで、20 数年前までは緑が深くサンコウチョウ、ミソサザイの繁殖する貴重な地域だった。現在は、芝川右岸の田貫湖に接する平地は開発の手が入り貸別荘地域となって昔の面影はない。しかし観察コースの調査資料によれば 26 科 53 種の野鳥が記録されており、優れた野鳥の生息地域と言えよう。

### (a) 調査地域

調査は芝川沿いの右岸のコースを下流から上流に進み、約 1.5 km 上流で左岸に渡り、左岸に続く芝川断層を下流に下るコースと併せ、田貫湖東岸の別荘地域の中を特別調査地域として調査することとした。

### (b) 調査方法

調査方法は 1 km 当たり約 30 分の線センサスと、適宜一箇所 15 分の点センサスにより、姿および鳴声の判別可能範囲内において野鳥の種類別生息状況を調査した。

### (c) 調査結果

この地域は過去長期に渡り野鳥生息調査を実施してきた所で、今回の調査も従来と同様の方法で行った。調査期間は 1 年間の予定であったが、隣接するゴルフ場の開発前の調査資料と比較することができたので、3 年間の資料を載せその変化を見た。結果として、1989 年以前は毎年記録されていた野鳥が姿を消し 1990 年以降見られなくなった種、また見ることはできても数が少なくなった種が非常に多くなっている。今までに記録された野鳥の種類は目録の通り 28 科 63 種あり、この中で 1989 年までに姿が見えなくなった鳥にオオ

タカ、フクロウ、ヤマシギ、イワツバメ、サンコウチョウ、トラツグミ、ヒバリ、キクイタダキ、ベニマシコ、マヒワの 10 種がある。さらに 1990 年に姿を見られなかった野鳥にはツミ、キジ、コジュケイ、アオバト、イソシギ、コルリ、ルリビタキ、ヒガラ、ヤマガラ、ホオアカ、ウソ、アカゲラ、アカモズの 13 種があり、1990 年度の調査によれば記録された野鳥は 24 科 40 種と 1989 年以前の調査記録から 23 種の野鳥が姿を消した事になる。その上、1990 年度の調査で羽数の減少が確認された種が更に 10 種類あり、この地域に生息する野鳥が明らかに減少していることが確認できた。

周囲約 4 km 程の調査地で年間 28 科 63 種の野鳥を観察できた地域が数年の間に 24 科 40 種の野鳥しか確認できなくなってしまったのは、諸種の事情はあるにせよ急激な森林の開発とその後の自然環境の劣化と俗化によるものが主な原因と思われる。

### (d) 感想

この地域の野鳥生息調査を開始したのは 30 年以上も前、田貫湖東側の草原は春早くからセッカが鳴き、夏はココシキリの営巣地となる。芝川の岸には巨木の林が繁り、薄暗い林内にはサンコウチョウの営巣が観察できた。その後、昭和 40 年代にはハシブトガラスの異常増加、以前は関東平野の鳥であったオナガの生息地域拡大に伴う増加などによりキセキレイなど小鳥の雛が食べられてしまうという現在の自然環境。それに加えてこの地域を流れる芝川に農薬汚水が流入して水生昆虫の減少や川魚の奇形を招きカワセミ、カワガラスなどの減少につながっているように、このような開発行為が野鳥の採餌行動に大きな影響を与え、生息地を奪い生息数の減少を引き起こしていることを認識しなくてはならない。自然との共存共栄が理想の人間社会に相応しい場所として、この地域がいつまでも守られてゆくことを強く期待する。

## 田貫湖東地域鳥類目録 1

No.	科名	種名	88	89	90	生態	備考
1	ガンカモ科	カルガモ	○	◎	○	留	湿地, 草原, 芝川
2	ワシタカ科	トビ	◎	○	○	留	上空
3		オオタカ	△			留	林
4		ツミ	△	△		留	〃
5	キジ科	キジ	◎	○		留	林, 草原
6		コジュケイ	○	○		留	〃
7	ハト科	キジバト	○	◎	○	留	林, 上空
8		アオバト	△	△		留	林
9	シギ科	イソシギ	○	○		旅, 漂	芝川
10		ヤマシギ	△			留	林, 草原
11	ホトトギス科	カッコウ	◎	○	◎	夏	林, 草原
12		ホトトギス	○	○	○	夏	林
13	フクロウ科	フクロウ	△			留	林
14	アマツバメ科	ヒメアマツバメ	○	○	○	留	上空
15		アマツバメ	◎	◎	◎	夏	〃
16	カワセミ科	ヤマセミ	○	○	○	留	芝川
17		カワセミ	○	○	○	留	〃
18	キツツキ科	アカゲラ	○	○		留	林
19		コゲラ	○	○	○	留	〃
20	ヒバリ科	ヒバリ	○			留	草地, 畑
21	ツバメ科	ツバメ	○	○	○	夏	上空
22		イワツバメ	◎			夏	〃

## 田貫湖東地域鳥類目録 2

No.	科名	種名	88	89	90	生態	備考
23	セキレイ科	キセキレイ	○	○	○	留	芝川
24		ハクセキレイ	○	○	○	留, 漂	〃
25		セグロセキレイ	○	○	○	留, 漂	〃
26	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	●	◎	◎	留	林
27	モズ科	モズ	○	○	○	留	林, 草原
28		アカモズ	○	○		夏	草原
29	カワガラス科	カワガラス	○	○	○	留	芝川
30	ミソサザイ科	ミソサザイ	○	○	○	留	芝川
31	ヒタキ科ツグミ亜科	コルリ	○	○		夏	林
32		ルリビタキ	○	○		留	〃
33		ジョウビタキ	○	○	○	冬	林, 草原
34		トラツグミ	△			留	林, 空地
35		クロツグミ	○	○	○	夏	林
36		アカハラ	○	○	○	夏, 漂	林, 草原
37		ツグミ	○	○	◎	冬	〃
38	ヒタキ科ウグイス亜科	ヤブサメ	○	○	○	夏	林
39		ウグイス	◎	◎	◎	留	林, 草原
40		センダイムシクイ	○	○	○	夏	林
41		キクイタダキ	○			留, 漂	〃
42	ヒタキ科カササギビタキ亜科	サンコウチョウ	△			夏	林
43	エナガ科	エナガ	◎	◎	◎	留	林
44	シジュウカラ科	ヒガラ	○	◎		留	林
45		ヤマガラ	○	○		留	〃
46		シジュウカラ	◎	◎	◎	留	〃

## 田貫湖東地域鳥類目録 3

No.	科名	種名	88	89	90	生態	備考
47	メジロ科	メジロ	●	◎	◎	留	林
48	ホオジロ科	ホオジロ	●	◎	◎	留	林, 草原
49		ホオアカ	○	○		夏	草原
50		カシラダカ	●	○	◎	冬	林, 草原
51		ノジコ	○	○	○	夏	林
52		アオジ	●	◎	○	留	林, 藪
53	アトリ科	カワラヒワ	◎	◎	◎	留	林, 草原
54		マヒワ	●			冬	林
55		ベニマシコ	○			冬	林, 藪
56		ウソ	○	○		漂	林
57		イカル	◎	◎	○	留	〃
58	ハタオリドリ科	スズメ	○	○	◎	留	草原
59	ムクドリ科	ムクドリ	●	◎	◎	留	林, 草原
60	カラス科	カケス	○	◎	◎	留	林
61		オナガ	●	○	◎	留	〃
62		ハシボソガラス	◎	○	◎	留	林, 草原
63		ハシブトガラス	◎	○	○	留	〃
合計	28科	63種	63	53	40		

(△-極少, ○-少, ◎-普通, ●-多)



## (9) 天神山地域特別調査

### 概 説

1990年の春、富士宮市は上井出地先桜公園の天神山地域を県より移管された。普段は特に目立つことのない小さな丘であるが、毎年4月中旬になると山の西側半分に植えられた桜の花が斜面を覆い、花見のできる公園になっている。付近に水の無い公園だが給水施設を施して野鳥の水場ができており、1989年春に訪れた時は留鳥のホオジロが水浴びをしていた。これといって特徴のある場所ではない普通の丘ではあるが、野鳥保護施設の一つとして水場を作った最初の施設なので1年間様子を見る事とし、その結果を次に記す。

### (a) 調査方法

野鳥の調査では出現した鳥の種類数と共に個体数も記録するのが普通だが、この調査地は至って狭いエリアであり、個体数をカウントすると同一個体を重複して数えてしまう可能性が高く正確な結果が得られにくい。ため、今回の調査では種類数を主に記録する事とし、個体数の記録については参考値とする。天神山頂上の南端にある水場を中心に一回につき約1～2時間、周囲の環境を考察しながら調査を行う。

### (b) 調査地域

調査地域の天神山は、国道139号線富士宮バイパスを北上すると上井出インターチェンジを過ぎ大沢橋を越えて間もなく、右手に見える小高い丘である。丘の頂上から西～南側にかけては桜の高木が植わり遊歩道が整備された桜公園になっており、反対側の北～東側は植林された檜と杉の林で、その周囲は富士山大沢の砂防地域となっている。この中には雑木林の二次林もある。丘の頂上の一角に浅い池のような給水浴施設が作られ野鳥の休息地となっており、次第に鳥たちが集まる環境ができてきている。

### (c) 調査結果（給水浴施設の利用状況）

野鳥にとって水浴は非常に重要な行動であり、小鳥の場合一日に冬で2回、春から秋にかけては5～10回も行われる。そのため営巣地の近くに水場が無い場合は数百メートル以上もの距離を探すこともある。逆に水場があれば半日ほどの観察でその周辺に住む鳥たちの殆どを確認することができる。天神山の給水浴施設は頂上南端に一箇所だけあるので、ここを中心に観察を行なうと年間を通じてここを利用し通過して行く鳥の動きがわかる。

3月、時折ウグイス、メジロ、ホオジロなどが訪れるが多くは水を飲むだけで水浴まではしていかない様子。初夏も近く木々の緑が濃くなるにつれて訪れる鳥の種類も増え、漂鳥や旅鳥が立ち寄るようになると水浴をする鳥も増えてくる。カケス、オナガ、ムクドリなどの他にウソ、カワラヒワ、アオジ、シジュウカラ、エナガ、センダイムシクイ、クロツグミなどが近くの木で囀るようになる。

すっかり暑くなった7月、モズが姿を見せた。ヒヨドリ、キセキレイなども訪れ水場はいっそう賑やかになる。キジバトは水の表面を白く汚すので歓迎されないうが、翌日行って見たら汚れは消えていた。カッコウは鳴き声を聞いただけ、キジは姿を見せただけ、コジュケイは幾羽かが山道を次々に横切って行った。珍しくツミが桜の枝に止まっていたこともあった。

9月の観察では、2時間程の間にキジバト、メジロ、ウグイス、エナガ、ホオジロ、シジュウカラなど10種類の鳥たちが姿を見せ、イカルが12羽程訪れ水飲み、水浴をしていった。周囲の木々は緑なのに桜の葉だけが散っている。アカハラが姿を見せ、アカゲラが桜の幹を次々と巡りながら餌を探している。この日はコゲラも何処かで鳴いたのを聞いた。

朝夕めっきり涼しくなり水場周辺も静かになった11月、この日は1時間間にハシボソガラスが3羽姿を見せただけであった。

秋から冬にかけて姿を見せなかったツグミ、ジョウ

ビタキも1月に入って見られるようになり、イカルやカシラダカも訪れるようになった。まだ他に姿を見せても良いはずの漂鳥や冬鳥もあるのだが、現時点では年間を通じて18科33種しか観察できていない。

〔天神山鳥類目録 1, 2 参照〕

#### (d) 感想

今年1年間の調査の中で気付いた事に、この給水浴施設は野鳥ばかりでなく意外な生き物も利用しているという事が判った。最初に気付いたのはヘビで、30 cm程のヤマカガシの抜け殻が池の近くにあった。次はノラネコで、ゆっくりと葉陰から顔を出し周囲の安全を確かめてから水場に現れて水を舐め、近くにいる小鳥など気に掛けないような態度で消えていった。昼の場合だけを考えてもこの水場は鳥だけの占有ではないと言う事は、このような施設は自然の平等を考慮して作

らねばならないということを改めて教えられた。

今まで野鳥保護活動としてよく行われてきた巣箱の設置や給餌施設はこの地域には必要ない。ここにある桜の木は虫が付きやすいので自然の給餌台となって小鳥を呼び集めてくれる。このように自然に近い場所では、施設の充実よりも環境を整備することの方が望ましい。例えば、近くの雑木林から天神山に至る今ある樹林を幅数メートルの帯状に雑草や小灌木などのグリーンベルトで継ぐことができたなら野鳥たちの移動通路としてまた休息地域として機能し、年間を通じて今まで以上に鳥たちの集まる地域となるだろう。とは言っても秋から冬にかけて小鳥たちは水場を群れで利用することが多いため、小型のエナガ、メジロ、シジュウカラなどは先に利用している鳥や動物があると利用しにくいので、日当たりのよい場所に現在と同様の給水浴施設があと一箇所あれば充分であろう。

## 天神山鳥類目録 1

〔1990年調査〕

No.	科名	種名	90	生態	備考
1	ワシタカ科	トビ	○	留	上空
2		ツミ	△	留	林
3	キジ科	コジュケイ	◎	留	林, 水場
4		キジ	○	留	林
5	ハト科	キジバト	○	留	林, 水場
6	ホトトギス科	カッコウ	○	夏	林
7	キツツキ科	アカゲラ	○	留	林
8		コゲラ	○	留	〃
9	ツバメ科	ツバメ	○	夏	上空
10	セキレイ科	キセキレイ	○	留	水場
11	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	◎	留	林, 水場
12	モズ科	モズ	○	留, 漂	林, 草原
13	ヒタキ科ツグミ亜科	ルリビタキ	○	漂	林
14		ジョウビタキ	○	冬	林, 水場
15		クロツグミ	○	夏	〃
16		アカハラ	○	漂, 夏	林, 草原
17		シロハラ	○	冬	林
18		ツグミ	○	冬	林, 草原
19	ヒタキ科ウグイス亜科	ウグイス	◎	留	林, 水場
20		センダイムシクイ	○	夏	林
21	エナガ科	エナガ	◎	留	林, 水場
22	シジュウカラ科	シジュウカラ	◎	留	林, 水場

## 天神山鳥類目録 2

〔1990年調査〕

No.	科名	種名	90	生態	備考
23	メジロ科	メジロ	◎	留, 漂	林, 水場
24	ホオジロ科	ホオジロ	◎	留	林, 草原, 水場
25		カシラダカ	◎	冬	林, 水場
26		アオジ	◎	漂, 留	林
27	アトリ科	カワラヒワ	◎	留	林, 水場
28		ウソ	◎	漂	〃
29		イカル	●	留, 漂	〃
30	ムクドリ科	ムクドリ	●	留	林
31	カラス科	カケス	○	留	林
32		オナガ	◎	留	〃
33		ハシボソガラス	◎	留	林, 水場
合計	18科	33種			

(△-極少, ○-少, ◎-普通, ●-多)



#### (10) 足形鬼橋付近の野鳥生息状況

この地域は狭い場所ではあるが、芝川を挟んで東西両側に森林や雑木林があり、南北にベルト帯をなしている。そのため生物の生息環境としては通過地点、休息地点、営巣地点として存在価値のある場所となっており、鳥の種類は結構多く見られる。

- ① 川辺を中心に魚や川虫を関係づけているもの  
ヤマセミ、カワセミ、キセキレイ、カワガラス、セグロセキレイ
- ② 付近に住んで営巣し、雛を育てる（留鳥）  
アオジ、ウグイス、シジュウカラ、キジバト、ヒヨドリ、オナガ、ヤマガラ、スズメ、モズ、ホオジロ、カワラヒワ、キジ、オオタカ、トビ、カケス、ハシブトガラス、ハシボソガラス
- ③ 夏にやってくる鳥（夏鳥）  
クロツグミ、ツバメ、ノジコ
- ④ 秋から冬にやってくる鳥（冬鳥）  
ルリビタキ、ジョウビタキ、ツグミ、シロハラ、マヒワ、カシラダカ、チョウゲンボウ、ハヤブサ
- ⑤ 夏は深山に移動、冬は里に降りてくる（漂鳥）  
キクイタダキ
- ⑥ 秋から冬に群をなして生活する  
シジュウカラ、オナガ、カワラヒワ、スズメ、カシラダカ、ムクドリ

## 4 提 言

富士宮市域の自然環境は第一次調査時より急速に変化しており、野鳥の保護ばかりでなく市民の健康と安全のためにも富士宮市域北部と富士山麓の自然環境の

保全と回復が必要な時代となった。その第一は水資源の汚染防止と災害の防止である。緩やかな傾斜と富士山特有の地層地質は山麓の裾まで表流水がない。豊かな高原性の自然植生は富士山麓や朝霧高原の特徴であり、本州中部に位置しながら北海道や北陸地方の景観を思わせる貴重な地域である。富士山南麓をわが国の繁殖の南限としているノビタキやオオジシギ、また北米の鳥でありながらここに定着、繁殖しているカナダガンなど、全国的に見ても貴重な自然がこの地にあることを認識し、市民の財産である自然環境を守るための厳正な規制と、行き過ぎな開発行為に対しての中止や回復処置を実施しなければならない。

富士山を取り巻く価値ある自然を世界の人々に紹介し認めてもらうため、この地域を代表する自然環境を後世まで残すことを目的とした『自然保護地域』もしくは『自然公園』として施設したい。また市標として『富士山と共に歩む水と緑の国際文化都市』にふさわしい富士山麓の文化拠点として、地質、植生、動物、鳥類、昆虫、気象などの行政研究調査機関の誘致なども今後検討されたい。

## 参 考 文 献

- 1 富士宮市域自然調査研究会(1988)：富士宮市の自然(第一次富士宮市域自然調査研究報告書) 富士宮市
- 2 日本鳥学会編(1972)：日本鳥類目録改訂第5版 学習研究社
- 3 PETER SCOTT(1961)：KEY TO THE WILDFOWL The Wildfowl Trust



# 昆 虫





# I 鞘翅目 (甲虫類)

日原 章



## はじめに

甲虫はカブトムシとも読むように、カブトムシは甲虫の王様であり代表である。そしてクワガタ類やカナブン等と共に子供たちの憧れの的であり、今回の調査でも度々子供たちと遭遇したり、足跡に出会った。これは昔も今も子供たちの虫願望の表れであり、欲求であると思われるが、時代の流れの中で生じた環境の変化から、種や個体数の減少する傾向の中での調査はこの辺も考慮しながら慎重を期したつもりである。

## 1 調査方法

現地で確認することを主眼に、写真撮影し、又は採集し標本にすることにより、種名の同定の困難さに対処することとした。なお、調査同好者や既に発表された調査報告も極めて少なく困難を来たした。

## 2 採集方法

### ① ビーティングネットの使用

四角な布を木の枝や灌木の下に敷き、木を揺らし或いは棒で叩いたりして、昆虫を布の上に落と

し、採集する。

### ② ベイトトラップ法

コップに肉辺や甘味果実酒を入れ地表に埋めておく等し、餌を使って夜行性の種などを採集する。

### ③ ライトトラップ法

夜間に燈火に来る性質を利用し採集する方法。

### ④ わら巻き法

木の幹にわらやむしろを巻き、越冬種を採集する。

### ⑤ その他

石を起こしたり、朽木を割ってみる等する。

## 3 調査結果の科別リスト

### (1) ハンミョウ科

5月に根原B沢及び白糸横手沢川原、8月に富士山二合目、11月に坂林の山道で成虫発見、昔は庭に小さな穴がたくさんあってニラ等を差し込んで虫つり（幼虫）をしたものであった。別名みちおしえ

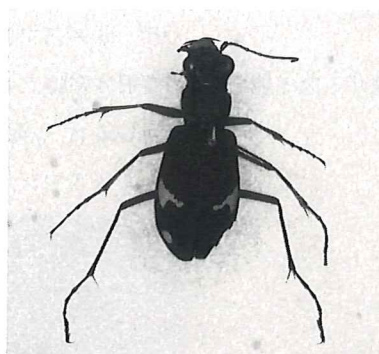
ハンミョウ

ニワハンミョウ

ミヤマハンミョウ



ハンミョウ



ニワハンミョウ



ミヤマハンミョウ



## (2) オサムシ科

ベイトトラップで明星山，泉町の畑で7月に，8月には田貫湖畔，朝霧牧場で，また朽木上で見ている。

フジクロナガオサムシ

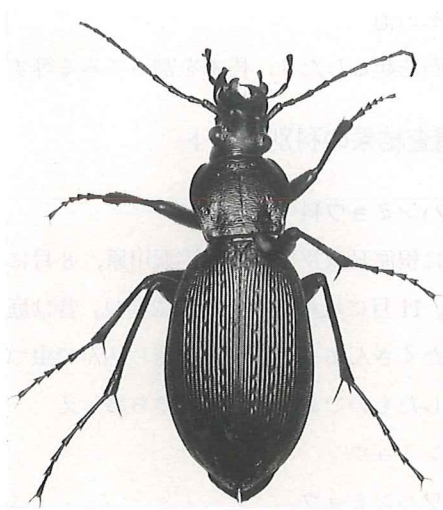
シズオカオサムシ

ホソアカガネオサムシ

ルイスオサムシ

マイマイカブリ

ヒメマイマイカブリ



シズオカオサムシ



ヒメゲンゴロウ



コシマゲンゴロウ

## (3) ゴミムシ科

明星山，泉町，田貫湖畔，朝霧牧草地等ゴミ捨て地のどこにでもいる。

アトボシアオゴミムシ

スジアオゴミムシ

ヒメキベリアオゴミムシ

ルリヒラタゴミムシ

ヤホシゴミムシ

ケゴモクムシ

## (4) ゲンゴロウ科

池，沼，河川に多いが，雨後の水溜りにもきた。そして夜間の燈火にもきた。

ヒメゲンゴロウ

コシマゲンゴロウ

## (5) ミズスマシ科

複眼は脊腹上下に分かれている。よく水面に群がって旋回しており，沼久保の川原の水溜りで確認している。

ミズスマシ



ミズスマシ



## (6) エンマムシモドキ科

タラノキの枯木で発見したが、日本に一種だけいる。

エンマムシモドキ

## (7) エンマムシ科

小昆虫を食し腐敗物、糞にくる。朽木皮下に多い。

ヒメエンマムシ

## (8) シデムシ科

オサムシ類と同じゴミ捨て地において、特にオオヒラタシデムシは多く、蛇やミミズの死骸上に見られた。

クロシデムシ

マエモンシデムシ

ヤマトモンシデムシ

コクロシデムシ

ヨツボシモンシデムシ

ヨツボシヒラタシデムシ

オオヒラタシデムシ



オオヒラタシデムシ

オサムシ科からシデムシ科までは肉食又は腐肉食なので餌となる動物や虫が必要であり、殆ど3月から12月にかけて見掛ける。特に人家やキャンプ場近くに多く見掛けるのは食物連鎖の関係と思われ、たくましく動きまわってベイトトラップに掛かるのもこの種の特徴である。

ゴミのある場所によく集まり、幼虫類もよく動き回る。この科は何処にでもいる山の掃除屋で、フジ、シズオカの名のあるものは形も美しく、この地の特徴的

な種である。又捕らえられると刺激性の放屁をすることから「ヘッピームシ」の俗称をもつものもある。

## (9) デオキノコムシ科

枯木につく菌を食べている。

ヤマトデオキノコムシ

ヒメクロデオキノコムシ

## (10) ハネカクシ科

ベイトトラップに来た。笹の葉に多く種類は多い。

コアリガタハネカクシ

クロコガシラハネカクシ

オサシデムシモドキ

## (11) クワガタムシ科

この科は広葉樹の朽木を食べて幼虫時代を過ごすのが、ミヤマクワガタでは成虫になるまでに数年を要する。成虫は姿、形ともよく、近年はその稀少価値も加わって商品化され乱獲が進み、家庭燃料の変化や開発も重なって広葉樹林の減少は著しく、その個体数は激減し、大型のものは絶滅に近付いており、この調査にも次第に減少するのが確認された。

それでも本来的に夏は樹液に集まり、沼久保川原の柳、白尾山、明星山、安居山、大岩、次郎長、粟倉、青木、外神、天母台、上井出、白糸、朝霧、根原、富士山二合目等に分布しているのを確認している。

ノコギリクワガタの角は形よく反り返っているのが普通だが、近年は小形のものや角の反り返っていないものが多くなってきている。この原因は幼虫時代の成育環境によるもので、水分の多寡に影響されると言われ、環境変化から乾燥が進んでいることがうかがえるものである。

ミヤマクワガタ

コクワガタ

スジクワガタ

アカアシクワガタ

ノコギリクワガタ

ヒラタクワガタ

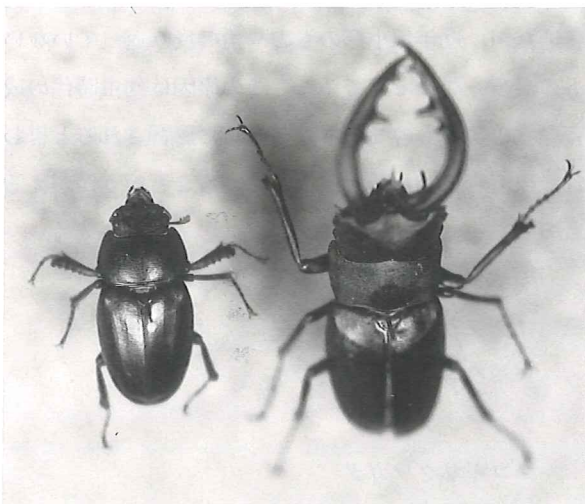
ルリクワガタ



ミヤマクワガタ♂



アカアシクワガタ♂



♀ノギリクワガタ♂

## (12) センチコガネ科

牛馬糞によく集まるが老熟茸中でも得られる。

センチコガネ

## (13) コガネムシ科

甲虫類は一般に植物の樹木部や葉及び果実等を食害することが多く、作物の害虫と言われるものが殆どで、これらは種類も個体数も多く春から秋まで何処にでも見られ、特に7月末から8月初旬には野山に急増し、豆科植物には特に多く集まる。朝霧方面のクズやハンノキの葉に多く集まっているのが見られ、8月初めの一週間に水銀灯に集まるものは毎朝バケツ一杯はあった。マメコガネはジャパニーズビートルと称されアメリカで大繁殖したこともあり、明星山から朝霧高原まで広く分布している。又この種に属するカブトムシは養殖され商品化されて、子供たちの好みの対象となってスーパーやデパートにあるが、これが逆に野生化したものが在来種を駆逐する等の問題を起こしている。

一般に畑地や果物畑でよく見掛ける種である。

カブトムシ

オオスジコガネ

ヒメコガネ

マメコガネ

セマグラコガネ

アオハナムグリ

ヒラタハナムグリ

ヒメアシナガコガネ

ツヤスジコガネ

オオトラフコガネ

ヒメスジコガネ

クロマルエンマコガネ

ナガチャコガネ

オオキイロコガネ

アオウスチャコガネ

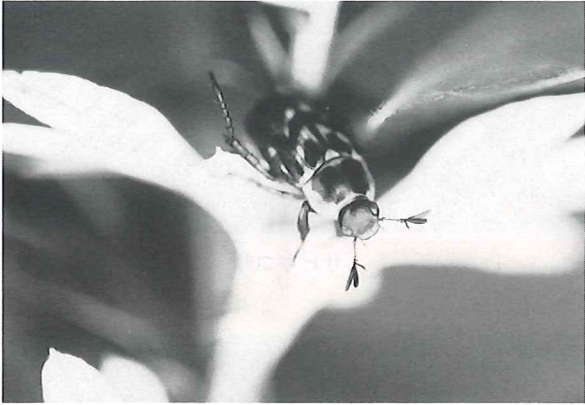
ビロードコガネ

アオアシナガコガネ

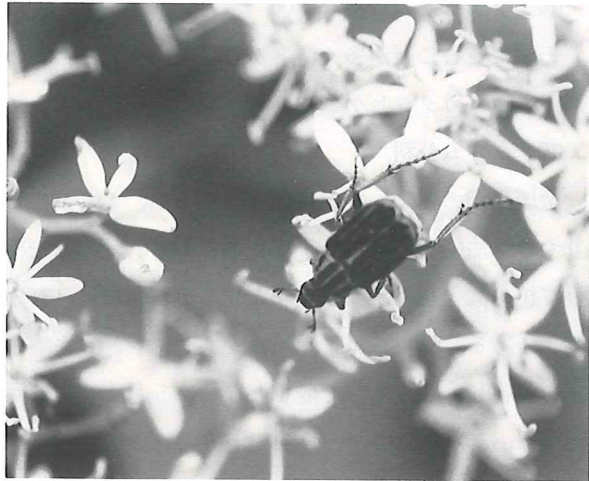
カナブン



アオカナブン  
アオドウガネ  
ドオガネブイブイ



セマダラコガネ



ヒメアシナゴコガネ



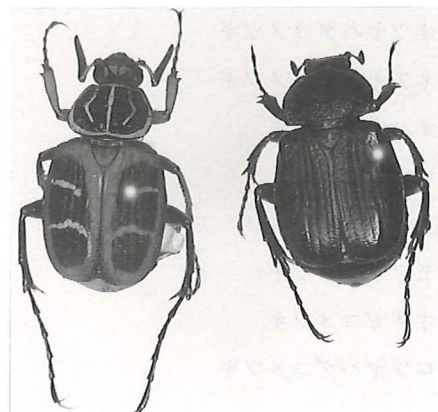
アオカナブン



カブトムシ



マメコガネ



♂オオトラフコガネ♀

## (14) クシヒゲムシ科

朽木に棲むことが多く、春から夏によく見かける。

ムネアカクシヒゲムシ

## (15) タマムシ科

金属光沢の美しい羽を持つものがあり、この羽を貼りつけた法隆寺の玉虫厨子は有名である。夏の日を受けて榎の葉上をキラリキラリと光って飛ぶ様子は、荘厳でさえある。幼虫はエノキ、カシ、サクラ、カキ等の材を食害し、3・4年で成虫となる。5月山宮、6月沼久保、9月に四中西の公園で、10月に浅間大社の森で確認している。ウバタマムシは松に、クリタマムシは栗の木にいる。タマムシ色光沢で江戸時代珍重された。

タマムシ

クリタマムシ

ウバタマムシ

## (16) コメツキムシ科

コメツキの名は、仰向けに置くと前胸と翅鞘の肩で板を叩いて跳ね返って元に戻ることからつけられたもので、5月にミズキの白花に多く訪れ舞っているのを見るが、初夏には他の甲虫類と共に樹液にも来ている。

アカアシオオクシコメツキ

メスアカキマダラコメツキ

ルリツヤハダコメツキ

オオツヤハダコメツキ

ムネアカクロコメツキ

オオハナコメツキ

サビキコリ

ムナビロサビキコリ

シモフリコメツキ

オオナガコメツキ

クロツヤハダコメツキ



サビキコリ



オオナガコメツキ

## (17) ホタル科

ホタルと言えば一般に大型のゲンジボタルを指すことが多いが、湧水等きれいな水に生息するカワニナを幼虫時代に食べて成長するので、水環境の悪化から個体数は減少し、沼久保、青木、星山等で見られる程度であるが、ヘイケボタルは環境にも強く、順応性もあって広く生息し、沼久保から猪之頭まで分布し小田貫湿原、大倉ダムで確認している。明滅サイクルは富士川を境界に東西で異なることが近年発表された。また、この種は環境指標種となっている。

詳細は「特別調査4 富士宮のホタルについて」の報告を参照されたい。

ゲンジボタル (清流に幼虫)

ヘイケボタル (水田汚水にも幼虫)



オバボタル

ヒメボタル (高地, 陸生の幼虫) 中里山,

西白塚

(18) ジョウカイボン科

初夏に花上で見掛け, 形状はハナカミキリに似るが, 体は非常に軟らかい。

ジョウカイボン

アオジョウカイ

セボシジョウカイ

キンイロジョウカイ

(19) ベニボタル科

熱帯地方に分布が多いが, 花, 葉, 樹皮下で見つかる。

ベニボタル

クシヒゲベニボタル

カクムネベニボタル

(20) ケシキスイ科

初夏に樹液に来てクワガタの子と間違えられるが, これで立派な成虫である。

ヨツボシケシキスイ

コヨツボシケシキスイ

(21) オオキノコムシ科

楕円形でキノコに集まり種により食べるキノコが違う。

オオキノコムシ

クロハバビロオオキノコムシ

(22) テントウムシ科

ナナホシテントウがアブラムシを捕食するので益虫として有名だが, 一般には葉を食害する。羽の斑点の数で白十五星, 七星, 十星等と呼ばれている。

テントウムシ

ナナホシテントウ

シロジュウゴホシテントウ

ベニヘリテントウ

カメノコテントウ

トホシテントウ

ニジュウヤホシテントウ



テントウムシ



ニジュウヤホシテントウ

(23) ゴミムシダマシ科

湿気が多い枯木, 朽木等で広く見られた。

ヒゲブトゴミムシダマシ

シワナガキマワリ

キマワリ



キマワリ

## (24) ハムシダマシ科

幼虫は朽木、落葉下に、成虫は葉、花、樹皮下に見る。

ナガハムシダマシ

アオハムシダマシ

## (25) キノコムシダマシ科

枯木やキノコにいる。

モンキナガクチキムシ

## (26) アカハネムシ科

触覚は鋸歯状で、ベニボタル類に似ている。色は鮮やか。初夏明星山で見た。

アカハネムシ

## (27) カミキリモドキ科

幼虫は朽木や落葉の中に、成虫は葉上、花上に見られ、肌に触れたとき水腫を生じさせるものもある。

キアシカミキリモドキ

キバネカミキリモドキ

モモブトカミキリモドキ

カトウカミキリモドキ

ホソカミキリモドキ

## (28) アリモドキ科

体長5mm。朽木に棲む。日本には約50種知られる。

ケナガクビボソムシ

## (29) カミキリムシ科

この種だけでも種類が多く、大型から小型まで日本に約1,000種と言われて、大型種の中には前胸と中胸をこすり合わせてキイキイ音を出すものもあり、明星山から朝霧まで広く分布するが北部には小形のものが多。ハナカミキリは夏に花上に来るが、アカハナカミキリが代表的存在で、南部では6月から朝霧や富士山では8月下旬まで見られる。

小形のものはトラノオ等の花中に頭を突っ込んでいて気付き難いこともある。一般にテッポウムシと呼ばれたりして害をすることが多いが、羽の形や色の美しい種もある。

シロスジカミキリ

ミヤマカミキリ

ノコギリカミキリ

キボシカミキリ

アカハナカミキリ

ヨツスジハナカミキリ

セズジヒメハナカミキリ

ツヤケシハナカミキリ

ミヤマクロハナカミキリ

アラメハナカミキリ

フジヒメハナカミキリ

フジコブヤハズカミキリ

ヒラヤマコブハナカミキリ

セダカコブヤハズカミキリ

フタスジカタビロハナカミキリ

ホソガタヒメハナカミキリ

オヤマヒメハナカミキリ

ニンフハナカミキリ

タテジマハナカミキリ

フタスジハナカミキリ

トラフカミキリ

キスジトラカミキリ

シロトラカミキリ

エグリトラカミキリ

トゲヒゲトラカミキリ

キバネニセハムシハナカミキリ

ルリハナカミキリ

フタオビノミハナカミキリ

キベリクロヒメハナカミキリ

カクムネヒメハナカミキリ

ナガバヒメハナカミキリ

モモグロハナカミキリ

カラカネハナカミキリ

ヒゲジロハナカミキリ

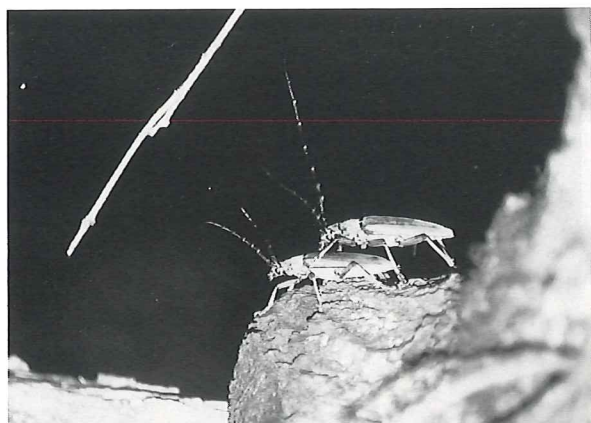
トビイロカミキリ

ピロウドカミキリ

ニセピロウドカミキリ

ニセリングカミキリ  
 ヒメリングカミキリ  
 ヘリグロリングカミキリ  
 エゾサビカミキリ  
 アトジロサビカミキリ  
 アトモンサビカミキリ  
 ナガジロサビカミキリ  
 ヒメヒゲナガカミキリ  
 ハンノキカミキリ

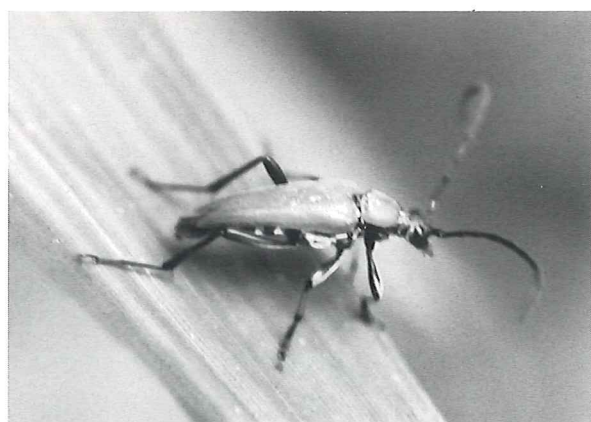
ドウボソカミキリ  
 シロオビチビカミキリ  
 ヨツキボシカミキリ  
 ナガゴマフカミキリ  
 シラホシカミキリ  
 キッコウモンケシカミキリ  
 ミドリカミキリ  
 ホタルカミキリ  
 チャボヒゲナガカミキリ



ミヤマカミキリ



キスジトラカミキリ

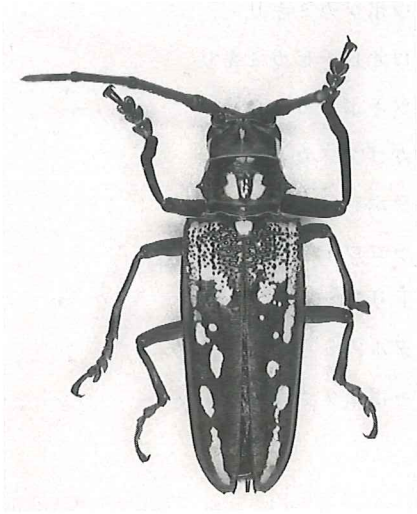


アカハナカミキリ



ノコギリカミキリ





シロスジカミキリ



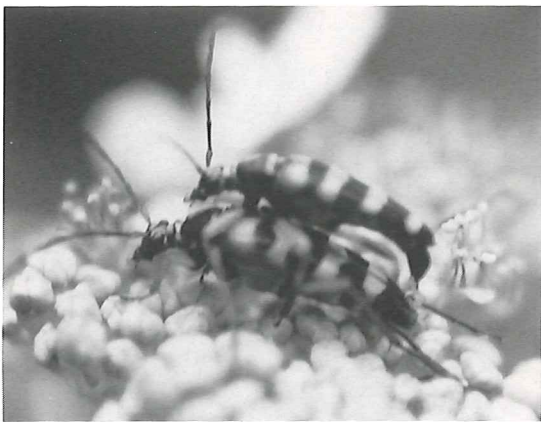
ルリハナカミキリ



キボシカミキリ



セスジヒメハナカミキリ



ヨツスジハナカミキリ



ツヤケシハナカミキリ





ミヤマクロハナカミキリ

## (30) ハムシ科

ハムシは葉虫で葉を食害する。小型で種類も多く分別や同定が難しい。テントウムシに似るが羽が軟らかい感じで、何処にでも見られ、アトボシハムシをわら巻きの中から12月に、越冬中を見つけた。

ヨモギハムシ  
アトボシハムシ  
サンゴジュハムシ  
ウリハムシ  
クロウリハムシ  
トホシハムシ  
キイロクビナガハムシ  
ルリハムシ  
ルリクビホソハムシ  
キボシルリハムシ  
クロルリトゲハムシ  
ヒゲナガルリマルノミハムシ  
アザミカミナリハムシ  
クロボシツツハムシ  
アカガネサルハムシ  
オオキイロマルノミハムシ  
フタホシオオノミハムシ  
フジハムシ  
キバラヒメハムシ  
イチモンジカメノコハムシ

アオカメノコハムシ  
セモンジンガサハムシ  
ヒメジンガサハムシ  
ホタルハムシ  
キイロタマノミハムシ  
コガタルリハムシ  
イタドリハムシ  
キムネルリハムシ  
ハンノキハムシ  
ドロノキハムシ



イタドリハムシ

## (31) ヒゲナガゾウムシ科

カミキリムシに似るが区別が難。枯木や種子にいる。

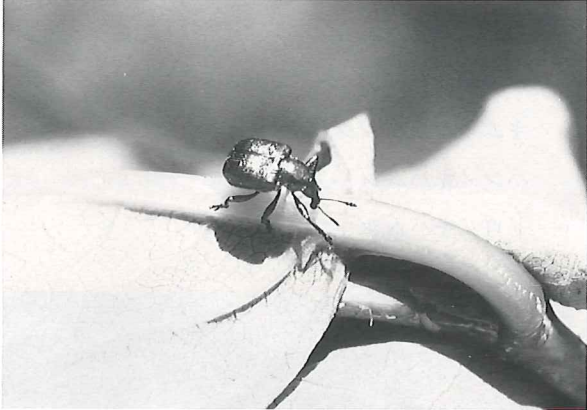
ホソヒゲナガゾウムシ

## (32) オトシブミ科

幼果に産卵して切り落としたり、落葉を切り巻いて産卵し、落としたりすることから「落とし文」の名がある。市街地周辺では4月末、北部では8月まで、揺らん作りを確認している。

ドロハマキチョッキリ  
チャイロチョッキリ  
オトシブミ  
ウスアカオトシブミ  
ヒメクロオトシブミ  
ヒゲナガオトシブミ  
ヒメコブオトシブミ

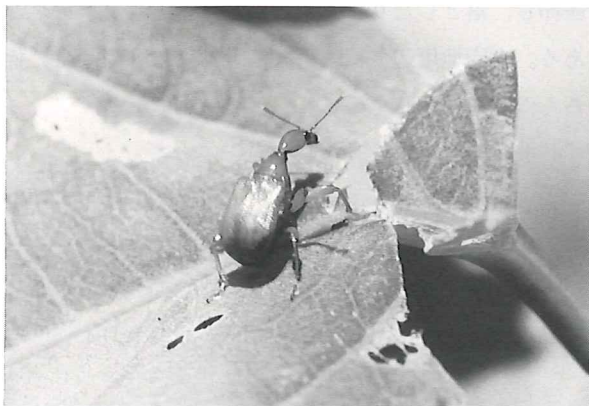
ウスモンオトシブミ  
 アカクビナガオトシブミ  
 ハギツルクビオトシブミ  
 エゴツルクビオトシブミ



ドロハマキチョッキリ



アカクビナガオトシブミ



ウスアカオトシブミ



オトシブミ

(33) ゾウムシ科

この科は象の名があるとおり、丈夫な口が突起し、これで植物に穴を開けて食害し又棲む。コクゾウムシは、かつては米びつに棲んでいた種であった。

オオゾウムシ (オオゾウムシ科)

マツアナアキゾウムシ

ホソアナアキゾウムシ

コブヒゲボソゾウムシ

シロコブゾウムシ

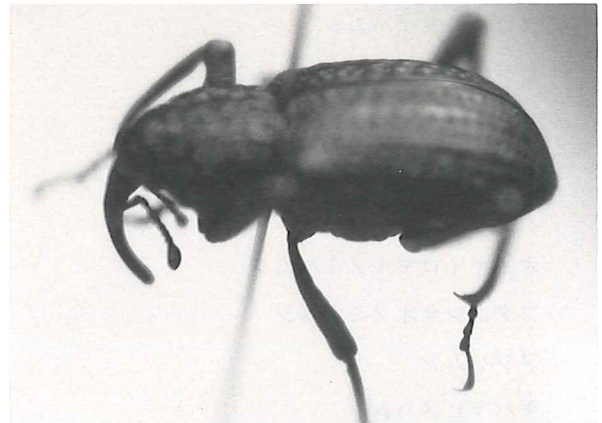
コフキゾウムシ

リンゴコフキゾウムシ

マダラメカクシゾウムシ

オジロアシナガゾウムシ

カシワクチプトゾウムシ



オオゾウムシ (オオゾウムシ科)



シロコブゾウムシ

## 参 考 文 献

1 杉山恵一編 (1983)：「静岡県的重要昆虫」 第一

法規

- 2 中根猛彦監修. 日本甲虫学会編 (1984)：「原色日本昆虫図鑑」 保育社
- 3 黒沢良彦・渡辺泰明 (1985)：「甲虫」 山と溪谷社
- 4 静岡県教委高校教育課(1987)：「富士山麓山の村」 自然環境報告書
- 5 黒沢良彦 (1988)：「クワガタムシ」 保育社
- 6 「駿河の昆虫」(～1992)：静岡昆虫同好会
- 7 大林延夫・佐藤正孝・小島圭三編 (1992)：「日本産カミキリムシ検索図説」 東海大学出版会



## 特別調査 1

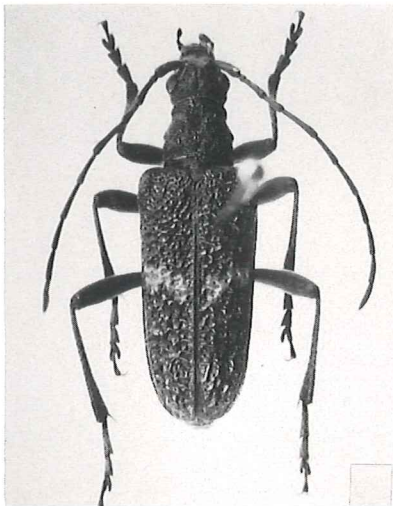
## 表富士の特徴的な甲虫

平井克男

表富士における特徴的な注目すべき甲虫については近年調査が深まり、これらは標高1,000~2,000 mにかけての針葉樹広葉樹混交林帯に生息しているものが多く、以下にこれを示す。

## (1) アラメハナカミキリ

独特な美しさを持つ種で、寒冷地に生息している。表富士での記録では本州南限として貴重である。二合目付近の針葉樹の立ち枯れから、6~7月にかけて多く見出される。



アラメハナカミキリ

## (2) ヒラヤマコブハナカミキリ

平地では4~5月にかけて、カエデ花上や林道上での飛翔個体が得られていたが、大変な稀種として有名であった。ホストがヒメシャラ、カエデ、アカメガシワ等と判明してから、産地も少しずつ増えている。表富士では二合目付近のコミネカエデ等から6月下旬~7月にかけて、また、一合目付近ではヒメシャラから5月に個体が得られている。

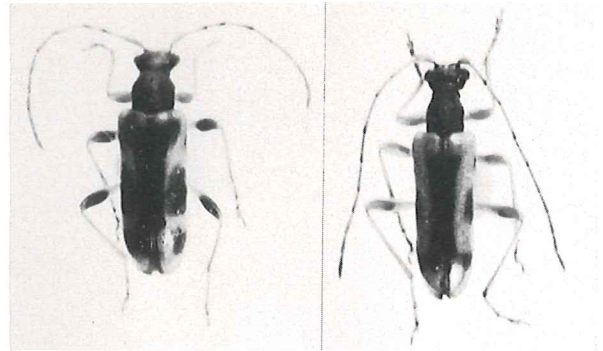
## (3) フタスジカタビロハナカミキリ

初夏に現れる種で、5月中~下旬ヤマシャクヤクの花上から、または飛翔中の個体が得られる。自然林伐採後ヤマシャクヤクの花が咲いている環境がよい。

吉原林道、北山林道周辺での記録がある。

## (4) フジヒメハナカミキリ

カミキリムシ科ピドニア属の一種であり、体長は1 cmに満たない。表富士二合目1,700 m付近で得られた個体をもとにして記載された種で、7月上旬中に二合目周辺の樹林帯の中に咲くゴトウズル等の花上から得られている。表富士のピドニア属はこの他ホソガタヒメハナカミキリ、カクムネヒメハナカミキリ、オヤマヒメハナカミキリ、キベリクロヒメハナカミキリ等が記録され、標高1,200~1,800 m周辺のブナ帯に多く生息している。



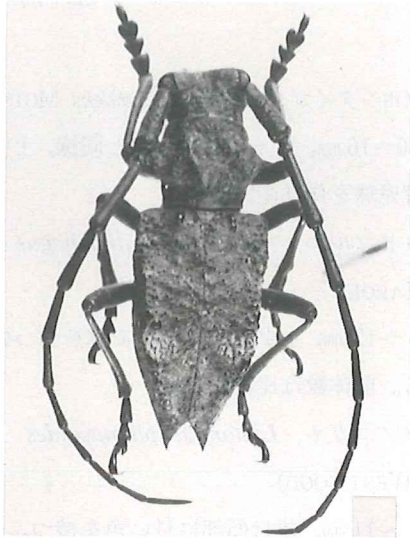
♂フジヒメハナカミキリ ♀

## (5) フジコブヤハズカミキリ

富士山から和名が取られている種で、後羽の退化のため飛翔できないカミキリとして、移動が制限されるため、分布調査上興味深いフォッサマグナの東側、富士山周辺から長野県にかけて分布する。コブヤハズカミキリ採集では秋季ピーティングによる方法が有名で



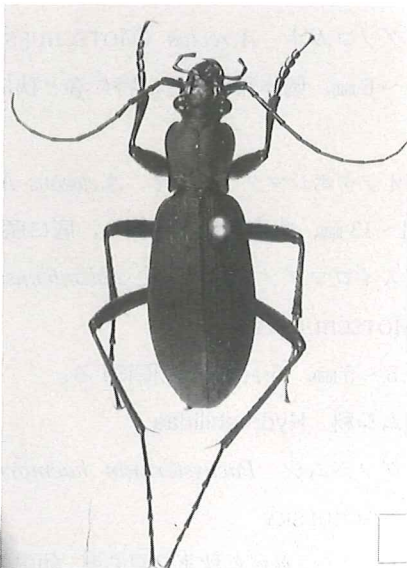
あり9～10月二合目周辺での記録がある。セダカコブヤハズカミキリは、一合目から二合目にかけてのブナ類の立ち枯れ、倒木等から夏季に多く見出される。



フジコブヤハズカミキリ

(6) フジクロナガオサムシ

富士山、箱根、丹沢に生息する。オサムシ類は後羽退化のため飛翔できず地域による種の変異があり、二合目付近から記録がある。



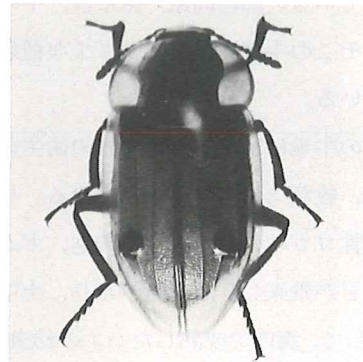
フジクロナガオサムシ

(7) ルリクワガタムシ

ルリクワガタムシは近年の研究により3種に分類されている。富士山からはコルリクワガタムシ、ルリクワガタムシの記録がある。ブナ帯に生息し近年の研究により産卵マークから個体を割り出す方法で多くの個体が得られている。

(8) ヨツボシヒラタシデムシ

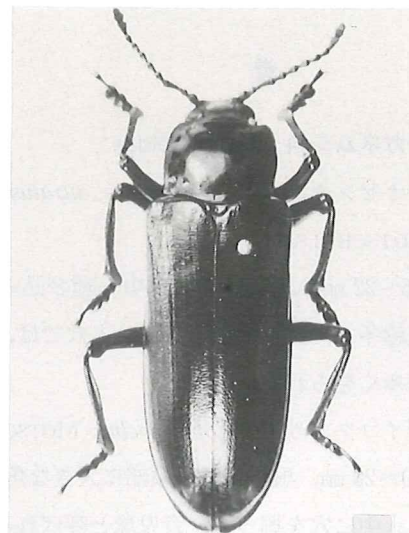
他のシデムシ類と違って成虫は樹上に生活し、鱗翅目の幼虫を補食する。5月頃二合目林道のカエデ花上からの記録がある。



ヨツボシヒラタシデムシ

(9) オオキノコムシ

オオキノコムシ科の中で最大の種でブナの倒木立ち枯れ等から7～8月に見出されている。



オオキノコムシ

## 特別調査 2

## 朝霧牧草地の甲虫

望月 進

## はじめに

甲虫類は、昆虫類の中では最も大きなグループで、日本からは8,800種ほどが知られており(森本・林, 1986), 森林, 草原, 土壌, 淡水そして家屋内など至る所に生息している。朝霧高原一帯には、牛の放牧地が広がるが、その牛糞内にもさまざまな種類の甲虫類が生息している。

牧草地での牛糞は、サシバエなどの衛生害虫の発生源となる他、牧草を枯らす原因ともなる。しかし、牛糞には食糞性コガネムシ(糞虫)の他、ガムシ、ハネカクシ類などが飛来し、糞を食べたり、土中に埋めたりする。そして、糞内で成熟したハエの幼虫を食べに、エンマムシや捕食性ハネカクシなどが飛来する。このため、土上の糞は減少し、さらにハエ類の発生も、捕食性甲虫類等によって発生量を抑えられている。

まず、これまでに牛糞内で採集された糞虫類を中心に1にまとめた。つぎに、動物の死体(腐肉トラップ)に見られた甲虫類を2にまとめた。

## 1 牛 糞

## (1) コガネムシ科 Scarabaeidae

- ① オオセンチコガネ *Geotrufes auratus*  
MOTSCHULSKY

体長16~22 mm, 成虫は糞を地中へ運び込み産卵する。幼虫越冬で、翌春成虫となる。人穴では、9月に牛糞下で多く見られた。

- ② ダイコクコガネ *Copris ochus* MOTSCHULSKY  
体長20~28 mm, 黒色で雄は頭部に大きな角を持つ。成虫は、土中に穴を掘って、育児球と呼ばれる糞球を作り、その上部に産卵する。

- ③ ゴホンダイコクコガネ *Cacutidens* MOTSCHULSKY  
体長10~16 mm, ダイコクコガネと同様、土中に穴を掘って育児球を作り産卵する。

- ④ カドマルエンマコガネ *Onthophagus lenzii*  
HAROLD  
体長8~12 mm, 土中に穴を掘って糞を引っ張り込み産卵する。個体数は比較的多い。

- ⑤ ツノコガネ *Liatongus phanaeoides*  
(WESTWOOD)

体長7~11 mm, 雄は頭部に長い角を持つ。

- ⑥ オオマグソコガネ *Aphodius haroldianus*  
BALTHASAR

体長8.5~12.5 mm, 浅い穴を掘り、底に産卵する。

- ⑦ フチケマグソコガネ *A.urostigma* HAROLD  
体長5~6 mm, 牛糞内に産卵する。

- ⑧ コマグソコガネ *A.pusillus* (HERBST)  
体長3~4.5 mm, 牛糞内に産卵する。

- ⑨ マグソコガネ *A.rectus* (MOTSCHULSKY)  
体長5~6 mm, 個体数は多く、特に春と秋に多く見られる。

- ⑩ オオフタホシマグソコガネ *A.elegans* ALLIBERT  
体長11~13 mm, 牛糞下に穴を掘り、底に産卵する。

- ⑪ ウスイロマグソコガネ *A.sublimbatus*  
(MOTSCHULSKY)

体長3.5~5 mm, 5月頃から飛来する。

- (2) ガムシ科 Hydrophilidae

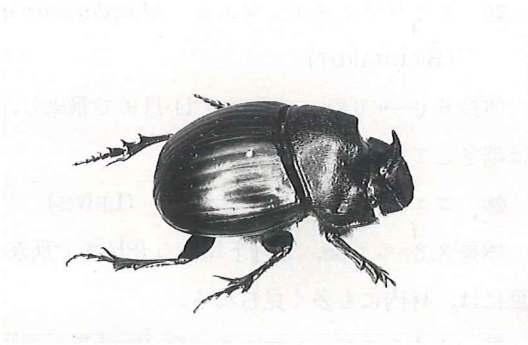
- ⑫ マグソガムシ *Pachysternum haemorrhoum*  
MOTSCHULSKY

体長2.5~3 mm, 春から秋まで見られ、幼虫の食性は不明である。

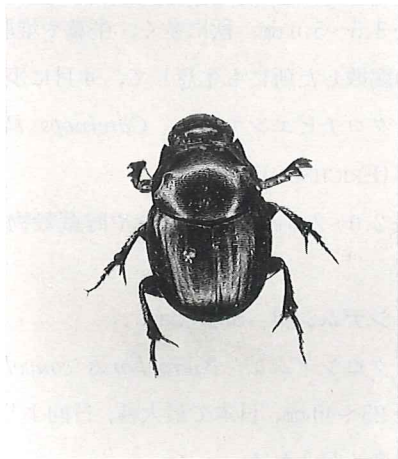
- (3) エンマムシ科 Histeridae

幼虫，成虫ともにハエの幼虫を食べる捕食性天敵である。

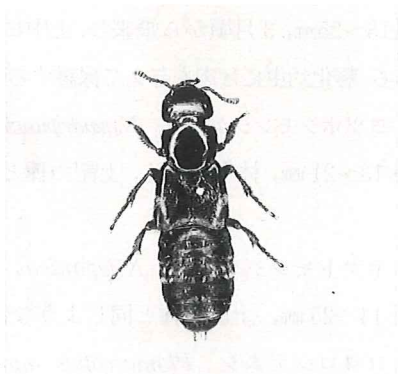
- ⑬ コツヤエンマムシ *Atholus duodecimstriatus*  
*quatuordecimstriatus* (GYLLENHAL)  
体長 3.7～5 mm，ツヤホソバエ科幼虫を捕食する。



ダイコクコガネ♂



カドマルエンマコガネ♂



オオハネカクシ

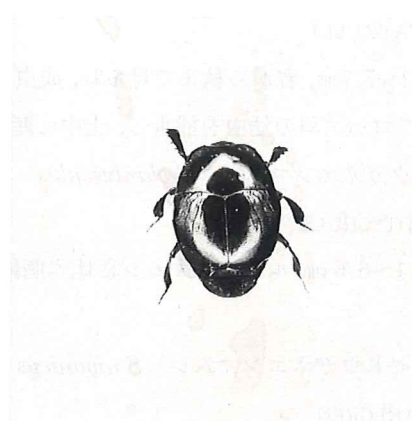
- ⑭ ツヤマルエンマムシ *A.pirithous* (MAR-  
SEUL)

体長 3.5～5 mm，やや古い糞にも飛来する。

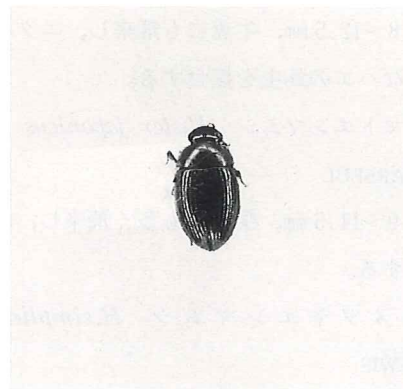
- ⑮ ムナクボエンマムシ *A.depistor* (MARSEUL)  
体長 4.7～6.5 mm，腐肉へも飛来し，土中に産卵する。



オオマグソコガネ



ルリエンマムシ



ガムシの一種



## 2 動物の死体（腐肉トラップ）

## (1) コガネムシ科 Scarabaeidae

- ⑮ センチコガネ *Geotrupes laevistriatus*  
MOTSCHULSKY

体長 14~20 mm, 牛糞にも飛来するが, 動物の死体にも多い。林内に多く見られる。

- ⑯ コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* WATERHOUSE

体長 6~10 mm, 春から秋まで見られ, 林内で多く飛来が見られる。

- ⑰ クロマルエンマコガネ *O. ater* WATERHOUSE  
体長 7~10 mm, 動物の死体に多く飛来する。

## (2) エンマムシ科 Histeridae

- ⑱ ルリエンマムシ *Saprinus splendens*  
(PAYKULL)

体長 5.2~7.7 mm, 春から秋まで見られ, 成虫は, ニクバエ科, クロバエ科の幼虫を捕食し, 土中に産卵する。

- ⑲ ドウガネエンマムシ *S. planiusculus*  
MOTSCHULSKY

体長 5.1~6.6 mm, ルリエンマムシに比べ個体数は少ない。

- ⑳ ニセドウガネエンマムシ *S. niponicus*  
DAHLGREN

体長 4.8~6.6 mm, 富士山二合目付近にも分布する。

- ㉑ エンマムシ *Merohister jekeli* (MARSEUL)

体長 8.8~12.5 mm, 牛糞にも飛来し, ニクバエ科などの大きなハエの幼虫を捕食する。

- ㉒ ヤマトエンマムシ *Hister japonicus*  
MARSEUL

体長 8.9~11.5 mm, 牛糞へも多く飛来し, ハエの幼虫を捕食する。

- ㉓ ヒメツヤエンマムシ *H. simplicisternus*  
LEWIS

体長 4.2~6.5 mm, 牛糞へも飛来する。

- ㉔ ヒメエンマムシ *Margarinotus weymarni*

## WENZEL

体長 6.0~9.0 mm, 3月から6月までの飛来が多く見られる。

- ㉕ ニセヒメエンマムシ *M. agnatus* (LEWIS)

体長 6.0~9.0 mm, 春に多く, 富士山二合目では8月にも飛来が見られた。

- ㉖ オオサワヒメエンマムシ *M. cadavericola*  
(BICKHARDT)

体長 6.0~9.0 mm, 9月から11月まで飛来し, 幼虫は越冬して春に羽化する。

- ㉗ コエンマムシ *M. niponicus* (LEWIS)

体長 3.3~5.0 mm, 3月下旬から8月まで飛来する。夏には, 林内にも多く見られる。

- ㉘ オオセスジエンマムシ *Onthophilus ostreatus*  
LEWIS

体長 3.5~5.0 mm, 秋に多く, 牛糞や堆肥などの他, 白菜の腐敗した所にも生息して, 4月に羽化する。

- ㉙ クロチビエンマムシ *Carcinops Pumilio*  
(ERICHSON)

体長 2.0~2.5 mm, 乾いた糞や貯蔵穀物にも見られる。

## (3) シテムシ科 Silphidae

- ㉚ クロシテムシ *Nicrophorus concolor* KRAATZ

体長 25~40 mm, 日本で最大種, 日向よりも, 山地の林内に多く見られる。

- ㉛ マエモンシテムシ *N. maculifrons* KRAATZ

体長 13~25 mm, 3月頃から飛来し, 土中に肉を埋め団子を作る。孵化幼虫には肉を与えて保護する習性を持つ。

- ㉜ ヨツボシモンシテムシ *N. quadripunctatus* KRAATZ

体長 13~21 mm, 林内に多く, 上記の種と同じ習性を持つ。

- ㉝ ヤマトモンシテムシ *N. japonicus* HAROLD

体長 14~25 mm, 上記2種と同じような習性を持つ。

- ㉞ コクロシテムシ *Ptomascopus morio* KRAATZ

体長 8~15 mm, 平地の林内で多く見られる。

- ㉟ オオモモプトシテムシ *Necrodes asiaticus*



## PORTEVIN

体長 15~28 mm, 死体に発生したハエの幼虫を捕食する。

③⑦ モモプトシテムシ *N.nigricornis* HAROLD

体長 13~15 mm, 成虫, 幼虫ともにハエの幼虫を捕食する。個体数は多く, 夜に多く活動する。

③⑧ オオヒラタシテムシ *Eusilpha japonica*  
(MOTSCHULSKY)

体長 18~23 mm, 道路上でミミズの死骸を食べるのが観察される。腐肉の他, ハエの幼虫も捕食する。人家近くで多く見られる。

③⑨ ベッコウヒラタシテムシ *E.brunnicollis*  
(KRAATZ)

体長 17~22 mm, 林内に多く, 幼虫, 成虫共にハエの幼虫を捕食する。

④⑩ ヒメヒラタシテムシ *Thanatophilus sinuatus*  
(LINNÉ)

体長 10~13 mm, 春から秋まで飛来し, 腐肉とハエの幼虫を捕食する。

④⑪ オニヒラタシテムシ *T.rugosus* (LINNÉ)

体長 9~12 mm, 上記の種と生息地は重なるが, 個体数はやや少ない。

## (4) ハネカクシ科 Staphylinidae

多くの種が飛来するが, その同定はむずかしい。

④⑫ オオハネカクシ *Creophilus maxillosus* LINNÉ  
体長 13~23 mm, 成虫は, ハエの幼虫を捕食し, 土中に産卵する。

④⑬ コクロヒゲプトハネカクシ *Aleochara parens*  
SHARP

体長 6.0~7.0 mm, 成虫は, ハエの卵や幼虫を捕食する。個体数は多い。

④⑭ チャイロコガシラハネカクシ *Philonthus germanus* SHARP

体長 5.5~6.0 mm, コガシラハネカクシ類は, ハエの幼虫を捕食するものと思われる。

## (5) カツオブシムシ科 Dermestidae

④⑮ ハラジロカツオブシムシ *Dermestes maculatus*  
DEGEER

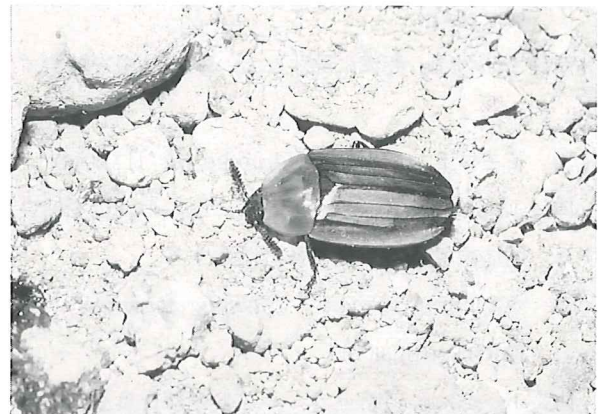
体長 9.0~10 mm, 毛皮や標本の他, 動物の死体にも飛来する。

## 参 考 文 献

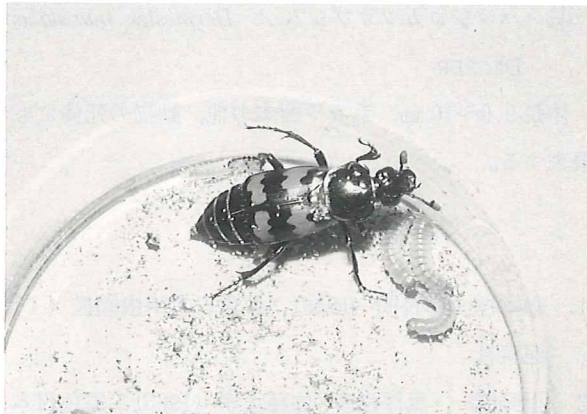
- 1 森本桂・林長閑 (1986): 原色日本甲虫図鑑 (I) 保育社
- 2 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝 (1985): 原色日本甲虫図鑑 (II) 保育社



クロシテムシ



ベッコウヒラタシテムシ



ヤマトモンシテムシ (雌と幼虫)



マエモンシテムシ (羽化直後)



ヨツボシモンシテムシ



エンママシ

## 特別調査 3

## 富士山西斜面のアリガタハネカクシ類の分布

望月 進

## はじめに

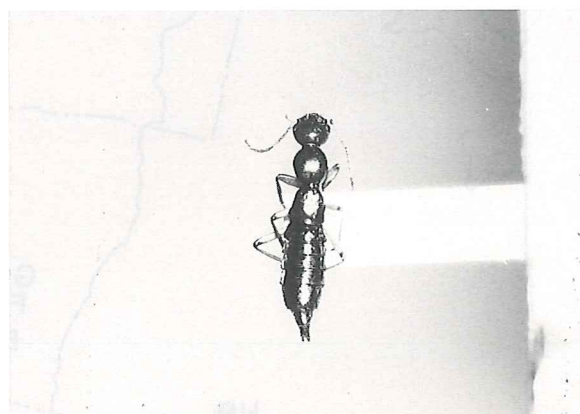
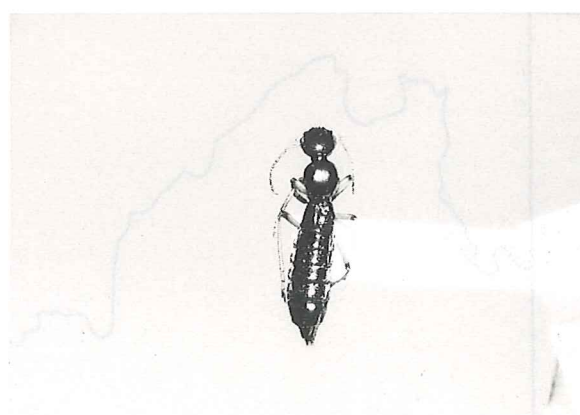
アリガタハネカクシ類は、ハネカクシ科、*Megalopaederus*属に分類され、日本では4種が知られている。山地性で、富士山ではブナなどの林床のササ類（スズタケなど）に多く生息し、ここでアブラムシなどの小動物を捕食して生活しているものと思われる。4種はいずれも近縁で、後翅は退化しているために飛翔することができない。

日本における分布は、渡辺（1986）によってまとめられている。それによると、中部地方を境にして東日本には*M. lewisi*、西日本には*M. wadai*、近畿地方には*M. poweri*、そして*M. liwisi*に囲まれるようにして、*M. kurosawai*が山梨県、静岡県に分布することが報告されている。この論文中的富士山での分布を見ると、*M. lewisi*が南斜面に、*M. kurosawai*が北斜面に分布し、西斜面では大沢崩れ付近に分布の境界があることが示唆される。そこで、今回この2種の分布の境界及び垂直分布を明らかにすることを目的に1993年5月から10月までの間調査を行った。

## 1 調査地域と調査方法

まず、標高1,200 mから1,500 mにかけての大沢崩れ周辺から徐々に北へ向かって採集を行った。採集方法は、下に白い布を置き、上からササを棒で叩く方法（叩き網）で採集した。

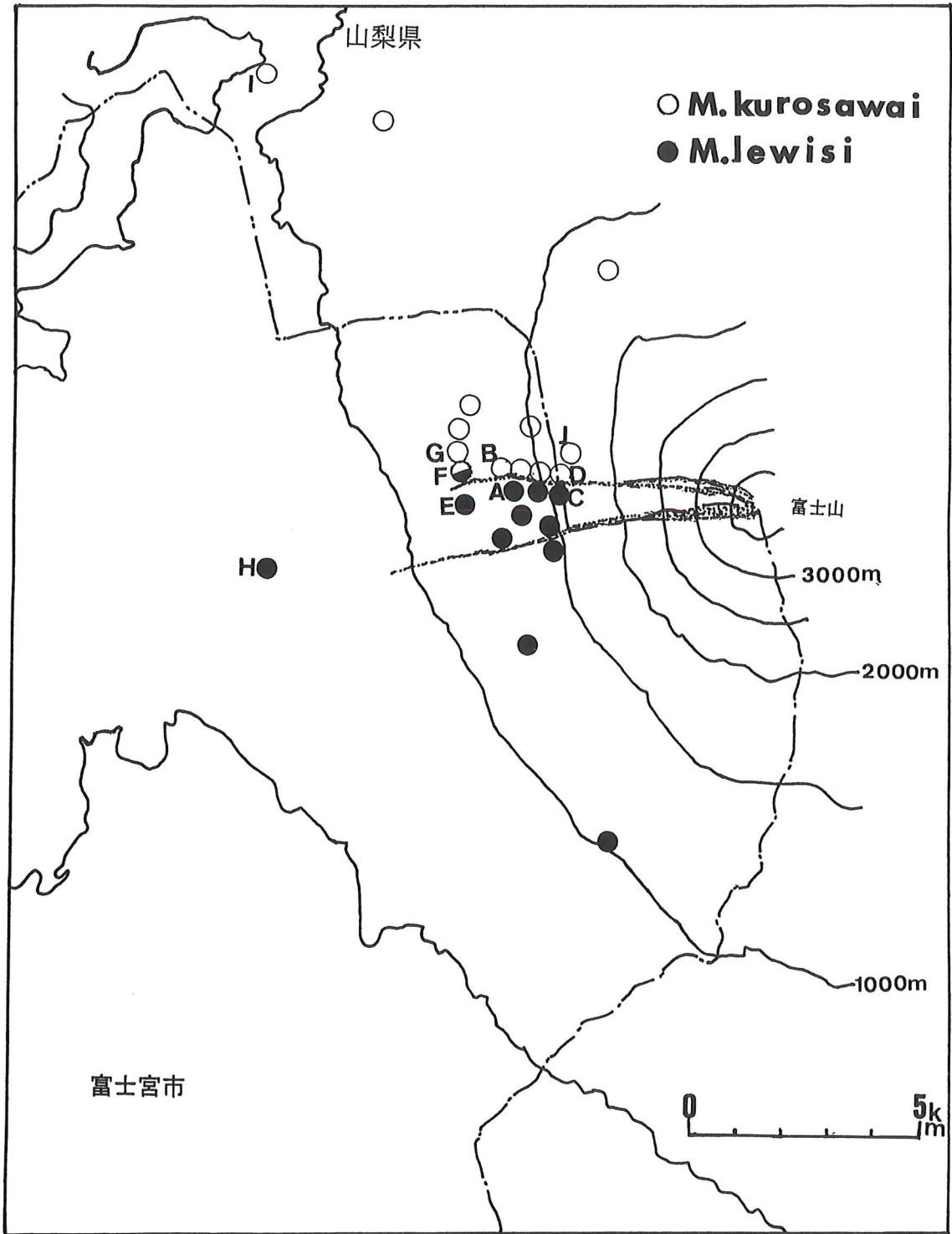
種の同定は、渡辺（1986）による、雄交尾器を用いて行った。なお、雌については、同定はできなかった。

*M. lewisi**M. kurosawai*

## 2 調査結果

図のように、標高1,300 mから1,600 mまでの間、2種の分布の境界は、峠塚（とやづか）の北にある滑沢（なめさわ）にあった。そして、北側には*M. kurosawai*、南側に*M. lewisi*がそれぞれ分布していた。滑沢は、大沢同様に通常は水は流れていないが、大雨の時には土砂が流出する。なお、AとBの間はおよそ15 m





富士山西斜面のアリガタハネカクシ類2種  
*M. lewisi*と*M. kurosawai*の分布



であった。標高 1,200 m 地点では A-C 間をほぼ直線的に延長した F 地点に分布の境界があり、ここでは 2 種の混生がみられた。滑沢下流の E では *M. lewisi* が、G では *M. kurosawai* がそれぞれ分布していた。このため、2 種の混生地は、ごく狭い範囲であると思われる。しかし、なぜこの 2 種の分布の境界が滑沢付近にあり、しかもほぼ直線的に別れるかについては、今のところ明らかではない。

垂直分布を見ると、*M. lewisi* が標高 700 m (H) から 1,600 m (C)、*M. kurosawai* が 900 m (I) から 1,700 m (J) の範囲で採集され、大きな差は見られなかった。しかし、山地のササ類だけで調査したため、さらに上部や下部のササ以外の葉上にも生息している可能性も否定できない。

富士山東側の分布の境界は、御殿場口や須走口が、*M. lewisi*、鳴沢村で *M. kurosawai* が分布していたことから、吉田口から北富士演習林付近にあるものと

思われる。

今後、アリガタハネカクシ類の詳しい分布調査を進め、さらに形態学、生態学上の調査から類縁関係を知ることによって、これら 4 種の種分化の過程が明らかになるものと思われる。

未筆ながら、本調査を進めるに当たり、資料提供ならびに御助言下さった、東京農業大学農学部昆虫学教室の渡辺泰明教授に深謝する。

### 参 考 文 献

- 1 Watanabe, Y., (1986): A Revisional Study of the Japanese Species of the Genus *Megalopaederus* (Coleoptera, Staphylinidae) Ent. Pap. pres. Kurosawa, Tokyo 159-169.
- 2 渡辺泰明・馬場金太郎 (1979): 新潟県内におけるアリガタハネカクシ類の分布 新潟県の昆虫 (越佐昆虫同好会会報 50 号)

## 特別調査 4

## 富士宮のホタルについて

佐野雅則

## はじめに

この報告は、86年から90年までを一区切りとして行った調査をもとに行うものである。環境破壊が当時より進んでいることを考えると、多少の古さが気になるが、これからの観察や保護活動の参考にしていただければ幸いである。

## 1 概 論

## (1) 富士宮及び周辺地区の特殊性

フォッサマグナを境に、多くの動植物が分布域を分けているという実態は、食草や食餌に拘束され、移動能力に劣る昆虫等にもよく見られる。例えばギフチョウとヒメギフチョウは同属で別種の蝶であるが、そのすみわけはリュードルフィアラインという境界線をかたちづくっている。同様に分類的には同一種という扱いであるが、ゲンジボタルにも東日本に産するものと西日本に産するものとは、棲息環境や行動などに明らかな差異が認められ、両型の分布状況というものが近年にわかに注目されるに至った。

成虫の雄は集団で同時に明滅をするが、この明滅の周期が東日本型では約4秒と長いのに対し、西日本型では約2秒と短いということが報告された。集団同時明滅の間隔を計ることが、東西いずれのタイプであるかの判別法といわれ、調査には複数回の点滅の所要時間を計り回数で割る方法が勧められている。今回数地点で行った計測は5回の点滅に要した時間を計るという方法をとった。

富士宮周辺のゲンジボタルはどうやら東日本型に属するものらしいが、最近芝川町で東西の中間的な約3秒の点滅周期を示すものが見つかったとも報告され、

今改めてフォッサマグナ及び富士川周辺のゲンジボタルが注目されている。

## (2) 調査対象

調査はゲンジボタル主体に行ったもので、ヘイケボタル、ヒメボタルの2種はこの間に確認できたものについてのみ報告する。

ゲンジボタル *Luciola cruciata* MOTSCHULSKY

胸部背面に十文字型の黒斑を有す。大型で光は強く、ゆっくりと光る。幼虫は水生で、餌はカワニナを捕食する。カワニナの生息域にしか生息できないと言える。九州、本州、四国に分布。

ヘイケボタル *Luciola lateralis* MOTSCHULSKY

胸部背面に縦に広い一条の黒斑を有す。小型で光は弱くチカチカとせわしく光る。餌はモノアラガイ、サカマキガイ、タニシ、カワニナと多くの種類の巻き貝を食す。棲息域はゲンジボタルより広く、発生時期も長期にわたる。日本全土に分布。

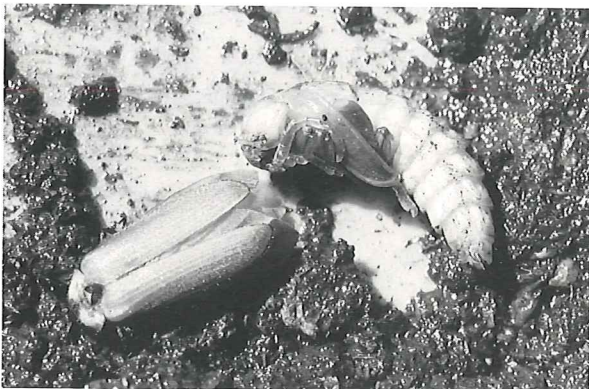
ヒメボタル *Hotaria parvula* (KIESENWETTER)

小型、ヘイケボタルと同じくらいの大きさで、光は黄色でフラッシュのように光る。陸生ボタルでカタツムリ類を食す。雌は下翅が退化して飛ぶことができない。発生は山林等で、活動時間は概して夜遅く、活動も気象条件等に大きく左右されるため調査しにくい。

発光するホタルの内、良く知られるゲンジボタル、ヘイケボタルは、幼虫が水中生活することが知られ、ホタルといえば水生といった印象が持たれる。しかし、2,000種といわれる世界のホタル類のほとんどは陸生であり、水生のゲンジボタル、ヘイケボタルは例外的に特殊な存在であるという。ホタルは昆虫綱鞘翅目(甲虫類)に属し、その生活史も幼虫が水中生活をするこ



ゲンジボタルの卵



蛹と羽化したゲンジボタル

南部で調査したのは貫戸、星山、沼久保、安居山といった地域である。山本は未調査。

市街地の近くでは大中里、小泉、大岩、青木で少ないながらも確認されている。村山、山宮、北山は調査できなかった。

北部は距離的な制約もあり、調査回数がかなり少ないが、上野、白糸、猪之頭を調査している。麓、根原、人穴は未調査である。

西白塚、登山道周辺ではヒメボタルを調査した。



星山の生息地

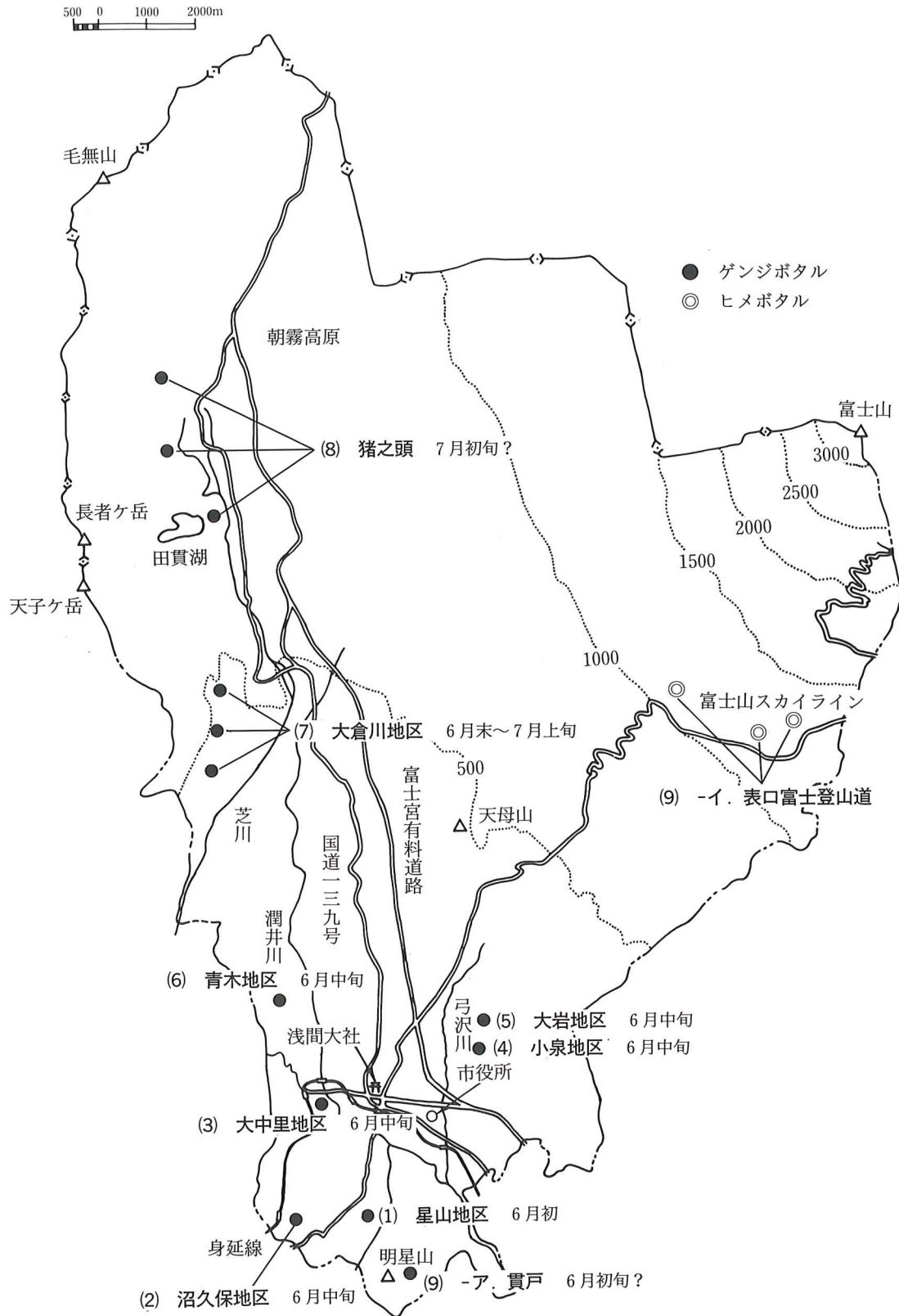
とをのぞけば、カゲロウやトンボといった水生昆虫よりは、潜土し土まゆを作り、完全変態をするなどの点で、むしろカブトムシに似る。

## 2 調査方法、調査地点

ゲンジボタルを主体に5年間の調査を始めたころはボタルの生息する全ての地域を網羅するつもりであった。しかし今日の生息地が明日にも消滅しかねない、環境変化の激しさを見るにつけ、繰り返し調査することの重要性を痛感し、調査地をしぼって回数を増やすことに方針を定め、定点観測的な方法に切り換えた。

調査項目は、年月日、時間、場所、目撃数（発光）、確認数（種、性別）、天候、備考として記入用紙を作り記入するといった方法をとった。





調査地と出現時期



表1 ゲンジボタル調査一覧

1986-1991

発生地	星山	沼久保	大中里	小泉	大岩	青木	大倉川	猪之頭
水系	富士川	富士川	潤井川	弓沢川	弓沢川	潤井川	大倉川	芝川
調査期間	87.5.24   90.6.5	86.6.14   90.6.22	86.6.9   90.8.22	89.5.28   90.6.21	87.5.25   90.6.4	87.6.5   90.6.17	86.6.22   90.7.18	86.7.6   86.7.8
調査回数	47回	34回	62回	16回	11回	15回	37回	8回
初見日	5.13(90)	5.28(89)	6.1(90)	5.28(89)	5.25(87)	6.1(90)	6.17(90)	7.6(86)
終見日	6.20(87)	7.1(86)	7.15(90)	6.25(89)	6.12(89)	6.20(89)	7.21(89)	7.8(86)
推定される盛期	6月初め	6月中旬	6月中旬	6月中旬	6月中旬	6月中旬	6月末	7月初め
固体密度	普通	薄い	薄い	薄い	薄い	薄い	薄い	薄い
増減	減ったが やや回復	減少	減少	不明 資料不足	不明 資料不足	不明 資料不足	減少	不明 資料不足
環境	水田地帯 用水発達	水田地帯	湧水下流 芹栽培地	湧水下流 水田地帯	湧水下流 水田地帯	湧水下流 水田地帯	川筋	川筋
環境変化	特になし	護岸改修 休耕田 放置	護岸改修	資料不足	資料不足	資料不足	護岸改修	資料不足
備考	ヘイケも 生息	ヘイケも 生息	ヘイケも 生息 90.8.12 ゲンジ 未確認			ヘイケも 生息	ヘイケも 生息	ヘイケも 生息

### 3 地域毎の発生状況

#### (1) 星山地区

山裾の田園地帯で田の中央に小川があり、周縁部まで農業用水路が張り巡らされ、餌となるカワニナもよく見られる。上流下流の2箇所を観測。

1987年当時は多くの飛翔が見られたが翌年以降大幅に減少し、近年やっと回復してはきたが1987年当時には及ばない。

ヘイケボタルも産する。

#### (2) 沼久保地区

下田橋上, 下流域, 西の田

河川, 周辺の農業用水の護岸工事により極度に減少, 殆ど消滅寸前。

ヘイケボタルも産する。

#### (3) 大中里地区

よしま池下流, 清水川等

よしま池下流は川に隣接の芹栽培地がゲンジボタルの発生地になっているものと思われ、個体数は少ないものの発生時期は長期にわたる。芹の栽培地の岸寄りと川寄りの、場所による水温の差やむらがあるが、或いは出現時期の違いになっているのかも知れない。

少数だが長期間見られ、近年は減少傾向にある。

ヘイケボタルも産する。

#### (4) 小泉地区

八幡宮湧水, 同下流

湧水を水源とする田の用水。

護岸の改修が進んでいるが、まだ土手が少し残っている。

#### (5) 大岩地区

出水, 大沢川等

#### (6) 青木地区

青見北, 青木

山裾の湧き水周辺に発生, 下の田園地帯には護岸工事も進みカワニナも殆ど見られない。

個体数も少なく、消滅が心配される。

ヘイケボタルも生息。

#### (7) 大倉川地区

大倉橋, 坂林, 大倉ダム

大倉川と支流が発生地と思われ、周辺に田は少ない。

ヘイケボタルも生息。

#### (8) 猪之頭

陣馬の滝, 田貫湖下流等

ヘイケボタルも陣馬の滝近くで確認。

#### (9) その他の生息地

##### ア 貫戸

1987. 6. 1

1回調査

ゲンジボタル4頭の発光を目撃

詳細は不明

##### イ 表口富士登山道

ヒメボタルの調査

1986. 7. 19 - 8. 3

初見日 7. 19 (1986)

終見日 8. 3 (1986)

詳細は不明

#### (参考) 他町の記録

##### ア 南松野

山の斜面の水田地帯

2系統の小規模の水路があるが、一方はコンクリートに改修。

近年減少傾向にある。

ヘイケボタルも生息。

##### イ 内房

稲瀬川水系の水田地帯

護岸はコンクリートに改修されているが、土砂が堆積し、草も生えて自然河川の様相を呈している。近年水田が資材置場、住宅建設などで失われつつあり、減少が心配される。

ヘイケボタルも生息。

##### ウ 西山

水田地帯

水路網の発達でホタルは広範に見られるが、個体数はそれほど多くない。

近年護岸工事が盛ん。

南部と北部では出現時期に多少のずれがある。

ヘイケボタルも生息。



西山地区の生息地

表2 他町のゲンジボタル (参考)

発生地	南松野	内房	西山
水系	富士川	稲瀬川	芝川
調査期間	86.6.10   90.6.11	86.6.10   90.6.10	86.6.21   90.7.2
調査回数	24回	29回	78回
初見日	5.13(90)	5.22(89)	6.2(90)
終見日	6.14(89)	6.18(86)	7.15(90)
推定される盛期	6月初め	6月初旬	6月中旬
固体密度	普通	やや濃い	やや薄い
増減	減少	減少	やや減少
環境	水田地帯 用水発達	水田地帯 用水発達	水田地帯 用水発達
環境変化	特になし	宅地化	護岸改修
備考	ヘイケも 生息	ヘイケも 生息	ヘイケも 生息

## 4 分 析

### (1) 現 状

結論から先に言えば、富士宮のゲンジボタルの発生状況はまさに風前の灯と言える。

見られる個体数は盛期でも10頭に満たない所が大半で、放置すれば消滅しかねない状態である。比較的調査回数が多かった星山、大中里等でもこの調査の間に目撃個体数は半減している。芝川町、富士川町の発生地でも同様である。

### (2) 分 布

ゲンジボタル、ヘイケボタルはその幼虫期を水中で過ごすため年間を通して渇水することのない河川、水路、湧水等に生息する。餌のカワニナが生息できない場所には、ゲンジボタルも生息できない。

富士宮の湧水として紹介されている地域の多くで、あるいは名もない小さな沢等で少ないながらもゲンジボタルが確認されている。貫戸、星山、沼久保、大中里、小泉、大岩、青木、上野、白糸、猪之頭などでゲンジボタルを目撃できた。

調査回数が少なかったために記録がない地域もあるが、ヘイケボタルもほぼ同じ地域で発生が確認されている。生息条件がゆるやかなヘイケボタル中心に調査をするならば、かなりの地域で記録されるものと思われる。

ヒメボタルは、北山林道から西臼塚にかけての登山道周辺で確認された。

### (3) 発生時期・期間

水温、気温等の違いによりゲンジボタルの発生時期は地域毎に差がある。標高80メートルの市南部では5月下旬から6月中旬であるのに対し、標高680メートルの市北部では6月下旬から7月中旬と約1箇月のひらきがある。同じ地域でも湧水周辺と下流域では発生時期に多少のずれがある。水温、気温等の影響が多いと思われる。

それぞれの発生地でゲンジボタルが見られるのは早



い記録から遅い記録まで約1箇月の期間で、個体密度によってこの期間は長くもなれば短くもなる。全般にどここの発生地でも個体数が少ないということが発生期の特定さえ困難にしている。

(4) 考 察

水源又は水源周辺で、農薬や人家の汚水の影響を受けにくい場所にしかゲンジボタルは残っていない。このことから、ゲンジボタルの生息には、湧水池周辺が適地であるかのように思われるかも知れないが、湧水池は必ずしも生息適地ではない。

大場信義氏がゲンジボタルの基本的生息条件を挙げているが、蛹化には土、成虫期には生殖行動、幼虫期には水と餌に関わる条件が重要であるとしている。その水も、たとえば富士山の地下水に由来する湧玉池の水源では、水温の周年変化は13~14°Cと安定しており、季節変化は極めて少ない。汚染を受けにくく、安定した水質は好ましいのだが、水温は低い。ゲンジボタルは一般的には1年で成虫になるが、環境庁の宮下衛氏によれば、湧玉池と同様の条件下では、成虫になるのに3年の歳月を要すとのことである。幼虫期の長期化は危険をも増大させる。また、餌のカワニナも水源部には少なく、必ずしも水源部の環境は好適とは言えない。

本来、富士宮の水は湧き水を水源とする関係から、広範にはりめぐらされた水路網は良質の水で満たされ、どこでもゲンジボタルが発生しうる可能性があった。稲作とホタルは特に密接な関係にあり、肥沃な水田付近は餌のカワニナを涵養する最良の温床であった。しかし今日、水田の荒廃と宅地化は進み、雑排水による汚染の増加、護岸のコンクリート化、街灯の整備等は直接、間接にホタルに影響を与えた。生息可能域は面から線へ、線から点へと極めて限られた範囲にまで狭められ、現在もお事態は悪化の一途を辿っている。本来の生息適地はほとんど消滅してしまったともいえ、現在では、条件的には厳しい水源周辺にまで、ゲンジボタルの生息地は狭められてしまったものである。

(5) 集団同時明滅について

1990年と1994年に点滅周期を計測した。

条件の良いときを選び計測したつもりであるが、個体密度が低いために明瞭な同時明滅が崩れ、計測が不能になることが多かった。

表3 5点滅所要時間 1990年

地区	平均	月日	時刻	5点滅時間		
星山	4.22 168.6/8/5	6.1	20:31	19	19	20
		6.5	20:24	22.5 21.3	22.3 22	22.5
内房	3.91 156.2/8/5	6.2	20:12	19.0	19.9	20.9
		6.10	20:19	19.0 19.7	18.8 20.2	18.7
大中里	3.68	6.2		18.4		
南松野	3.87	6.5		19	20	19

1994年

地区	平均	月日	時刻	5点滅時間		
西山	3.24 324.02/20/5	6.27	20:36	15.68	16.29	15.51
				16.68	17.96	16.35
				16.07	15.92	14.80
				16.68	15.54	16.18
				17.36	16.20	15.56
				16.31	16.08	15.51
				16.56	16.78	
猪之頭	4.45 200.14/9/5	7.4	20:09	21.79	21.59	22.78
				23.46	21.75	22.77
				21.63	22.44	21.93

5 提 言

(1) 水辺の復元と保存を

その清く澄んだ水が湧き出る様を、先人は湧玉と称し歌に詠み、讃えた。訪れる人は清冽な水に感嘆の声を挙げる。幼時からなれ親しんだ湧水の素晴らしさをそんなときに改めて実感させられる。しかし、この水





湧玉地



沼久保の護岸改修

が流れ出ると同時に雑排水にまみれ、生き物は追いやられているという現実、特別天然記念物でさえ避けられず、まして他の湧水、河川では野放し状態と言える。

ホタルを繁殖させると言った場合、人口飼育なら例えばビルの1室のような自然と切り離れた状態でも発生させることは可能である。これを放てば一見素晴らしい光景には見えるものの、このホタルが人手を借りずに繁殖してゆくためには、その環境は様々な条件を満たしていなければならない。

ホタルの生息は稲作と大いに関わりがある。たとえば山奥の源流にもいなくはない。しかし本当の生息適地は、人里近くの実り豊かな水田地帯なのである。

本来の稲作と周辺環境というものは優れた治水システムを構築していた。稲作を取り巻く環境は、経験的に完成された、人と自然との豊かな共存システムだったのである。ところが生活様式の変化と稲作の不振により、システムは崩れ、水田の荒廃は進む一方である。加えて山林の植相は杉や檜に偏り、宅地化の拡大、道路、水路の舗装等により、水源涵養機能や保水機能が著しく低下し、湧水や地下水の減少と雨水の氾濫を引き起こすに至った。このために氾濫対策としての河川改修は、いたるところで進んでいる。

しかし、この河川改修により生き物の姿が見られなくなることが多い。淵や瀬や流れの緩急が多様な生き

物に多様な生息環境を与えていたものだが、改修後の均一な川床の生き物の多様性には対応できず、土砂が堆積し草が生え、元の川になるまでには数年の歳月が必要だ。稀には数年を経てホタルが戻ることもある。しかし、現実には周辺の宅地化により、水質の悪化が急であることを思えば、悲観的にならざるを得ない。

ホタルが生息する環境には、実に多種の生き物が同居している。川は本来海へ続く道で、生き物が生息し往来するところであり、人の暮らしの間近かにあった。昔ながらの川に戻すことは多くの困難があり難しいだろう。しかし、こういった多くの生き物と共に、ホタルも住む水辺を復元し子孫に伝え残すことが、今必要であろう。湧水の清浄な水を、もっと下流まで保っていく。そんなことから始めたらどうであろうか。

一朝一夕にはいかないだろうが、多くの生き物が住む水辺が復元できれば、ホタルも間近に帰って来るであろう。

## (2) 調査について

この報告は、今にして思えば、ただやみくもに走り回っただけの記録で、調査を名乗るのには少々お粗末であったように思う。移動に追われ、時間と目撃数ばかりに注意が向いていて天気、気温、水温、月齢、雲量等の記録が少なかった。遠くの調査地は回数が少なかった。観測時刻も大幅に前後するなど観測条件に統一を欠いた等々。このあたりが一個人の調査の限界で、

収穫といえば大まかな地域毎の成虫出現時期と、個体数の経年変化ぐらいであろうか。

意外だったのは、生息地に住みながらホタルを見ない、知らないと答える人が多かったことだ。ホタルが認知されるにはある程度の個体数が必要であるらしい。しかし、一方で、さがしてみたらこんな所にもいたということが、意外に多いとも聞く。過去の生息状況の聞き取り調査と現在の生息状況の比較調査が必要な所以である。

調査は無理なく続けられることが大事で、大勢で手分けして地域を分担し、足しげく通えるところを詳しく調査することが望ましい。並行して、新たな生息地を探す分布調査を行っていくことも必要であろう。

それぞれの地域の具体的な問題点をあぶりだすこと

で、調査を環境の保全、復元に生かしてゆくことが可能である。

## 参 考 文 献

- 1 大場信義 (1988) : ゲンジボタル 文一総合出版
- 2 中根猛彦・大場信義 (1983) : ホタルの観察と飼育 ニュー・サイエンス社
- 3 栗林慧他 (1986) : アニマ 7月号 No.162 特集1 ホタルの季節 平凡社
- 4 矢島稔(1981) : 昆虫誌 光とはばたきの信号 東京書籍
- 5 栗林慧 (1980) : 科学のアルバム 68 ホタル 光のひみつ あかね書房

## II 鱗翅目 (蝶類)

城 内 博 司





## はじめに

近年各地において、開発に伴う環境破壊が急速に進みつつある。富士山麓においても、著しい環境変化によって、今まで生息していた蝶の姿が見られなくなったり、昔にはある決まった地域しか生息していなかった蝶が、食草などの関係によって、その分布を広げている種もある。清邦彦氏はその原因として、次の3点をあげている。①肥料・飼料等の変化によりカヤ場の存在価値が減少し、採草が行われず放置されたり、植林されることによる草原の減少、②酪農様式の変化、すなわち放牧地から牧草地へ、さらに大型機械の利用のため土地の起伏をなくした牧草地の造成。これによる盛り上がった溶岩上の乾性草原の消失、肥沃化・湿潤化による植物群落構成種の変化、③大型観光施設の建設など。

これらによる環境変化は、富士山麓の蝶相を変えつつあり、草原性蝶類に属するチャマグラセセリ、オオチャバネセセリ、アカセセリ、アサマシジミ、ハヤシミドリシジミ、ヤマキチョウ、キマグラモドキなどの蝶を消滅させようとしている。

この調査報告は1985年から1990年までの富士宮市北部を中心にした報告である。

## 1 調査方法

ネットィング法を用いて、網で捕獲し種を確認するとともに、貴重種の有無についても確認・考察を行った。また、朝霧高原においてはルートセンサス法も用い、調査環境をA半自然環境、B別荘分譲地、C耕作地、D牧草地、Eゴルフ場と定め、15分間で同一のルート約1キロメートルを歩き、種の確認あるいは推定できた蝶を記録した。調査日は1985年4月から10月までで、各月の前半・後半各1回ずつの計14回、時刻は主として10時30分から12時頃に行い、天気はできる限り好天の日を選んだ。

## 2 調査地域

富士宮市北部地域に重点を置き、①天神山地域、②田貫湖・小田貫湿原周辺地域、③富士山一合目「富士山麓山の村」地域、④大倉ダム上流の佐折地域、⑤猪之頭、麓、根原及び朝霧高原などを中心に調査した。

また、朝霧高原におけるルートセンサス法に伴う調査環境は、

### A 半自然環境

890 m三角点東方標高900 mの小高い丘のようになった溶岩上の広葉草原。富士山麓を代表するタイプの草原。

### B 別荘分譲地

朝霧野外活動センター北東、標高870～890 m。

### C 耕作地

890 m三角点東方、標高890 m。周囲をヒノキ、スギの植林地あるいはカシワが混じる草原に囲まれた畑で、キャベツを主にダイコン、カリフラワーなどを育てている。

### D 牧草地

富士丘東方標高900 m、周囲は一面の牧草地で、その中を舗装された農道が直線的に通っている。

### E ゴルフ場

朝霧ゴルフ場、標高940～960 mで大部分はきれいに刈り込まれた芝でヒノキ、マツといった樹木も点在し、庭園にはサツキ、ドウダンツツジなどの低木があり、花壇には夏から秋にかけてサルビア、マリーゴールドが植えられていた。

## 3 調査結果

### (1) 天神山地域

今回の調査で確認できた蝶は6科20種である。

この地域は、桜の木がかなり植樹されており、遊歩道や休憩場所も設置されている。蝶相の特徴としては、種類数に乏しく、また個体数も多いとは言えない。その理由として考えられることは、地形的に単純であり、

常時水が流れている沢などが無いことが挙げられる。蝶の種類は、低山地に多産する普通種が多く、特筆すべき貴重種は見られなかった。過去の文献を見ても、この地域はあまり調査されたことがなく、今後の調査に期待する。

●セセリチョウ科

チャマダラセセリ  
ダイミョウセセリ  
コチャバネセセリ  
コキマダラセセリ  
キマダラセセリ  
チャバネセセリ

●アゲハチョウ科

クロアゲハ  
カラスアゲハ

●シロチョウ科

キチョウ  
モンシロチョウ

●シジミチョウ科

ベニシジミ  
ゴイシシジミ  
ウラナミシジミ  
ヤマトシジミ  
ミヤマシジミ

●タテハチョウ科



ダイミョウセセリ (天神山)

コミスジ

ホシミスジ

●ジャノメチョウ科

ウラナミジャノメ  
ジャノメチョウ  
コジャノメ

(2) 田貫湖・小田貫湿原周辺地域

この地域は、1970年代から詳しく調査されている。田貫湖周辺は、植生も多様であり、自然林も残っている。蝶相の特徴としては、種類数が豊かであり、個体数も多い。特筆すべきことからは、高原性の蝶が生息していること、そして以前の文献では記載されていなかったコムラサキ、クロコノマチョウ、ルリタテハなどが田貫湖周辺のコナラ林で確認できたこと、今まで上井出林道付近で見られたスギタニルリシジミが小田貫湿原上流で採取されたことである。

●セセリチョウ科

チャマダラセセリ  
ダイミョウセセリ  
ホシチャバネセセリ  
コチャバネセセリ  
ホソバセセリ  
ヘリグロチャバネセセリ  
コキマダラセセリ  
ヒメキマダラセセリ  
キマダラセセリ  
オオチャバネセセリ  
チャバネセセリ  
イチモンジセセリ

●アゲハチョウ科

キアゲハ  
アゲハ  
クロアゲハ  
カラスアゲハ  
ミヤマカラスアゲハ

## ●シロチョウ科

キチョウ  
ツマグロキチョウ  
モンキチョウ  
モンシロチョウ  
スジグロシロチョウ  
エゾスジグロシロチョウ

## ●シジミチョウ科

ミズイロオナガシジミ  
ミヤマカラスシジミ  
ベニシジミ  
ゴイシシジミ  
クロシジミ  
ゴマシジミ  
ミヤマシジミ  
スギタニルリシジミ

## ●タテハチョウ科

ヒョウモンチョウ  
ウラギンスジヒョウモン  
オオウラギンスジヒョウモン  
ミドリヒョウモン  
クモガタヒョウモン  
ウラギンヒョウモン  
アサマイチモンジ  
コムスジ  
ミスジチョウ  
ホシミスジ  
キタテハ  
ルリタテハ  
スミナガシ  
コムラサキ

## ●ジャノメチョウ科

ヒメウラナミジャノメ  
ジャノメチョウ  
クロヒカゲ  
ヒカゲチョウ

ヤマキマダラヒカゲ

サトキマダラヒカゲ

ヒメジャノメ

コジャノメ

クロコノマチョウ



ヒメキマダラセセリ (田貫湖)



サトキマダラヒカゲ♂ (田貫湖)



ヒメジャノメ (沼久保)



### (3) 富士山一合目「富士山麓山の村」地域

この地域での蝶相の特徴としては、低山地性の蝶が多く、平地との共通種も少なくない。特筆すべき種は確認できず、いずれも低山地には広く分布する種と考えられる。

富士山麓の蝶類としては草原性の蝶類が独特な蝶相を形成していることで知られているが、当地域は草原も乏しく、それらの蝶はほとんど見られないことがわかった。

植物相を反映してヒロハノキハダを食すカラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、タケササ類を食すコチャバネセセリ、ヤマキマダラヒカゲ、クロヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲの個体数がかなり多かった。

#### ●セセリチョウ科

コチャバネセセリ  
ヒメキマダラセセリ  
キマダラセセリ  
イチモンジセセリ

#### ●アゲハチョウ科

アゲハ  
オナガアゲハ  
クロアゲハ  
カラスアゲハ  
ミヤマカラスアゲハ

#### ●シロチョウ科

キチョウ  
スジグロシロチョウ

#### ●シジミチョウ科

ベニシジミ  
トラフシジミ  
ウラナミシジミ  
ウラゴマダラシジミ  
ルリシジミ

#### ●テングチョウ科

テングチョウ

#### ●マダラチョウ科

アサギマダラ

#### ●タテハチョウ科

オオウラギンスジヒョウモン  
ミドリヒョウモン  
ウラギンヒョウモン  
イチモンジチョウ  
アサマイチモンジ  
コムスジ  
サカハチチョウ  
キタテハ  
ルリタテハ  
ヒオドシチョウ  
アカタテハ  
スミナガシ

#### ●ジャノメチョウ科

ヒメウラナミジャノメ  
ジャノメチョウ  
ヒメキマダラヒカゲ  
クロヒカゲ  
ヒカゲチョウ  
ヤマキマダラヒカゲ

### (4) 大倉ダム上流の佐折地域

この地域は、ほとんどが植林地であり、蝶類の採餌や吸蜜のための訪花植物に適した環境の多様性に欠けていて種類数はごく普通の値となっている。特筆すべき蝶として、春に川沿いの林縁でギフチョウが確認できたが、最近減少しつつある種であり、保護の対象として考えていく必要がある。夏には、高原性のヒョウモンチョウの仲間がかなり確認でき、コナラ林やコナラ・クリ林内ではジャノメチョウ科、シジミチョウ科の蝶がかなり確認できた。また、道路の水溜りなどにはカラスアゲハの飛来も多かった。

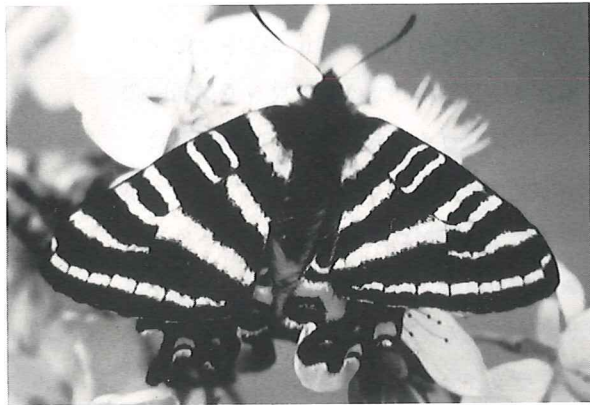
#### ●セセリチョウ科

ミヤマセセリ  
ダイミョウセセリ  
ヒメキマダラセセリ  
オオチャバネセセリ



- チャバネセセリ
- イチモンジセセリ
- アゲハチョウ科
  - ギフチョウ
  - ジャコウアゲハ
  - アオスジアゲハ
  - キアゲハ
  - オナガアゲハ
  - クロアゲハ
  - カラスアゲハ
- シロチョウ科
  - キチョウ
  - モンキチョウ
  - モンシロチョウ
  - スジグロシロチョウ
- シジミチョウ科
  - オオミドリシジミ
  - コツバメ
  - ベニシジミ
  - ゴイシシジミ
  - ルリシジミ
  - ツバメシジミ
- ウラギンシジミ科
  - ウラギンシジミ
- マダラチョウ科
  - アサギマダラ
- タテハチョウ科
  - ウラギンスジヒョウモン
  - ミドリヒョウモン
  - クモガタヒョウモン
  - メスグロヒョウモン
  - ウラギンヒョウモン
  - イチモンジチョウ
  - コムスジ
  - サカハチチョウ
  - キタテハ

- ルリタテハ
- アカタテハ
- スミナガシ
- ジャノメチョウ科
  - ヒメウラナミジャノメ
  - クロヒカゲ
  - ヒカゲチョウ
  - ヤマキマダラヒカゲ
  - ヒメジャノメ
  - コジャノメ
  - クロコノマチョウ



ギフチョウ (卵から飼育)

#### (5) 猪之頭, 麓, 朝霧高原

これらの地域は、富士山麓において草原を呈していたが、牧草地の拡大、スギ、ヒノキの人工林の成長などにより、以前の草原的な環境が失われてきている。これに伴って草原性蝶類もかなり減少してきているように思われる。

今回の調査によれば、チャマダラセセリ、アカセセリなどは数が減少してきていることがわかった。アサマシジミはかろうじて生き残っている程度である。反対に、ハヤシミドリシジミはカシワの木さえあれば健在であり、ヘリグロチャバネセセリ、キマダラモドキは、以前よりもかなり確認できた。これらのことを総合して考えると、背の低い草原に生息する種は激減しているが、疎林的な環境に生息する種はそれほど減少

#### D 牧草地

14種293個体を確認。単純化はさらに進み、種類数は減少し個体数は増加している。イチモンジセセリ以外のセセリチョウはすべて姿を消し、タテハチョウ科も2種のみである。ベニシジミ143個体、キタテハ73個体と人為的環境に適応している特定の種が極めて多く、この2種だけで全体の73%を占めている。植生そのものが単純化しているためである。

#### E ゴルフ場

13種37個体を確認。種類数の減少はそれほどでもないが、個体数が急激に減少している。発生していると考えられるのはベニシジミとキタテハのみで他はすべて周辺の樹林、草原、耕作地から入り込んだものと考えられる。食餌植物、蜜源となる植物ともに少なく、蝶はほとんどいないと言っても言い過ぎではない。

### 4 む す び

今回の第二次調査によって、富士宮市域で見られた蝶は9科94種という結果になった。この結果を第一次調査結果と比較すると、約20種ほど減少したことになる。アオバセセリ、アカセセリ、モンキアゲハ、ウラナミアカシジミ、オナガシジミ、アイノミドリシジミ、フジミドリシジミ、エゾミドリシジミ、シルビアシジミ、ジョウザンミドリシジミ、エルタテハ、キベリタテハ、ウラジャノメなどがほとんど見られなくなっている。また、富士宮市域の南部で多く発生が確認されていたクロコノマチョウ、コムラサキ、スミナガシなどのタテハチョウ類が北部の田貫湖周辺でかなり見られるようになってきている。ウスバシロチョウは依然分布を拡大している。

富士宮市域の蝶相は、今回の調査でもかなり豊富なものであることが判明したが、開発等によって環境が変化し、減少する傾向にある。朝霧高原周辺の草原性蝶類であるアサマシジミ、ゴマシジミ、ヒメシロチョウ、ハヤシミドリシジミ、ヒョウモンチョウ、キマダラモドキ、ホシチャバネセセリ、ヤマキチョウ、スジ

ボソヤマキチョウなど、分布が限定されているギフチョウなど、落葉広葉樹林帯に生息するミドリシジミ類などの保護を積極的に行うとともに、今後も継続した調査を期待する。

### 5 ヒョウモンチョウ類の分布と生育地

#### はじめに

静岡県及びその周辺では7属10種のヒョウモンチョウ類を産し、このうち富士宮市域には7属9種の生息が確認されているヒョウモンチョウ類は日本の代表的な草原性蝶類で、種類数、個体数ともかなり大きな割合を占めている。これらの蝶類は、さまざまな環境の草原を生息地として利用し、低地帯から亜高山帯下部へ、開けた草原から林縁や疎林内の草地へ、そして、湿潤草原から乾燥草原へと広がり、種によって固有の生息地域を形成している。

最近の自然環境の変化により、草原性蝶類の生息地にも大きな影響が現れてきており、ヒョウモンチョウ類の分布と生息地をまとめることは、これからの自然保護の指標に役立つと思う。

なお、この報告は静岡昆虫同好会の方々、特に高橋真弓氏、清邦彦氏の報文を引用、参考にさせていただいた。

#### (1) 調査地域と調査方法

富士宮市域を現地調査及び文献調査でまとめた。

#### (2) 各種の分布と生息地

##### ① ヒョウモンチョウ

#### [分 布]

富士宮市域に多く、垂直分布は田貫湖付近の標高600mから富士山一合目付近の1,300m辺りに及ぶ地域に産地が多い。

#### [生 息 地]

明るく開けた草原で、食草のワレモコウのほか、吸蜜植物となる多くの陽地性草本を含んでいることが多い。生息地ではしばしばヒメシメチョウ、ゴマシジミ、ヒメシジミ、アサマシジミ、ホシチャバネセセリなど

の草原性蝶類と混生する。本種の生息地となっている草原は、火入れ、刈り草などによって保存されている半自然草原で、蝶類の生息地としては最適と思われる。このような草原は、牧草地やゴルフ場の造成、スギ・ヒノキの植林その他「開発」によって急速に失われている。

[成虫出現期]

田貫湖周辺では6月下旬頃から出現し、8月中旬又は下旬まで見ることができる。出現期の前半では雄が、後半には雌が多い。

[吸蜜植物]

ノアザミ、カセンソウ、オカトラノオ、キリンソウ、マツムシソウ、ミヤマイボタ、ウツギなどの花に集まり、とくにカセンソウ、キリンソウ、オカトラノオなどの花を好む。

[記録地点]

富士山一〜二合目周辺、北山林道、麓、田貫湖、根原、県道人穴・焼間線県境付近、朝霧カントリー南方、上井出林道分岐点付近。

② ミドリヒョウモン

[分布]

標高1,500〜1,700 m程度の山地帯に多い。

[生息地]

主として林縁又は疎林の陽地に生息するが、開けた草原にもよく現れ、草本の花に飛来して吸蜜する。移動力はかなり大きい。

[成虫出現期]

低地帯では6月上〜中旬にかけて、高地帯では7月中〜下旬頃羽化する。

[吸蜜植物]

ヒヨドリバナ、マツムシソウ、テンニンソウ、クルマバナ、クガイソウ、フジウツギ、オトコエシ、ミヤマイボタ、オカトラノオ、ウツギ、シシウド、ウド、キリンソウ、シモツケ、ヌルデ、イヌザンショウなどの記録があり、この中にはミヤマイボタ、ヌルデ、イヌザンショウなどの亜高木または低木が含まれていることは注目される。

[記録地点]

カケスバタ〜富士山二合目周辺、二合目林道、北山林道〜大沢林道、上井出林道大沢崩〜11番事務所、県道人穴・焼間線県境付近、根原〜富士丘、高鉢ゲート、毛無山1,450 m付近〜山頂。

③ クモガタヒョウモン

[分布]

個体数は前種より少なく、垂直分布は低地から標高1,700 m程度の山地に及ぶ。市域での記録はわずかである。

[生息地]

疎林内の草地や林縁の草原などに見られるが、メスグロヒョウモンと比べるといくらか開けた草原に進出する傾向がある。

[成虫出現期]

低地帯では5月上旬〜6月上旬にかけて羽化し、羽化期前半には雄が多い。盛夏の時期にはほとんど活動せず雑木林の樹陰に潜んでいることが多く、林の中を歩いていると葉陰から急に飛び立つのを見ることがある。標高1,000 m以上の山地では7〜9月頃出現し、休まず活動する。

[吸蜜植物]

ニガナ、ノアザミ、ヒヨドリバナ、クガイソウ、テンニンソウ、ミヤマイボタ、イボタノキ、オカトラノオ、ウツギ、クリなどに集まる。

[記録地点]

富士山二合目林道、根原、毛無山頂上付近。

④ メスグロヒョウモン

[分布]

富士宮市全域に分布するが、個体数は多くない。垂直分布はやや低く、標高1,500 m程度になるとほとんど見られない。

[生息地]

林縁や疎林内の明るい草地に見られる。移動力はミドリヒョウモンほど大きくない。

[成虫出現期]



低地帯では、6月上～中旬に羽化する。盛夏の時期には姿を消し、9月中旬～10月中旬頃再び現れ、雄は林縁や林間の空き地に縄張りをつくる。山岳地帯では7月に入ってから羽化し、秋まで連続的に活動する。

[吸蜜植物]

タムラソウ、ノアザミ、シラヤマギク、ヒヨドリバナ、マツムシソウ、オカトラノオ、ウツギ、クリなどの花に集まる。

[記録地点]

篠坂、富士山一～二合目、大中里、沼久保、猪之頭、上井出11番国有林。

⑤ ウラギンスジヒョウモン

[分布]

富士山麓に多く、垂直分布の上限は標高1,600m程度である。

[生息地]

ミドリ、メスグロ、オオウラギンスジの各ヒョウモンチョウ類よりも開けた環境を好む。

[成虫出現期]

低地帯では、6月中旬～7月上旬頃羽化する。盛夏の時期には姿を消し、9月中・下旬頃から10月下旬頃まで活動する。

[吸蜜植物]

タムラソウ、タイアザミ、ヒヨドリバナ、サワヒヨドリ、カセンソウ、コウリンカ、マツムシソウ、オミナエシ、オトコエシ、ヒメトラノオ、イヌゴマ、ウツボグサ、オカトラノオ、キリンソウ、チダケサシ、シシウド、クリなどの花に集まる。

[記録地点]

カケスバタ～富士山二合目、北山林道、大中里、上井出北方、上井出林道、田貫湖付近、角木沢東北方(900～1,050m)、猪之頭～麓、朝霧カントリー、県道人穴・焼間線県境付近、1,029m三角点～根原、根原～富士丘。

⑥ オオウラギンスジヒョウモン

[分布]

富士山麓には多く、垂直分布は標高800～1,600mの

範囲に記録が多い。

[生息地]

開けた草原よりも林縁や疎林内の草地に多く、樹上を飛ぶことも多い。

[吸蜜植物]

マルバダケブキ、ヒヨドリバナ、コウリンカ、ホソエノアザミ、マツムシソウ、リョウブ、フジウツギ、オカトラノオ、ミヤマイボタ、ツリガネニンジン、ノリウツギ、ウツギ、チダケサシ、シシウド、イヌザンショウの花に集まる。

[記録地点]

カケスバタ～富士山二合目、二合目林道、北山林道、田貫湖、上井出林道、人穴東北方、県道人穴・焼間線県境付近、麓、根原付近。

⑦ ウラギンヒョウモン

[分布]

富士山麓には個体数が多く、垂直分布の範囲も低地から標高2,000m位までと広い。

[生息地]

明るく開けた草原を好み、メスグロヒョウモンのように森林内部に入り込む傾向は見られない。

[成虫出現期]

低地帯では6月上旬から、標高1,000m内外の山地では6月上旬から羽化する。低地では盛夏の活動は見られず、9月中旬頃から再びその姿を現す。山地では9月下旬頃まで連続的に活動し、秋に産卵が行われる。

[吸蜜植物]

ノアザミ、タイアザミ、ノハラアザミ、タムラソウ、マルバダケブキ、コウリンカ、カセンソウ、サワヒヨドリ、ミヤマイボタ、ヒメトラノオ、クガイソウ、マツムシソウ、オカトラノオ、フジウツギ、ウツギ、ノリウツギ、キリンソウ等の花に集まる。

[記録地点]

富士山一～二合目、二合目林道、大沢林道～北山林道、沼久保付近、大宮、田貫湖、朝霧～麓、上井出林道、富士丘、県道人穴・焼間線県境付近、人穴東北方



林道，毛無山（1,000～1,800 m）。

### ⑧ ギンボシヒョウモン

[分 布]

富士山，天子山脈などの山岳地帯に分布し，標高1,200～2,000 m位までに多い。

[生 息 地]

明るく開けた草原を好み，一般に森林内部には入らない。

[成虫出現期]

7月上旬～8月上旬にかけて羽化し，羽化期の前半には雄が多い。9月頃まで中断しないで活動する。

[吸蜜植物]

コウゾリナ，ノアザミ，フジアザミ，ノハラアザミ，タムラソウ，マルバダケブキ，コウリンカ，ハンゴンソウ，カセンソウ，ヒヨドリバナ，マツムシソウ，ミヤマイボタ，クガイソウ，フジウツギ，オカトラノオ，キリンソウ，ウツギ，ギボウシ等の花に集まる。

[記録地点]

富士山一～二合目，二合目林道，北山林道，麓，毛無山（1,450 m～頂上）。

### ⑨ ツマグロヒョウモン

[分 布]

富士宮市域では個体数が少ない。採集記録は低山地に多く見られる。

[生 息 地]

明るく開けた草原に生息し，森林内部には見られない。ヒョウモンチョウ類中最も暖地性の強い種である。

[成虫出現期]

4～11月まで連続的に見られ，8～10月頃個体数が多い。

[記録地点]

明星山，黒田，大岩，宮内，カケスバタ。

## 6 足形鬼橋付近の調査結果

山林から耕地，草原から森林地帯へ続くこの地は，蝶の生息環境には恵まれている。

芝川流域は南から北へかけて連続帯を形成しているので案外に種類も多く個体数の多い地域であると言える。この付近に限定すると，出現数は限られてくるが，移動地域に当たるので東西の移動，季節による南北の移動が見られる。大沢扇状地帯の雑木－草原，毛無山地の雑木－草原に見られるもの等があり，総括的には田貫湖－朝霧高原に属するものである。

以下に出現したものを整理してみた。

#### ●セセリチョウ科

チャマダラセセリ

ミヤマセセリ

ダイミョウセセリ

ホシチャバネセセリ

コチャバネセセリ

ホソバセセリ

コキマダラセセリ

ヒメキマダラセセリ

キマダラセセリ

オオチャバネセセリ

チャバネセセリ

イチモンジセセリ

#### ●アゲハチョウ科

ウスバシロチョウ

ギフチョウ

ジャコウアゲハ

アオスジアゲハ

キアゲハ

アゲハ

オナガアゲハ

クロアゲハ

カラスアゲハ

ミヤマカラスアゲハ

#### ●シロチョウ科

森林周辺地や草原地帯に多い。

ヒメシロチョウ

キチョウ

ツマグロキチョウ  
 スジボソヤマキチョウ  
 モンキチョウ  
 ツマキチョウ  
 モンシロチョウ  
 スジグロシロチョウ  
 エゾスジグロシロチョウ

●シジミチョウ科

コナラ・ミズナラ・クヌギ・カシワ等を食樹とするものが多いが、ウツギに産卵するトラフシジミ、スイバ・ギシギシを食草とするベニシジミ、タケ・ササに寄生するタケノアブラムシを肉食とするゴイシシジミ、カタバミを食するヤマトシジミ等小型で種類も多い。

ミズイロオナガシジミ  
 オオミドリシジミ  
 トラフシジミ  
 コツバメ  
 ベニシジミ  
 ゴイシシジミ  
 クロシジミ  
 ウラナミシジミ  
 ヤマトシジミ  
 ゴマシジミ  
 ルリシジミ  
 ツバメシジミ  
 ミヤマシジミ  
 ウラギンシジミ (ウラギンシジミ科)

●テングチョウ科

テングチョウ

●マダラチョウ科

アサギマダラ

●タテハチョウ科

ヒョウモンチョウ  
 ウラギンスジヒョウモン  
 オオウラギンスジヒョウモン

ミドリヒョウモン  
 クモガタヒョウモン  
 メスグロヒョウモン  
 ウラギンヒョウモン  
 イチモンジチョウ  
 コミスジ  
 ホシミスジ  
 サカハチチョウ  
 キタテハ  
 ルリタテハ  
 アカタテハ  
 スミナガシ

●ジャノメチョウ科

森林周辺部に生活し、個体数も多く、イネ科植物を食草としているもの、ササ類を食草とするもの等が多い。

ヒメウラナミジャノメ  
 ウラナミジャノメ  
 ジャノメチョウ  
 ツマジロウラジャノメ  
 クロヒカゲ  
 ヒカゲチョウ  
 ヤマキマダラヒカゲ  
 ヒメジャノメ

## 7 富士見小学校におけるオオムラサキの飼育活動

### はじめに

富士見小学校では、昭和57年から環境教育・情操教育の一貫として、オオムラサキの飼育活動を行っている。この活動によって、児童は地域の自然を直接経験によって感じ取り、生命尊重の大切さを理解できるようになってきている。

#### (1) 飼育活動の経過

昭和57. 1. 16 奈良県野生生物保護委員会の中

尾氏他9名がエノキ苗370本、越冬幼虫70匹を持参

2. 16 長野県より越冬幼虫90匹持参

5. 6 観察会 15頭飼育

6. 26 放蝶集会

12. 26 公営墓地内で越冬幼虫発見

58. 6. 25 第2回放蝶

59. 6. 23 第3回放蝶

60. 6. 22 第4回放蝶

61. 6. 21 第5回放蝶

8. 9 オオムラサキ保護の会、滋賀県・奈良県より来校

62. 6. 19 NHK放映

6. 20 第6回放蝶

63. 5. 7 PTAオオムラサキ委員会発足

6. 23 第7回放蝶

平成1. 6. 14 静岡第一TV放映

6. 26 第8回放蝶

8. 4 探蝶会、山梨県長坂町へ

2. 5. 22 幼虫・さなぎ探しを大エノキで実施

6. 13 理科「オオムラサキの一生」授業研究

6. 18 第9回放蝶

7. 31 親子探蝶会、山梨県長坂町へ

4. 5 山崎賞(学校賞)受賞

## (2) 飼育状況

○飼育室の大きさ 5m×15m×2.5m

○7月ふ化1齢幼虫→8月2齢→3～4月に活動開始4齢虫(H3には1,050頭)→エノキの若葉にH4に800頭、H5は700頭

○1頭の♀産卵数……H3は350卵、H4は1,600卵(自然交尾)、H5は800卵

○卵の変化……白っぽい卵から紫黒色に変化

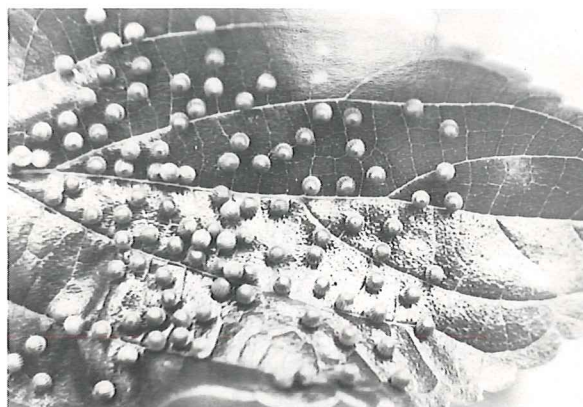
○エノキ14本で300～400頭飼育が限界

○さなぎからの羽化数はH3は750頭、H4は500頭、H5は500頭

○餌……樹液の代わりにカルピス(カルピス10倍液+梅酒)、ジュース、サクランボ、バナナを使用

○年1回発生、成虫は6月下旬～8月上旬に出現  
♂は6月下旬～7月中旬、♀は7月上旬～下旬に羽化

○母蝶は8月産卵、3～5齢幼虫で越冬



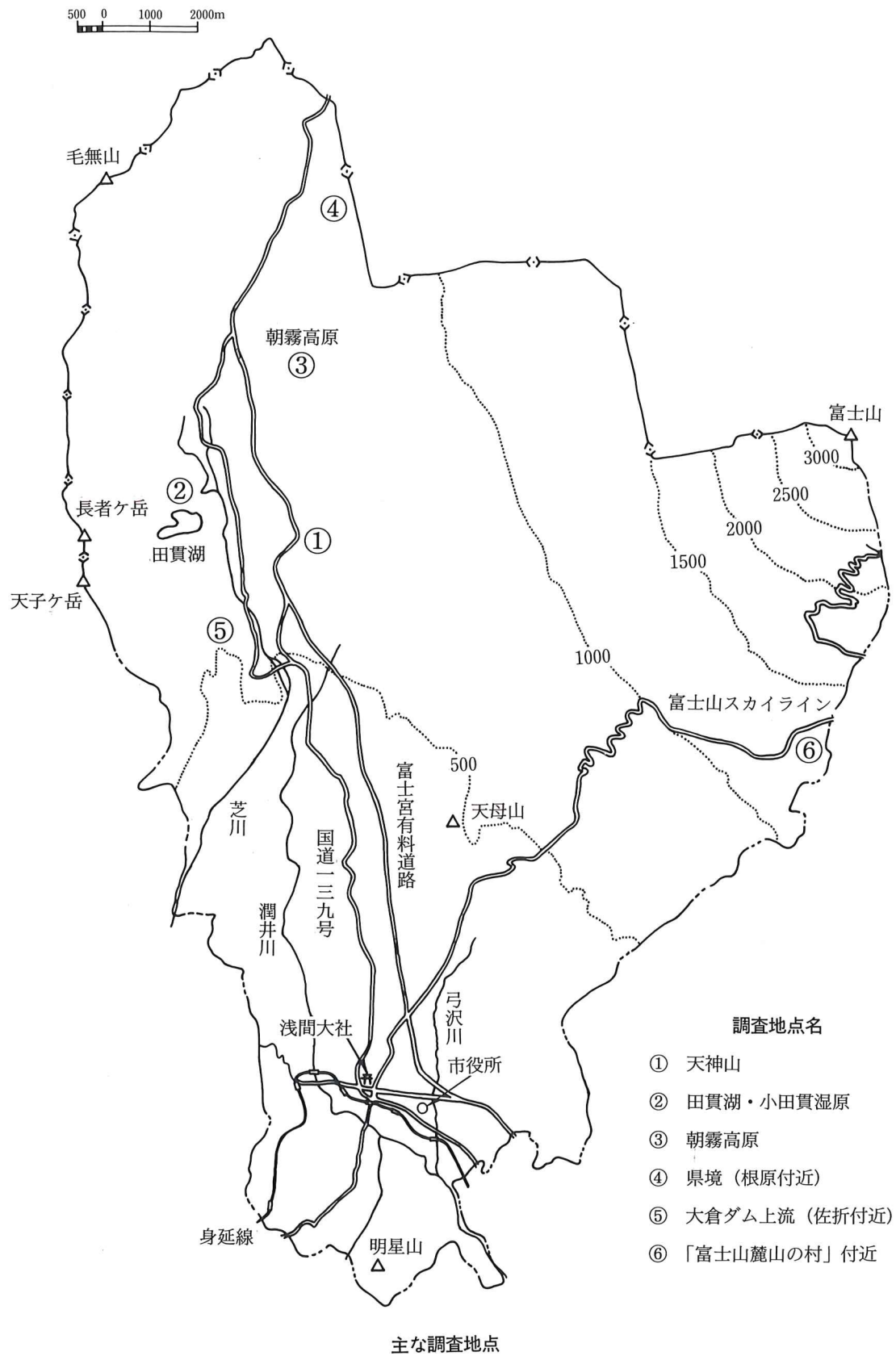
オオムラサキの卵



オオムラサキの終齢幼虫



ジュースの汁を吸うオオムラサキ(♂)





## 参 考 文 献

- 1 清 邦彦：駿河の昆虫「富士山麓における蝶類群集と人為作用」 静岡昆虫同好会
- 2 静岡昆虫同好会：駿河の昆虫
- 3 川副昭人・若林守男：原色日本蝶類図鑑 保育社
- 4 藤岡知夫：図説「日本の蝶」 ニュー・サイエンス社
- 5 杉山恵一：静岡県の重要昆虫 第一法規



# III 直翅目 (バッタ類)

日原 章



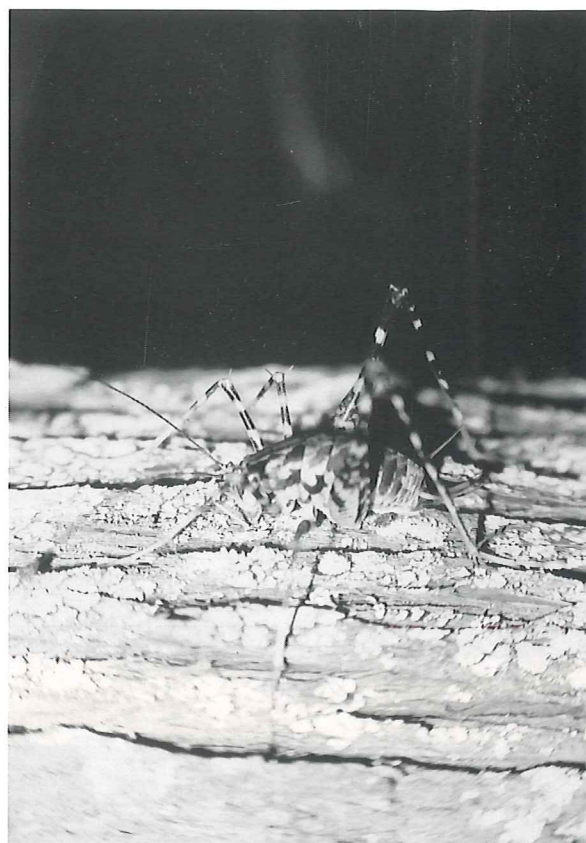


## はじめに

この種はバッタの仲間として広く親しまれ、音を出すものは文学や歴史の中にも多く見られ、子供の遊び仲間として或いは風流の対象として人々の身近にあった。近年はスズムシ等飼育の容易さも手伝って、自然地の減少中で人工飼育の形が普及し市販もされ、かなりの個体数を保有し、一方サバクトビバッタの繁殖のような大被害や沖縄馬毛島のトノサマバッタ繁殖被害。明治の北海道開拓の頃のバッタ繁殖被害の報告等に示されるようなこともあって人との関わりは深い。

### 1 調査方法

特別な方法がある訳ではなく、足を使って東西南北を草地、林地、裸地、神社、祠、洞穴、大木等を歩き回り捕虫ネットや器で捕集し確認した。一般に不完全変態のものが多く幼虫時代には見つけにくいし、区別が困難で、成虫は7月末から8月に集中することや、種によって棲み場所が違う等、夜昼夕にも発現率に合わせて行動する等、調整が必要であった。



マダラカマドウマ

### 2 調査結果

#### (1) カマドウマ科

体型はキリギリスに近いが翅を持たず、よく跳躍するが飛ぶことも鳴くこともできない。薄暗く湿った場所を好み、廃屋や神社の床下、農家の台所、土管、洞窟の中、森林の朽木等に見られ、夜中に湿った林地内で良く見掛けている。

カマドウマ

クチキウマ

#### (2) コロギス科

体型はコオロギに似るが、キリギリスの特徴もあり、肉食性で樹上生活をし、口から糸を出して葉を綴り合わせて隠れ家を作り日中はその中にいる。体や後脚を他物に打ち当てて音を出す習性がある。

ハネナシコロギス

#### (3) キリギリス科

体色は緑が基本だが褐色系もあって太って大型の部類に属し、主に草の中で生活する。脚は強く、跳躍や草中を素早く歩くのに適す。肉食性で前脚左右を翅と擦り合わせて音を出しめはナワバリを持つ。

ウマオイムシ

・ハヤシノウマオイ……スイーツ・チョンと

・ハタケノウマオイ……シィチョ・シィチョと

長声型と早声型とを別種とみなす。

ヤブキリ

種類多く成長すると樹上生活する。

クサキリ

ササキリ

ササキリモドキ

キリギリス

日当たりの良い草原に棲みチョンギーと鳴く。

ヒメギス

セスジツユムシ

ツユムシ

クツワムシ



クサキリ



コバネヒメギス



セスジツユムシ

(4) コオロギ科

鳴き声の美しいものが多く、人との馴染みも深い。体色は黒褐色系で地表近くに棲み土中に産卵するものが多い。アオマツムシは体色も緑で樹上生活し、木の枝中に産卵する等の種もある。また草が絶えると畑野菜をも食害する例が見られた。

エンマコオロギ

ミツカドコオロギ

ツヅレサセコオロギ

ハラオカメコオロギ

タンボコオロギ

クチキコオロギ

カマドコオロギ

エゾスズ

マダラスズ

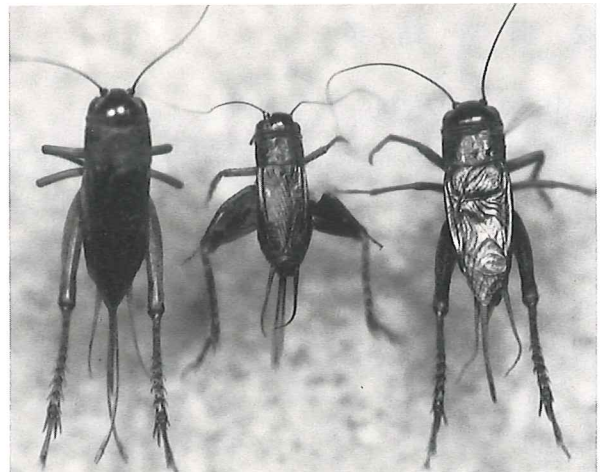
アオマツムシ

マツムシ

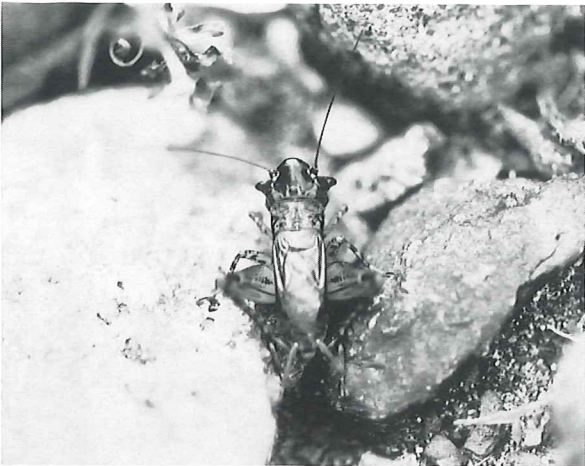
スズムシ

カネタタキ

カンタン



エンマコウロギ



ミツカドコオロギ



カンタン

## (5) アリツカコオロギ科

体長2～3mmの褐色ビロード状で翅, 単眼はない。  
アリの巣の中で居候生活すると言われている。

アリツカコオロギ

## (6) ノミバッタ科

体長4～5mmの艶のある黒色。ケラに近い種である。  
湿地や砂地の日当たりの良い地表に穴を掘って生活する。

ノミバッタ

## (7) ケラ科

土中にトンネルを掘って生活し, 前翅を擦って音を

出す。コオロギに近い種である。

ケラ

## (8) ヒシバッタ科

小型のバッタで地表生活し, 体色も地表に似て黒系  
であり見分け難く地味な種である。乾田や裸地に棲む。

ヒシバッタ

## (9) バッタ科

草食性で明るい草原や川原に棲むが, 樹上生活のもの  
もある。後脚が発達しよく跳躍し, よく飛翔し,  
30～50m飛ぶものもある。飛翔時の羽音はお互いのコ  
ミュニケーションの手段のようである。

フキバッタ類

オンブバッタ

ショウリョウバッタ

ショウリョウバッタモドキ

イナゴ

コバネイナゴ

ヒロバネヒナバッタ

カワラバッタ

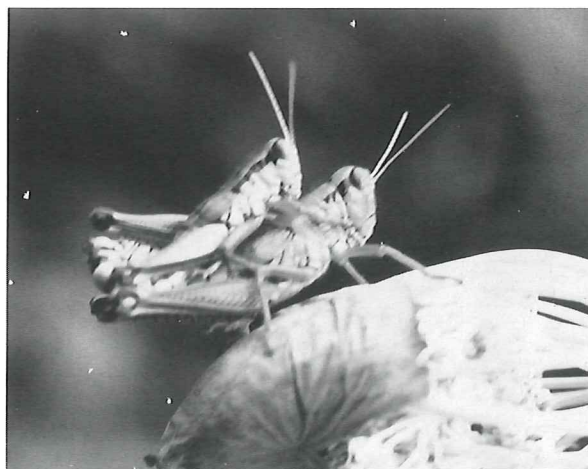
マダラバッタ

クルマバッタ

トノサマバッタ

イボバッタ

ツチイナゴ

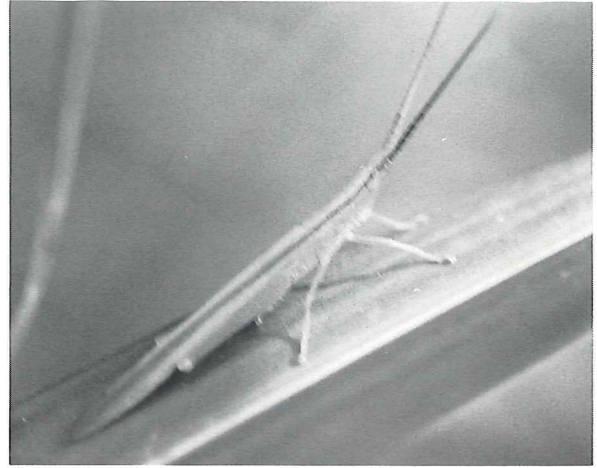


フキバッタ

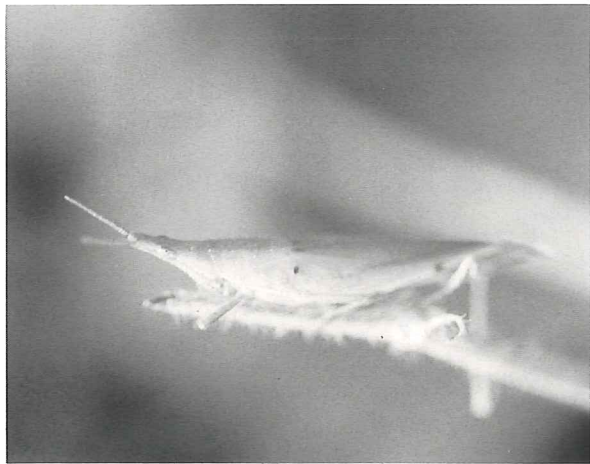




オンブバッタ



ショウリョウバッタモドキ



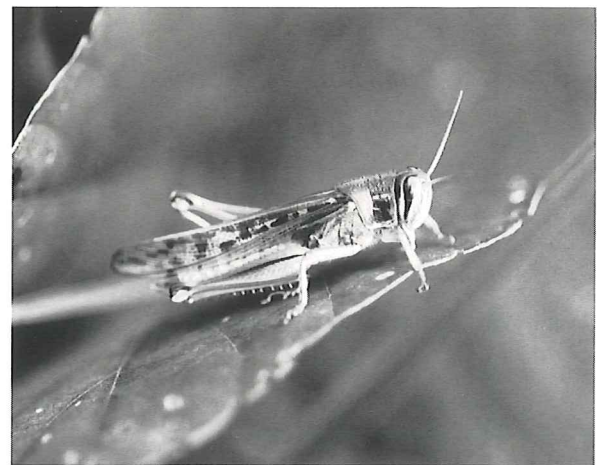
アカハネオンブバッタ



イボバッタ

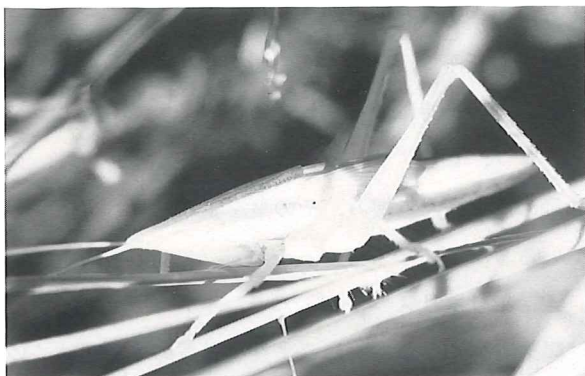


ショウリョウバッタ



ツチイナゴ





シブイロカマキリモドキ

### 3 地域別生息状況

#### (1) 沼久保川原

草原や川原草原の発達はあまりよくないが、市域で唯一の人為の及ばない地域として貴重な存在であり、種や数も少ないが、チョウ、トンボ、甲虫等もいる。富士川沿いに芝川にかけトノサマバッタやカワラバッタがおり、9～10月に川原を30～50m飛翔する姿は特徴的でたくましくもある。

クサキリ、コバネイナゴ、マダラバッタ、ツユムシ、カワラバッタ、クルマバッタ、フキバッタ類、更に、砂地にヒシバッタも見られた。

#### (2) 明星山草原

駐車場と頂上及びその付近に草原がある。手入れがされ刈り草とその干し草の下にコオロギ類やバッタ類も多く、エンマコオロギ、オンブバッタ、キリギリス、ツユムシ、フキバッタ、スズムシが見られた。

#### (3) 星山

櫟林等の雑木林の中に、更に下草があって、ツユムシ、クサキリが見られた。

#### (4) 白尾山

頂上付近や各々の登山道に草地や雑木林があって、コオロギ、キリギリスが多く、ショウリョウバッタ、ショウリョウバッタモドキ、スズムシ、マツムシも見られた。

#### (5) 中里山 (西の山)

安居山から上野大石寺へかけての山並みは、段丘状をしており、林縁に草地があり、クサキリ、ツユムシ、コオロギが多くクツワムシも見られた。(平地との境辺りでは清水も湧き出てホタルも見られた。)

#### (6) 大石寺下草原

道路沿いの草地に、マツムシ、スズムシが鳴いていたが、警戒心が強く近付けば直ぐ鳴き止む。ここでも、個体数は少ない。

#### (7) 大倉川沿いから田貫湖周辺

草原の多い地域だが、日当たりも良く、コバネイナゴ、コバネヒメギスの素早い動きを見た。一般に小型のものが多い。草屋根の中にもコバネイナゴが確認できた。林縁地には、ツユムシ、クサキリ、アオブキバッタ、ショウリョウバッタ、ヒシバッタ、(ホタル)等がいる。

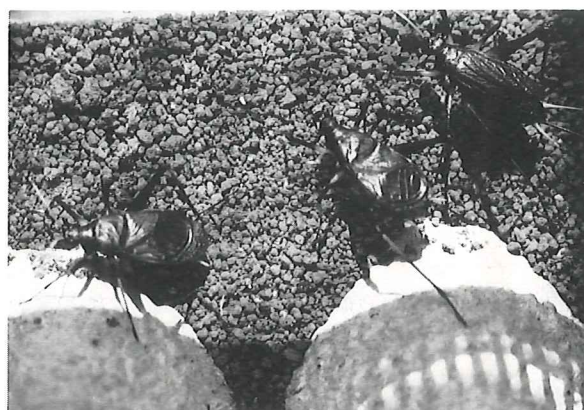
#### (8) 西富士有料道路敷周辺

一般の人の立ち入りが少ないこと、農薬の散布の必要がないこと等から、自然条件の整っている場所として、スズムシ、マツムシが聞かれる特定地域と言える。

### 4 個別生息状況

#### (1) スズムシ

草地の根の間、モグラの穴、石の間等、湿った土の近くで生活する。夜間は冷えた石の上や檜の根元には



スズムシ

い上がって鳴く。さつま芋畑や茶畑でも以前は良く見掛けたが、今は農薬の故か殆ど見ない。果実を好んで食べるが、飼育等で蛋白質が不足すると、共食いし、雌は雄を喰って太り土中に産卵する。

京都のスズムシ寺では産卵時期やふ化時期を変えたりして飼育を調整し、一年中鳴くようにして聞かせてくれている。

生育北限は山宮、粟倉、上野の富士南麓道路付近が一般的である。

#### (2) マツムシ

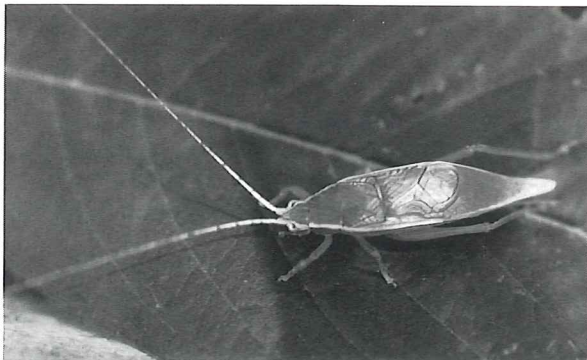
草原のススキやチガヤ等の中で、茎を噛み汁を吸って生活している。卵はススキ等の茎の中に産み込む。

かつては陸稲畑の中で鳴き声をよく聞いたが、今は極端に数が減少した。

スズムシより飼育は困難で生活力も弱いようであり、高原地域、大中里山地草原、大石寺下草地、西富士道路付近等で数少ない群れの声聞いている。

分布はスズムシと同じく富士南麓道路付近を生育の北限としている。

#### (3) アオマツムシ



アオマツムシ

明治以後中国から帰化して急速に繁殖したと言われ、静岡県下でも箱根を越えて西下したのは昭和30年代も後半であった。

翅色は緑と褐色がありマツムシより大型で樹上生活し、時に20~30mは飛翔する。群れをなして高い周波数の音を出して鳴き合い、1匹が鳴き出すと他も鳴き

出し、鳴き止むと他も鳴き止む習性がある。

生活力旺盛で市街地の街路樹や神社の森等、人間に近い所で近年特に数を増している。

サクラ、ビワ、サングジュ、マテバシイ、カキ、クス等の木に好んで棲み、その葉を噛んで食べて生活している。

#### (4) キリギリス

陽射も強く、草もよれるような暑さの中で鳴いているのを見掛ける。特に海岸の草地に多いが、市域では、白尾山、明星山、星山、沼久保に見られた。

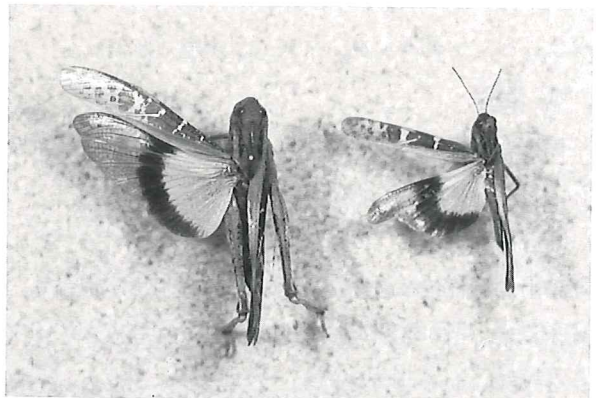
大型なのに敏捷で歩くのも早い。雄は生活圏（なわばり）を持つようである。



キリギリス

#### (5) クルマバッタ

富士川川原に多く見られ、大型なので飛翔時の羽の紋様が美しい。カワラバッタと見間違い易いが、後翅に青色がない。



クルマバッタ



## (6) トノサマバッタ

大型のバッタで飛行力も強い。体色は褐色から緑色まで各段階の色調があり、黒っぽいものまでいろいろで孤独相や変異を起こした群生相があることが知られている。

草間のどこにでも見られ、明星山や白尾山、沼久保で多く見られた。秋になると雄は動くものを雌と間違えて飛びつくと言われているが、明確でなく棒切れを飛ばしても反応はなかった。

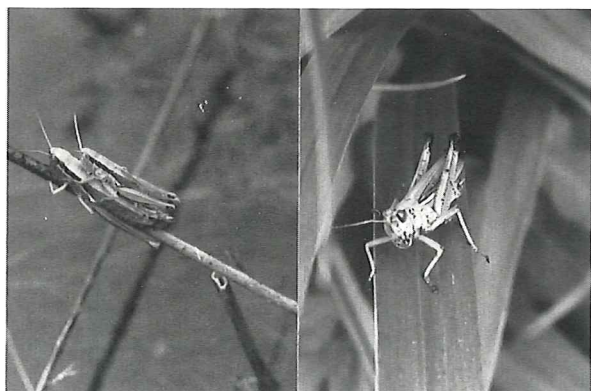
普通はイネ科、カヤツリグサ科植物を食べているが、農作物を食害した記録もある。



トノサマバッタ

## (7) コバネイナゴ

稲に害を与えるとして農薬により激減したが、近年再び草原に見られるようになり食用にされた。明星山、白尾山、田貫湖や朝霧の草原地帯でも見られる。



コバネイナゴ

## (8) クツワムシ

緑色と褐色種があるが、子供の遊び相手の一般的な秋の虫であったが、生息環境の悪化で数が激減し、中里山、栗倉地先に残存しスズムシと共に確認した。



クツワムシ

## 5 富士山の大宮林道、吉原林道付近の調査報告

- 1 カマドウマ科 クチキウマ
- 2 コロギス科 ハネナシコロギス
- 3 キリギリス科 ヒメクサキリ  
ホソクビツユムシ  
ツユムシ  
キタハガタササキリモドキ
- 4 コオロギ科 カンタン
- 5 ヒシバッタ科 ヒシバッタ
- 6 バ ッ タ 科 ナキイナゴ  
ヒロバネヒナバッタ  
マダラバッタ  
ミカドフキバッタ

## 参 考 文 献

- 1 杉山恵一編 (1983) : 「静岡県的重要昆虫」 第一法規

- 2 伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇 (1985) : 「原色日本昆虫図鑑」 保育社
- 3 足田輝一 (1977) : 「雑木林の博物誌」 新潮選
- 4 「駿河の昆虫」 (~1993) : 静岡昆虫同好会
- 5 静岡県教委高校教育課(1987) : 「富士山麓山の村」 自然環境報告書
- 6 宮武頼夫・加納康嗣 (1992) : セミ・バッタ 保育社



# IV トンボ目 (トンボ類)

城内博司



## 田貫湖と小田貫湿原のトンボ

### はじめに

富士宮市北方に位置する田貫湖は、昔は狸沼といわれ、この地域唯一の湖沼である。静岡県全体から見ても標高 650 m にある湖沼としては再大規模のものであり、寒冷地域でもあるため、分布上注目すべき種が発見されている。当地が富士山周辺の中では重要なトンボ類の産地であることが明らかになったので、今までの調査結果を報告する。

### 1 調査方法

採集及び目撃記録は、採集地を田貫湖及びその周辺と小田貫湿原及びその周辺の 2 箇所とした。また、福井順治氏の文献も引用させていただいた。

### 2 採集と観察の記録

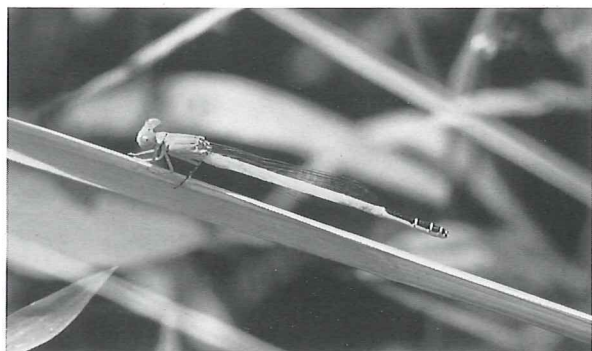
#### ●イトトンボ科

##### (1) ホソミイトトンボ

成虫越冬するトンボ。夏期には越冬する型とは斑紋の異なる夏型が出現する。

##### (2) キイトトンボ

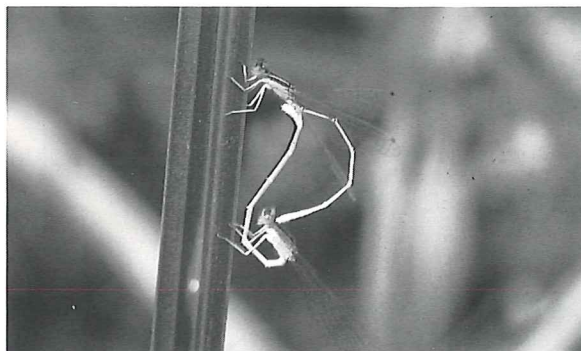
小田貫湿原には 7 月から 9 月にかけて多産し、交尾・産卵をしている個体が観察された。



キイトトンボ♂ (小田貫湿原)

##### (3) アジアイトトンボ

小田貫湿原で、個体数は少ないが 7 月から 10 月まで確認されている。



アジアイトトンボ (交尾)

##### (4) クロイトトンボ

池・沼に広く分布する種であり、田貫湖及び小田貫湿原で確認されている。

#### ●モノサシトンボ科

##### (5) モノサシトンボ

小田貫湿原で確認。個体数は少ない。県内では樹林に囲まれた池に広く分布する。

#### ●アオイトトンボ科

##### (6) ホソミオツネントンボ

小田貫湿原で確認。短期間ではあるが個体数は極め



ホソミオツネントンボ (産卵)

て多い。成虫で越冬する。

(7) アオイトトンボ

小田貫湿原で確認。中・東部からはじめて発見された貴重な記録。個体数はかなり多く、秋期には交尾・産卵をするものをよく見掛ける。

(8) オオアオイトトンボ

小田貫湿原付近の樹林内で採集されているが、個体数は少ない。

●カワトンボ科

(9) カワトンボ

本種は幼虫が河川・溪流に生育する種であり、小田貫湿原付近の沢と用水路で採集されている。

●サナエトンボ科

(10) コサナエ

小田貫湿原で確認。全国的には東北日本に分布の中心をもつ種であり、当地初記録の分布貴重種。

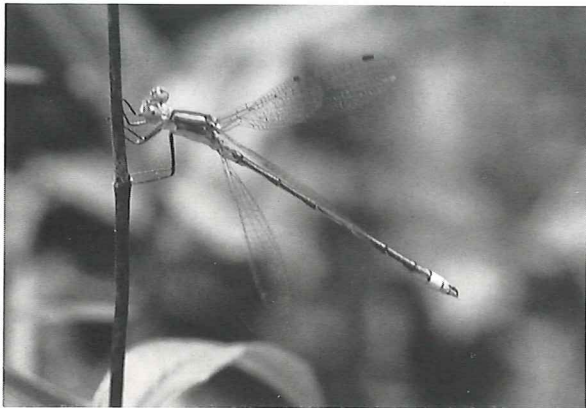
(11) ウチワヤンマ

田貫湖だけに見られ、個体数はあまり多くない。本種は水面が広く開放的な池・沼を好み、湿原で見掛けることは少ない。

●オニヤンマ科

(12) オニヤンマ

本種は幼虫が流水中に生育する種であり、移動性の強いトンボである。田貫湖で確認。



アオイトトンボ♂



カワトンボ



オニヤンマ



ルリボシヤンマ♀産卵 (小田貫湿原)



## ●ヤンマ科

## (13) ルリボシヤンマ

小田貫湿原で確認。分布が極限されている北方系・高山系のトンボ。ヤンマの中の優先種となっている場所は県内にはなく、貴重な産地といえる。

## (14) ギンヤンマ

水面が広く開放的な池・沼を好む。個体数は少ない。田貫湖で確認。

## (15) クロスジギンヤンマ

狭い水域を好む。羽化殻も確認され、小田貫湿原において幼虫が成育していることも明らかになっている。ルリボシヤンマと生態的に似ている種であり、春期には本種、夏から秋期にはルリボシヤンマが季節的な「棲み分け」をして共存していると考えられることができる。

## ●エゾトンボ科

## (16) タカネトンボ

小田貫湿原で幼虫はよく見られるが、成虫は比較的少ない。

## (17) オオヤマトンボ

田貫湖で目撃されているが、数は少ない。本種は水面が広く開放的な池・沼でよく見られる普通種。

## ●トンボ科

## (18) ハラビロトンボ

当地には多産し、特に夏期の小田貫湿原にはたくさん見られる。



ハラビロトンボ♂

## (19) シオカラトンボ

各地で見られる普通種だが、田貫湖では個体数はそれほど多くない。



♂シオカラトンボ♀

## (20) シオヤトンボ

本種も各地に広く分布するが、出現期が春期に限られる。田貫湖で確認。

## (21) オオシオカラトンボ

田貫湖で採集・目撃記録があるが、個体数は極めて少ない。

## (22) ヨツボシトンボ

小田貫湿原には相当数が生息している。県東部では初めての記録である。春期に羽化する種であるが、標高が高いこともあり、6月になっても羽化する個体もある。



ヨツボシトンボ♂ (羽化)

## (23) ショウジョウトンボ

中・東部では少ない種。小田貫湿原では相当数確認されている。

## (24) コフキトンボ

田貫湖には比較的多いが、小田貫湿原では記録例がない。水面が広く開放的な池・沼でよく見られる普通種。

## (25) ミヤマアカネ

個体数は少ないが、当地では各所で見掛ける。

## (26) アキアカネ

移動性が強いトンボ。当地では個体数は少ない。

## (27) ヒメアカネ

小田貫湿原で最もよく見られる赤トンボ。移動性が乏しく未熟個体も周辺の樹林内に静止していることが

多く、特に夏期には多数の個体がいる。

## (28) マユタテアカネ

小田貫湿原だけでなく、田貫湖周辺にも多い。

## (29) リスアカネ

樹林に囲まれた池・沼などによく見られる赤トンボで、個体数は多い。

## (30) ノシメトンボ

前種によく似ているが個体数は少ない。

## (31) コノシメトンボ

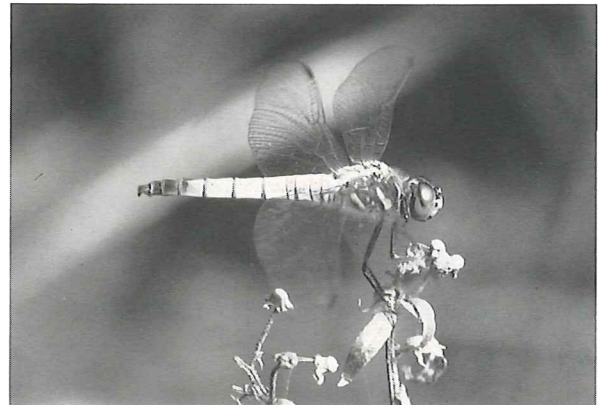
リスアカネとは対照的に、周囲がよく開けた池・沼に見られることが多く、小田貫湿原では確認されていない。田貫湖でも個体数は少ない。

## (32) ネキトンボ

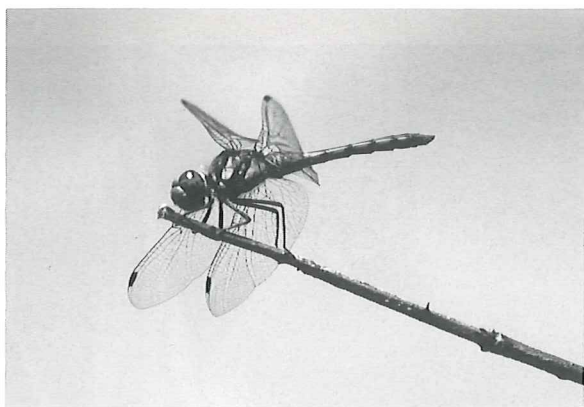
低山地の池・沼には比較的好く見られる種。



ショウジョウトンボ♀



コフキトンボ



アキアカネ♂



ヒメアカネ♀

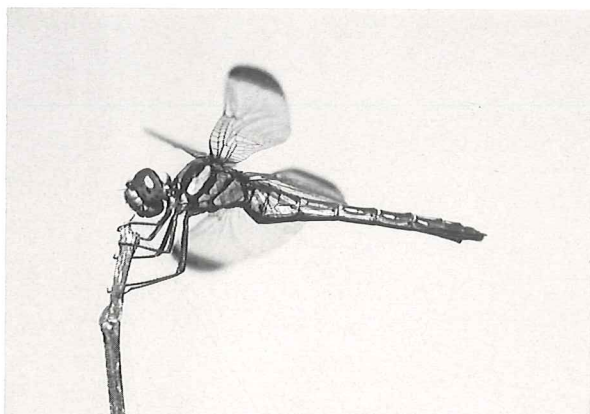




マユタテアカネ (交尾)



リスアカネ



ノシメトンボ♀



ネキトンボ

### (33) ウスバキトンボ

移動性が強く、県内各地で採集・目撃されている普通種。

## 3 トンボ相の特徴と考察

以上のように9科33種が記録されているが、1つの湖沼と小さな湿原を含む狭い範囲で確認された種類としてはかなり多いと考えられる。中でも、コサナエ、ルリボシヤンマ、ヨツボシトンボなどの北方系種は分布が極限されるトンボであり、貴重な産地である。

また、当地はトンボ類全体にわたって個体数がかなり多いと考えられる。

## 4 足形鬼橋付近の調査結果

この地域は、自然環境が保たれている部分が多いので、個体数は少ないがカワトンボの仲間がおり、また、湿原地や沼も多少形を造っているので付近にはトンボ類が多く見られるところである。

この地域だけに限定して見ることは生態上からも無理があり、大部分はかなりの距離を移動して生活しているものと見て、通過する地域と考えてよい。

### ●イトトンボ科

ホソミイトトンボ

ホソミオツネトンボ

●カワトンボ科

ミヤマカワトンボ

カワトンボ

●ヤンマ科

オニヤンマ

●トンボ科

ハラビロトンボ

ショウジョウトンボ

シオカラトンボ

シオヤトンボ

コフキトンボ

ミヤマアカネ

マユタテアカネ

ヒメアカネ

リスアカネ

アキアカネ

参 考 文 献

福井順治：田貫湖と小田貫湿原のトンボ 駿河の昆虫



# 水生動物

夫作満憲基  
鐵幸邦茂  
川田本川藤  
石神山石遠



# 魚 類

神 田 幸 作  
山 本 満





## はじめに

昭和59年度から62年度までの第一次市域自然調査研究においては、調査地域として、①猪之頭、②田貫湖、③横手沢、④精進川、⑤滝戸橋、⑥白土の池（よしま池）の計6箇所を設定し調査を行った。

昭和63年3月には、各河川が水量減水状況となり、魚類の生息域が狭められ、河川の深みなど1箇所に集中して生息するため、魚類の個体確認が容易になりつつある。

このような状況をふまえ、63年度は、調査区域を大きく広め、市街地及びその周辺における川幅2m以上の小河川、用水路などにまで調査の手を広げる予定である。

また、夏期における魚類移動が活発な時期には、捕獲魚類にマークをし放流後、再捕獲により確率的魚類個体数推測も計画したい。

対象河川として計画している箇所は、以下のとおりであり、河川域の上流、中流、下流における調査を進めていく。

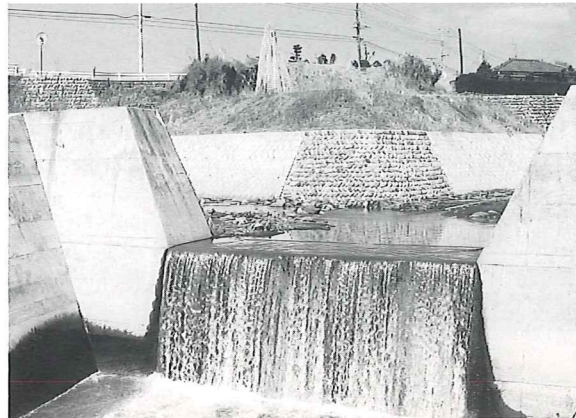
- (1) 弓沢川を中心として、以東の河川及び沢  
滝沢川、大沢川、サギ沢川、中沢川、久遠寺川、慈眼寺沢、大岩貯水池、溜野沢
- (2) 潤井川を中心として、市街地中西部  
清水川、水久保貯水池、神田川、白土の池（よしま池）、下川、渋沢用水、方辺川
- (3) 富士宮市北部  
本門寺沢、江柏堀用水、足取沢、滝沢川、北山用水路、春沢、拾石沢、田貫湖
- (4) 芝川水系  
芝川、半野用水、大倉川、西沢川
- (5) 富士川蓬萊橋以東

## 1 調査結果

時田橋下流10mの地点 昭和63年3月

左河川は弓沢川、右河川は滝沢川

合流地点での確認魚類 0匹



滝沢川下流地点 昭和63年3月

大岩龍野橋上流20m付近～1.5km

確認魚類 アブラハヤ多数、ドジョウ2匹

その他 サワガニ多数、カワニナ多数



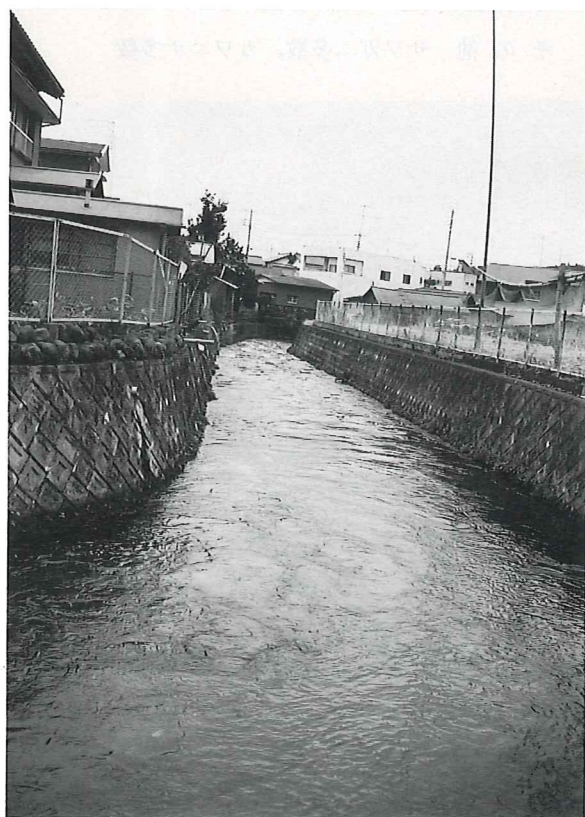
弓沢川中流（舞々木橋下地点） 昭和63年3月  
洗剤による泡が目立つ。滝の下にゴミが多数ある。  
確認魚類 0匹



大岩貯水池（丸堤）  
確認魚類 ブラックバス、マブナ、ヘラブナ、タモロコ、コイ、タナゴ、アブラハヤ  
その他 サワガニ、イモリ、ヒキガエル



下川下流（八幡橋上流100m地点）昭和63年3月  
確認魚類 コイ、ニジマス、アブラハヤ  
その他 カワニナ



大岩貯水池（大岩堤）  
確認魚類 マブナ、ヘラブナ、タモロコ、ドジョウ  
その他 モエビ、イモリ、ヒキガエル、ウシガエル





## 清水川と潤井川の合流地点

確認魚類 アブラハヤ、ニジマス



## 清水川上流（清水橋以北）

確認魚類 アブラハヤ、ニジマス、マブナ、ヒヤ  
ミズドジョウ（ホトケドジョウ）その他 ヌマエビ、アメリカザリガニ、トノサ  
マガエル





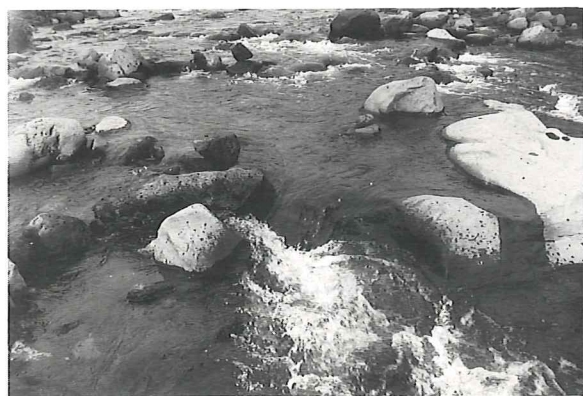
# 水生昆虫

石川邦憲  
遠藤茂基



## 芝川水系の水生昆虫

芝川水系に生息する水生昆虫の種類については、大部分蜉蝣目と毛翅目が占めており、特に蜉蝣目のウエノヒラタカゲロウ、毛翅目のチャバネヒゲナガカワトビケラなどが水系全般に分布しており、それぞれの特徴より水系全体が山地性の溪流であることがわかる。



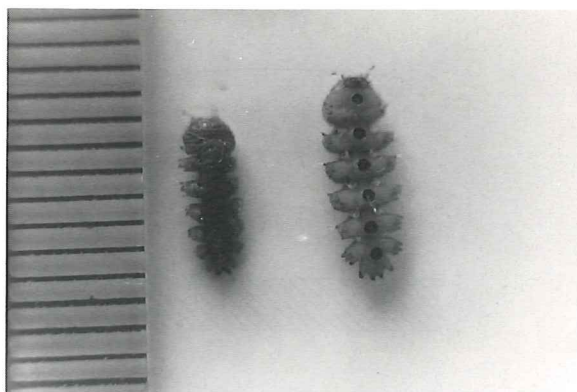
芝川水系大倉

また、この水系を上流より下流への分布として見るならば、ヒゲナガカワトビケラ科の2種類、ヒゲナガカワトビケラとチャバネヒゲナガカワトビケラとでは、前者は上流の溪流に多く、後者は中・下流に多い。しかし、お互いに広く重なり合って住んでいる。これらトビケラ類は、流れに抗するように巣室を作っており、この前に石と石をつなぎ合わせた捕獲網を張りめ

ぐらせて、これにかかる藻類を摂食している。また携巢型のものも急流、溪流に見られるが、急流では小型のものが多い。大きいと流れに抗しにくいからであると思われる。芝川水系においては、クロツツトビケラのような小型のものしか見ることができなかった。

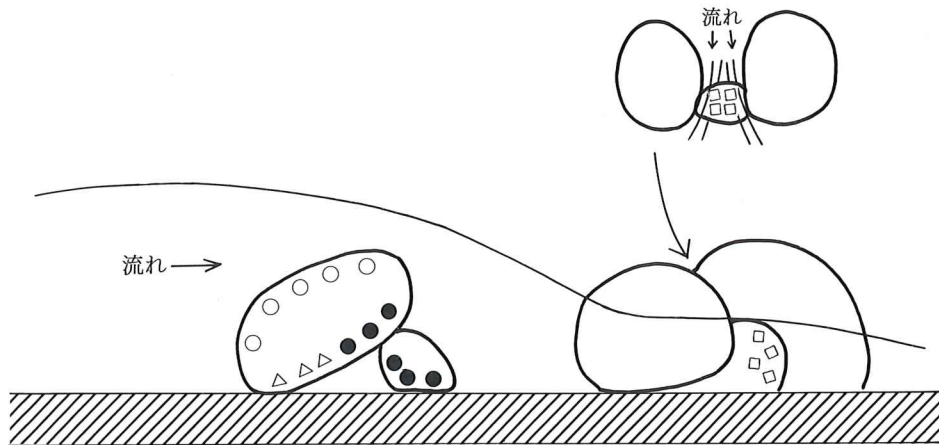
次に、積翅目についてみると、芝川水系の場合種類数（個体数）が少ないのは、一般にこれらの種類は、流れの速いところよりも比較的ゆるやかな流れの石の側面、または裏面にいることが多いため芝川水系にはあまり適さないものと思われる。カゲロウ類では、流れの速いところにいる種類もあればゆるやかな所にいる種類もある。速い流れに住むウエノヒラタカゲロウなどは、石の表面や側面に多く見られ、水の流れに抗するように体全体が扁平である。

アミカは、流れの速い所でしか見られず、特に大きい石と石の間の流速が増す所の面にしか見ることができない。もともとアミカ類は、6個の吸盤によって体をささえることができ、流れに対する適応がなされている。蛹はだ円形で、一度石などに付着すると移動することがない。



スカシアミカの幼虫

目	科	種
蜉 蝣 目	ヒラタカゲロウ科	オビカゲロウ ウエノヒラタカゲロウ ヒメヒラタカゲロウ <i>Eedyonurus</i> SP EA <i>Heptagenia</i> SP HB
	フタオカゲロウ科	オオフタオカゲロウ チラカゲロウ
	マダラカゲロウ科	オオマダラカゲロウ マダラカゲロウ
	コカゲロウ科	フタバコカゲロウ フタバカゲロウ
毛 翅 目	ヒゲナガカワトビケラ科	ヒゲナガカワトビケラ チャバネヒゲナガカワトビケラ
	クロツツトビケラ科	クロツツトビケラ
	ナガレトビケラ科	オオナガレトビケラ ヒロアタマナガレトビケラ
	オオシマトビケラ亜科	オオシマトビケラ
積 翅 目	カワゲラ科	オオクラカケカワゲラ
広 翅 目	ヘビトンボ科	ヘビトンボ
双 翅 目	アミカ科	スカシアミカ
	ガガンボ科	<i>Tipula</i> SP TA



水中における水生昆虫の生存場所  
(芝川水系)

○…カゲロウ ●…トビケラ  
△…カワゲラ □…アミカ



# 象 気

朗之弘博  
富幸知  
藤下野高  
近木佐久



## はじめに

富士宮市域の気候は、表日本の東海気候区に属している。従って四季を通じて寒暖の差が少なく、人々が生活するための気候的条件に恵まれている。

しかし、富士宮市域の地形が富士山の山頂から山麓までの標高差が大きい特徴に加えて、北西部から、南西部にかけて天子山脈や星山丘陵などがあるために、場所によって富士宮市特有の複雑な気象変化を示すことがある。

富士宮市の気象については、従来長期的な気象観測が数箇所で行われており、前回、初めてこれらの資料を本格的に分析した。

今回もまた、前回と同様に過去7年間の資料を分析し、市民に富士宮市域の気象のことを理解してもらい、自然現象に対する安全な市民生活の確保と、将来の都市づくりに役立つ気象資料を作成する目的で本調査に取り組んだ。

### 1 観測地点及び観測項目

富士宮市域は、富士山頂から山麓に至るまで標高差が大きな地域である。そこで観測地点は標高差を考慮し、市域の特徴ある地点を設定した。

幸いなことに、富士宮市域では建設省建設大学校静岡朝霧校、静岡県立高等農業学園、富士宮市芝川町消防組合消防本部などが、長期にわたって気象観測をし

てきている。そこで、これらの観測所を調査地点に設定し、その観測データを基に分析を行った。

しかし、観測項目については、それぞれの観測所の観測目的により、観測内容が統一を欠いている。

### 2 観測地点の選定理由

#### ① 建設大学

富士宮市域の最北端であり、また、集落のある最北端部でもある。さらに、朝霧高原の代表的な数少ない観測地点でもある。

#### ② 農業学園

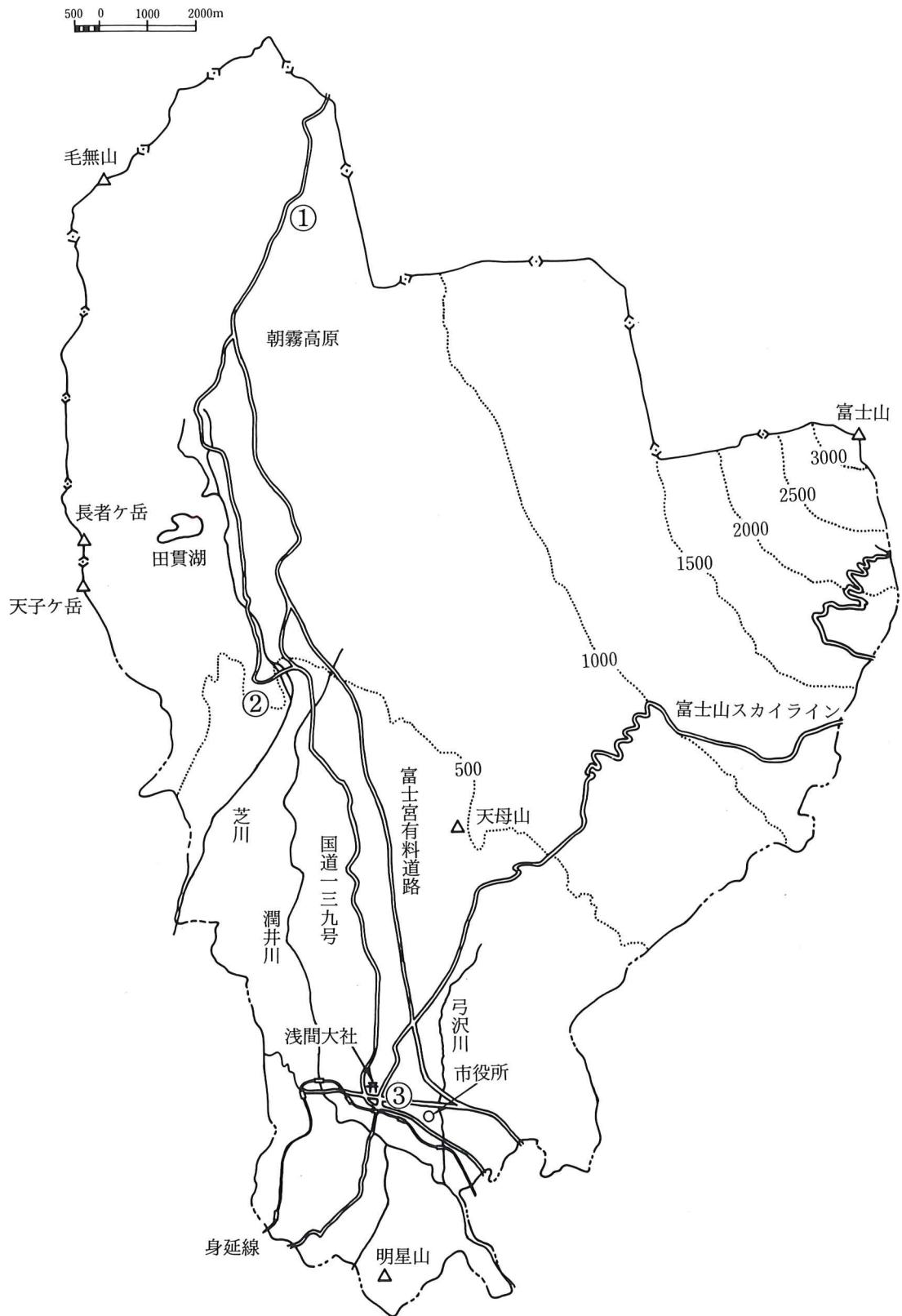
富士宮市域の中西部中間地点に位置し、白糸の滝、芝川などの影響の有無などを知るのによい地点と考えられる。

#### ③ 消防本部

市街地の南に位置し、北部地区と対比するのに好適な地点である。

観測地点及び観測項目一覧表

No.	観測地点名称(略称)	標高(m)	観測項目					
			気温			風向	風速	降水量
			9時	最高	最低			
1	建設省建設大学校静岡朝霧校(建設大学)	900	○	○	○	○	○	○
2	静岡県立高等農業学園(農業学園)	529	○	○	○	○	○	○
3	富士宮市芝川町消防組合消防本部(消防本部)	122	○	○	○	○	○	○



観測地点図



### 3 気象観測を継続するために

富士宮市域の気象を観測しデータを整理しているが、ほとんどが借り物で行っているため、その地点で観測を中止したときにデータの入手が困難になり、継続できなくなる。また、それぞれの場所での測定が我々の欲しいデータと一致するとは限らない。今回につい

て言えば、建設大学校が1988年度で中止してしまい、市の北部のデータが取れなくなってしまった。また消防本部も移転で場所が変更してしまった。今後、この調査を継続していくとすれば、少なくとも市内の数箇所での観測が必要となる。現在観測機器も発達し、月に1度の点検で観測できるのだから、定点を決め自前で観測をしていく必要がある。



# 気 温





## 1 調査方法

調査の対象とした統計期間は、1986～1992年の7年間である。いずれの地点も、9時の気温、最高気温、最低気温を観測した。平均気温は、最高気温と最低気温の平均で求められるが、ここでは9時の気温を平均気温として用いた。

## 2 データ処理方法

各地点の観測データは、それぞれの関係機関から借用した。建設省関係の自記記録計で測定したデータ、高等農業学園の9時の観測データ（1週間の自記記録計を併用）、消防本部の観測データ（1985年より、コンピューターにより自動処理したデータ）の必要な部分を抽出し使用した。

## 3 観測地点

富士宮市域において、気温の観測を長期にわたって実施している中から、次の3点を選定した。

- ① 建設大学（標高 900 m）
- ② 農業学園（標高 529 m）
- ③ 消防本部（標高 122 m）

## 4 調査結果

### (1) 観測地点別気温の変化

1日の気温の変化を見るのに、一般的には日平均気温  $\{(日最高気温 + 日最低気温) \div 2\}$  を用いるが、調査期間が短いため、ここでは、9時の気温を平均気温とした。また、日最高気温、日最低気温も併わせて分析した。各地点の月別平均気温を比較するために、観測地3点の観測値をすべてグラフに表した。表1-1、1-2、1-3、図1によって建設大学、農業学園、消防本部の9時の気温、最高気温、最低気温を比較してみると、消防本部、農業学園、建設大学の順に1～2.5℃ずつ、それぞれ低くなっていくことが分かる。

この主な理由としては、標高の違いがあげられる。

気温は標高との関係が深く、土地の高さによる気温の減少率を気温減率といい、一般に100m増すごとに約0.6℃下がる。

消防本部の標高は122m、農業学園の標高は529mであり、標高差は、おおよそ400mあるので、 $0.6 \times 4 = 2.4$  (°C) の温度差が考えられる。

次に考えられるのは、農業学園がある白糸地区の地域性である。農業学園付近には白糸の滝があり、そのばく布から生ずる水滴が気化するのに大気中より気化熱を奪い、周囲の空気が冷されて温度が下がると考えられる。

農業学園、消防本部の温度変化は、温度差の違いこそあるが、ほぼ同様な温度変化をしており各地とも極めて似ている。

表1-1、1-2の過去7年間の気温の変化を見ると、上がり下がりを繰り返しながら総体的に気温が上昇していることが分かる。最近よくいわれる地球温暖化現象の一端をこの表に見ることができるであろう。

最暖月はいずれの地点でも8月であり、最寒月は2月である。

(建設大学は1989年以降の気象観測を中断している。そのため、3箇年のデータの処理結果から判断した。)

表 1-1 建設大学

(単位: °C)

年 气温	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	平均
平均	10.7	11.6	11.6					10.8
最高	13.9	14.8	14.5					13.9
最低	5.9	6.5	7.3					6.1

表 1-2 農業学園

(単位: °C)

年 气温	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	平均
平均	13.0	13.7	12.8	13.9	14.2	13.6	13.2	13.5
最高	17.2	18.7	17.1	18.4	18.6	18.3	17.6	18.0
最低	8.3	9.6	8.7	8.3	9.2	9.5	8.9	8.9

表 1-3 消防本部

(単位: °C)

年 气温	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	平均
平均	15.5	16.2	15.4	16.3	16.9	16.2	14.9	15.5
最高	19.3	20.3	19.5	20.0	20.7	20.2	20.3	19.6
最低	11.0	12.0	11.0	12.0	12.6	12.4	11.1	11.3

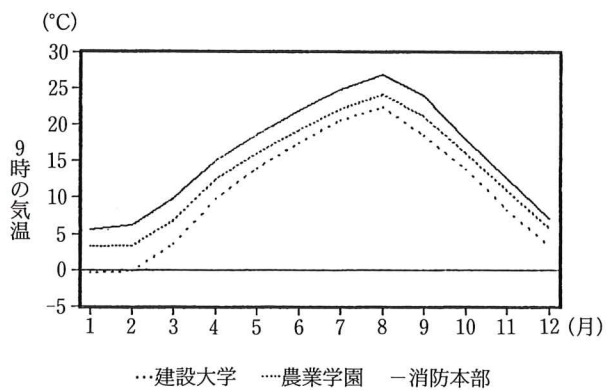


図 1 月別平均気温

## (2) 観測地点別気温の極値

を見るとやはり2月に低極値を記録している。

最近2年間の気温の極値を見ると、表2のようになる。高極値は1991, 1992年とも7, 8月に集中し、低極値は1991, 1992年とも2月に集中し、過去のデータ

一般的に、寒い日が多い月は2月とされているが、データからもこれが裏付けされている。

表2 観測地点における年度別の最高・最低気温（1位～3位）と発生日  
農業学園 (単位：℃)

年	1991年			1992年		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
最高気温	32.0	31.5	31.5	32.0	31.0	30.5
月日	7.24	8.28 8.29	8.2 8.4	7.23	7.24	7.20 7.26
最低気温	-7.5	-7.3	-7.0	-7.0	-6.0	-5.0
月日	2.21	2.22	2.24	1.21	2.2	1.20

消防本部 (単位：℃)

年	1991年			1992年		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
最高気温	35.1	33.1	32.8	34.7	34.1	34.0
月日	7.8	8.2	7.24	7.27	8.16	7.24
最低気温	-5.1	-4.0	-3.0	-2.2	-2.1	-1.5
月日	2.24	2.25	2.21	2.23	2.22	1.25

## (3) 年較差

気温の実態を知る目安として、較差を分析した。1日の気温の変化の中で、日最高気温と日最低気温との差を日較差といい、月平均気温の最暖月と最寒月との差を年較差という。

各観測地点の年較差は、表3に示した。

これを県下の各地点の年較差と比べると、伊豆半島の諸地点で、18.0から19.9と小さく、御前崎、興津が20.0、静岡が20.4である。したがって富士宮市域は、県下でも幾分温度差が大きい方であると言える。

表3 気温の年較差

1989年

観測地点名	最暖月	最暖月の平均(°C)		気温の高極値(°C)	最寒月	最寒月の平均(°C)		気温の低極値(°C)	年較差(°C)
		平均気温	最高気温			平均気温	最低気温		
農業学園	8	24.9	28.1		2	4.9	1.9		20.0
消防本部	8	27.3	29.9		2	7.5	3.7		19.8

1990年

観測地点名	最暖月	最暖月の平均(°C)		気温の高極値(°C)	最寒月	最寒月の平均(°C)		気温の低極値(°C)	年較差(°C)
		平均気温	最高気温			平均気温	最低気温		
農業学園	8	25.1	29.8		1	2.9	-1.3		22.2
消防本部	8	28.6	31.1		1	5.0	0.8		23.6

1991年

観測地点名	最暖月	最暖月の平均(°C)		気温の高極値(°C)	最寒月	最寒月の平均(°C)		気温の低極値(°C)	年較差(°C)
		平均気温	最高気温			平均気温	最低気温		
農業学園	8	23.5	27.8	30.0	2	2.1	-2.0	-7.5	21.3
消防本部	8	25.8	31.6	33.1	2	5.3	0.8	-5.0	20.5

1992年

観測地点名	最暖月	最暖月の平均(°C)		気温の高極値(°C)	最寒月	最寒月の平均(°C)		気温の低極値(°C)	年較差(°C)
		平均気温	最高気温			平均気温	最低気温		
農業学園	8	23.0	26.5	30.0	2	3.3	-1.5	-6.0	19.7
消防本部	8	25.9	30.0	34.1	1	5.8	1.9	-1.5	20.1



(4) 夏日・冬日等の日数

寒暖を表す指標の一つとして、日最高気温が30°C以上の日を真夏日、日最高気温が25°C以上の日を夏日、日最低気温が0°C未満の日を冬日、日最高気温が0°C未満の日を真冬日として比較する方法が用いられる。これらの日数の月別平均を図2-1~4で、年次別夏日等を図2-5、6で各観測地別に示した。

夏日の始まりは、市街地では5月、山間部では6月

以降である。市街地では年間の約4分の1が夏日、約6分の1が冬日に当たる。真冬日は朝霧方面及び山間部では観測されているが、市街地では観測されていない。

各図から夏日と冬日を比べると、夏日が冬日の2倍くらい多いことがわかる。

各年とも7~8月は、ほとんど夏日または真夏日であり、また、1~2月は、冬日が集中していることがわかる。

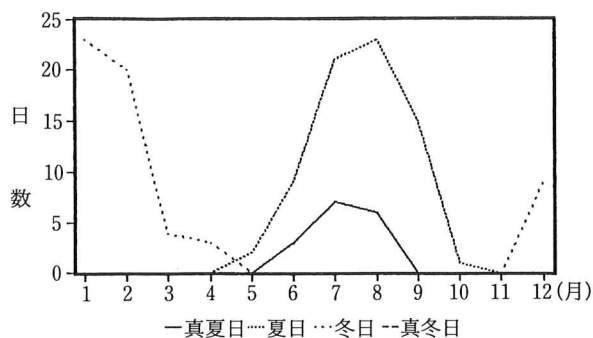


図2-1 高等農業学園月別夏日等1991年

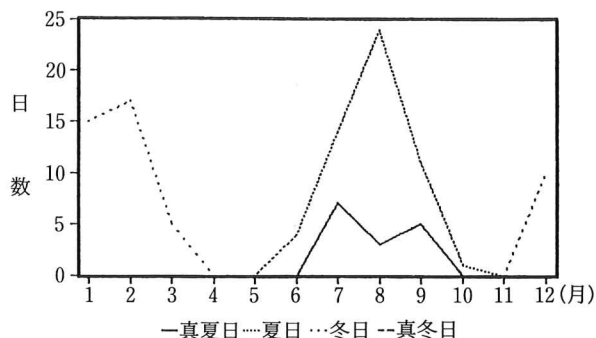


図2-2 高等農業学園月別夏日等1992年

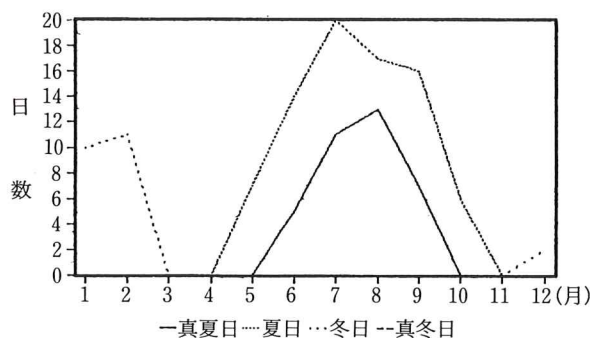


図2-3 消防本部月別夏日等1991年

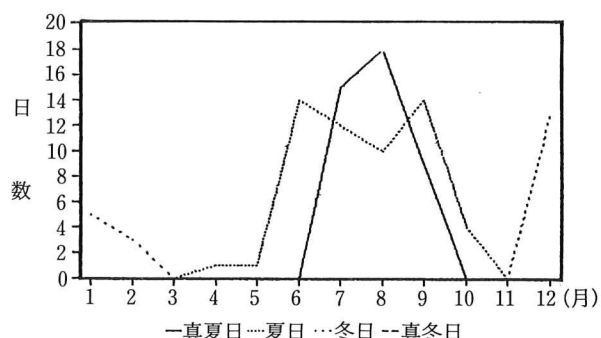


図2-4 消防本部月別夏日等1992年

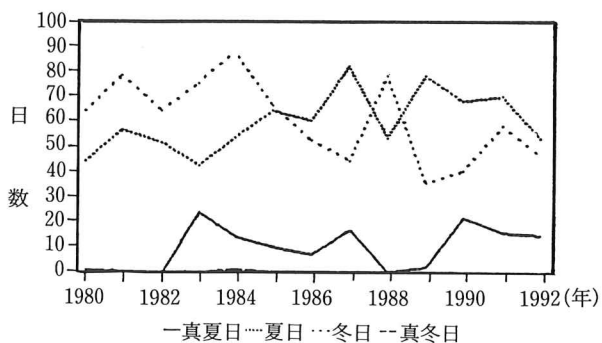


図2-5 高等農業学園年次別夏日等

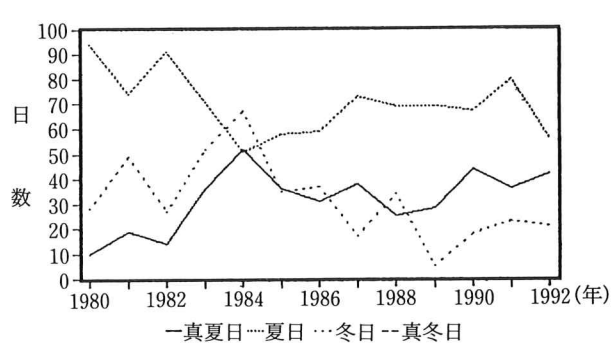


図2-6 消防本部年次別夏日等

## 5 気温を観測して

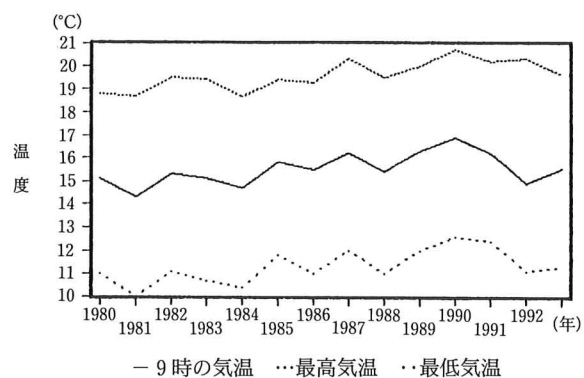


図3 消防本部年別気温

気温について言えば、世界的に地球の温暖化現象が指摘されているが、富士宮市でも、1980年からのデータから平均気温が数°C上昇していることがはっきりしている。

# 降水量





## はじめに

今回の調査では、データのとれる地点の中から3地点にしぼり、その観測データを活かしていくという形で出発した。データとして使用したのは観測データが長期にわたるものが中心となった。

### 1 観測地点

観測地点は、建設大学、農業学園、消防本部の3箇所である。市全体から考えると、これらの観測地点では手薄ではあるが、まとまったデータがとれることを考慮にいれ決定した。

なお、消防本部のデータは、1992年2月より、富士宮市役所内の消防緊急通信指令施設で処理されたものより得ている。

### 2 観測方法

機械による自動読み取り、人手に頼る従来の方法等、観測地点により異なっている。また、同一の地点であっても途中から自動読み取り観測に切り替わった所もあり、その点統一性を欠いている。

### 3 データ処理方法

各観測地点における、前日9時から当日9時までの日降水量をデータとして分析を行った。

### 4 統計期間

1986年から1992年までの7年間の観測データを使用した地点は、消防本部、農業学園の2箇所であり、建設大学は1986年から1988年の3年間である。データの中には機械の凍結等による欠測がある。

### 5 降水量の概況

1989年から1992年のデータがないことが問題ではあるが、標高の高い建設大学に比べ、農業学園、消防本部の降水量は多くなっている。

月別に各地点のデータを平均してみると、消防本部、農業学園は6月と8月と9月に多く、12月と1月に少なくなっている(図1-1, 2)のに、建設大学では3月と5月と6月に多く、2月と11月に少ないというようにここでも北部と中・南部で違いをみせている。

年次別では1989年から1991年が多く凸の様なカーブを描いている(図2-2, 3)。年によって降水量は大きく変化する。また、月ごとの変化も、地点により違いがみられる。

## 6 各地点での年変化

### (1) 月平均降水量

消防本部では、8, 9月が多く冬場に少ないという特徴がある。農業学園では、6, 9月が多く冬場に少ないというように消防本部と同じような変化をしている。建設大学では、多い月が3, 5月となっている。

各地点で、多い月と少ない月との差をみると、建設大学ではその差が小さく、他の地点は大きくなっている。

### (2) 年次別降水量

消防本部では、1986, 1987年が少なく、1988年から多くなり毎年2,000 mmをこえている。農業学園でも同じ様な変化であるが、1992年だけは、7年間の中で最低を示している。建設大学のデータの不足はあるが、1986, 1987年が他の地点と同様な雨量を示していることより、全体的に似たような変化をしているとみられる。

## 7 季節と降水量

12月から2月までを冬、3月から5月までを春、6月から8月までを夏、9月から11月までを秋としてみると、消防本部、農業学園は夏、秋に多く、冬少ない。夏蒸し暑く、冬カラカラ天気といった様相を呈している。建設大学では春に多くなっている。

## 8 調査結果

### (1) 月別降水量

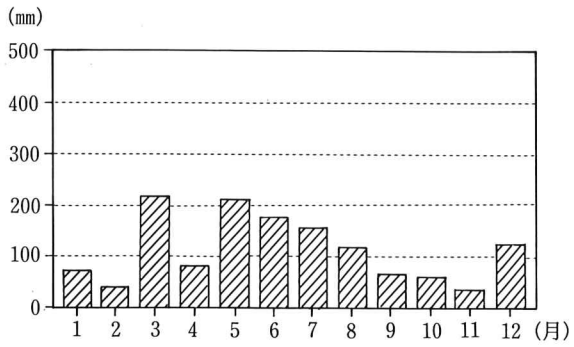


図 1-1 建設大学1986-1988平均

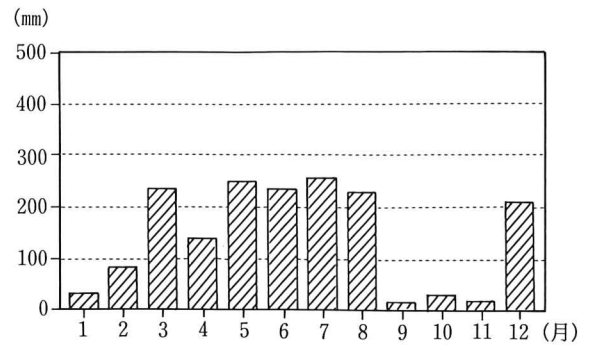


図 1-4 建設大学1986

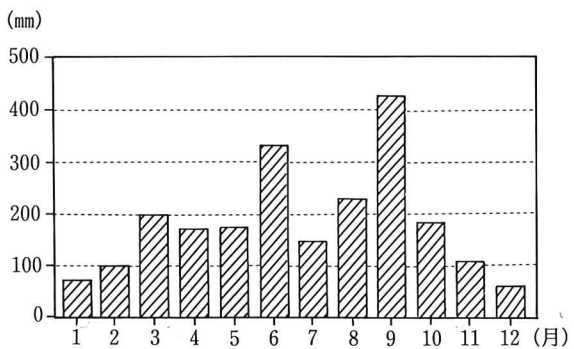


図 1-2 農業学園1986-1992平均

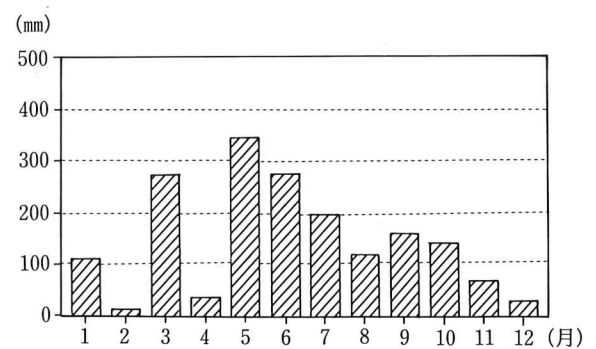


図 1-5 建設大学1987

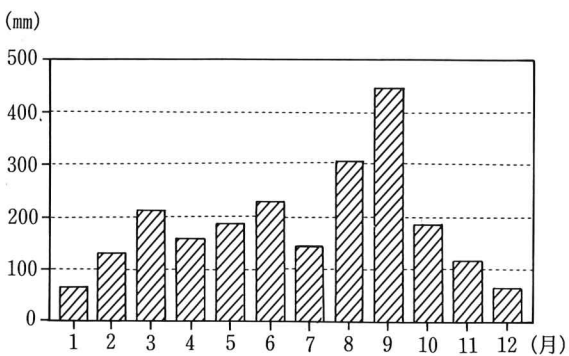


図 1-3 消防本部1986-1992平均

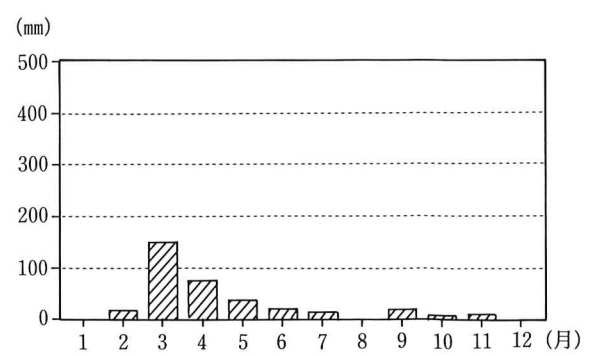


図 1-6 建設大学1988

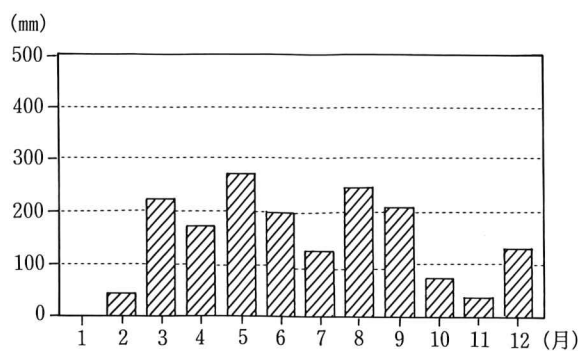


图 1-7 農業学園1986

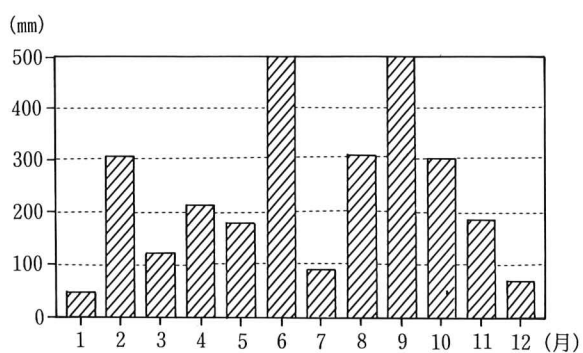


图 1-11 農業学園1990

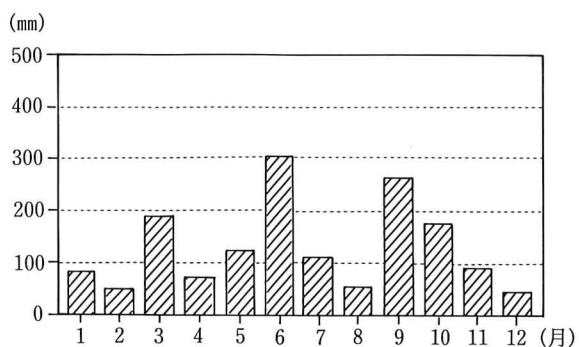


图 1-8 農業学園1987

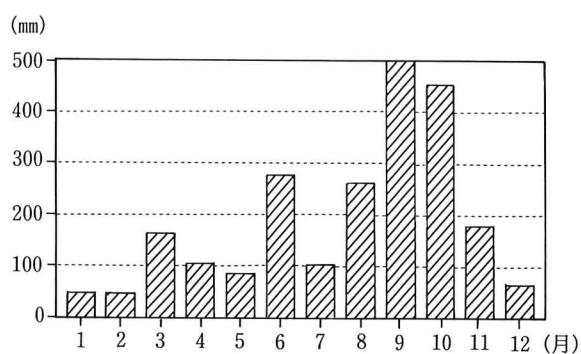


图 1-12 農業学園1991

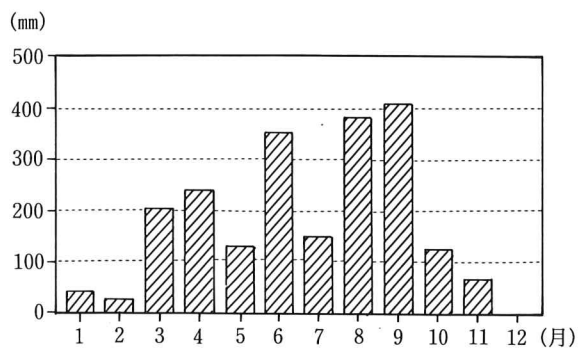


图 1-9 農業学園1988

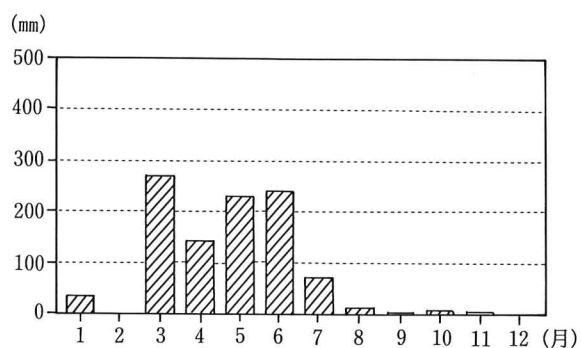


图 1-13 農業学園1992

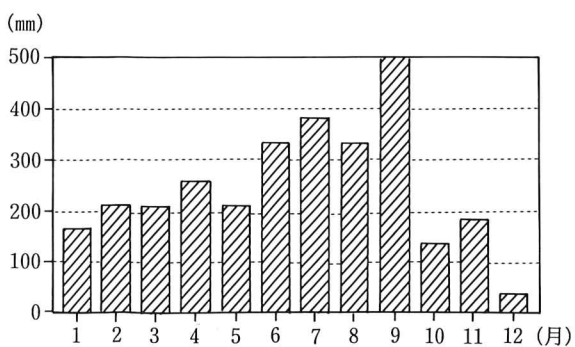


图 1-10 農業学園1989

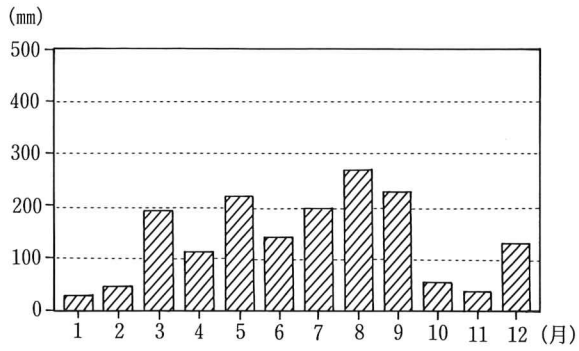


图 1-14 消防本部1986

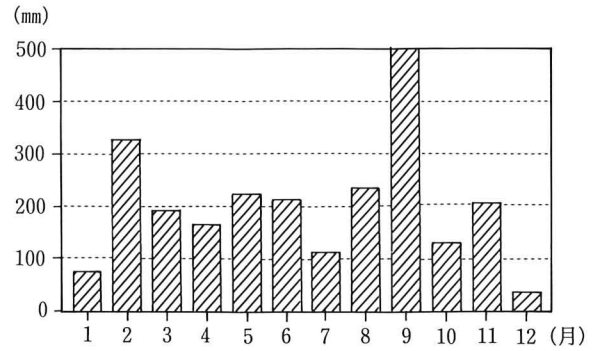


图 1-18 消防本部1990

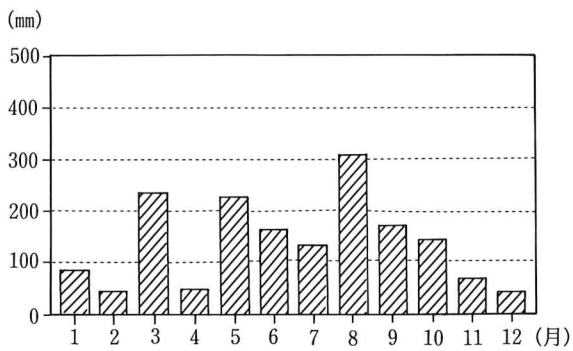


图 1-15 消防本部1987

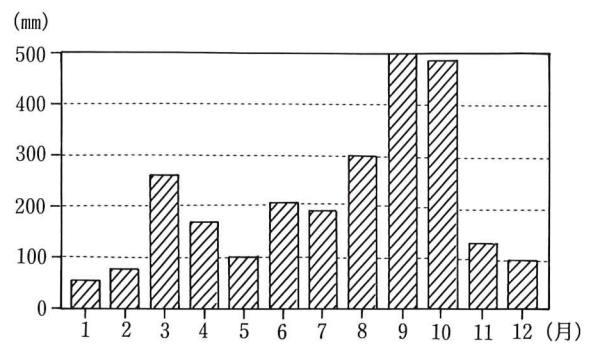


图 1-19 消防本部1991

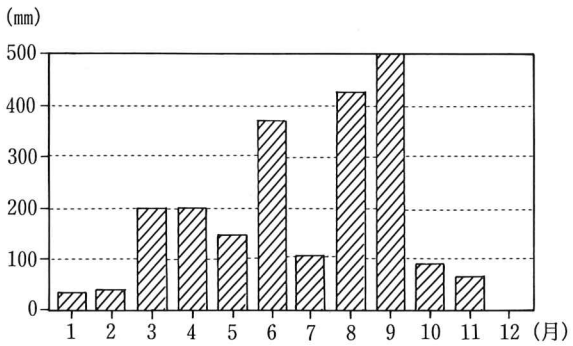


图 1-16 消防本部1988

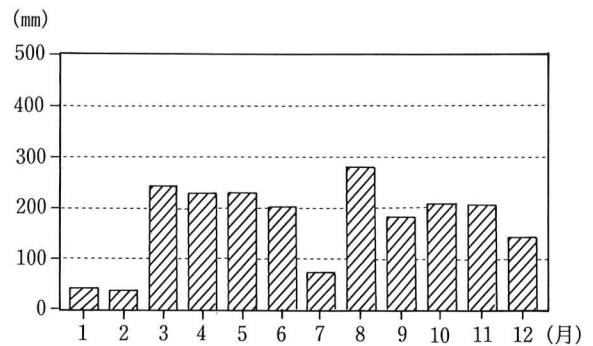


图 1-20 消防本部1992

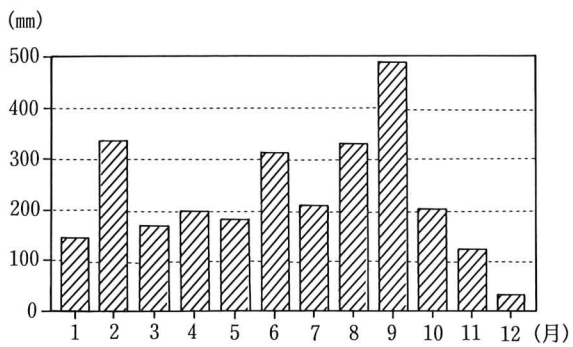


图 1-17 消防本部1989



表 1-1 建設大学降水量

(単位：mm)

月 \ 年	1986	1987	1988	平均
1	31	112		72
2	83	13	18	38
3	232	274	147	218
4	139	34	74	82
5	250	348	37	212
6	237	280	23	180
7	261	200	14	158
8	233	122	2	119
9	18	163	21	67
10	34	146	5	62
11	23	72	10	35
12	216	32		124
合計	1,757	1,796	351	1,301

表 1-2 農業学園降水量

(単位：mm)

月 \ 年	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	平均
1		82	42	166	48	50	35	71
2	40	48	27	213	306	49	0	98
3	223	189	204	210	122	162	270	197
4	173	70	240	260	212	105	144	172
5	271	124	130	213	180	84	230	176
6	198	306	355	335	609	278	241	332
7	126	113	152	385	90	101	72	148
8	247	55	386	338	307	260	10	229
9	211	268	411	681	581	827	4	426
10	76	178	126	139	305	456	8	184
11	37	94	66	185	187	177	6	107
12	132	46		36	71	65	1	59
合計	1,734	1,573	2,139	3,161	3,018	2,614	1,021	2,180

表 1-3 消防本部降水量

(単位：mm)

月 \ 年	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	平均
1	29	87	34	145	76	55	43	67
2	48	45	40	337	327	79	37	130
3	194	236	201	172	192	262	246	215
4	117	48	203	200	164	170	228	161
5	222	230	149	182	221	101	231	191
6	145	166	375	311	210	208	202	231
7	200	137	107	209	111	192	73	147
8	272	311	428	329	232	297	283	307
9	230	174	698	491	510	850	183	448
10	56	144	90	200	131	489	209	188
11	38	68	65	122	207	131	206	120
12	131	43	2	32	37	96	142	69
合計	1,682	1,689	2,392	2,730	2,418	2,930	2,083	2,275

(2) 年次別降水量

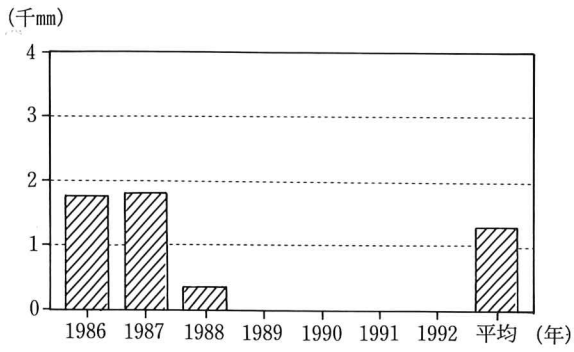


图 2 - 1 建設大学1986-1992

(3) 季節別降水量

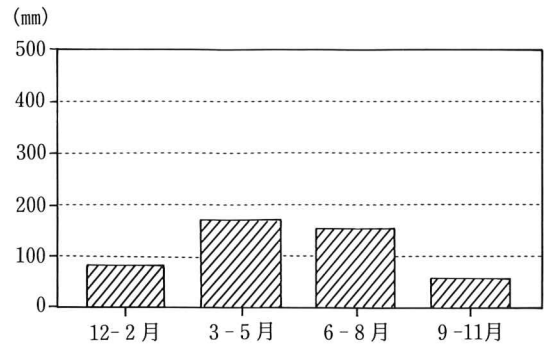


图 3 - 1 建設大学季節平均

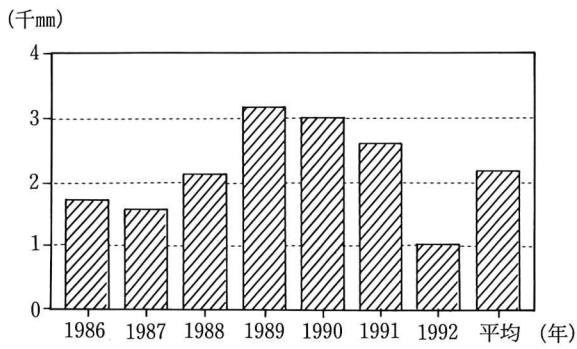


图 2 - 2 農業学園1986-1992

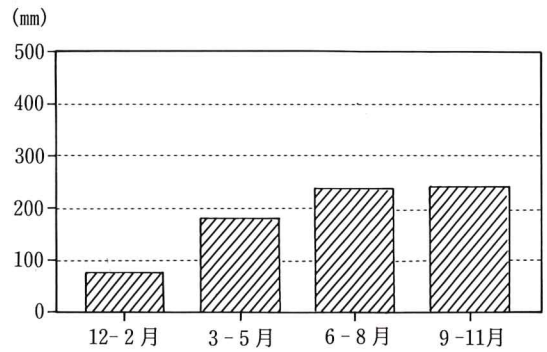


图 3 - 2 農業学園季節平均

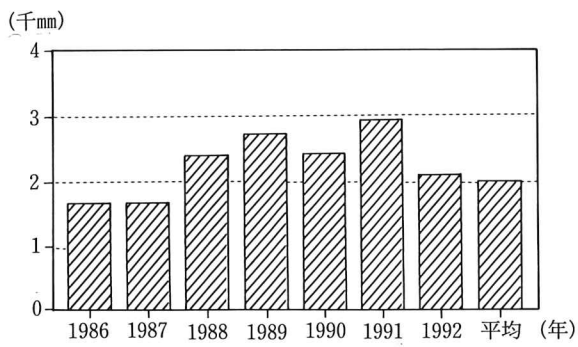


图 2 - 3 消防本部1986-1992

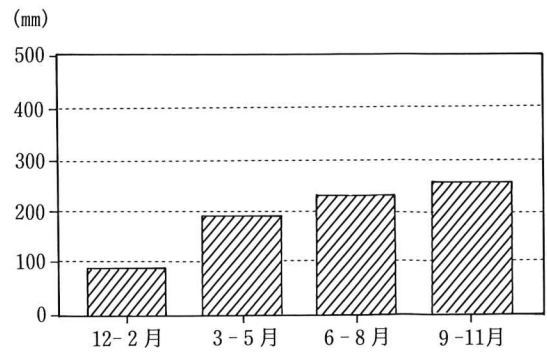


图 3 - 3 消防本部季節平均

風





## 1 調査方法

観測を実施しているところから観測データを借用し、必要事項を読み取り集計した。

## 2 観測地点

### ① 建設大学

朝霧高原の中央部に位置し、富士宮市域の最北地区の風を観測するには最もよい位置にある。

### ② 農業学園

農地、山林の比較的多い地域で標高も市域の中程で、天子山脈寄りの風の観測には都合のよい地点である。

### ③ 消防本部

富士宮市域の南部に位置し、市街地の風について観測するのに都合の良い地点にある。

## 3 観測方法

建設大学では、自動観測装置による観測。

農業学園は9時のみの定時観測である。

消防本部は、1980年から1984年までは定時観測、1985年からは自動観測装置により観測。

## 4 データ処理方法

農業学園が9時の観測であったので、3地点の比較ができるように、データより9時のみを読み取り、月・年ごとに集計し、風向は風配図に度数で示し、また、春（3～5月）、夏（6～8月）、秋（9～11月）、冬（12～2月）を同じく示した。

風速は、月・年の平均で示した。

## 5 統計期間

1986年から1992年までの7年間である。

## 6 調査結果

### (1) 各地点の年変化

#### ① 建設大学

西に毛無山、東に富士山を控えているため、西方向と東方向の風はほとんど吹かないが、夏、秋の低気圧や台風の接近時には吹く。

9年間の集計によると、南、南南西、南西の南方向の風が最も多く53%。北、北北東、北東の北方向は34%である。

風速は他のどの地点よりも強く、年平均3m/秒を越えている。

これは朝霧高原の中央部に有り、風を遮るものがなく標高が高いためと考えられる。

#### ② 農業学園

年間を通じて南南西の風が最も多く11%、次いで南10%、南西8%である。これは、芝川及び大倉川沿いに上ってくる風が多いためと考えられる。また、北7%、北北東8%、北東8%は建設大学と似た傾向にある。北北西、北西、西北西が多いのは、風が天子山脈に影響されるためと考えられる。風速は、3地点の中で最も弱くなっている。

#### ③ 消防本部

南20%、南南東14%、南南西14%、南西9%、南東8%と南方向が圧倒的に多い。

これは、潤井川沿い及び富士山を吹き上る風の一部が星山丘陵沿いに吹いてくるためと考えられる。

北は3%、北西4%、西6%と同じような割合であり、富士山側の東北東は非常に少ない。

風速は、年平均1.7m/秒と弱く、また、強弱の差も少ない。

## a 風 向

表 1-1 建設大学 1986

月 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	5	3	3	0	0	0	0	2	3	0	3	0	0	1	0	0
2	5	4	7	2	0	0	0	1	2	5	0	0	0	0	0	1
3	2	8	2	0	0	0	1	0	2	7	6	0	0	0	0	2
4	4	3	0	0	0	0	0	0	6	10	2	1	0	0	0	0
5	5	0	0	0	0	0	0	0	7	4	4	0	0	0	0	3
6	5	2	0	0	0	0	0	0	12	2	1	0	0	0	0	1
7	1	0	1	0	0	0	0	0	20	3	1	1	0	0	1	0
8	4	3	0	0	0	0	0	1	12	3	2	0	0	0	0	0
9	3	2	1	0	0	0	0	0	5	1	1	0	0	0	0	2
10	5	6	2	1	0	0	0	0	6	3	3	1	0	0	0	1
11	4	0	3	0	0	0	0	0	12	2	0	0	0	0	0	0
12	7	1	4	0	0	0	0	0	3	4	2	0	0	0	0	0
合 計	50	32	23	3	0	0	1	4	90	44	25	3	0	1	1	10

表 1-2 建設大学 1987

月 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	2	3	9	1	0	0	0	0	4	1	1	0	0	0	1	1
2	5	0	1	0	0	0	0	0	11	2	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	1	3	1	0	0	0	1	2	4	7	4	0	0	0	0	0
5	0	1	1	0	0	0	0	0	2	10	3	0	0	0	0	1
6	3	5	5	0	0	0	0	0	5	7	3	0	0	0	0	0
7	0	2	1	0	0	0	0	1	3	16	4	0	0	0	1	0
8	1	1	0	0	0	0	0	1	4	19	4	1	0	0	0	2
9	3	11	3	0	0	0	0	0	2	4	3	0	0	0	0	0
10	3	9	5	1	0	0	0	0	1	4	5	2	0	0	1	0
11	1	8	2	1	0	0	0	0	0	2	4	1	1	1	0	0
12	2	4	4	7	0	0	0	0	0	1	3	3	0	0	0	1
合 計	21	47	32	10	0	0	1	4	36	73	34	7	1	1	3	5

表 1-3 建設大学 1988

月 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	4	7	0	0	0	0	0	0	4	6	1	1	1	0	0	5
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	8	1	1	0	0	0	1	1	7	3	1	0	0	1	0	6
10	3	1	0	0	0	0	1	2	5	5	2	0	0	0	2	2
11	2	0	2	0	0	0	2	5	5	2	0	0	0	0	0	2
12	3	3	0	0	0	0	3	3	6	1	1	0	0	0	0	1
合 計	20	12	3	0	0	0	7	11	27	17	5	1	1	1	2	16

表 1-4 建設大学 1980-1988 平均

年	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1980		23	30	11	3	4	0	4	5	49	60	27	3	2	0	1	3
1981		23	50	22	14	2	10	1	1	51	96	20	8	2	10	0	2
1982		39	54	23	12	0	3	3	8	59	62	24	3	2	3	4	2
1983		40	23	30	10	2	0	1	7	59	36	33	6	2	3	1	2
1984		50	34	30	12	6	4	2	5	76	56	24	2	1	3	1	9
1985		47	40	22	11	2	0	3	5	101	70	24	2	0	1	1	9
1986		50	32	23	3	0	0	1	4	90	44	25	3	0	1	1	10
1987		21	47	32	10	0	0	1	4	36	73	34	7	1	1	3	5
1988		20	12	3	0	0	0	7	11	27	17	5	1	1	1	2	16
平均		35	36	22	8	2	2	3	6	61	57	24	4	1	3	2	6

表 1-5 農業学園 1986

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		0	1	10	4	6	2	1	0	0	1	2	2	0	1	0	0
2		0	1	1	4	7	5	1	1	1	1	0	2	0	0	0	1
3		0	0	2	0	1	3	1	3	1	0	0	4	2	0	3	4
4		0	1	0	0	0	0	1	2	4	2	0	1	5	5	5	7
5		0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7	5	7
6		0	0	1	0	0	1	2	1	0	0	2	1	1	10	4	5
7		0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	10	8	7
8		0	7	2	1	0	3	0	2	0	0	0	0	0	3	3	4
9		0	0	5	5	0	0	2	2	1	3	1	2	1	0	1	1
10		0	2	4	3	1	0	0	1	4	0	2	1	5	1	1	2
11		0	0	3	0	0	3	1	0	3	4	3	2	2	2	2	4
12		0	0	1	0	0	0	0	1	5	4	9	4	2	0	0	2
合計		0	13	30	18	15	17	9	13	19	15	19	20	22	39	32	44

表 1-6 農業学園 1987

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		1	0	0	2	2	0	1	2	5	5	3	5	2	3	0	0
2		2	4	3	2	1	2	3	0	3	2	1	1	1	0	0	0
3		1	1	4	2	2	0	1	3	5	1	3	3	2	0	2	1
4		0	1	2	0	1	0	0	1	9	3	4	5	4	0	0	0
5		0	0	0	0	2	1	1	6	7	6	2	2	2	1	1	0
6		2	1	0	1	1	0	2	3	4	8	3	3	2	1	0	0
7		1	0	0	1	0	2	0	1	4	4	7	10	1	0	0	0
8		0	0	1	0	0	0	0	2	4	12	2	5	4	0	0	0
9		3	4	1	5	0	0	0	1	2	4	4	4	2	0	0	0
10		3	0	4	2	1	3	2	1	2	4	4	1	1	0	1	1
11		3	3	2	5	1	1	2	1	3	2	3	1	1	0	0	2
12		6	3	5	12	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
合計		22	17	22	32	11	9	12	21	48	52	37	40	22	5	4	6

表 1-7 農業学園 1988

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		7	4	4	3	3	2	3	0	0	1	1	1	0	1	0	1
2		2	2	3	8	2	3	0	2	0	3	2	2	0	0	0	0
3		0	3	5	4	1	1	2	0	2	3	3	6	1	0	0	0
4		1	0	2	0	1	2	1	2	3	6	3	3	3	2	0	1
5		1	2	0	0	2	3	1	5	6	4	1	0	3	1	0	2
6		2	0	1	1	1	0	1	4	5	7	5	1	1	0	0	1
7		1	0	0	0	0	0	0	1	13	12	1	2	0	1	0	0
8		1	1	2	1	1	1	1	2	7	12	1	1	0	0	0	0
9		2	0	1	0	2	0	0	2	6	8	4	1	4	0	0	0
10		2	1	2	1	1	2	1	2	6	8	2	0	1	0	0	2
11		10	0	0	2	0	2	0	1	6	6	0	0	0	1	0	2
12		2	7	9	1	5	0	0	1	2	1	0	0	0	0	1	2
合計		31	20	29	21	19	16	10	22	56	71	23	17	13	6	1	11

表 1-8 農業学園 1989

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		3	4	4	7	1	0	0	1	2	0	1	3	0	2	1	2
2		2	1	4	2	0	0	0	1	9	3	2	0	1	1	1	1
3		1	4	4	0	1	0	1	3	4	2	3	4	0	1	2	0
4		2	0	1	2	2	0	2	3	7	0	4	3	1	0	0	2
5		3	1	3	0	2	1	1	1	7	5	1	2	2	0	0	0
6		1	2	2	0	1	3	5	2	1	4	5	2	2	0	1	2
7		4	0	1	0	0	0	2	2	3	9	2	0	1	0	3	0
8		2	0	1	0	1	4	1	6	2	3	6	3	2	1	0	1
9		0	4	1	1	0	2	1	6	6	3	2	3	0	2	0	0
10		5	2	0	4	0	1	1	3	2	4	2	1	0	1	1	2
11		2	9	4	1	1	3	1	1	2	2	1	1	1	0	0	3
12		8	6	10	0	0	1	1	0	2	0	1	0	1	2	0	0
合計		33	33	35	17	9	15	16	29	47	35	30	22	11	10	9	13

表 1-9 農業学園 1990

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		5	6	5	0	1	1	2	1	1	0	0	0	0	1	0	8
2		1	6	2	1	1	1	0	0	6	5	1	1	0	1	1	1
3		6	2	2	0	1	1	1	3	4	3	1	1	0	1	0	5
4		5	7	1	1	0	3	0	3	2	1	2	0	1	0	0	4
5		2	7	1	4	3	0	0	0	3	2	0	2	1	2	2	2
6		3	6	5	0	1	2	2	0	0	0	0	2	1	0	3	5
7		5	5	2	2	0	0	0	0	0	1	1	1	4	1	3	6
8		5	4	2	0	1	1	0	1	0	1	1	2	2	3	0	8
9		6	1	1	0	3	0	1	3	0	2	5	1	0	0	4	3
10		1	4	1	1	2	0	1	2	6	3	2	0	3	2	2	1
11		0	0	0	1	0	2	1	3	8	6	2	1	1	3	1	1
12		3	0	0	0	1	3	6	4	1	6	2	1	1	0	0	3
合計		42	48	22	10	14	14	14	20	31	30	17	12	14	14	16	47



表 1-10 農業学園 1991

月	方位															
	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	0	0	0	1	0	1	2	4	5	9	6	1	1	0	1	0
2	0	2	1	1	0	0	0	1	0	6	2	8	2	3	2	0
3	2	2	3	2	2	2	1	3	1	5	3	1	0	1	1	2
4	4	2	2	2	6	0	4	0	3	1	0	2	1	1	0	2
5	2	5	9	5	2	1	0	0	0	0	1	1	2	0	0	2
6	3	7	2	4	1	1	0	1	0	2	1	2	1	1	3	1
7	2	4	6	8	4	1	1	0	0	0	2	1	0	0	1	1
8	2	1	1	0	0	2	0	5	4	6	4	2	0	2	0	0
9	4	1	3	1	0	1	0	2	6	2	4	0	1	2	2	1
10	4	6	4	2	3	0	2	0	1	2	1	1	1	0	2	2
11	4	2	5	3	1	2	0	2	2	1	1	1	2	0	1	3
12	2	2	0	1	3	0	1	1	2	5	5	2	4	2	0	1
合計	29	34	36	30	22	11	11	19	24	30	30	22	15	12	13	15

表 1-11 農業学園 1992

月	方位															
	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	0	0	1	1	1	1	2	0	4	6	3	7	3	1	1	0
2	0	0	1	3	0	1	2	0	0	4	2	4	7	5	0	0
3	0	1	4	3	1	4	0	0	1	1	5	5	3	3	0	0
4	6	4	2	2	8	0	0	0	0	1	1	1	2	0	2	1
5	2	5	4	4	0	2	1	1	2	0	6	1	1	1	0	1
6	1	0	1	1	0	2	1	1	3	3	9	2	3	0	2	1
7	0	1	0	1	2	0	0	1	2	6	8	3	2	0	1	4
8	0	0	1	0	0	2	2	2	9	7	2	0	1	1	2	2
9	2	1	0	2	2	2	4	1	5	1	2	2	1	3	0	2
10	3	1	2	2	4	0	2	5	2	2	0	0	0	0	2	6
11	6	4	1	0	1	3	0	1	1	0	0	1	2	1	4	5
12	4	2	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	5	7	8
合計	24	19	17	19	19	18	15	13	29	31	38	27	26	20	21	30

表 1-12 農業学園 1980-1992 平均

年	方位															
	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1980	7	0	7	5	26	25	27	94	33	0	77	44	0	2	2	0
1981	17	4	24	9	10	6	35	141	28	26	28	22	5	3	10	6
1982	27	21	26	19	18	14	21	26	26	37	31	29	18	14	17	11
1983	48	13	19	16	18	24	32	31	40	35	30	15	9	6	6	19
1984	30	36	26	12	14	10	20	26	45	58	33	13	5	5	6	27
1985	33	30	22	6	8	17	26	30	45	47	37	13	8	5	9	22
1986	0	13	30	18	15	17	9	13	19	15	19	20	22	39	32	44
1987	22	17	22	32	11	9	12	21	48	52	37	40	22	5	4	6
1988	31	20	29	21	19	16	10	22	56	71	23	17	13	6	1	11
1989	33	33	35	17	9	15	16	29	47	35	30	22	11	10	9	13
1990	42	48	22	10	14	1	14	20	31	30	17	12	14	14	16	47
1991	29	34	36	30	22	11	11	19	24	30	30	22	15	12	13	15
1992	24	19	17	19	19	18	15	13	29	31	38	27	26	20	21	30
平均	26	22	24	16	16	14	19	37	36	36	33	23	13	11	11	19

表 1—13 消防本部 1986

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		0	0	0	1	0	1	0	1	2	9	4	3	4	3	1	2
2		1	0	0	0	0	1	0	1	3	9	2	4	1	4	0	2
3		3	0	0	0	0	2	1	2	2	5	1	8	1	1	1	4
4		1	0	0	0	1	5	3	5	3	6	1	1	2	1	0	0
5		0	1	0	0	1	0	6	11	3	4	2	1	1	1	0	0
6		0	1	0	0	0	4	4	7	9	2	0	2	0	0	0	1
7		0	0	0	0	0	7	1	12	5	2	1	1	0	2	0	0
8		0	0	0	0	0	3	9	7	8	2	0	0	1	1	0	0
9		0	0	0	1	0	2	1	9	6	5	2	1	1	2	0	0
10		0	0	0	0	0	1	1	5	2	3	2	5	7	2	0	3
11		1	0	0	0	0	0	1	3	2	6	2	4	4	4	1	2
12		0	1	0	0	0	1	1	2	0	3	5	5	2	8	1	2
合計		6	3	0	2	2	27	28	65	45	56	22	35	24	29	4	16

表 1—14 消防本部 1987

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		0	1	0	0	0	0	0	3	4	7	3	4	2	4	1	2
2		0	0	0	1	1	3	1	2	2	5	3	1	4	1	1	3
3		0	1	0	0	0	0	4	4	5	4	3	4	3	2	1	0
4		1	0	0	0	1	0	5	10	2	4	4	0	0	3	0	0
5		0	0	0	0	0	3	4	9	7	5	2	0	0	0	0	1
6		0	0	0	1	1	1	3	10	7	5	1	0	0	1	0	0
7		0	0	0	0	1	1	11	10	2	4	2	0	0	0	0	0
8		0	0	0	2	1	2	5	12	5	3	1	0	0	0	0	0
9		1	1	1	1	0	1	2	5	5	4	2	1	1	3	0	2
10		0	0	0	0	0	2	3	2	5	8	5	0	3	2	0	1
11		0	0	0	0	0	0	1	3	5	5	5	2	5	2	1	1
12		1	0	0	0	1	1	0	0	0	6	2	4	4	8	1	2
合計		3	3	1	5	6	14	39	70	49	60	33	16	22	26	5	12

表 1—15 消防本部 1988

月	方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1		1	1	0	0	0	0	3	0	2	6	9	3	2	3	1	0
2		0	0	1	0	0	1	0	4	1	7	4	2	3	3	1	2
3		1	0	0	0	0	2	0	2	5	7	3	2	1	3	2	3
4		0	2	0	0	0	0	4	3	4	10	1	2	1	2	0	1
5		0	1	0	0	0	1	3	11	2	6	3	0	0	1	0	2
6		1	0	0	0	0	1	4	11	1	6	1	0	2	2	1	0
7		0	0	0	0	0	1	5	14	2	6	0	1	0	1	1	0
8		0	0	0	0	0	1	0	6	5	10	3	3	2	1	0	0
9		0	0	0	0	0	1	2	5	5	3	1	2	4	4	2	1
10		1	0	0	0	0	2	1	3	2	11	1	1	5	1	1	2
11		0	0	0	1	0	0	1	3	0	12	6	3	1	0	1	2
12		0	0	0	0	1	3	0	0	1	11	0	5	4	3	2	1
合計		4	4	1	1	1	13	23	62	30	95	32	24	25	24	12	14

表 1-16 消防本部 1989

月 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	0	1	0	0	1	1	1	0	1	6	3	4	3	6	3	1
2	0	0	0	1	0	2	2	1	1	10	4	1	2	3	0	1
3	0	1	0	0	2	1	1	1	5	5	4	4	3	1	0	2
4	2	0	0	0	0	1	5	6	3	7	2	1	2	0	0	1
5	1	0	0	0	2	3	0	5	6	6	1	3	0	2	1	1
6	0	1	0	0	0	1	3	8	6	5	2	0	3	0	1	0
7	1	0	0	0	0	0	2	12	5	7	0	0	0	2	0	1
8	1	0	0	0	0	0	3	12	6	2	1	0	1	3	1	0
9	0	0	0	0	1	1	2	9	6	7	2	0	0	1	0	0
10	0	0	0	2	0	1	4	0	3	4	5	4	1	1	1	5
11	1	0	0	1	0	1	2	0	1	7	6	5	1	1	3	1
12	0	0	0	1	0	1	1	0	0	7	8	3	6	3	1	0
合計	6	3	0	5	6	13	26	54	43	73	38	25	22	23	11	13

表 1-17 消防本部 1990

月 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	8	5	5	1	1	0	5
2	0	0	0	0	0	1	0	2	2	5	4	3	2	3	1	4
3	0	0	0	1	2	1	1	5	2	3	3	4	6	2	0	2
4	0	0	1	0	0	0	2	5	7	7	1	1	1	1	1	3
5	1	1	0	0	2	1	1	11	2	10	0	0	2	0	1	0
6	0	0	0	0	0	2	6	10	3	6	1	1	1	0	0	0
7	0	0	0	0	0	3	4	13	3	3	1	1	0	0	3	0
8	0	0	0	0	0	1	4	10	4	6	3	1	0	1	0	0
9	0	0	2	0	1	0	4	3	3	6	4	0	1	5	0	1
10	0	0	1	0	0	1	0	1	6	5	3	5	5	2	0	1
11	1	0	0	0	0	0	0	0	4	7	2	5	3	7	1	0
12	0	1	0	0	0	2	2	0	2	4	4	5	1	6	2	2
合計	2	3	4	1	6	12	25	61	39	70	31	31	23	28	9	18

表 1-18 消防本部 1991

月 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	4	5	7	4	4	3	1
2	1	0	1	0	0	1	0	0	0	6	6	5	3	3	1	1
3	1	0	0	0	0	1	0	2	7	8	5	2	0	3	1	1
4	1	0	0	0	0	1	4	10	4	5	0	1	2	0	0	2
5	0	0	0	0	0	3	5	6	6	7	1	1	1	0	0	1
6	0	0	0	0	0	4	3	12	2	2	1	1	1	4	0	0
7	0	0	0	0	0	2	7	13	3	3	0	2	0	0	1	0
8	0	0	0	0	1	0	2	9	9	6	0	1	2	0	0	1
9	1	0	0	0	1	0	1	7	6	5	0	1	3	3	1	1
10	0	1	1	0	0	0	3	3	3	4	1	4	5	4	0	2
11	0	0	1	0	0	0	0	3	1	6	2	9	1	6	1	0
12	0	0	0	0	2	1	1	2	0	4	4	2	4	8	1	2
合計	4	1	3	0	4	14	26	68	42	60	25	36	26	35	9	12

表 1—19 消防本部 1992

月 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1	0	2	1	0	1	0	1	1	2	5	3	5	3	4	2	0
2	0	0	0	1	1	0	1	1	4	5	6	3	2	2	3	0
3	0	0	0	1	0	1	1	2	5	9	3	2	4	3	0	0
4	1	0	0	0	1	1	3	6	3	2	5	3	1	2	1	1
5	1	0	2	0	0	3	4	5	6	0	3	4	0	1	2	0
6	0	1	0	0	0	2	1	8	7	3	5	0	0	1	1	1
7	0	0	1	1	1	0	5	6	5	2	6	1	1	0	1	1
8	0	0	0	0	0	0	4	8	6	4	3	2	1	1	2	0
9	2	0	1	0	0	1	4	3	3	6	6	2	0	1	1	1
10	1	1	1	1	2	0	2	3	2	6	4	4	1	2	1	0
11	2	0	2	0	0	0	3	0	1	1	4	4	5	3	4	0
12	0	0	1	0	1	0	2	5	1	2	4	5	0	5	2	3
合 計	7	4	9	4	7	8	31	48	45	45	52	35	18	25	20	7

表 1—20 消防本部 1980—1992 平均

年 \ 方位	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW
1980	17	2	2	0	6	0	11	1	86	0	12	0	13	0	7	3
1981	16	0	0	0	4	1	9	4	111	2	8	0	11	0	8	0
1982	11	0	2	0	7	1	20	5	76	5	11	0	6	1	14	3
1983	5	0	1	1	9	0	25	8	60	3	11	1	8	1	17	5
1984	9	0	1	2	5	2	11	15	84	12	22	10	8	7	16	4
1985	10	2	3	2	7	16	30	68	41	56	37	30	24	15	6	17
1986	6	3	0	2	2	27	28	65	45	56	22	35	24	29	4	16
1987	3	3	1	5	6	14	39	70	49	60	33	16	22	26	5	12
1988	4	4	1	1	1	13	23	62	30	95	32	24	25	24	12	14
1989	6	3	0	5	6	13	26	54	43	73	38	25	22	23	11	13
1990	2	3	4	1	6	12	25	61	39	70	31	31	23	28	9	18
1991	4	1	3	0	4	14	26	68	42	60	25	36	26	35	9	12
1992	7	4	9	4	7	8	31	48	45	45	52	35	18	25	20	7
平 均	8	2	2	2	5	9	23	41	58	41	26	19	18	16	11	10



b 風 配 図

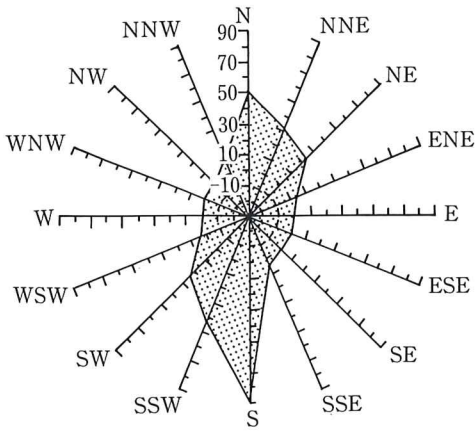


図 1 - 1 建設大学 1986

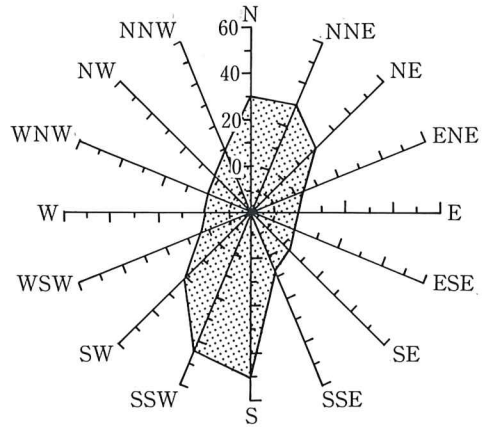


図 1 - 4 建設大学 1986-1988平均

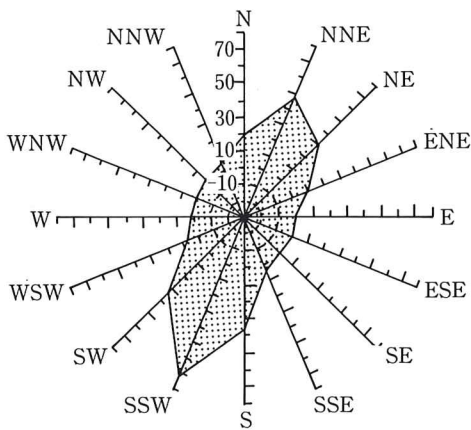


図 1 - 2 建設大学 1987

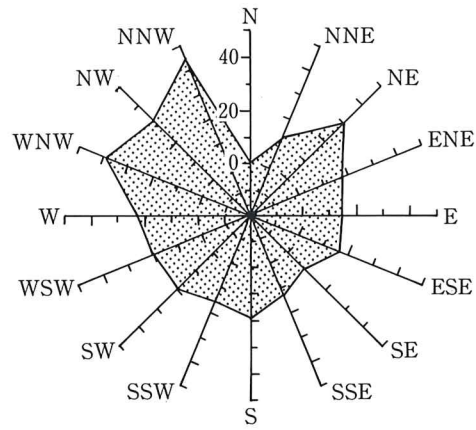


図 1 - 5 高等農業学園 1986

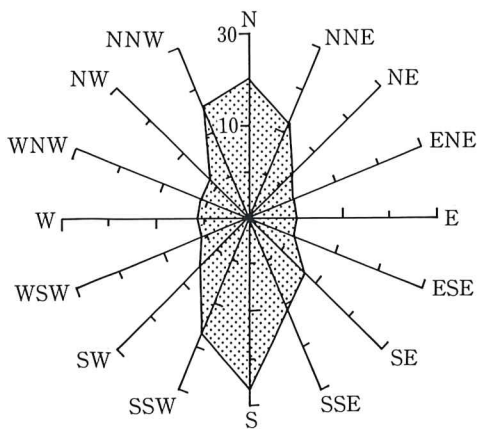


図 1 - 3 建設大学 1988

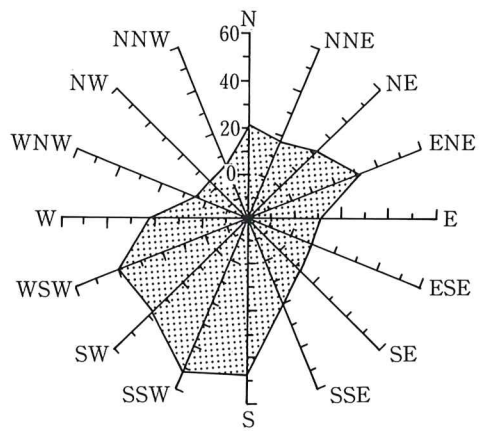


図 1 - 6 高等農業学園 1987

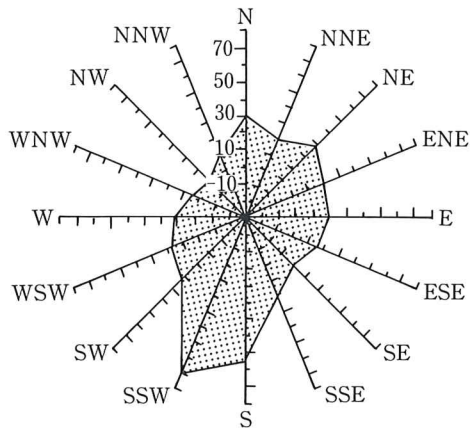


图 1-7 高等農業学園 1988

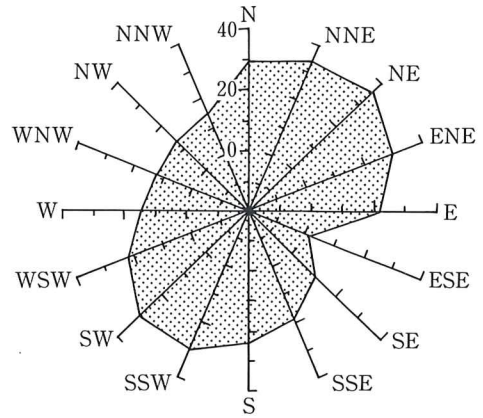


图 1-10 高等農業学園 1991

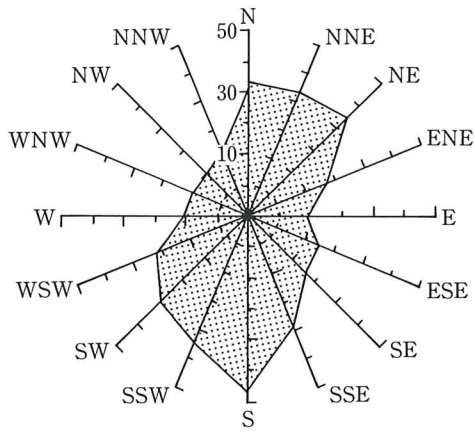


图 1-8 高等農業学園 1989

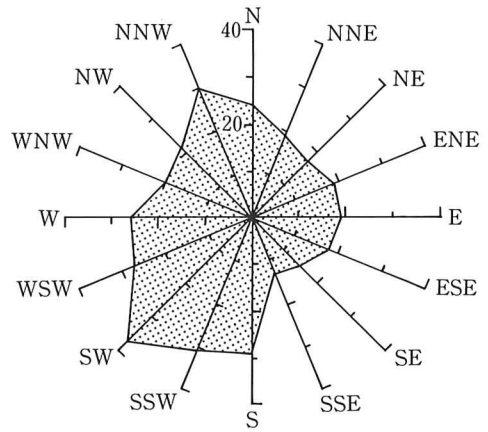


图 1-11 高等農業学園 1992

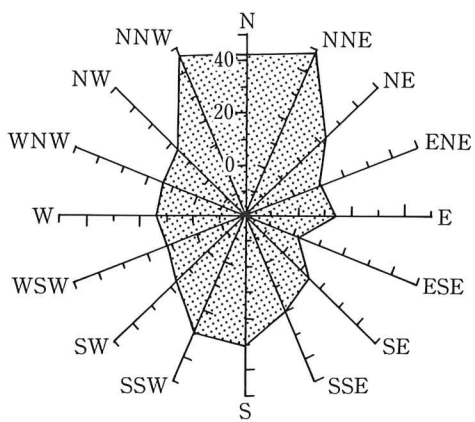


图 1-9 高等農業学園 1990

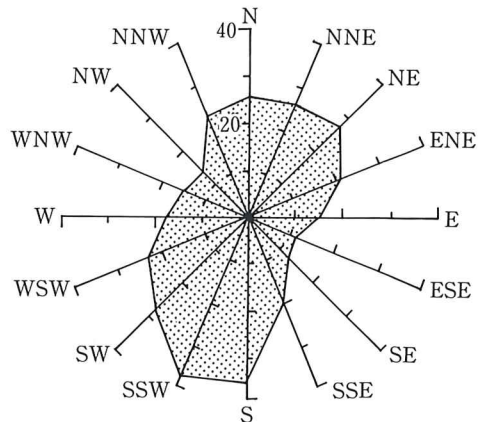


图 1-12 高等農業学園 1986-1992平均

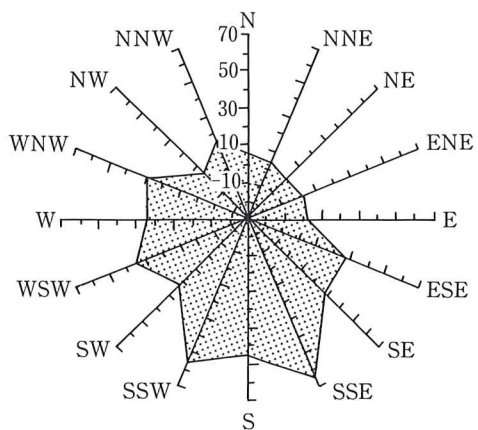


图 1-13 消防本部 1986

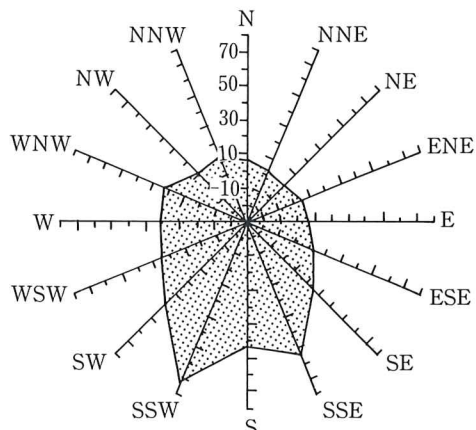


图 1-16 消防本部 1989

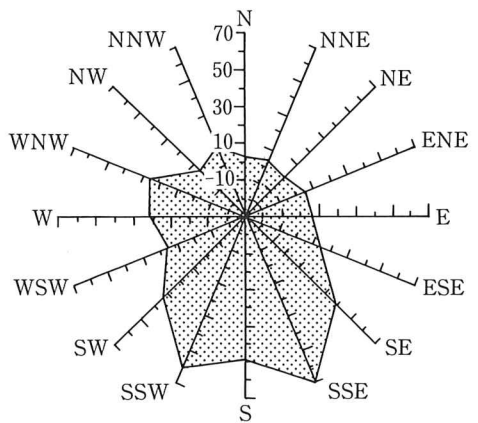


图 1-14 消防本部 1987

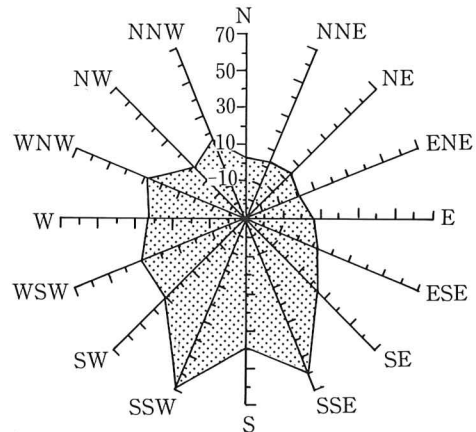


图 1-17 消防本部 1990

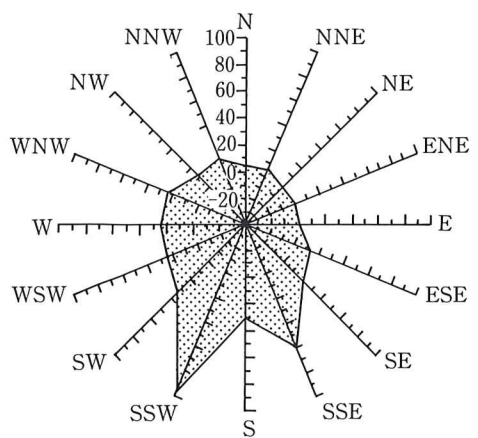


图 1-15 消防本部 1988

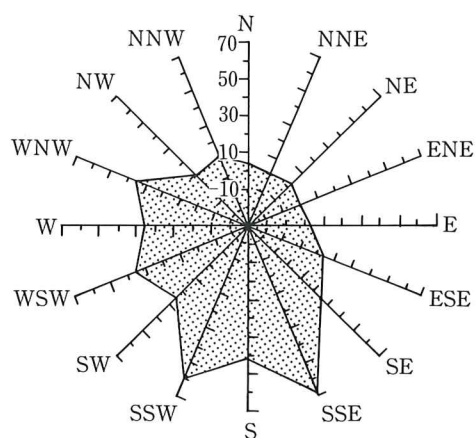


图 1-18 消防本部 1991

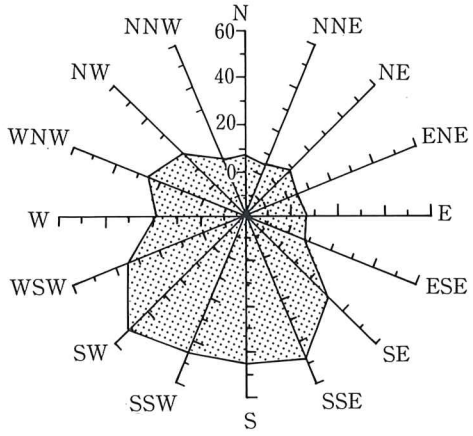


图 1-19 消防本部 1992

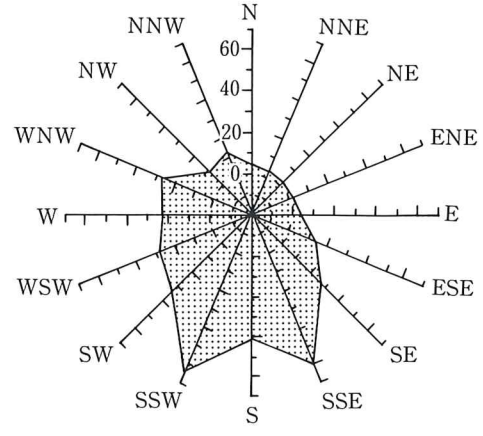


图 1-20 消防本部 1986-1992平均



C 風 速

表 1-21 建設大学(单位: m)

年 月	1986	1987	1988	平均
1	2.1	2.8		2.4
2	3.0	3.2		3.1
3	4.1	4.5		4.3
4	3.7	3.8		3.7
5	3.3	3.6		3.4
6	3.3	3.8		3.5
7	2.5	4.4		3.4
8	3.7	5.9		4.8
9	4.1	7.0	2.2	4.4
10	3.6	6.0	1.4	3.6
11	3.1	4.2	2.0	3.1
12	3.6	5.0	0.9	3.1
平均	3.3	4.5	1.6	3.1

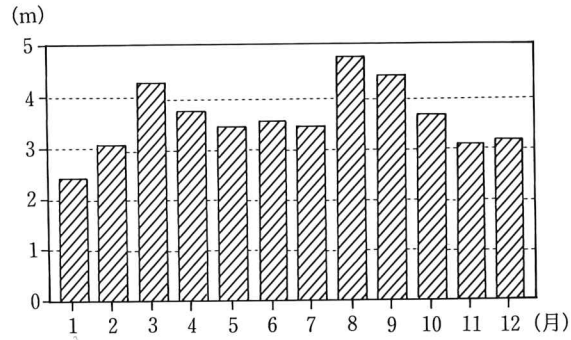


图 1-21 建設大学平均風速

表 1-22 農業学園 (单位: m)

年 月	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	平均
1	0.4	0.3			0.5	0.8	0.4	0.4
2	2.0	0.7			0.9	3.1	0.6	1.4
3	1.5				1.4	2.2	1.9	1.7
4	0.8				1.1	1.1	0.7	0.9
5	1.1				1.2	0.8	0.7	0.9
6	0.9				0.9	3.2	0.4	1.3
7	0.5				0.7	0.5	0.4	0.5
8	0.5				0.8	1.2	1.1	0.9
9	0.3				0.6	0.4	0.6	0.4
10	0.7				0.9	0.9	0.8	0.8
11	0.3				0.8	0.9	1.6	0.9
12	0.7				1.6	0.6	1.0	0.9
平均	0.8	0.5			0.9	1.3	0.8	0.9

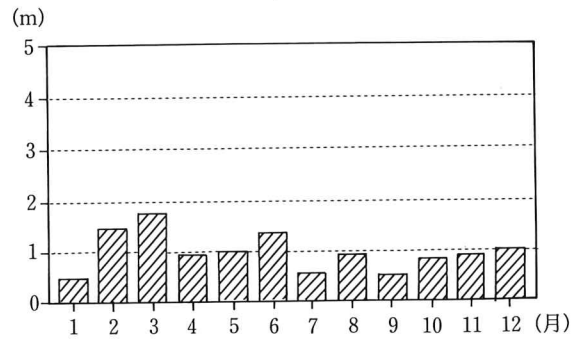


图 1-22 農業学園平均風速

表 1-23 消防本部 (单位: m)

年 月	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	平均
1	1.3	1.5	1.3	1.8	1.3	1.7	0.9	1.4
2	2.0	1.9	2.0	1.4	1.4	2.0	1.4	1.7
3	2.6	1.9	1.9	2.0	1.9	1.4	1.6	1.9
4	1.9	1.6	1.7	2.2	1.9	2.1	2.1	1.9
5	2.2	2.5	2.2	1.5	2.2	1.8	2.4	2.1
6	2.0	2.0	1.8	1.7	1.5	2.0	2.1	1.8
7	1.9	2.1	1.6	2.0	1.6	1.9	1.5	1.8
8	1.9	1.8	1.6	1.9	2.0	1.7	2.3	1.8
9	1.6	1.6	1.7	2.0	1.5	1.5	2.0	1.7
10	1.6	1.6	1.4	1.6	1.3	1.7	1.4	1.5
11	1.3	1.4	1.4	1.5	1.5	1.4	1.4	1.4
12	1.6	1.3	1.0	1.3	1.6	1.0	1.2	1.2
平均	1.8	1.7	1.6	1.7	1.6	1.6	1.6	1.7

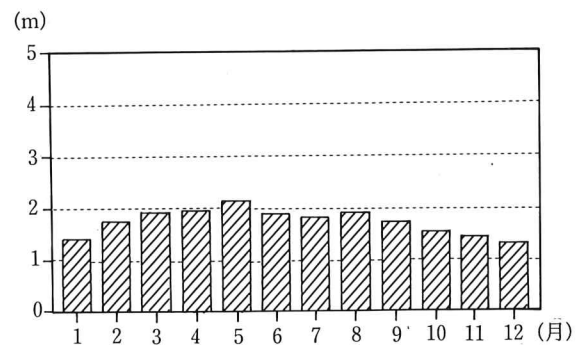


图 1-23 消防本部平均風速

(2) 季節と風

① 春の風

富士宮市域は、圧倒的に南からの風が多い。駿河湾から吹いてくる風は、潤井川沿いに北上し、市街地では南風となり、白糸の原地区では、芝川、大倉川に沿って北上し、南南東と南南西の風となる。

また朝霧高原は、平坦で北東に開けているため、その方向に風が吹き抜け、南か南南西の風が吹く。

南風の時は、比較的天気は良いが、他の風向の風が吹く時は天気が崩れる。特に、北方向の風は天気が崩れ、吹く風も強い。

風速は、建設大学が最も強い。

② 夏の風

風力は、春に比べるとやや弱い。風は南か南東から市内に吹き込み、天子山脈にぶつかり北東の山梨県の郡内地方に吹き抜けている。この時期の強い風は、ほとんどが南風である。農業学園や建設大学の観測でも、南南西、南の風がほとんどである。これは富士川を上り、芝川町より芝川、大倉川沿いを吹き上る風が多いことが考えられる。

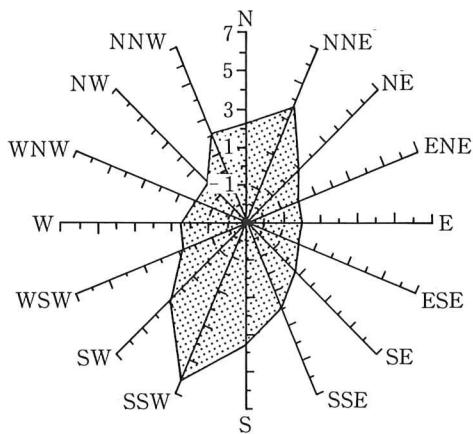


図 2 - 1 建設大学 春

③ 秋の風

消防本部では南南西の風があいかわらず多いが、他は、北、北北東が増えてくる。風速は、低地が弱いのに、高所の建設大学は強くなっている。これは、この時期上空に強い北よりの風が入って来ていることによるものと考えられる。

④ 冬の風

風向は、建設大学、農業学園では北から北東が多い。これは、富士宮市域に山梨県の郡内地方から風が吹き込んでいることを示している。

しかし、富士川を上り星山、沼久保からも南方向の風が吹き込んでおり、消防本部では南南西、南西の風も多い。建設大学、消防本部では、この季節が風の弱い季節となっている。

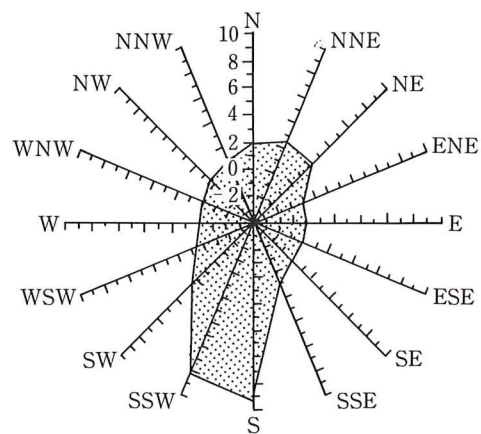


図 2 - 2 建設大学 夏

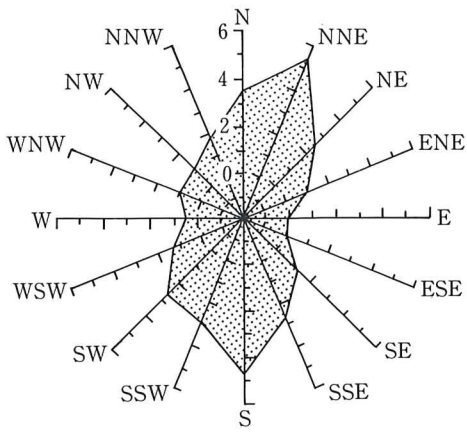


图 2-3 建設大学 秋

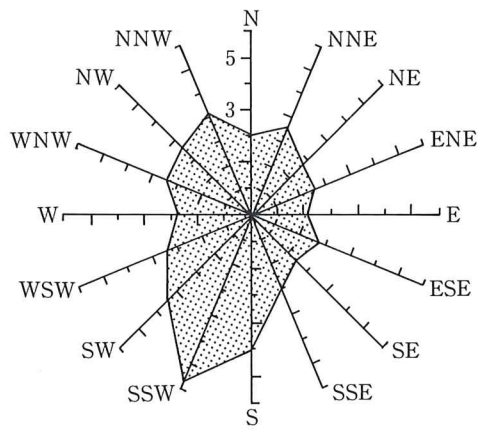


图 2-6 農業学園 夏

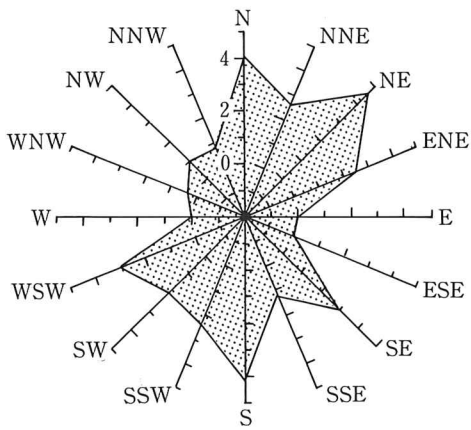


图 2-4 建設大学 冬

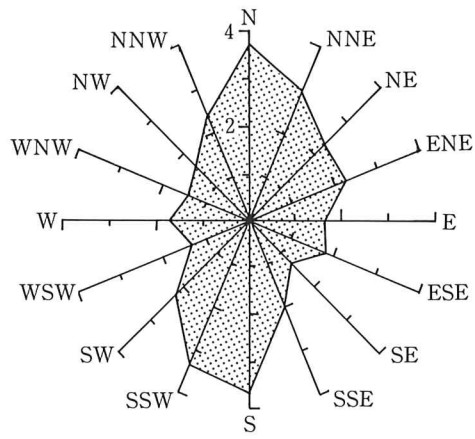


图 2-7 農業学園 秋

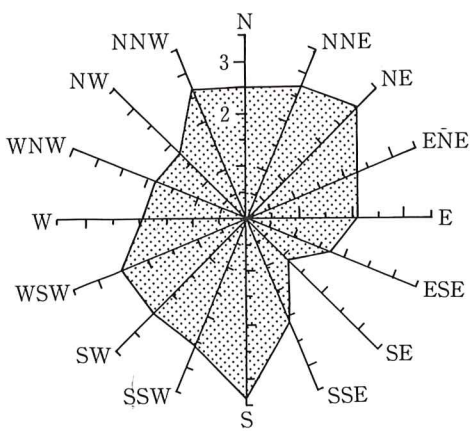


图 2-5 農業学園 春

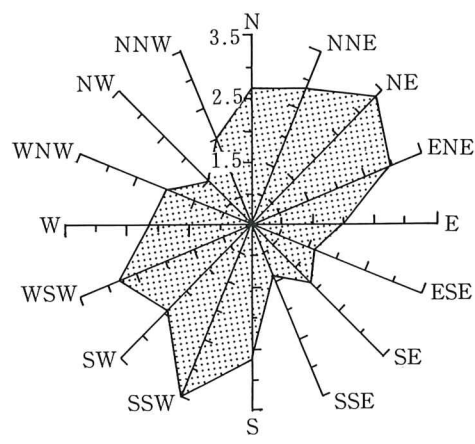


图 2-8 農業学園 冬

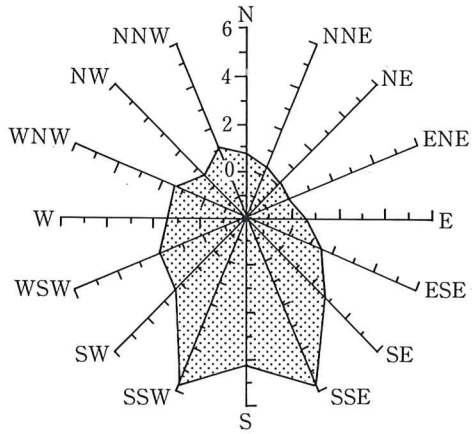


图 2-9 消防本部 春

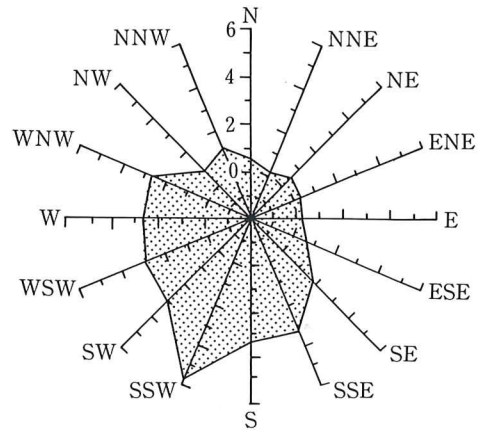


图 2-11 消防本部 秋

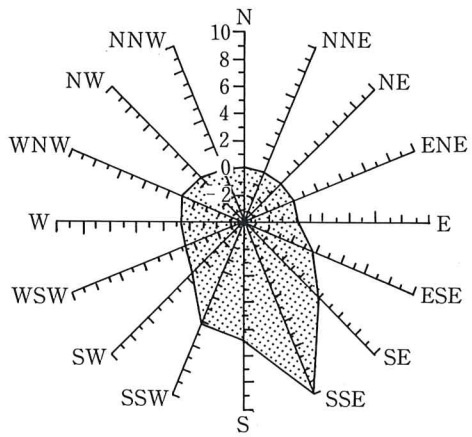


图 2-10 消防本部 夏

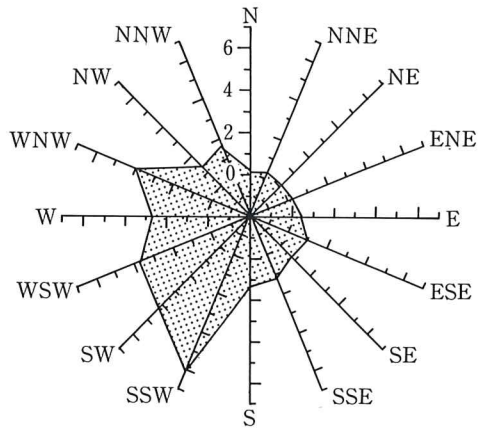


图 2-12 消防本部 冬



雲



## 1 調査のねらいと方法

一般に、高気圧の日は天気が良く、低気圧の日は天気が悪いといわれているが、我々の身近にある富士山の見え方はどうなっているかを研究した。

調査の対象とした統計期間は、1991年から1992年の2年間である。富士宮市小泉より毎日9時に富士山にかかっている雲を撮影し、富士山にかかる雲の量と天気図との相関関係を調べる。

## 2 資料処理方法

写真より、富士山にかかる雲を、次のように富士山の見え方によって、分類している。

- 1 富士山が全部見える
- 2 半分以上富士山が見える
- 3 半分くらい富士山が見える
- 4 半分以下しか富士山が見えない
- 5 全く富士山が見えない

の、5段階とした。また、その時の富士山付近に影響を及ぼしているだろうと思われる、気圧配置、前線の種類を天気図より低気圧、高気圧と温暖前線、寒冷前線、停滞前線、閉塞前線を読み取った。

## 3 観測地点

市内小泉2348番地の29の住宅より写真撮影をする。

## 4 調査結果

### (1) 月別の富士山の見え方

下表は月別富士山の見え方、図1は月別富士山の見え方をグラフ化した物である。

空気中の水蒸気量が少ない冬（11～2月）によく見え、水蒸気量が多い夏（6～9月）は見えない日が多くなっている。また、春先の3月も見えない日が多い、これは、移動性の高気圧と低気圧が交互にやってくるため天気が不安定になりやすいことと関連があると思われる。

### (2) 気圧による富士山の見え方

図2は7月と12月の気圧別の富士山の見え方をグラフ化した物である。

図2より、富士山は冬の高気圧の日によく見えていくことが分かる。夏（7月）は、停滞前線が発生しているため、全く見えない日が多く、前線が通過しても、南からの風のため富士山に雲がかかりやすくなっていると思われる。逆に、冬（12月）は、高気圧が多く、

月別富士山の見え方

回数		月												合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1991年	全部見える	14	14	6	3	9	3	3	0	2	4	9	11	78
	半分以上見える	5	1	2	3	2	1	2	1	4	1	1	6	29
	半分	2	5	0	5	1	1	3	1	0	2	6	2	28
	半分以下	3	1	1	3	2	1	1	3	3	7	7	1	33
	全く見えない	7	7	22	15	16	24	21	26	17	17	7	11	190
	欠測日数	0	0	0	1	1	0	1	0	4	0	0	0	7
1992年	全部見える	11	17	3	11	6	2	1	1	0	7	12	15	86
	半分以上見える	5	6	3	1	3	1	0	0	4	5	5	2	35
	半分	4	0	3	0	1	9	1	1	4	5	1	2	31
	半分以下	5	2	0	4	4	3	6	9	7	3	5	1	49
	全く見えない	5	4	22	14	17	13	23	20	15	11	7	8	159
	欠測日数	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	3	6

前線も寒冷前線が多く、すぐに前線が通過してしまい前線通過後すぐに雲がなくなっている。

図3は年間の気圧別による富士山の見え方をグラフ化した物である。

図3より、高気圧の日の方が低気圧より富士山の見える日が多くなっている。これは、低気圧の日には上

昇気流が生じるため雲ができやすくなっているためと思われる。また、高気圧の日にも見えない日が相当ある。前線が残っていたり、南からの湿った空気が流れ込んで富士山にぶつかり、上昇気流が生じて雲が発生するためと思われる。

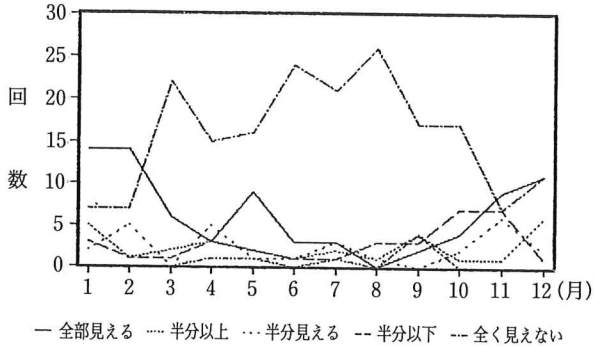


図1-1 9時に富士山が見える回数 1991年

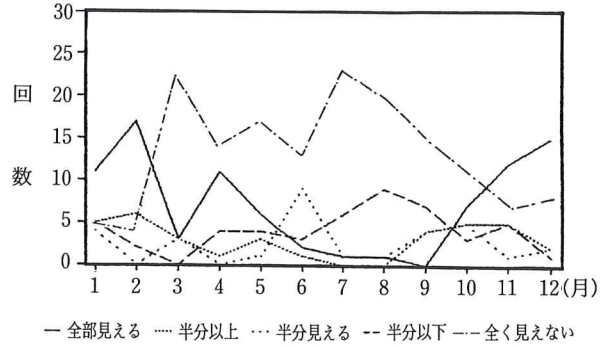


図1-2 9時に富士山が見える回数 1992年

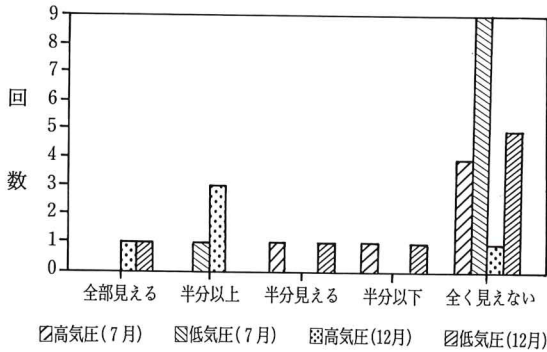


図2-1 9時に富士山が見える回数 1991年 (7月と12月気圧別)

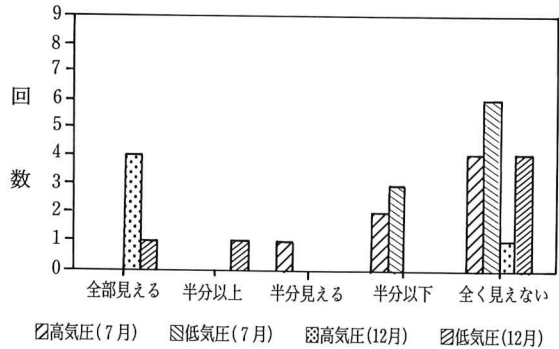


図2-2 9時に富士山が見える回数 1992年 (7月と12月気圧別)

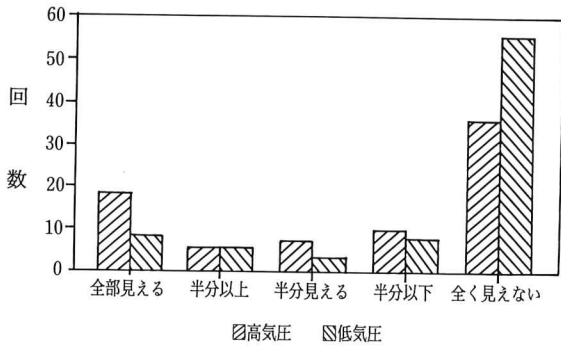


図3-1 9時に富士山が見える回数 1991年 (年間気圧別)

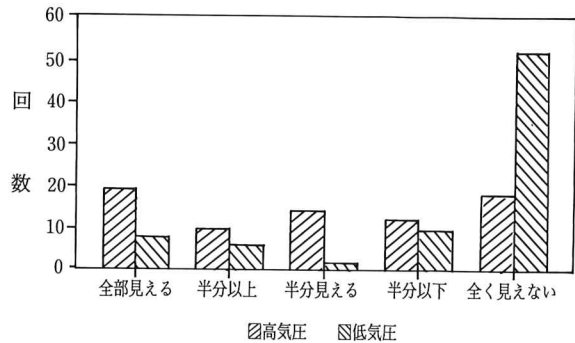


図3-2 9時に富士山が見える回数 1992年 (年間気圧別)



## 5 雲を観察して

富士山にかかる雲については、毎日9時に写真撮影で記録をし、低気圧・高気圧、前線については、9時の天気図(気象庁)で北緯30~40度・東経130~140度の範囲に前線があるか、低気圧・高気圧がかかっているかを見て判断した。そのため、ここでは、低気圧・高気圧、前線の有無だけを判断の根拠とし、前線などで富士山に直接影響があるかどうかの判断をしていない。そのため、遠くの気圧や前線で富士山が“見えた”“見えなかった”を判断しているため、高気圧がある日でも富士山に雲がかかっている日が相当あるが、これは、富士山から遠く離れたところにある高気圧の影響より他の影響の方が強くでている日があるためと思

われる。

富士山に特徴ある雲がかかった時に、天気に変化すると言われているが、今後は、数日間のサイクルで天気がどの様に変化するかと、特徴のある雲と気圧配置との関係や風との関係についても調べていきたい。

これ以外にも、富士宮市周辺の山にかかる雲は、富士山以上に富士宮市の天気と密接な関係があると思われるので、このことについても調べていく必要がある。

このようなデータを市民に知らせることで、富士山をはじめとし、山にかかる雲を注意して観察するようになり、より自然の不思議さを知り、自然と共に生活している実感を味わい、身近にある雲を見ながら自分なりに天気の子報ができるようになると思われる。



# 植 物

登 野 野 野 野  
夫 比 奈 典 夫  
男 林 久 男  
雄 野 光 雄  
亨 辺 直 亨





## 調 査 結 果

### 1 県境付近の植物

標高1,000 m, 山梨県との県境になる割石峠付近は、気候が冷涼で9月ともなると秋の色が濃くなる。

一面のススキ群集が広がり、草原から遷移したフジサンシキウツギ、マメザクラ、カシワなどの群落が斑状に見られる。

この頃、最も目立つのがうす紫色のマツムシソウの群落である。またユウスゲの黄色、シシウドの白花がススキの上に首を伸ばし、遠くからでもその存在がわかる。秋の七草もフジバカマを除いて、全てが確認される。

以下、9月に見られる主な植物をあげる。

アカショウマ	(ユキノシタ科)	カラマツソウ	(キンポウゲ科)
アカネ	(アカネ科)	カワラナデシコ	(ナデシコ科)
アキノキリンソウ	(キク科)	キヌタソウ	(アカネ科)
アキノタムラソウ	(シソ科)	キリンソウ	(ベンケイソウ科)
アズマヤマアザミ	(キク科)	キンミズヒキ	(バラ科)
アブラススキ	(イネ科)	クサレダマ	(サクラソウ科)
イタドリ	(タデ科)	クルマバナ	(シソ科)
イワノガリヤス	(イネ科)	コアジサイ	(ユキノシタ科)
ウメバチソウ	(ユキノシタ科)	コウゾリナ	(キク科)
オオイヌタデ	(タデ科)	コウリンカ	(キク科)
オカトラノオ	(サクラソウ科)	コオニユリ	(ユリ科)
オオバギボウシ	(ユリ科)	サワヒヨドリ	(キク科)
オケラ	(キク科)	シシウド	(セリ科)
オトギリソウ	(オトギリソウ科)	シデシャジン	(キキョウ科)
オトコヨモギ	(キク科)	シモツケ	(バラ科)
オミナエシ	(オミナエシ科)	シュロソウ	(ユリ科)
オヤマボクチ	(キク科)	シラヤマギク	(キク科)
カシワ	(ブナ科)	ススキ	(イネ科)
カセンソウ	(キク科)	ズサイコ	(ガガイモ科)
		ダイコンソウ	(バラ科)
		タチコゴメグサ	(ゴマノハグサ科)
		タチフウロ	(フウロソウ科)
		タムラソウ	(キク科)
		ダンコウバイ	(クスノキ科)
		ツユクサ	(ツユクサ科)
		ツリガネニンジン	(キキョウ科)
		ツルフジバカマ	(マメ科)
		ツルニンジン	(キキョウ科)
		トウダイグサ	(トウダイグサ科)
		トモエシオガマ	(ゴマノハグサ科)
		ノアザミ	(キク科)
		ノコギリソウ	(キク科)

ノダケ	(セリ科)	ムラサキシキブ	(クマツヅラ科)
ノハナショウブ	(アヤメ科)	メドハギ	(マメ科)
ノハラアザミ	(キク科)	モミジガサ	(キク科)
ヒメジソ	(シソ科)	ヤマアジサイ	(ユキノシタ科)
ヒメジョオン	(キク科)	ヤマオダマキ	(キンポウゲ科)
ヒルガオ	(ヒルガオ科)	ヤマトラノオ	(ゴマノハグサ科)
フジサンシキウツギ	(スイカズラ科)	ヤマトリカブト	(キンポウゲ科)
フナバラソウ	(ガガイモ科)	ヤマハギ	(マメ科)
ヘクソカズラ	(アカネ科)	ヤマラッキョウ	(ユリ科)
ホタルサイコ	(セリ科)	ユウガギク	(キク科)
マツムシソウ	(マツムシソウ科)	ユウスゲ	(ユリ科)
マメザクラ	(バラ科)	ヨツバヒヨドリ	(キク科)
マユミ	(ニシキギ科)	ヨメナ	(キク科)
マルバハギ	(マメ科)	リンドウ	(リンドウ科)
ミナモトソウ	(バラ科)	ワレモコウ	(バラ科)
ミヤコアザミ	(キク科)		



クサレダマ (サクラソウ科)



シデシャジン (キキョウ科)

## 2 天子ヶ岳の植物

天子ヶ岳頂上 (1,330 m) のヨウラクツツジ「サラサドウダン」とシロヤシオ「ゴヨウツツジ」を見に、5月の連休を利用して登った。ワラビ取りや家族づれのハイキング客でにぎわいを見せていた。地層も古く、植物の種類も豊富であり、ユキザサ、バイケイソウ、モミジガサ、エンレイソウの群落がみられたが、ミツバツツジ、アシタカツツジなどがかなり減っているのは寂しい限りである。

以下、主な植物をあげる。

アオмамシグサ	(サトイモ科)
アカネ	(アカネ科)
アケビ	(アケビ科)
アケボノスマレ	(スマレ科)
アシタカツツジ	(ツツジ科)
アリノトウグサ	(アリノトウグサ科)
イタドリ	(タデ科)
イヌザンショウ	(ミカン科)
イボタノキ	(モクセイ科)
ウツギ	(ユキノシタ科)
ウバユリ	(ユリ科)
ウマノアシガタ	(キンポウゲ科)
ウメモドキ	(モチノキ科)
ウリハダカエデ	(カエデ科)
エイザンスミレ	(スマレ科)
エンレイソウ	(ユリ科)
オカトラノオ	(サクラソウ科)
オケラ	(キク科)
オトギリソウ	(オトギリソウ科)
オノオレ	(カバノキ科)
オヤマボクチ	(キク科)
カシワ	(ブナ科)
ガマズミ	(スイカズラ科)
カワラマツバ	(アカネ科)
カンアオイ	(ウマノスズクサ科)

キクザキイチリンソウ	(キンポウゲ科)
キヌタソウ	(アカネ科)
キブシ	(キブシ科)
ギボウシ	(ユリ科)
キランソウ	(シソ科)
キンミズヒキ	(バラ科)
クサボケ	(バラ科)
クジャクシダ	(ウラボシ科)
クマヤナギ	(クロウメモドキ科)
グミ	(グミ科)
クロモジ	(クスノキ科)
クワガタソウ	(ゴマノハグサ科)
コアジサイ	(ユキノシタ科)
コウゾ	(クワ科)
コウゾリナ	(キク科)
コゴメウツギ	(バラ科)
コスミレ	(スマレ科)
ゴヨウツツジ	(ツツジ科)
ゴンズイ	(ミツバウツギ科)
ササユリ	(ユリ科)
サラサドウダンツツジ	(ツツジ科)
サラシナショウマ	(キンポウゲ科)
サルトリイバラ	(ユリ科)
サルナシ	(サルナシ科)
サワフタギ	(ハイノキ科)
サンカクヅル	(ブドウ科)
サンショウ	(ミカン科)
シシウド	(セリ科)
ジシバリ	(キク科)
シモツケ	(バラ科)
シュロソウ	(ユリ科)
スイカズラ	(スイカズラ科)
スノキ	(ツツジ科)
センボンヤリ	(キク科)
ゼンマイ	(ゼンマイ科)
タカトウダイ	(トウダイグサ科)

タガネソウ	(カヤツリグサ科)	フデリンドウ	(リンドウ科)
タチシオデ	(ユリ科)	フモトスマレ	(スマレ科)
タチツボスマレ	(スマレ科)	フユノハナワラビ	(ハナヤスリ科)
タニウツギ	(スイカズラ科)	ヘクソカズラ	(アカネ科)
タラノキ	(ウコギ科)	ホウチャクソウ	(ユリ科)
ダンコウバイ	(クスノキ科)	ホオノキ	(モクレン科)
チゴユリ	(ユリ科)	ホトトギス	(ユリ科)
ツクバネソウ	(ユリ科)	マツムシソウ	(マツムシソウ科)
ツノハシバミ	(カバノキ科)	マユミ	(ニシキギ科)
ツボスマレ	(スマレ科)	マルバガマズミ	(スイカズラ科)
ツリガネニンジン	(キキョウ科)	ミズキ	(ミズキ科)
ツリバナ	(ニシキギ科)	ミツバウツギ	(ミツバウツギ科)
ツルアジサイ	(ユキノシタ科)	ミツバツツジ	(ツツジ科)
ツルキンバイ	(バラ科)	ミヤコアザミ	(キク科)
ツルニンジン	(キキョウ科)	ムラサキシキブ	(クマツツラ科)
テリハノイバラ	(バラ科)	メギ	(メギ科)
ドクダミ	(ドクダミ科)	モミジイチゴ	(バラ科)
トンボソウ	(ラン科)	モミジガサ	(キク科)
ナルコユリ	(ユリ科)	ヤクシソウ	(キク科)
ニガイチゴ	(バラ科)	ヤブコウジ	(ヤブコウジ科)
ニガナ	(キク科)	ヤブレガサ	(キク科)
ニシキギ	(ニシキギ科)	ヤマウコギ	(ウコギ科)
ノイバラ	(バラ科)	ヤマオダマキ	(キンポウゲ科)
ノダケ	(セリ科)	ヤマグワ	(クワ科)
バイケイソウ	(ユリ科)	ヤマクワガタ	(ゴマノハグサ科)
ハシリドコロ	(ナス科)	ヤマシャクヤク	(キンポウゲ科)
ハナイカダ	(ミズキ科)	ヤマツツジ	(ツツジ科)
ハバヤマボクチ	(キク科)	ヤマトリカブト	(キンポウゲ科)
ハリギリ	(ウコギ科)	ヤマブキ	(バラ科)
ハンショウヅル	(キンポウゲ科)	ヤマユリ	(ユリ科)
ヒカゲノカズラ	(ヒカゲノカズラ科)	ヤマルリソウ	(ムラサキ科)
ヒメイワカガミ	(イワウメ科)	ユキザサ	(ユリ科)
ヒメカンスゲ	(カヤツリグサ科)	ヨウラクツツジ	(ツツジ科)
ヒメハギ	(ヒメハギ科)	リュウノウギク	(キク科)
フジザクラ	(バラ科)	リョウブ	(リョウブ科)
フタリシズカ	(センリョウ科)	リンドウ	(リンドウ科)



レンゲツツジ	(ツツジ科)
ワチガイソウ	(ナデシコ科)
ワラビ	(ウラボシ科)
ワレモコウ	(バラ科)



ヤマトリカブト (キンポウゲ科)



マツムシソウ (マツムシソウ科)

### 3 根原地区の植物

山梨県境に近いこの地区は、標高1,000 m近くあり、6～7月は深い霧に育まれて、市内でも特異な植物相が見られる。特に8～9月は、数多くの花が咲き乱れ、ヤマトラノオの青、オミナエシの黄、コオニユリの赤、ナデシコの桃が楽しめる。

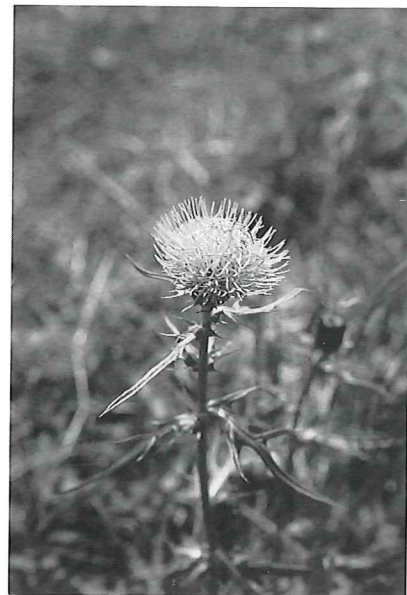
以下、9月に調査した植物である。

アカネ	(アカネ科)
アキカラマツ	(キンポウゲ科)
アキノウナギヅル	(タデ科)
アキノタムラソウ	(シソ科)
アズマヤマアザミ	(キク科)
アブラチャン	(クスノキ科)
イタドリ	(オンタデ科)
イタヤカエデ	(カエデ科)
イヌタデ	(タデ科)
イヌトウバナ	(シソ科)
イブキボウフウ	(セリ科)
イワガラミ	(ユキノシタ科)
ウメバチソウ	(ユキノシタ科)
ウリハダカエデ	(カエデ科)
オオバコ	(オオバコ科)
オミナエシ	(オミナエシ科)
ガクウツギ	(ユキノシタ科)
カセンソウ	(キク科)
キンミズヒキ	(バラ科)
クルマバナ	(シソ科)
ケヤキ	(ニレ科)
ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
コウゾリナ	(キク科)
コウリンカ	(キク科)
コオニユリ	(ユリ科)
コナラ	(ブナ科)
サワヒヨドリ	(キク科)
サワフタギ	(ハイノキ科)

シオデ	(ユリ科)	ミヤコザサ	(イネ科)
シシウド	(セリ科)	ミヤマホオソ	(アワブキ科)
シラネ	(シソ科)	モミジイチゴ	(バラ科)
シロヤマギク	(キク科)	モリアザミ	(キク科)
スズサイユ	(ガガイモ科)	ヤマガシユウ	(ユリ科)
タイアザミ	(キク科)	ヤマトグサ	(ヤマトグサ科)
タガネソウ	(カヤツリグサ科)	ヤマトラノオ	(ゴマノハグサ科)
タチコゴメグサ	(ゴマノハグサ科)	ヤマハンノキ	(カバノキ科)
タチフウロ	(フウロソウ科)	ヤマラッキョウ	(ユリ科)
チゴユリ	(ユリ科)	ユウスゲ	(ユリ科)
チダケサシ	(ユキノシタ科)	ワレモコウ	(バラ科)
ツタウルシ	(ウルシ科)		
ツリガネニンジン	(キキョウ科)		
ツリバナ	(ニシキギ科)		
ツリフネソウ	(ツリフネソウ科)		
ツルニンジン	(キキョウ科)		
ツルフジバカマ	(マメ科)		
ナデシコ	(ナデシコ科)		
ナルコユリ	(ユリ科)		
ノイバラ	(バラ科)		
ノゲシ	(キク科)		
ノコギリソウ	(キク科)		
ノダケ	(セリ科)		
ノハラアザミ	(キク科)		
ノブキ	(キク科)		
ハクモウイノデ	(オシダ科)		
ヒメジソ	(シソ科)		
フサザクラ	(フサザクラ科)		
ブタクサ	(キク科)		
フタリシズカ	(センリョウ科)		
ヘクソカズラ	(アカネ科)		
ボクチ	(キク科)		
ホタルサイコ	(セリ科)		
マルバハギ	(マメ科)		
ミツバウツギ	(ミツバウツギ科)		
ミヤコアザミ	(キク科)		



ツリバナの実 (ニシキギ科)



ノハラアザミ (キク科)

#### 4 東海自然歩道(根原～建設大学校前) の植物

根原溶岩流によってできた高台の道を歩くと、初夏にはツツジ類が咲き競ってきれいだ。また富士山の眺めもすばらしく、秋の紅葉の頃も格別である。紅色や黄色、黒色の実をつけた植物が多い。

以下、主な植物をあげる。

アカシデ	(カバノキ科)	クサレダマ	(サクラソウ科)
アキノタムラソウ	(シソ科)	クマイチゴ	(バラ科)
アセビ	(ツツジ科)	クロモジ	(クスノキ科)
アブラチャン	(クスノキ科)	ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
アレチマツヨイグサ	(アカバナ科)	コアジサイ	(ユキノシタ科)
イボタノキ	(モクセイ科)	コウゾリナ	(キク科)
ウコンバナ	(クスノキ科)	コオニユリ	(ユリ科)
ウツボグサ	(シソ科)	コクサギ	(ミカン科)
ウメバチソウ	(ユキノシタ科)	サラシナショウマ	(キンポウゲ科)
ウメモドキ	(ニシキギ科)	サルトリイバラ	(ユリ科)
ウリハダカエデ	(カエデ科)	サワフタギ	(ハイノキ科)
エゴノキ	(エゴノキ科)	サンシキウツギ	(スイカズラ科)
エビガライチゴ	(バラ科)	サンショウ	(ミカン科)
オオアワガエリ	(イネ科)	シオデ	(ユリ科)
オオダイコンソウ	(バラ科)	シシウド	(セリ科)
オオヒナノウスツボ	(ゴマノハグサ科)	シモツケ	(バラ科)
オオマツヨイグサ	(アカバナ科)	シラキ	(トウダイグサ科)
オトコヨモギ	(キク科)	シラゲガヤ	(イネ科)
カシワバハグマ	(キク科)	スノキ	(ツツジ科)
ガマズミ	(スイカズラ科)	センニンソウ	(キンポウゲ科)
カマツカ	(バラ科)	センブリ	(リンドウ科)
カモガヤ	(イネ科)	タイアザミ	(キク科)
カワラナデシコ	(ナデシコ科)	タムラソウ	(キク科)
キヌガサギク	(キク科)	ツリバナ	(ニシキギ科)
キバナアキギリ	(シソ科)	ツルニンジン	(キキョウ科)
キバナノマツバニンジン	(アマ科)	テンニンソウ	(シソ科)
キブシ	(キブシ科)	ドクウツギ	(ドクウツギ科)
クサボタン	(キンポウゲ科)	ニシキギ	(ニシキギ科)
		ニワトコ	(スイカズラ科)
		ニンドウ	(スイカズラ科)
		ネコヤナギ	(ヤナギ科)
		ネナシカズラ	(ヒルガオ科)
		ノイバラ	(バラ科)
		ノコンギク	(キク科)
		ハギ	(マメ科)
		バライチゴ	(バラ科)

ハリエンジュ	(マメ科)
ハンノキ	(カバノキ科)
フサザクラ	(フサザクラ科)
フジアカシヨウマ	(ユキノシタ科)
フジアザミ	(キク科)
フシグロセンノウ	(ナデシコ科)
ボタンヅル	(キンポウゲ科)
マムシグサ	(サトイモ科)
マユミ	(ニシキギ科)
ミズキ	(ミズキ科)
ミズナラ	(ブナ科)
ミツバアケビ	(アケビ科)
ミツバウツギ	(ミツバウツギ科)
ムラサキシキブ	(クマツヅラ科)
モミジガサ	(キク科)
ヤクシソウ	(キク科)
ヤシャブシ	(カバノキ科)
ヤブレガサ	(キク科)
ヤマアワ	(イネ科)
ヤマトリカブト	(キンポウゲ科)
ヤマハギ	(マメ科)
ヤマハンノキ	(カバノキ科)
ヤマブキ	(バラ科)
ヤマボウシ	(ミズキ科)
ヤマホロシ	(ナス科)
ヤマユリ	(ユリ科)
ヤマラッキョウ	(ユリ科)
ヤワタソウ	(ユキノシタ科)
ユウガギク	(キク科)
リュウノウギク	(キク科)
リンドウ	(リンドウ科)
ワレモコウ	(バラ科)



フジアザミ (キク科)

## 5 朝霧高原の植物

朝霧高原一帯の地形は、集魂質の古富士泥流やこれを覆う古期富士第II期の溶岩で、かなり起伏に富んでいる。広い高原状の地形が続く朝霧高原は、山梨県境の割石峠の標高 980 m から白糸滝、上井出の標高 500 m あたりまで南北 15 km に渡っている。

視界数mという霧の発生は、上井出から 800 m の高原までに多く、特に駿河湾からの温暖で多湿な空気が毎秒 1.5 m くらいの南東の風で運ばれてくる 6～8 月に多いと言われている。

この霧と夏の冷涼な気候に育まれて、朝霧高原の植物は草本の種類に大変富んでおり、高原独特の植物が数多く見られる。春はタチツボスミレ、ニリンソウ、ミツバツチグリなどの植物のほか、限られた場所にしか成育せずその数も非常に少ないイチゲキスミレも見られる。

夏はコオニユリ、チダケサシ、ノハナショウブ、タチフウロなどの花が咲き乱れ、霧により育つ特有の植物としてユウスゲが見られる。



秋は朝霧高原の最も美しい季節でマツムシソウ、ヤマトラノオ、オミナエシ、ワレモコウ、カセンソウ、リンドウ、ヤマラッキョウなどが咲き万葉集で有名な七草のうちフジバカマを除いて全て見られる。

以下、主な植物をあげる。

アカザ	(アカザ科)	イヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
アカソ	(イラクサ科)	イヌビユ	(ヒユ科)
アカツメクサ	(マメ科)	イヌホオズキ	(ナス科)
アカネ	(アカネ科)	イノコズチ	(ヒユ科)
アカマツ	(マツ科)	イボタノキ	(モクセイ科)
アカメガシワ	(トウダイグサ科)	イロハカエデ	(カエデ科)
アキカラマツ	(キンポウゲ科)	イワガラミ	(ユキノシタ科)
アキノウナギヅル	(タデ科)	イワナンテン	(ツツジ科)
アキノキリンソウ	(キク科)	ウコギ	(ウコギ科)
アキノタムラソウ	(シソ科)	ウシハコベ	(ナデシコ科)
アキノノゲシ	(キク科)	ウツギ	(ユキノシタ科)
アケビ	(アケビ科)	ウツボグサ	(シソ科)
アシ	(イネ科)	ウド	(ウコギ科)
アズマヤマアザミ	(キク科)	ウバユリ	(ユリ科)
アセビ	(ツツジ科)	ウマノアシガタ	(キンポウゲ科)
アブラチャン	(クスノキ科)	ウメバチソウ	(ユキノシタ科)
アマドコロ	(ユリ科)	ウメモドキ	(モチノキ科)
アメリカセンダングサ	(キク科)	ウリハダカエデ	(カエデ科)
アヤメ	(アヤメ科)	ウルシ	(ウルシ科)
アリノトウグサ	(アリノトウグサ科)	エイザンスミレ	(スミレ科)
アレチノギク	(キク科)	エゴノキ	(エゴノキ科)
アレチマツヨイグサ	(アカバナ科)	エノコログサ	(イネ科)
イタチササゲ	(マメ科)	エビヅル	(ブドウ科)
イタドリ	(タデ科)	エンコウカエデ	(カエデ科)
イチゲキスミレ	(スミレ科)	エンレイソウ	(ユリ科)
イチヤクソウ	(イチヤクソウ科)	オオアワガエリ	(イネ科)
イヌガラシ	(アブラナ科)	オオイヌタデ	(タデ科)
イヌゴマ	(シソ科)	オオイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
イヌザンショウ	(ミカン科)	オオケタデ	(タデ科)
イヌタデ	(タデ科)	オオバギボウシ	(ユリ科)
イヌツゲ	(モチノキ科)	オオバコ	(オオバコ科)
		オオマツヨイグサ	(アカバナ科)
		オオモミジガサ	(キク科)
		オカトラノオ	(サクラソウ科)
		オガルカヤ	(イネ科)
		オギ	(イネ科)

オキナグサ	(キンポウゲ科)	キハギ	(マメ科)
オケラ	(キク科)	キバナアキギリ	(シソ科)
オトギリソウ	(オトギリソウ科)	キバナノマツバニンジン	(アマ科)
オトコエシ	(オミナエシ科)	キブシ	(キブシ科)
オトコヨモギ	(キク科)	ギボウシ	(ユリ科)
オニタビラコ	(キク科)	ギョウジャノミズ	(ブドウ科)
オヒシバ	(イネ科)	キランソウ	(シソ科)
オミナエシ	(オミナエシ科)	キンミズヒキ	(バラ科)
オヤマボクチ	(キク科)	キンラン	(ラン科)
カイジンドウ	(シソ科)	ギンラン	(ラン科)
カキドオシ	(シソ科)	クガイソウ	(ゴマノハグサ科)
カキラン	(ラン科)	クサギ	(クマツヅラ科)
カシワ	(ブナ科)	クサソテツ	(オシダ科)
カゼクサ	(イネ科)	クサボケ	(バラ科)
カセンソウ	(キク科)	クサボタン	(キンポウゲ科)
カタバミ	(カタバミ科)	クサレダマ	(サクラソウ科)
カナウツギ	(バラ科)	クズ	(マメ科)
カナムグラ	(クワ科)	クヌギ	(ブナ科)
カニクサ	(カニクサ科)	クマヤナギ	(クロウメモドキ科)
ガマズミ	(スイカズラ科)	クモキリソウ	(ラン科)
カモガヤ	(イネ科)	クリ	(ブナ科)
カラスノエンドウ	(マメ科)	クルマバナ	(シソ科)
カラスノゴマ	(シナノキ科)	クロバナエンジュ	(マメ科)
カラマツソウ	(キンポウゲ科)	クロモジ	(クスノキ科)
カワラヨモギ	(キク科)	ケヤキ	(ニレ科)
カワラマツバ	(アカネ科)	ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
ガングビソウ	(キク科)	コアジサイ	(ユキノシタ科)
キケマン	(ケシ科)	コウゾ	(クワ科)
キジカクシ	(ユリ科)	コウゾリナ	(キク科)
ギシギシ	(タデ科)	コウヤボウキ	(キク科)
キジムシロ	(バラ科)	コウヤワラビ	(オシダ科)
キツネアザミ	(キク科)	コウリンカ	(キク科)
キツネノボタン	(キンポウゲ科)	コオニユリ	(ユリ科)
キツネノマゴ	(キツネノマゴ科)	コケオトギリ	(オトギリソウ科)
キツリフネ	(ツリフネソウ科)	コゴメウツギ	(バラ科)
キヌタソウ	(アカネ科)	コナラ	(ブナ科)

コバギボウシ	(ユリ科)	センニンソウ	(キンポウゲ科)
コマツナギ	(マメ科)	センブリ	(リンドウ科)
コメツブウマゴヤシ	(マメ科)	ゼンマイ	(ゼンマイ科)
コモチマンネングサ	(ベンケイソウ科)	ダイコンソウ	(バラ科)
ゴンズイ	(ミツバウツギ科)	タケニグサ	(ケシ科)
サクラソウ	(サクラソウ科)	タチツボスミレ	(スミレ科)
サルトリイバラ	(ユリ科)	タチフウロ	(フウロソウ科)
サワシバ	(カバノキ科)	タニウツギ	(スイカズラ科)
サワヒヨドリ	(キク科)	タネツケバナ	(アブラナ科)
サンショウ	(ミカン科)	タマアジサイ	(ユキノシタ科)
シオデ	(ユリ科)	タムラソウ	(キク科)
シシウド	(セリ科)	タラノキ	(ウコギ科)
シシガシラ	(シシガシラ科)	ダンコウバイ	(クスノキ科)
ジシバリ	(キク科)	タンポポ	(キク科)
シデシャジン	(キキョウ科)	チガヤ	(イネ科)
シモツケ	(バラ科)	チカラシバ	(イネ科)
シモバシラ	(シソ科)	チゴユリ	(ユリ科)
ジャノヒゲ	(ユリ科)	チダケサシ	(ユキノシタ科)
シュロソウ	(ユリ科)	チチコグサモドキ	(キク科)
シロザ	(アカザ科)	チヂミザサ	(イネ科)
シロツメクサ	(マメ科)	チドメグサ	(セリ科)
ジロボウエンゴサク	(ケシ科)	ツノハシバミ	(カバノキ科)
シロヤマギク	(キク科)	ツユクサ	(ツユクサ科)
スイカズラ	(スイカズラ科)	ツリガネニンジン	(キキョウ科)
スイバ	(タデ科)	ツリバナ	(ニシキギ科)
スギ	(スギ科)	ツリフネソウ	(ツリフネソウ科)
スギナ	(トクサ科)	ツルウメモドキ	(ニシキギ科)
ススキ	(イネ科)	ツルニンジン	(キキョウ科)
スズメノヤリ	(イグサ科)	ツルフジバカマ	(マメ科)
スノキ	(ツツジ科)	ツルリンドウ	(リンドウ科)
スベリヒユ	(スベリヒユ科)	テリハノイバラ	(バラ科)
ズミ	(バラ科)	テンニンソウ	(シソ科)
スミレ	(スミレ科)	トウダイグサ	(トウダイグサ科)
スルガテンナンショウ	(サトイモ科)	ドクウツギ	(ドクウツギ科)
セイヨウタンポポ	(キク科)	ドクダミ	(ドクダミ科)
セキヤノアキチヨウジ	(シソ科)	トモエソウ	(オトギリソウ科)

ナギナタコウジュ	(シソ科)	バライチゴ	(バラ科)
ナズナ	(アブラナ科)	ハルザキヤマガラシ	(アブラナ科)
ナツトウダイ	(トウダイグサ科)	ハルジオン	(キク科)
ナデシコ	(ナデシコ科)	ハンゴンソウ	(キク科)
ナベナ	(マツムシソウ科)	ハンショウヅル	(キンポウゲ科)
ナルコユリ	(ユリ科)	ハンノキ	(カバノキ科)
ナワシロイチゴ	(バラ科)	ヒキオコシ	(シソ科)
ナンテンハギ	(マメ科)	ヒノキ	(ヒノキ科)
ニガイチゴ	(バラ科)	ヒメジョオン	(キク科)
ニガナ	(キク科)	ヒメスイバ	(タデ科)
ニシキギ	(ニシキギ科)	ヒメハギ	(ヒメハギ科)
ニリンソウ	(キンポウゲ科)	ヒルガオ	(ヒルガオ科)
ニワトコ	(スイカズラ科)	フキ	(キク科)
ヌスビトハギ	(マメ科)	フジアザミ	(キク科)
ヌマトラノオ	(サクラソウ科)	フジウツギ	(フジウツギ科)
ネコハギ	(マメ科)	フシグロセンノウ	(ナデシコ科)
ネムノキ	(マメ科)	フジザクラ	(バラ科)
ノアザミ	(キク科)	フタリシズカ	(センリョウ科)
ノイバラ	(バラ科)	フナバラソウ	(ガガイモ科)
ノコギリソウ	(キク科)	フモトスマレ	(スマレ科)
ノコンギク	(キク科)	フユイチゴ	(バラ科)
ノダイオウ	(タデ科)	ヘクソカズラ	(アカネ科)
ノダケ	(セリ科)	ヘビイチゴ	(バラ科)
ノハナショウブ	(アヤメ科)	ヘラオオバコ	(オオバコ科)
ノハラアザミ	(キク科)	ハウチャクソウ	(ユリ科)
ノビル	(ユリ科)	ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)
ノブドウ	(ブドウ科)	ホタルブクロ	(キキョウ科)
ノボロギク	(キク科)	ポタンヅル	(キンポウゲ科)
ノリウツギ	(ユキノシタ科)	マツカゼソウ	(ミカン科)
ハキダメギク	(キク科)	マツムシソウ	(マツムシソウ科)
ハコベ	(ナデシコ科)	マツヨイグサ	(アカバナ科)
ハコネウツギ	(スイカズラ科)	ママコナ	(ゴマノハグサ科)
ハチク	(イネ科)	ママコノシリヌグイ	(タデ科)
ハナイカダ	(ミズキ科)	マムシグサ	(サトイモ科)
ハナイカリ	(リンドウ科)	マユミ	(ニシキギ科)
ハナガサギク	(キク科)	マルバダケブキ	(キク科)



ミズキ	(ミズキ科)	ユウスゲ	(ユリ科)
ミズナラ	(ブナ科)	ユキノシタ	(ユキノシタ科)
ミズヒキ	(タデ科)	ヨツバヒヨドリ	(キク科)
ミソハギ	(ミソハギ科)	ヨメナ	(キク科)
ミツバ	(セリ科)	ヨモギ	(キク科)
ミツバアケビ	(アケビ科)	リュウノウギク	(キク科)
ミツバツチグリ	(バラ科)	リョウブ	(リョウブ科)
ミツバツツジ	(ツツジ科)	リンドウ	(リンドウ科)
ミミナグサ	(ナデシコ科)	レンゲツツジ	(ツツジ科)
ミヤコグサ	(マメ科)	ワニグチソウ	(ユリ科)
ムラサキケマン	(ケシ科)	ワラビ	(ウラボシ科)
ムラサキサギゴケ	(ゴマノハグサ科)	ワルナスビ	(ナス科)
ムラサキシキブ	(クマツヅラ科)	ワレモコウ	(バラ科)
メギ	(メギ科)		
メヒシバ	(イネ科)		
モジズリ	(ラン科)		
ヤエムグラ	(アカネ科)		
ヤクシソウ	(キク科)		
ヤブガラシ	(ブドウ科)		
ヤブタピラコ	(キク科)		
ヤブデマリ	(スイカズラ科)		
ヤブレガサ	(キク科)		
ヤマオダマキ	(キンポウゲ科)		
ヤマグワ	(クワ科)		
ヤマジノホトトギス	(ユリ科)		
ヤマツツジ	(ツツジ科)		
ヤマトラノオ	(ゴマノハグサ科)		
ヤマトリカブト	(キンポウゲ科)		
ヤマハギ	(マメ科)		
ヤマフジ	(マメ科)		
ヤマボウシ	(ミズキ科)		
ヤマホオコ	(キク科)		
ヤマホトトギス	(ユリ科)		
ヤマユリ	(ユリ科)		
ヤマラッキョウ	(ユリ科)		
ユウガギク	(キク科)		

朝霧高原は、富士宮市にとって最後に残された自然  
 いっぱいの原野ではないでしょうか。虫食い状に地区  
 の人々が耕地にしてはいるが、耕地として固定してい  
 ないため常に自然の状態が保たれている。

野鳥の観察も植物の調査も東海自然歩道に歩を進め  
 ることによって容易に楽しむことができ、富士の景観  
 と共にここは長くこのままにしておくことが必要では  
 ないだろうか。

少し眼を他にむけてみると、柿田川や桶ヶ谷沼はト  
 ラスト運動で現状をそのまま残そうと努力し、話題を  
 ふりまいており、場所によっては監視員をおいて見張  
 るということも行われています。これは自然を大切に  
 管理し保護している姿だが、「自然の中でのみ人間は生  
 きられる」という考えが根底にあるからではないで  
 しょうか。今日の状態を少しでも永く子に孫に残した  
 い。それは人類をより永く生きのびさせる絶対条件だ  
 からである。故に今日に生きる人々の責任と義務だと思  
 います。

例えば、ユウスゲをみると14~15年前には人穴の的  
 橋の南側でも数多く咲き誇り、道ゆく人を楽しませて  
 くれた夏の夕べだったが、今は一本も見られず、建設  
 大学校北に広がる草原に姿を見ることができるだけで  
 ある。イチゲキスミレは、我が国が大陸と地続きであつ

た証であるとも言われるほど昔からの植物である。それが最近誕生したばかりの人間のエゴによる開発の波に負け姿を消した。ミツバツツジ、ササダケも消えてしまった。マツムシソウやウメバチソウ、オヤマボクチやコウリンカも開発の波には弱い。

これを考えると多くの植物を育て育んでいる朝霧高原はいつまでもこのままの姿で残しておきたいものではないでしょうか。



カキラン (ラン科)



ユウスゲ (ユリ科)

## 6 猪之頭の植物

井之頭小学校から歩き、五斗目木川を超えて更に西へ2 km程行くとカタクリの保護地に着く。近年盗掘が目立ち、猪之頭区で保護に立ち上がった場所である。雑木林の中に赤紫色の花を下向きにつけた株が、多数群生しているのが見られた。

また折り返して、富士養鱒場内の東側の高台に多数群生しているカタクリを見ることができた。

以下、主な植物をあげる。

アブラチャン	(クスノキ科)
エイザンスミレ	(スミレ科)
オオイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
オランダガラシ	(アブラナ科)
カキドオシ	(シソ科)
カタクリ	(ユリ科)
キクザキイチリンソウ	(キンボウゲ科)
キブシ	(キブシ科)
キランソウ	(シソ科)
サイシン	(ウマノスズクサ科)
シロツメクサ	(マメ科)

シロバナタンポポ	(キク科)
ジロボウエンゴサク	(ケシ科)
セントウソウ	(セリ科)
タチツボスミレ	(スミレ科)
タネツケバナ	(アブラナ科)
ツルボ	(ユリ科)
ニリンソウ	(キンポウゲ科)
ノカンゾウ	(ユリ科)
ノボロギク	(キク科)
ノミノフスマ	(ナデシコ科)
ハコベ	(ナデシコ科)
ヒメオドリコソウ	(シソ科)
ヒメスイバ	(タデ科)
ホトケノザ	(シソ科)
ミズナ	(イラクサ科)
ミツバツチグリ	(バラ科)
ミツマタ	(ジンチョウゲ科)
ミミナグサ	(ナデシコ科)
ミヤマカタバミ	(カタバミ科)
ムラサキケマン	(ケシ科)



カタクリ (ユリ科)

## 7 小田貫湿原の植物

天子山脈の長者ヶ岳から東へ張り出した田貫尾根の北側に接し、南側の田貫湖に相対する位置にあり、湿原の植物をみるのに最適な場所が小田貫湿原である。この湿原一帯は、古くは「スゲノ沢」とも呼ばれ、多くのカサスゲが自生し、現在もカサスゲが大群落を作っている。モウセンゴケが白い花を咲かせ、レンゲツツジやヤマツツジが朱や紅の花を咲かせる。また、アサマフウロやミズチドリ、ヒルムシロなど他の地域では見られない植物がある。

以下、主な植物をあげる。

アオスゲ	(カヤツリグサ科)
アオマムシグサ	(サトイモ科)
アカショウマ	(ユキノシタ科)
アカソ	(イラクサ科)
アカネ	(アカネ科)
アキカラマツ	(キンポウゲ科)
アギナシ	(オモダカ科)
アキノウナギヅル	(タデ科)
アキノキリンソウ	(キク科)
アキノタムラソウ	(シソ科)
アケボノソウ	(リンドウ科)
アサマフウロ	(フウロソウ科)
アズマヤマアザミ	(キク科)
アゼスゲ	(カヤツリグサ科)
アゼムシロ	(キキョウ科)
アブラガヤ	(カヤツリグサ科)
アブラシバ	(カヤツリグサ科)
アブラススキ	(イネ科)
アリノトウグサ	(アリノトウグサ科)
アレチヌスビトハギ	(マメ科)
アレチマツヨイグサ	(アカバナ科)
イ	(イグサ科)
イチヤクソウ	(イチヤクソウ科)
イヌゴマ	(シソ科)

イヌザンショウ	(ミカン科)	クマヤナギ	(クロウメモドキ科)
イボタノキ	(モクセイ科)	グミ	(グミ科)
イノコズチ	(ヒユ科)	ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
ウツギ	(ユキノシタ科)	コアカソ	(イラクサ科)
ウマノアシガタ	(キンポウゲ科)	コアジサイ	(ユキノシタ科)
ウメバチソウ	(ユキノシタ科)	ゴウソ	(カヤツリグサ科)
ウメモドキ	(モチノキ科)	コウヤワラビ	(ウラボシ科)
オオバコ	(オオバコ科)	コオニユリ	(ユリ科)
オオヒナノウスツボ	(ゴマノハグサ科)	コゴメウツギ	(バラ科)
オオヘビイチゴ	(バラ科)	コシロネ (サルダヒコ)	(シソ科)
オオマツヨイグサ	(アカバナ科)	コナスビ	(サクラソウ科)
オカトラノオ	(サクラソウ科)	コマツカサスキ	(カヤツリグサ科)
オダマキ	(キンポウゲ科)	コマツナギ	(マメ科)
オトギリソウ	(オトギリソウ科)	サラシナショウマ	(キンポウゲ科)
オトコエシ	(オミナオシ科)	サルトリイバラ	(ユリ科)
オトコヨモギ	(キク科)	サワアザミ	(キク科)
オミナエシ	(オミナエシ科)	サワギキョウ	(キキョウ科)
カキドオシ	(シソ科)	サワシロギク	(キク科)
カサスゲ	(カヤツリグサ科)	サワシロネ	(シソ科)
カナウツギ	(バラ科)	サワヒヨドリ	(キク科)
カモガヤ	(イネ科)	サワフタギ	(ハイノキ科)
カラマツソウ	(キンポウゲ科)	シオガマギク	(ゴマノハグサ科)
カワラマツバ	(アカネ科)	シオデ	(ユリ科)
カワラヨモギ	(キク科)	シシウド	(セリ科)
カンガレイ	(カヤツリグサ科)	シシガシラ	(ウラボシ科)
カンスゲ	(カヤツリグサ科)	シモツケ	(バラ科)
キクアザミ	(キク科)	ジャニンジン	(アブラナ科)
キジムシロ	(バラ科)	シュロソウ	(ユリ科)
キツネササゲ	(マメ科)	シラネセンキュウ	(セリ科)
キヌタソウ	(アカネ科)	シラヤマギク	(キク科)
ギボウシ	(ユリ科)	シロネ	(シソ科)
キンミズヒキ	(バラ科)	スイカズラ	(スイカズラ科)
クサボケ	(バラ科)	スイバ	(タデ科)
クサボタン	(キンポウゲ科)	ススキ	(イネ科)
クサレダマ	(サクラソウ科)	スズメウリ	(ウリ科)
クマイチゴ	(バラ科)	スノキ	(ツツジ科)



ズミ	(バラ科)	ノリウツギ	(ユキノシタ科)
セキヤノアキチョウジ	(シソ科)	ハタザオ	(アブラナ科)
センニンソウ	(キンポウゲ科)	バッコウヤナギ	(ヤナギ科)
タガネソウ	(カヤツリグサ科)	ハルジオン	(キク科)
タケニグサ	(ケシ科)	ハンノキ	(カバノキ科)
タチシオデ	(ユリ科)	ヒカゲノカズラ	(ヒカゲノカズラ科)
タチツボスミレ	(スミレ科)	ヒノキ	(ヒノキ科)
タチドコロ	(ヤマノイモ科)	ヒメシダ	(オシダ科)
タチフウロ	(フウロソウ科)	ヒメシロネ	(シソ科)
タムラソウ	(キク科)	ヒヨドリバナ	(キク科)
タラノキ	(ウコギ科)	ヒルムシロ	(ヒルムシロ科)
ダンドボロギク	(キク科)	フシグロセンノウ	(ナデシコ科)
チゴザサ	(イネ科)	フジザクラ	(バラ科)
チダケサシ	(ユキノシタ科)	フモトスミレ	(スミレ科)
チドメグサ	(セリ科)	ヘクソカズラ	(アカネ科)
ツユクサ	(ツユクサ科)	ベニバナボロギク	(キク科)
ツリガネニンジン	(キキョウ科)	ヘラバヒメジョオン	(キク科)
ツリフネソウ	(ツリフネソウ科)	ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)
ツルニンジン	(キキョウ科)	ホソバコガク	(ユキノシタ科)
ツルリンドウ	(リンドウ科)	ホタルイ	(カヤツリグサ科)
テリハノイバラ	(バラ科)	ボタンズル	(キンポウゲ科)
テンニンソウ	(シソ科)	ホツツジ	(ツツジ科)
トキソウ	(ラン科)	マツムシソウ	(マツムシソウ科)
トダシバ	(イネ科)	マユミ	(ニシキギ科)
ナワシロイチゴ	(バラ科)	マルバハギ	(マメ科)
ナンテンハギ	(マメ科)	ミズオトギリ	(オトギリソウ科)
ニガイチゴ	(バラ科)	ミズギボウシ	(ユリ科)
ニガナ	(キク科)	ミズゴケ	(ミズゴケ科)
ヌマガヤ	(イネ科)	ミズチドリ	(ラン科)
ヌマトラノオ	(サクラソウ科)	ミズナラ	(ブナ科)
ノアザミ	(キク科)	ミゾソバ	(タデ科)
ノイバラ	(バラ科)	ミツバツチグリ	(バラ科)
ノギラン	(ユリ科)	ミツバツツジ	(ツツジ科)
ノダケ	(セリ科)	ミヤコアザミ	(キク科)
ノハナショウブ	(アヤメ科)	ミヤコザサ	(イネ科)
ノハラアザミ	(キク科)	ムカゴニンジン	(セリ科)

メギ	(メギ科)
メドハギ	(マメ科)
モウセンゴケ	(モウセンゴケ科)
モチツツジ	(ツツジ科)
ヤエムグラ	(アカネ科)
ヤブツルアズキ	(マメ科)
ヤブデマリ	(スイカズラ科)
ヤマオダマキ	(キンポウゲ科)
ヤマグワ	(クワ科)
ヤマゼリ	(セリ科)
ヤマツツジ	(ツツジ科)
ヤマドリゼンマイ	(ゼンマイ科)
ヤマハギ	(マメ科)
ヤマブキ	(バラ科)
ヤマホウコ	(キク科)
ヤマヨメナ	(キク科)
ヤマラッキョウ	(ユリ科)
ユウガギク	(キク科)
ヨモギ	(キク科)
リュウノウギク	(キク科)
リョウブ	(リョウブ科)
リンドウ	(リンドウ科)
レンゲツツジ	(ツツジ科)
ワレモコウ	(バラ科)
ワラビ	(ウラボシ科)



アギナシ (オモダカ科)



トキソウ (ラン科)



ヌマトラノオ (サクラソウ科)



ミズチドリ (ラン科)



サワアザミ (キク科)

## 8 白糸の植物

富士宮市は、その市域が数千年前にでき上がった新富士火山の南麓に殆どを占めている。この白糸地域は、新富士火山の西端に当たり、しかもその面側はかなり古い層から成る天子山系を控えており1千万年ぐらい前の地層が見られる。したがって、カセンソウ、リュウノウギク、オトギリソウ、ミズギボウシ、ワレモコウなど朝霧高原と共通する植物が見られる。

白糸滝上下の芝川にはダイモンジソウ、ジンジソウ、ホトトギスなど湿地特有の草花が見られ、白糸滝周辺や神社の古木にはセッコク、ヨウラクラン、カヤランなどのめずらしい着生蘭も見られる。また広い滝の右側の壁にはネコノメソウ、ヒロハコンロンソウ、ナルコスゲの群落が、下部にはオランダガラシの群落が見られた。

半野の茅山付近の林道には、春になるとヤマブキが咲き乱れキンラン、ギンラン、チゴユリなども見掛ける。以前この付近にはクマガイソウの群落も見られたが乱掘により最近では全滅状態である。

以下、主な植物をあげる。

アオキ	(ミズキ科)
アオハコベ	(ナデシコ科)
アオマムシグサ	(サトイモ科)
アカザ	(アカザ科)
アカショウマ	(ユキノシタ科)
アカソ	(イラクサ科)
アカバナ	(アカバナ科)
アカネ	(アカネ科)
アカメガシワ	(トウダイグサ科)
アキカラマツ	(キンポウゲ科)
アキノウナギヅル	(タデ科)
アキノキリンソウ	(キク科)
アキノタムラソウ	(シソ科)
アキノノゲシ	(キク科)
アケビ	(アケビ科)

アケボノソウ	(リンドウ科)	エイザンスミレ	(スミレ科)
アスナロ	(ヒノキ科)	エゴノキ	(エゴノキ科)
アズマヤマアザミ	(キク科)	エノコログサ	(イネ科)
アセビ	(ツツジ科)	エビヅル	(ブドウ科)
アブラチャン	(クスノキ科)	エンレイソウ	(ユリ科)
アマチャヅル	(ウリ科)	オオバインモトソウ	(ウラボシ科)
アマドコロ	(ユリ科)	オオバコ	(オオバコ科)
アメリカセンダングサ	(キク科)	オオバタネツケバナ	(アブラナ科)
アリノトオグサ	(アリノトオグサ科)	オオマツヨイグサ	(アカバナ科)
アレチノギク	(キク科)	オカトラノオ	(サクラソウ科)
イカリソウ	(メギ科)	オガルカヤ	(イネ科)
イシミカワ	(タデ科)	オケラ	(キク科)
イタチササゲ	(マメ科)	オシダ	(オシダ科)
イタドリ	(タデ科)	オトギリソウ	(オトギリソウ科)
イチヤクソウ	(イチヤクソウ科)	オトコエシ	(オミナエシ科)
イヌガラシ	(アブラナ科)	オトコヨモギ	(キク科)
イヌゴマ	(シソ科)	オドリコソウ	(シソ科)
イヌザンショウ	(ミカン科)	オニタビラコ	(キク科)
イヌタデ	(タデ科)	オニドコロ	(ヤマノイモ科)
イノコズチ	(ヒユ科)	オニノヤガラ	(ラン科)
イボタノキ	(モクセイ科)	オヒシバ	(イネ科)
イラクサ	(イラクサ科)	オミナエシ	(オミナエシ科)
イロハカエデ	(カエデ科)	オヤマボクチ	(キク科)
イワガラミ	(ユキノシタ科)	オランダガラシ	(アブラナ科)
イワタバコ	(イワタバコ科)	カキドオシ	(シソ科)
ウコギ	(ウコギ科)	カセンソウ	(キク科)
ウシハコベ	(ナデシコ科)	カタバミ	(カタバミ科)
ウツギ	(ユキノシタ科)	カナウツギ	(バラ科)
ウツボグサ	(シソ科)	カニクサ	(カニクサ科)
ウド	(ウコギ科)	ガマズミ	(スイカズラ科)
ウバユリ	(ユリ科)	カマツカ	(バラ科)
ウマノアシガタ	(キンポウゲ科)	カヤラン	(ラン科)
ウメバチソウ	(ユキノシタ科)	カラスウリ	(ウリ科)
ウメモドキ	(モチノキ科)	カラスノエンドウ	(マメ科)
ウリハダカエデ	(カエデ科)	カラマツソウ	(キンポウゲ科)
ウワバミソウ	(イラクサ科)	カラムシ	(イラクサ科)



カワラマツバ	(アカネ科)	クロモジ	(クスノキ科)
カンアオイ	(ウマノスズクサ科)	クワ	(クワ科)
ガंकビソウ	(キク科)	ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
キクザキイチリンソウ	(キンポウゲ科)	コアジサイ	(ユキノシタ科)
キケマン	(ケシ科)	コウゾ	(クワ科)
キジカクシ	(ユリ科)	コウゾリナ	(キク科)
ギシギシ	(タデ科)	コウヤボウキ	(キク科)
キジムシロ	(バラ科)	コウヤワラビ	(オシダ科)
キツタ	(ウコギ科)	コオニユリ	(ユリ科)
キツネノボタン	(キンポウゲ科)	コガマ	(ガマ科)
キツネノマゴ	(キツネノマゴ科)	コクサギ	(ミカン科)
キツリフネ	(ツリフネソウ科)	コゴメウツギ	(バラ科)
キヌタソウ	(アカネ科)	コツクバネウツギ	(スイカズラ科)
キハギ	(マメ科)	コナラ	(ブナ科)
キバナアキギリ	(シソ科)	コバギボウシ	(ユリ科)
キブシ	(キブシ科)	コバノガマズミ	(スイカズラ科)
ギボウシ	(ユリ科)	コブナグサ	(イネ科)
キュウリグサ	(ムラサキ科)	コマツナギ	(マメ科)
ギョウジャノミズ	(ブドウ科)	コマツヨイグサ	(アカバナ科)
キランソウ	(シソ科)	コミカンソウ	(トウダイグサ科)
キンミズヒキ	(バラ科)	ゴンズイ	(ミツバウツギ科)
キンラン	(ラン科)	サイハイラン	(ラン科)
ギンラン	(ラン科)	サギゴケ	(ゴマノハグサ科)
クサギ	(クマツヅラ科)	ササバギンラン	(ラン科)
クサソテツ	(オシダ科)	ササユリ	(ユリ科)
クサノオウ	(ケシ科)	サネカズラ	(モクレン科)
クサボケ	(バラ科)	サラシナショウマ	(キンポウゲ科)
クサボタン	(キンポウゲ科)	サルトリイバラ	(ユリ科)
クジャクソウ	(キク科)	サワヒヨドリ	(キク科)
クズ	(マメ科)	サワフタギ	(ハイノキ科)
クヌギ	(ブナ科)	サンショウ	(ミカン科)
クマヤナギ	(クロウメモドキ科)	シオデ	(ユリ科)
クモキリソウ	(ラン科)	ジガバチソウ	(ラン科)
クラマゴケ	(イワヒバ科)	シシウド	(セリ科)
クリ	(ブナ科)	シシガシラ	(シシガシラ科)
クルマバナ	(シソ科)	ジシバリ	(キク科)

シデシャジン	(キキョウ科)	タケニグサ	(ケシ科)
シバカワノリ	(カワノリ科)	タチイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
シモバシラ	(シソ科)	タチガシワ	(ガガイモ科)
シャガ	(アヤメ科)	タチシオデ	(ユリ科)
ジャニンジン	(アブラナ科)	タチツボスミレ	(スミレ科)
ジャノヒゲ	(ユリ科)	タチフウロ	(フウロソウ科)
シュウメイギク	(キク科)	タツナミソウ	(シソ科)
シラヤマギク	(キク科)	タツノヒゲ	(イネ科)
ジロボウエンゴサク	(ケシ科)	タニウツギ	(スイカズラ科)
ジンジソウ	(ユキノシタ科)	タネツケバナ	(アブラナ科)
スイカズラ	(スイカズラ科)	タマアジサイ	(ユキノシタ科)
スイバ	(タデ科)	タムラソウ	(キク科)
スギ	(スギ科)	タラノキ	(ウコギ科)
スギナ	(トクサ科)	ダンコウバイ	(クスノキ科)
ススキ	(イネ科)	タンポポ	(キク科)
スズメノエンドウ	(マメ科)	チガヤ	(イネ科)
スズメノカタビラ	(イネ科)	チカラシバ	(イネ科)
スズメノヤリ	(イグサ科)	チゴユリ	(ユリ科)
スノキ	(ツツジ科)	チダケサシ	(ユキノシタ科)
スベリヒユ	(スベリヒユ科)	チチコグサモドキ	(キク科)
ズミ	(バラ科)	チヂミザサ	(イネ科)
スミレ	(スミレ科)	チドメグサ	(セリ科)
セイヨウタンポポ	(キク科)	チャルメルソウ	(ユキノシタ科)
セキヤノアキチョウジ	(シソ科)	ツチアケビ	(ラン科)
セッコク	(ラン科)	ツノハシバミ	(カバノキ科)
セリ	(セリ科)	ツバキ	(ツバキ科)
センニンソウ	(キンポウゲ科)	ツボスミレ	(スミレ科)
センブリ	(リンドウ科)	ツメクサ	(ナデシコ科)
センボンヤリ	(キク科)	ツユクサ	(ツユクサ科)
ゼンマイ	(ゼンマイ科)	ツリガネニンジン	(キキョウ科)
ソクズ	(スイカズラ科)	ツリバナ	(ニシキギ科)
ダイコンソウ	(バラ科)	ツリフネソウ	(ツリフネソウ科)
ダイモンジソウ	(ユキノシタ科)	ツルウメモドキ	(ニシキギ科)
タカサブロウ	(キク科)	ツルニンジン	(キキョウ科)
タカトウダイ	(トウダイグサ科)	ツルリンドウ	(リンドウ科)
タガネソウ	(カヤツリグサ科)	テイカカズラ	(キョウチクトウ科)

テリハノイバラ	(バラ科)	ノコンギク	(キク科)
テンニンソウ	(シソ科)	ノダイオウ	(タデ科)
トウゲシバ	(ヒカゲノカズラ科)	ノダケ	(セリ科)
トウダイグサ	(トウダイグサ科)	ノハラアザミ	(キク科)
トキワハゼ	(ゴマノハグサ科)	ノビル	(ユリ科)
ドクゼリ	(セリ科)	ノブドウ	(ブドウ科)
ドクダミ	(ドクダミ科)	ノボロギク	(キク科)
トコロ	(ヤマノイモ科)	ノミノフスマ	(ナデシコ科)
トチバニンジン	(ウコギ科)	ノラッキョウ	(ユリ科)
トリカブト	(キンポウゲ科)	ノリウツギ	(ユキノシタ科)
トンボソウ	(ラン科)	ハキダメギク	(キク科)
ナギナタコウジュ	(シソ科)	ハグロソウ	(キツネノマゴ科)
ナズナ	(アブラナ科)	ハコベ	(ナデシコ科)
ナツトウダイ	(トウダイグサ科)	ハナイカダ	(ミズキ科)
ナツノハナワラビ	(ハナワラビ科)	バライチゴ	(バラ科)
ナツハゼ	(ツツジ科)	ハルジオン	(キク科)
ナデシコ	(ナデシコ科)	ハルリンドウ	(リンドウ科)
ナルコスゲ	(カヤツリグサ科)	ハンショウヅル	(キンポウゲ科)
ナルコユリ	(ユリ科)	ハンノキ	(カバノキ科)
ナワシロイゴ	(バラ科)	ヒカゲノカズラ	(ヒカゲノカズラ科)
ナンテンハギ	(マメ科)	ヒガンバナ	(ヒガンバナ科)
ナンバンギセル	(ハマウツボ科)	ヒサカキ	(ツバキ科)
ニガイチゴ	(バラ科)	ヒトリシズカ	(センリョウ科)
ニガナ	(キク科)	ヒノキ	(ヒノキ科)
ニシキギ	(ニシキギ科)	ヒメクズ	(マメ科)
ニリンソウ	(キンポウゲ科)	ヒメジョオン	(キク科)
ニワトコ	(スイカズラ科)	ヒメヤブラン	(ユリ科)
ヌスビトハギ	(マメ科)	ヒヨドリバナ	(キク科)
ネコノメソウ	(ユキノシタ科)	ヒロハコンロンソウ	(アブラナ科)
ネコハギ	(マメ科)	フキ	(キク科)
ネズミモチ	(モクセイ科)	フサザクラ	(ヤマグルマ科)
ネムノキ	(マメ科)	フジ	(マメ科)
ノアザミ	(キク科)	フジウツギ	(フジウツギ科)
ノイバラ	(バラ科)	フシグロセンノウ	(ナデシコ科)
ノカンゾウ	(ユリ科)	フジザクラ	(バラ科)
ノゲシ	(キク科)	ブタクサ	(キク科)

フタリシズカ	(センリョウ科)	ミツバツツジ	(ツツジ科)
フデリンドウ	(リンドウ科)	ミツマタ	(ジンチョウゲ科)
フナバラソウ	(ガガイモ科)	ミナモトソウ	(バラ科)
フモトスマレ	(スマレ科)	ミミナグサ	(ナデシコ科)
フユイチゴ	(バラ科)	ミヤコアザミ	(キク科)
フユノハナワラビ	(ハナワラビ科)	ミヤコグサ	(マメ科)
ヘクソカズラ	(アカネ科)	ムラサキカタバミ	(カタバミ科)
ベニバナボロギク	(キク科)	ムラサキケマン	(ケシ科)
ヘビイチゴ	(バラ科)	ムラサキシキブ	(クマツヅラ科)
ホウチャクソウ	(ユリ科)	メガルカヤ	(イネ科)
ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)	メギ	(メギ科)
ホオノキ	(モクレン科)	メドハギ	(マメ科)
ホクロ	(ラン科)	メヒシバ	(イネ科)
ホソバコガク	(ユキノシタ科)	メヤブソテツ	(ウラボシ科)
ホソバシヨリマシダ	(オシダ科)	モジズリ	(ラン科)
ホタルサイコ	(セリ科)	モチツツジ	(ツツジ科)
ホタルブクロ	(キキョウ科)	モミ	(マツ科)
ボタンヅル	(キンポウゲ科)	モミジイチゴ	(バラ科)
ホトトギス	(ユリ科)	ヤエムグラ	(アカネ科)
マタタビ	(サルナシ科)	ヤクシソウ	(キク科)
マツカゼソウ	(ミカン科)	ヤブガラシ	(ブドウ科)
マツムシソウ	(マツムシソウ科)	ヤブコウジ	(ヤブコウジ科)
マツヨイグサ	(アカバナ科)	ヤブジラミ	(セリ科)
マムシグサ	(サトイモ科)	ヤブソテツ	(ウラボシ科)
マユミ	(ニシキギ科)	ヤブデマリ	(スイカズラ科)
マルバウツギ	(ユキノシタ科)	ヤブニンジン	(セリ科)
マルバマンネングサ	(ベンケイソウ科)	ヤブミョウガ	(ツユクサ科)
マンネンスギ	(ヒカゲノカズラ科)	ヤブラン	(ユリ科)
ミズキ	(ミズキ科)	ヤブレガサ	(キク科)
ミズギボウシ	(ユリ科)	ヤマオダマキ	(キンポウゲ科)
ミズヒキ	(タデ科)	ヤマジノホトトギス	(ユリ科)
ミゾソバ	(タデ科)	ヤマシャクヤク	(キンポウゲ科)
ミツバ	(セリ科)	ヤマシロギク	(キク科)
ミツバアケビ	(アケビ科)	ヤマツツジ	(ツツジ科)
ミツバウツギ	(ミツバウツギ科)	ヤマトグサ	(ヤマトグサ科)
ミツバツチグリ	(バラ科)	ヤマノイモ	(ヤマノイモ科)



ヤマハギ	(マメ科)
ヤマハタザオ	(アブラナ科)
ヤマブキ	(バラ科)
ヤマフジ	(マメ科)
ヤマユリ	(ユリ科)
ユウガギク	(キク科)
ユウスゲ	(ユリ科)
ユキノシタ	(ユキノシタ科)
ユリワサビ	(アブラナ科)
ヨウシュヤマゴボウ	(ヤマゴボウ科)
ヨウラクラン	(ラン科)
ヨツバヒヨドリ	(キク科)
ヨツバムグラ	(アカネ科)
ヨメナ	(キク科)
ヨモギ	(キク科)
リュウノウギク	(キク科)
リュウノヒゲ	(ユリ科)
リョウブ	(リョウブ科)
リンドウ	(リンドウ科)
ルイヨウボタン	(メギ科)
ルリソウ	(ムラサキ科)
ワラビ	(ウラボシ科)
ワレモコウ	(バラ科)

半野の茅間から奥佐折にかけては、天子ヶ岳からの湧水やしほり水の流れる小川がいくつかあり、富士山麓にはない水の豊かな裾野を広げている。

ここは白糸財産区に管理されているので、道路は縦横に走り天子ヶ岳の中腹にまで伸び、植林がなされしっかりと手入れが行われ、すばらしい林となっている。

こんなに管理された中に白花のキクザキイチリンソウをみつけたりジンジソウを谷川の岩場で見たり、今はもう消えてしまったクマガイソウを毎年見に行ったものだった。今でもツチアケビを何本か見つけることができ、チゴユリの群落やキンラン、ギンラン、チャルメルソウを眺められるのはここだけぐらいになった。

白糸地域は川に「芝川のり」という国内で3～4箇所しかない川のりを産し（大倉川ダム下流でも）カタクリの群生地をかかえホソバシヨリマの北限と植物学的には大変楽しい所である。

それがゴルフ場にとの話を書く。

除草剤で養魚場の魚が全滅したニュースはまだ耳にあたらしく、地下水の汚染もよく聞くことだ。草を殺し魚が死ぬという事実の中で人間にいいはずはない。それも一部の人の楽しみのため広い土地を造成し（自然破壊）、鳥や動物を追い出し植物までかたづけ殺す。

人に害なく生物すべてに害なしの保証のもとでのゴルフ場作りはまだ少しは許されるのだが。

人類が限りある地球で生き延びるためには、何をしなければならぬか、しっかり考えなければならぬのではないのでしょうか。

半野の茅間をグループで歩き、植物を眺め森林浴にひたる。また奥佐折の谷川でキャンプ、バーベキューを楽しむ人々がいる。自然に接し明日に生きるための活力を自然より享受することのできる白糸であってほしいと思います。



アカバナ (アカバナ科)

## 9 天神山自然観察の森の植物

天神山自然観察の森は、上井出地区の北部にあり、近くに飢渴川と言われた水のない潤井川の扇状地を東にかかえ、西に白糸滝をひかえた丘陵地で、少し昔は大沢崩れよりの大水に裾を洗われたであろうと思われるところに位置している。

この辺りは海拔が約 500 メートル位であり、また下刈りがなされていないためか、雑草といばらが丘陵全体を覆い、小道から中へ入ることが困難のためか、多くのヤマユリが残されている。よい時期に行くと一茎に数個の花をつけているヤマユリに多く出会う。また、オトギリソウ、キバナアキギリも多くみられ、シモバシラやヤマハッカの群落を見ることができる。

不思議に感じたことは、イカリソウの個体数の多いことだ。今まで火山灰の土質では、イカリソウを見かけなかったが、ここでは数が多い、これは天子山系が近くを走り、そこに生育するイカリソウの種子が飛来したためか。

また、ここは戦後からついさき頃まで、県直轄の地になっていたためか、ヒサカキの太いものを見ることができる。

以下、主な植物をあげる。

アオキ	(ミズキ科)	アベリア	(スイカズラ科)
アカソ	(イラクサ科)	アマチャヅル	(ウリ科)
アカネ	(アカネ科)	アレチノギク	(キク科)
アカマツ	(マツ科)	イカリソウ	(メギ科)
アカメガシワ	(トウダイグサ科)	イケマ	(ガガイモ科)
アキカラマツ	(キンポウゲ科)	イシミカワ	(タデ科)
アキノキリンソウ	(キク科)	イタドリ	(タデ科)
アキノタムラソウ	(シソ科)	イヌガヤ	(イヌガヤ科)
アキノノゲシ	(キク科)	イヌザンショウ	(ミカン科)
アケビ	(アケビ科)	イヌツゲ	(モチノキ科)
アザミ	(キク科)	イノコズチ	(ヒユ科)
アズマヤマアザミ	(キク科)	イノモトソウ	(ウラボシ科)
アセビ	(ツツジ科)	イボタノキ	(モクセイ科)
		イロハカエデ	(カエデ科)
		ウコギ	(ウコギ科)
		ウツギ	(ユキノシタ科)
		ウド	(ウコギ科)
		ウバメガシ	(ブナ科)
		ウバユリ	(ユリ科)
		ウラジロガシ	(ブナ科)
		エゴノキ	(エゴノキ科)
		エニシダ	(マメ科)
		エビヅル	(ブドウ科)
		オオシマザクラ	(バラ科)
		オオバコ	(オオバコ科)
		オオマツヨイグサ	(アカバナ科)
		オカトラノオ	(サクラソウ科)
		オトギリソウ	(オトギリソウ科)
		オトコエシ	(オミナエシ科)
		オミナエシ	(オミナエシ科)
		カクレミノ	(ウコギ科)
		カセンソウ	(キク科)
		カナムグラ	(クワ科)
		カヤ (ススキ)	(イネ科)
		カラスノゴマ	(シナノキ科)
		カラムシ	(イラクサ科)

カワラマツバ	(アカネ科)	サワフタギ	(ハイノキ科)
ガマズミ	(スイカズラ科)	シイノキ	(ブナ科)
キイチゴ	(バラ科)	シオガマギク	(ゴマノハグサ科)
キツタ	(ウコギ科)	シオデ	(ユリ科)
キツネノカミソリ	(ユリ科)	シシウド	(セリ科)
キツネノボタン	(キンポウゲ科)	ジシバリ	(キク科)
キバナアキギリ	(シソ科)	シモツケ	(バラ科)
キブシ	(キブシ科)	シモバシラ	(シソ科)
ギボウシ	(ユリ科)	ジャノヒゲ	(ユリ科)
キンミズヒキ	(バラ科)	シュロソウ	(ユリ科)
キンモクセイ	(モクセイ科)	シラヤマギク	(キク科)
クサギ	(クマツヅラ科)	シロダモ	(クスノキ科)
クサレダマ	(サクラソウ科)	スギ	(スギ科)
クズ	(マメ科)	センニンソウ	(キンポウゲ科)
クヌギ	(ブナ科)	ゼンマイ	(ゼンマイ科)
クマシデ	(カバノキ科)	ダイコンソウ	(バラ科)
クマヤナギ	(クロウメモドキ科)	タガネソウ	(カヤツリグサ科)
グミ	(グミ科)	タケニグサ	(ケシ科)
クリ	(ブナ科)	タチツボスミレ	(スミレ科)
クルマバナ	(シソ科)	タニウツギ	(スイカズラ科)
クロモジ	(クスノキ科)	タムラソウ	(キク科)
クワ	(クワ科)	タラノキ	(ウコギ科)
ゲンノショウコ	(フウロソウ科)	チダケサシ	(ユキノシタ科)
コウゾ	(クワ科)	チチコグサモドキ	(キク科)
コウゾリナ	(キク科)	チヂミザサ	(イネ科)
コウヤマキ	(スギ科)	ツノハシバミ	(カバノキ科)
コオニユリ	(ユリ科)	ツユクサ	(ツユクサ科)
コゴメウツギ	(バラ科)	ツリガネニンジン	(キキョウ科)
コバギボウシ	(ユリ科)	ツリフネソウ	(ツリフネソウ科)
コボタンヅル	(キンポウゲ科)	ツルニンジン	(キキョウ科)
コマツナギ	(マメ科)	テリハノイバラ	(バラ科)
サイハイラン	(ラン科)	テンニンソウ	(シソ科)
サザンカ	(ツバキ科)	トウダイグサ	(トウダイグサ科)
サラシナショウマ	(キンポウゲ科)	ドウダンツツジ	(ツツジ科)
サルトリイバラ	(ユリ科)	ドクダミ	(ドクダミ科)
サワヒヨドリ	(キク科)	トコロ	(ヤマノイモ科)

トリカブト	(キンポウゲ科)	ホウチャクソウ	(ユリ科)
ナワシロイチゴ	(バラ科)	ホオノキ	(モクレン科)
ナンテン	(メギ科)	ホタルブクロ	(キキョウ科)
ナンテンハギ	(マメ科)	ボタンヅル	(キンポウゲ科)
ニガイチゴ	(バラ科)	マサキ	(ニシキギ科)
ニガナ	(キク科)	マツカゼソウ	(ミカン科)
ニシキギ	(ニシキギ科)	マツヨイグサ	(アカバナ科)
ヌルデ	(ウルシ科)	マムシグサ	(サトイモ科)
ネコハギ	(マメ科)	マメザクラ	(バラ科)
ネズミモチ	(モクセイ科)	マユミ	(ニシキギ科)
ネムノキ	(マメ科)	ミズキ	(ミズキ科)
ノイバラ	(バラ科)	ミズヒキ	(タデ科)
ノウルシ	(トウダイグサ科)	ミツバ	(セリ科)
ノカンゾウ	(ユリ科)	ミツバウツギ	(ミツバウツギ科)
ノコンギク	(キク科)	ミツマタ	(ジンチョウゲ科)
ノダイオウ	(タデ科)	ムラサキシキブ	(クマツヅラ科)
ノダケ	(セリ科)	モミ	(マツ科)
ノブドウ	(ブドウ科)	ヤクシソウ	(キク科)
ハナイカダ	(ミズキ科)	ヤブガラシ	(ブドウ科)
ハナズオウ	(マメ科)	ヤブタデ	(タデ科)
ハナミズキ	(ミズキ科)	ヤブタヒラコ	(キク科)
バライチゴ	(バラ科)	ヤブツバキ	(ツバキ科)
ハンショウヅル	(キンポウゲ科)	ヤブマオ	(イラクサ科)
ヒサカキ	(ツバキ科)	ヤブレガサ	(キク科)
ヒノキ	(ヒノキ科)	ヤマアザミ	(キク科)
ヒメシャラ	(ツバキ科)	ヤマザクラ	(バラ科)
ヒメジョオン	(キク科)	ヤマシロギク	(キク科)
ヒヨドリバナ	(キク科)	ヤマツツジ	(ツツジ科)
ヒルガオ	(ヒルガオ科)	ヤマニガナ	(キク科)
フキ	(キク科)	ヤマノイモ	(ヤマノイモ科)
ブタクサ	(キク科)	ヤマハッカ	(シソ科)
フタバハギ	(マメ科)	ヤマブキ	(バラ科)
フタリシズカ	(センリョウ科)	ヤマボウシ	(ミズキ科)
ヘクソカズラ	(アカネ科)	ヤマモミジ	(カエデ科)
ヘビノネゴザ	(ウラボシ科)	ヤマユリ	(ユリ科)
ヘラバヒメジョオン	(キク科)	ヤマヨメナ	(キク科)



ユウガギク	(キク科)
ユキヤナギ	(バラ科)
ヨウシュヤマゴボウ	(ヤマゴボウ科)
ヨツバムグラ	(アカネ科)
ヨメナ	(キク科)
ヨモギ	(キク科)
リンドウ	(リンドウ科)
レンギョウ	(モクセイ科)
ワレモコウ	(バラ科)

調査をして見て、珍しいものは見当たらないが、植物の種類は多くあるのに気がついた。今までは桜母樹園として県の管理下にあり以前はこの丘陵も桜見物の人で賑わったと聞かすが、いつ頃からか訪れる人もなくなつたため、ヤマユリなど他ではみられない見事さで残っている。

ここは、多くの人に見せると同時に富士宮の財産として残したいところである。



イカリソウ (メギ科)

## 10 天母山の植物

標高 480 m, シバ群落とサクラを主体とした園地を中心に、スギ、ヒノキ植林がこれを取り囲み、タブノキ、モミの単木なども多く見られる。

野草にも特異なものは見られないが、クサボケの小群落が広い地域に広がり、4～5月は真紅の花があちこちで見られる。

以下、主な植物をあげる。

アキノキリンソウ	(キク科)
アキノタムラソウ	(シソ科)
アブラススキ	(イネ科)
イヌタデ	(タデ科)
イヌトウバナ	(キク科)
イノコズチ	(ヒユ科)
ウツボグサ	(シソ科)
ウメバチソウ	(ユキノシタ科)
ウワバミソウ	(イラクサ科)
エノコログサ	(イネ科)
カラマツソウ	(キンポウゲ科)
カラムシ	(イラクサ科)
ガンクビソウ	(キク科)
キッコウハグマ	(キク科)
キツネノマゴ	(キツネノマゴ科)
キンミズヒキ	(バラ科)
ギンリョウソウ	(イチヤクソウ科)
クサボケ	(バラ科)
クズ	(マメ科)
ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
コウゾリナ	(キク科)
コキンバイザサ	(キンバイザサ科)
サラシナショウマ	(キンポウゲ科)
サワヒヨドリ	(キク科)
シュロソウ	(ユリ科)
シラヤマギク	(キク科)
ススキ	(イネ科)

センブリ	(リンドウ科)
センボンヤリ	(キク科)
ソメイヨシノ	(バラ科)
タブノキ	(クスノキ科)
チカラシバ	(イネ科)
チヂミザサ	(イネ科)
ツユクサ	(ツユクサ科)
ツリガネニンジン	(キキョウ科)
ツルボ	(ユリ科)
ツルリンドウ	(リンドウ科)
ナンテンハギ	(マメ科)
ナンバンギセル	(ハマウツボ科)
ヌスビトハギ	(マメ科)
ノコンギク	(キク科)
ノダケ	(セリ科)
ノハラアザミ	(キク科)
ノボロギク	(キク科)
ハキダメギク	(キク科)
ヒガンバナ	(ヒガンバナ科)
ヒヨドリバナ	(キク科)
フユノハナワラビ	(ハナヤスリ科)
ボケ	(バラ科)
マツカゼソウ	(ミカン科)
ミズヒキ	(タデ科)
メガルカヤ	(イネ科)
メナモミ	(キク科)
モミ	(マツ科)
ヤクシソウ	(キク科)
ヤブマオ	(イラクサ科)
ヤマラッキョウ	(ユリ科)
ユウガギク	(キク科)
リンドウ	(リンドウ科)
ワレモコウ	(バラ科)



シュロソウ (ユリ科)

## 11 富士山新五合より遊歩道の植物

富士山新五合での植物観賞は7月中旬から8月中旬頃までが最高である。運よくいくとツバメオモトの白い花とヒメイワカガミのピンクの花の群落を見ることができる。また、新六合では、イワシモツケを、新七合では室の前の石垣下でヤナギランの美しさに出会うことができる。

以下、主な植物をあげる。

イタドリ	(タデ科)
イワオウギ	(マメ科)
イワシモツケ	(バラ科)
イワツメクサ	(ナデシコ科)
イワヒゲ	(ツツジ科)
ウラハグサ	(イネ科)
オンタデ	(タデ科)
カラマツ	(マツ科)
キソチドリ	(ラン科)
ギンリョウソウ	(イチヤクソウ科)
キンレイカ	(オミナエシ科)
クルマユリ	(ユリ科)

コイチヤクソウ	(イチヤクソウ科)
コケモモ	(ツツジ科)
コタヌキラン	(カヤツリグサ科)
コバノイチヤクソウ	(イチヤクソウ科)
シオガマギク	(ゴマノハグサ科)
シャクジョウソウ	(イチヤクソウ科)
シラビソ	(モミ科)
タイツリオウギ	(マメ科)
タカネアオヤギソウ	(ユリ科)
タカネイワヤナギ	(ヤナギ科)
タカネグンナイフウロ	(フウロソウ科)
タカネニガナ	(キク科)
タカネバラ	(バラ科)
ダケカンバ	(カバノキ科)
ツバメオモト	(ユリ科)
トウヒ	(モミ科)
ナナカマド	(バラ科)
ハナヒリノキ	(ツツジ科)
ヒメイワカガミ	(イワウメ科)
ヒメシャジン	(キキョウ科)
フジアカショウマ	(ユキノシタ科)
フジアザミ	(キク科)
フジツリガネツツジ	(ツツジ科)
フジハタザオ	(アブラナ科)
フタバラン	(ラン科)
ブナ	(ブナ科)
ベニバナイチヤクソウ	(イチヤクソウ科)
マイヅルソウ	(ユリ科)
ミヤマアキノキリンソウ	(キク科)
ミヤマオトコヨモギ	(キク科)
ミヤマゼンコ	(セリ科)
ミヤマハンノキ	(カバノキ科)
ミヤマハンショウヅル	(キンポウゲ科)
ミヤマヤナギ	(ヤナギ科)
ムラサキモメンヅル	(マメ科)
メイゲツソウ	(タデ科)

ヤナギラン	(アカバナ科)
ヤハズヒゴタイ	(キク科)
ヤマホウコ	(キク科)
ヤマホタルブクロ	(キキョウ科)



タイツリオウギ (マメ科)



ヒメシャジン (キキョウ科)

## 12 西白塚周辺の植物

### a 夏に見られる植物

梅雨の晴れ間を見て、遊歩道から林内に入る。歩道際の明るい所には、ヤマアジサイ、ホソバコガク、ナルコユリなど花をつけているのが見られた。

新緑の林内では、可憐な姿のシロガネソウ、背の高いオタカラコウ、ウバユリが、木本類では梢に白い花をつけるヤマボウシ、ツルアジサイなどが見られた。

以下、主な植物をあげる。

アオмамシグサ	(サトイモ科)	ツクバネウツギ	(スイカズラ科)
アカネ	(アカネ科)	ツルアジサイ	(ユキノシタ科)
アカショウマ	(ユキノシタ科)	トチバニンジン	(ウコギ科)
アケボノソウ	(リンドウ科)	トネリコ	(モクセイ科)
アズキナシ	(バラ科)	トリカブト	(キンポウゲ科)
アブラチャン	(クスノキ科)	ナルコユリ	(ユリ科)
アマドコロ	(ユリ科)	ニガナ	(キク科)
イケマ	(ガガイモ科)	ニガホウズキ	(ナス科)
イタドリ	(タデ科)	ニシキウツギ	(スイカズラ科)
イヌトウバナ	(シソ科)	ニワトコ	(スイカズラ科)
イボタノキ	(モクセイ科)	ネコノメソウ	(ユキノシタ科)
イワガラミ	(ユキノシタ科)	ノイバラ	(バラ科)
ウグイスカグラ	(スイカズラ科)	バイケイソウ	(ユリ科)
ウツギ	(ユキノシタ科)	ハコネウツギ	(スイカズラ科)
ウバユリ	(ユリ科)	ハリギリ	(ウコギ科)
エゴノキ	(エゴノキ科)	ハンゴンソウ	(キク科)
エンレイソウ	(ユリ科)	ハンショウヅル	(キンポウゲ科)
オオカメノキ	(スイカズラ科)	ヒメシャラ	(ツバキ科)
オタカラコウ	(キク科)	ヒメヘビイチゴ	(バラ科)
オニシバリ	(ジンチョウゲ科)	フジテンニンソウ	(シソ科)
カツラ	(カツラ科)	フタリシズカ	(センリョウ科)
カラマツ	(マツ科)	ブナ	(ブナ科)
キハダ	(ミカン科)	ホソバコガク	(ユキノシタ科)
ククルマムグラ	(アカネ科)	мамシグサ	(サトイモ科)
コウチワカエデ	(カエデ科)	ミズナ	(イラクサ科)
コウモリソウ	(キク科)	ミズナラ	(ブナ科)
コゴメウツギ	(バラ科)	ミズヒキ	(タデ科)
ゴマギ	(スイカズラ科)	ミツバウツギ	(ミツバウツギ科)
サワグルミ	(クルミ科)	ミツマタ	(ジンチョウゲ科)
サンショウバラ	(バラ科)	ミヤマエンレイソウ	(ユリ科)
ジシバリ	(キク科)	ムラサキサギゴケ	(ゴマノハグサ科)
シロカネソウ	(キンポウゲ科)	メギ	(メギ科)
シロバナノヘビイチゴ	(バラ科)	メタカラコウ	(キク科)
セントウソウ	(セリ科)	モミ	(マツ科)
チドリノキ	(カエデ科)	モミジガサ	(キク科)
		ヤブデマリ	(スイカズラ科)



ヤマアジサイ	(ユキノシタ科)
ヤマトリカブト	(キンポウゲ科)
ヤマハタザオ	(アブラナ科)
ヤマブドウ	(ブドウ科)
ヤマボウシ	(ミズキ科)
ワニグチソウ	(ユリ科)



サンショウバラ (バラ科)

#### b 秋に見られる植物

紅葉のたよりに誘われて山中を歩く。道端にはノコンギクなど菊の仲間が多い。遊歩道から林にはいっていくと、レイジンソウやヤマトリカブトの花が見られた。

木本ではサンショウバラの花やナナカマド、ガマズミなどの赤い実が目立つ。

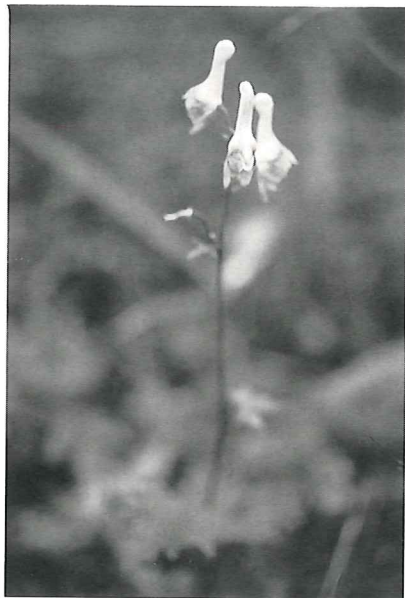
9～10月は、きのこ狩りで多くの人が山を歩くためか、林内は荒らされている。

以下、主な植物をあげる。

アカネ	(アカネ科)
アケボノソウ	(リンドウ科)
アズマヤマアザミ	(キク科)
イケマ	(ガガイモ科)
イタドリ	(タデ科)
イヌコウジュ	(シソ科)
イヌヤマハッカ	(シソ科)
ウナギヅル	(タデ科)

ウバユリ	(ユリ科)
ウワバミソウ	(イラクサ科)
エンレイソウ	(ユリ科)
オオバコ	(オオバコ科)
オタカラコウ	(キク科)
オトギリソウ	(オトギリソウ科)
オトコエシ	(オミナエシ科)
ガマズミ	(スイカズラ科)
カラマツ	(マツ科)
ガンクビソウ	(キク科)
キンミズヒキ	(バラ科)
クワクサ	(クワ科)
ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
コウゾリナ	(キク科)
コバイケイソウ	(ユリ科)
コフウロ	(フウロソウ科)
コブナグサ	(イネ科)
コボタンヅル	(キンポウゲ科)
サラシナショウマ	(キンポウゲ科)
サンショウバラ	(バラ科)
シシウド	(セリ科)
セントウソウ	(セリ科)
センニンソウ	(キンポウゲ科)
ダイコンソウ	(バラ科)
チドメグサ	(セリ科)
ツリフネソウ	(ツリフネソウ科)
テンニンソウ	(シソ科)
トチバニンジン	(ウコギ科)
ナナカマド	(バラ科)
ノコンギク	(キク科)
バライチゴ	(バラ科)
ヒメジョオン	(キク科)
フタリシズカ	(センリョウ科)
マムシグサ	(サトイモ科)
ミズヒキ	(タデ科)
ミゾソバ	(タデ科)

ミナモトソウ	(バラ科)
ミヤマタニソバ	(タデ科)
ミヤマムグラ	(アカネ科)
モミジガサ	(キク科)
ヤマシャクヤク	(キンポウゲ科)
ヤマシロギク	(キク科)
ヤマトリカブト	(キンポウゲ科)
ヤマユリ	(ユリ科)
ヨモギ	(キク科)
レイジンソウ	(キンポウゲ科)



レイジンソウ (キンポウゲ科)

### 13 栗倉周辺の植物

標高 400 m から 600 m の富士裾野地域の一部を占める村山地区は、水利や土壌条件の関係から畑耕作地が多い。その大部分はスギ、ヒノキ植林で占められ、古くからの集落や神社には常緑広葉樹を中心とした屋敷林、社寺林がみられる。

調査地である栗倉分校周辺では、春になると境界林の下にサクラソウの小群落が見られ、キンラン、ギンランやエビネなども数少ないが残されている。

以下は当地で5月に調査した植物である。

アカツメクサ	(マメ科)
アカネ	(アカネ科)
アヤメ	(アヤメ科)
イタドリ	(タデ科)
イヌガラシ	(アブラナ科)
イヌゴマ	(シソ科)
イラクサ	(イラクサ科)
ウグイスカグラ	(スイカズラ科)
ウマノアシガタ	(キンポウゲ科)
エビネ	(ラン科)
オニタビラコ	(キク科)
オランダミミナグサ	(ナデシコ科)
カキドオシ	(シソ科)
カタバミ	(カタバミ科)
カラスノエンドウ	(マメ科)
カラスビシャク	(サトイモ科)
カンサイタンポポ	(キク科)
キジカクシ	(ユリ科)
キュウリグサ	(ムラサキ科)
キランソウ	(シソ科)
キンミズヒキ	(バラ科)
キンラン	(ラン科)
ギンラン	(ラン科)
クサボケ	(バラ科)
クズ	(マメ科)
ゲンゲ	(マメ科)
コウヤワラビ	(ウラボシ科)
コナスビ	(サクラソウ科)
サクラソウ	(サクラソウ科)
ササバギンラン	(ラン科)
サワフタギ	(カキノキ科)
シオデ	(ユリ科)
シシウド	(セリ科)
ジシバリ	(キク科)
シュロソウ	(ユリ科)

シラヤマギク	(キク科)
シロツメクサ	(マメ科)
ジロポウエンゴサク	(ケシ科)
セイヨウタンポポ	(キク科)
センニンソウ	(キンポウゲ科)
ダイコンソウ	(バラ科)
タチイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
タツナミソウ	(シソ科)
タラノキ	(ウコギ科)
チガヤ	(イネ科)
ツボスミレ	(スミレ科)
ツユクサ	(ツユクサ科)
ツリガネニンジン	(キキョウ科)
ツレサギソウ	(ラン科)
トウカイタンポポ	(キク科)
ナズナ	(アブラナ科)
ナツトウダイ	(トウダイグサ科)
ナルコユリ	(ユリ科)
ニガナ	(キク科)
ニリンソウ	(キンポウゲ科)
ノゲシ	(キク科)
ノミノフスマ	(ナデシコ科)
ハコベ	(ナデシコ科)
ハナイカダ	(ミズキ科)
ハルジオン	(キク科)
ヒメジョオン	(キク科)
ヒメスイバ	(タデ科)
フタリシズカ	(センリョウ科)
ヘクソカズラ	(アカネ科)
ヘビイチゴ	(バラ科)
ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)
ハウチャクソウ	(ユリ科)
マムシグサ	(サトイモ科)
ミズキ	(ミズキ科)
ミズヒキ	(タデ科)
ミツバツチグリ	(バラ科)

ムラサキケマン	(ケシ科)
ムラサキサギゴケ	(ゴマノハグサ科)
ヤエムグラ	(アカネ科)
ヤクシソウ	(キク科)
ヤブタバコ	(キク科)
ヤマドリゼンマイ	(ゼンマイ科)
ユウガギク	(キク科)



ヤマドリゼンマイ (ゼンマイ科)

#### 14 富士宮北高校西側から富士宮西高校南側の畑の周辺の植物

この辺りはよく手入れされた畑が広がるところだが、雑木林もあり土手は石積みされていないために種々の花を見ることができる。また、畑の草々が目につくところでもあり園芸種が野生化したものも見える。

以下、主な植物をあげる。

アオビユ	(ヒユ科)
アカネ	(アカネ科)
アキノタムラソウ	(シソ科)
アサガオ	(ヒルガオ科)
アメリカセンダングサ	(キク科)
アラゲハンゴンソウ	(キク科)
アレチノギク	(キク科)
イシミカワ	(タデ科)

イタドリ	(タデ科)	フジアザミ	(キク科)
イノコズチ	(ヒユ科)	ヘクソカズラ	(アカネ科)
ウド	(ウコギ科)	ベニバナボロギク	(キク科)
オオケタデ	(タデ科)	ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)
オオバカタバミ	(カタバミ科)	ボントクタデ	(タデ科)
オミナエシ	(オミナエシ科)	マキエハギ	(マメ科)
カタバミ	(カタバミ科)	マツ	(マツ科)
カナムグラ	(クワ科)	ミズヒキ	(タデ科)
カワラケツメイ	(マメ科)	ミソハギ	(ミソハギ科)
キツネノマゴ	(キツネノマゴ科)	メマツヨイグサ	(アカバナ科)
キンミズヒキ	(バラ科)	ヤエヤマブキ	(バラ科)
クヌギ	(ブナ科)	ヤブガラシ	(ブドウ科)
ゲンノショウコ	(フウロソウ科)	ヤブタデ	(タデ科)
コナラ	(ブナ科)	ヤブラン	(ユリ科)
コミカンソウ	(トウダイグサ科)	ヤマホウコ	(キク科)
ススキ	(イネ科)	ヨウシュヤマゴボウ	(ヤマゴボウ科)
スベリヒユ	(スベリヒユ科)	ヨメナ	(キク科)
セイヨウタンポポ	(キク科)	ヨモギ	(キク科)
チカラシバ	(イネ科)	ワレモコウ	(バラ科)
チチコグサモドキ	(キク科)		
ツクミソウ	(アカバナ科)		
ツククサ	(ツククサ科)		
ツリガネニンジン	(キキョウ科)		
ツルボ	(ユリ科)		
テンニンソウ	(シソ科)		
トキワハゼ	(ゴマノハグサ科)		
ナンバンギセル	(ハマウツボ科)		
ヌスビトハギ	(マメ科)		
ノゲシ	(キク科)		
ノハギ	(マメ科)		
ハキダメギク	(キク科)		
ハグロソウ	(キツネノマゴ科)		
ヒノキ	(ヒノキ科)		
ヒメクズ	(マメ科)		
ヒメジョオン	(キク科)		
ヒヨドリバナ	(キク科)		



キツネノマゴ (キツネノマゴ科)



## 15 人穴小学校周辺の植物

人穴地域の南側に位置しているこの辺りは、標高650 m位であり一帯は雑木林が分布している。林の内で数種のスミレを見掛ける。

以下、主な植物をあげる。

アオマムシグサ	(サトイモ科)
アカネ	(アカネ科)
アケビ	(アケビ科)
アヤメ	(アヤメ科)
イカリソウ	(メギ科)
イタドリ	(タデ科)
イワタバコ	(イワタバコ科)
エイザンスミレ	(スミレ科)
エゾタンポポ	(キク科)
カキドオシ	(シソ科)
カナウツギ	(バラ科)
キジムシロ	(バラ科)
キンラン	(ラン科)
クサボケ	(バラ科)
クロモジ	(クスノキ科)
サラシナショウマ	(キンポウゲ科)
サルトリイバラ	(ユリ科)
サクラソウ	(サクラソウ科)
シオデ	(ユリ科)
ジシバリ	(キク科)
ジロボウエンゴサク	(ケシ科)
スギナ	(トクサ科)
スズメノテッポウ	(イネ科)
スミレ	(スミレ科)
ズミ	(バラ科)
セイヨウタンポポ	(キク科)
ゼンマイ	(ゼンマイ科)
タチツボスミレ	(スミレ科)
タニウツギ	(スイカズラ科)
チゴユリ	(ユリ科)

ツノハシバミ	(カバノキ科)
ツボスミレ	(スミレ科)
ツリバナ	(ニシキギ科)
ツリフネソウ	(ツリフネソウ科)
トチバニンジン	(ウコギ科)
トリカブト	(キンポウゲ科)
ナズナ	(アブラナ科)
ニリンソウ	(キンポウゲ科)
ニワトコ	(スイカズラ科)
ハナイカダ	(ミズキ科)
バライチゴ	(バラ科)
ヒトリシズカ	(センリョウ科)
フシグロセンノウ	(ナデシコ科)
フモトスミレ	(スミレ科)
ヘビイチゴ	(バラ科)
ホウチャクソウ	(ユリ科)
ホトケノザ	(シソ科)
ミズオトギリ	(オトギリソウ科)
ミズゴケ	(蘚類)
ミツバアケビ	(アケビ科)
ミバツツジ	(ツツジ科)
ムラサキケマン	(ケシ科)
ムラサキサギゴケ	(ゴマノハグサ科)
モミジイチゴ	(バラ科)
モミジガサ	(キク科)
ヤマウコギ	(ウコギ科)
ヤマツツジ	(ツツジ科)
ヤマフジ	(マメ科)
ヤマホトトギス	(ユリ科)
ヤブレガサ	(キク科)
ワニグチソウ	(ユリ科)
ワラビ	(ウラボウシ科)



ハナイカダ (ミズキ科)



ワニグチソウ (ユリ科)

## 16 白尾山 (白尾台) の植物

白尾山は市街地に近く、市民の憩うところであり、最近は公園化も進み大分整備されてきている。下記の植物は昭和 63 年度から平成 4 年度にかけて調査したものである。

以下、主な植物をあげる。

アオキ	(ミズキ科)
アオмамシグサ	(サトイモ科)
アカネ	(アカネ科)
アカメガシワ	(トウダイグサ科)
アキカラマツ	(キンポウゲ科)
アキノキリンソウ	(キク科)
アキノタムラソウ	(シソ科)

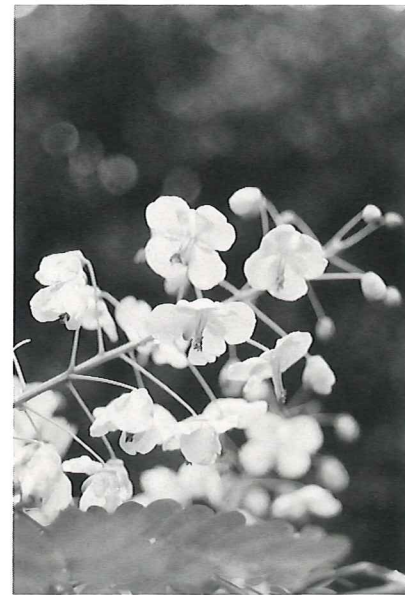
アブラギリ	(トウダイグサ科)
アマドコロ	(ユリ科)
アメリカハナミズキ	(ミズキ科)
アレチノギク	(キク科)
アレチマツヨイグサ	(アカバナ科)
イヌガラシ	(アブラナ科)
イロハカエデ	(カエデ科)
ウツボグサ	(シソ科)
ウラシマソウ	(サトイモ科)
ウルシ	(ウルシ科)
エゴノキ	(エゴノキ科)
エノキ	(ニレ科)
オカトラノオ	(サクラソウ科)
オトギリソウ	(オトギリソウ科)
オトコエシ	(オミナエシ科)
オトコヨモギ	(キク科)
オニタビラコ	(キク科)
カキドオシ	(シソ科)
カタバミ	(カタバミ科)
カニクサ	(カニクサ科)
ガマズミ	(スイカズラ科)
カラムシ	(イラクサ科)
ガンクビソウ	(キク科)
キブシ	(キブシ科)
ギボウシ	(ユリ科)
キランソウ	(シソ科)
キンミズヒキ	(バラ科)
クサギ	(クマツヅラ科)
クズ	(マメ科)
クヌギ	(ブナ科)
クララ	(マメ科)
クリ	(ブナ科)
クロモジ	(クスノキ科)
ゲンノショウコ	(フウロソウ科)
コウゾ	(クワ科)
コウゾリナ	(キク科)

コウヤボウキ	(キク科)	トウカエデ	(カエデ科)
コオニユリ	(ユリ科)	トウダイグサ	(トウダイグサ科)
コゴメウツギ	(バラ科)	トウワタ	(ガガイモ科)
コナスビ	(サクラソウ科)	ドクダミ	(ドクダミ科)
コナラ	(ブナ科)	トコロ	(ヤマノイモ科)
コマツナギ	(マメ科)	トリアシショウマ	(ユキノシタ科)
ゴンズイ	(ミツバウツギ科)	ナズナ	(アブラナ科)
サジガクビソウ	(キク科)	ナツトウダイ	(トウダイグサ科)
サネカズラ	(モクレン科)	ナルコユリ	(ユリ科)
サルトリイバラ	(ユリ科)	ニガイチゴ	(バラ科)
サワフタギ	(ハイノキ科)	ニシキギ	(ニシキギ科)
シオデ	(ユリ科)	ニワゼキショウ	(アヤメ科)
ジシバリ	(キク科)	ネムノキ	(マメ科)
シャガ	(アヤメ科)	ノアザミ	(キク科)
ジャケツイバラ	(マメ科)	ノカンゾウ	(ユリ科)
シュロソウ	(ユリ科)	ノゲシ	(キク科)
シラヤマギク	(キク科)	ノダケ	(セリ科)
シロツメクサ	(マメ科)	ノボロギク	(キク科)
スイカズラ	(スイカズラ科)	ハコベ	(ナデシコ科)
ススキ	(イネ科)	ハナイカダ	(ミズキ科)
スズメノヤリ	(イグサ科)	バライチゴ	(バラ科)
センニンソウ	(キンポウゲ科)	ハルジオン	(キク科)
ゼンマイ	(ゼンマイ科)	ハンショウヅル	(キンポウゲ科)
タガネソウ	(カヤツリグサ科)	ヒキヨモギ	(ゴマノハグサ科)
タケニグサ	(ケシ科)	ヒサカキ	(ツバキ科)
タチツボスミレ	(スミレ科)	ヒメジョオン	(キク科)
タツナミソウ	(シソ科)	ヒメヤブラン	(ユリ科)
タネツケバナ	(アブラナ科)	ヒヨドリバナ	(キク科)
タムラソウ	(キク科)	フジザクラ	(バラ科)
タラノキ	(ウコギ科)	フナバラソウ	(ガガイモ科)
タンポポ	(キク科)	フユイチゴ	(バラ科)
チチコグサ	(キク科)	ヘクソカズラ	(アカネ科)
チドメグサ	(セリ科)	ホウチャクソウ	(ユリ科)
ツリガネニンジン	(キキョウ科)	ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)
ツルボ	(ユリ科)	ホオノキ	(モクレン科)
テンニンソウ	(シソ科)	ホトケノザ	(シソ科)

ホトトギス	(ユリ科)
マツカゼソウ	(ミカン科)
マムシグサ	(サトイモ科)
マユミ	(ニシキギ科)
ミツバツチグリ	(バラ科)
ミツバツツジ	(ツツジ科)
ムラサキサギゴケ	(ゴマノハグサ科)
ムラサキシキブ	(クマツヅラ科)
メドハギ	(マメ科)
モクセイ	(モクセイ科)
モミジイチゴ	(バラ科)
ヤエムグラ	(アカネ科)
ヤクシソウ	(キク科)
ヤブコウジ	(ヤブコウジ科)
ヤブミョウガ	(ツユクサ科)
ヤブラン	(ユリ科)
ヤブレガサ	(キク科)
ヤマツツジ	(ツツジ科)
ヤマハギ	(マメ科)
ヤマブキ	(バラ科)
ヤマボウシ	(ミズキ科)
ヤマノイモ	(ヤマノイモ科)
ヤマユリ	(ユリ科)
ヨメナ	(キク科)
ヨモギ	(キク科)
リュウノウギク	(キク科)
リュウノヒゲ	(ユリ科)
リンドウ	(リンドウ科)
ワラビ	(ウラボシ科)
ワレモコウ	(バラ科)



ヨメナ (キク科)



ジャケツイバラ (マメ科)



## 17 潤井川両岸（青見橋から富丘橋まで） の植物

この地域は、富丘小学校から第四中学校の西側でジョギングコースなども整備されている約1 kmに渡る潤井川の両岸である。

以下、主な植物をあげる。

アオビユ	(ヒユ科)	エノキ	(ニレ科)
アオゲイトウ	(ヒユ科)	エノキグサ	(トウダイグサ科)
アカザ	(アカザ科)	エノコログサ	(イネ科)
アカツメクサ	(マメ科)	オオアワダチソウ	(キク科)
アカマツ	(マツ科)	オオイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
アカメガシワ	(トウダイグサ科)	オオジシバリ	(キク科)
アカソ	(イラクサ科)	オオニシキソウ	(トウダイグサ科)
アキノノゲシ	(キク科)	オオバコ	(オオバコ科)
アキノタムラソウ	(シソ科)	オオフサモ	(アリノトウグサ科)
アキカラマツ	(キンポウゲ科)	オオマツヨイグサ	(アカバナ科)
アケビ	(アケビ科)	オカトラノオ	(サクラソウ科)
アジサイ	(ユキノシタ科)	オキナグサ	(キンポウゲ科)
アレチウリ	(ウリ科)	オトギリソウ	(オトギリソウ科)
アレチノギク	(キク科)	オドリコソウ	(シソ科)
アメリカフウロ	(フウロソウ科)	オナモミ	(キク科)
イケマ	(ガガイモ科)	オニタビラコ	(キク科)
イシミカワ	(タデ科)	オヒシバ	(イネ科)
イタドリ	(タデ科)	オランダガラシ	(アブラナ科)
イチジク	(クワ科)	オランダミミナグサ	(ナデシコ科)
イヌガラシ	(アブラナ科)	カキドオシ	(シソ科)
イヌタデ	(タデ科)	カスマグサ	(マメ科)
イヌコウジュ	(シソ科)	カタバミ	(カタバミ科)
イヌドクサ	(トクサ科)	カナムグラ	(クワ科)
イノコズチ	(ヒユ科)	カモジグサ	(イネ科)
ウシハコベ	(ナデシコ科)	カヤツリグサ	(カヤツリグサ科)
ウツギ	(ユキノシタ科)	カラスノエンドウ	(マメ科)
ウマノアシガタ	(キンポウゲ科)	カラスノゴマ	(シナノキ科)
ウメモドキ	(モチノキ科)	カラムシ (ヤマソ)	(イラクサ科)
ウラシマソウ	(サトイモ科)	カワラヨモギ	(キク科)
		カントウタンポポ	(キク科)
		カントウヨメナ	(キク科)
		キュウリグサ	(ムラサキ科)
		ギシギシ	(タデ科)
		キツネノカミソリ	(ヒガンバナ科)
		キツネノボタン	(キンポウゲ科)
		キツネノマゴ	(キツネノマゴ科)

キツリフネ	(ツリフネソウ科)	シロツメクサ	(マメ科)
ギボウシ	(ユリ科)	シロバナセンダングサ	(キク科)
キランソウ	(シソ科)	ジロボウエンゴサク	(ケシ科)
キンエノコロ	(イネ科)	スイカズラ	(スイカズラ科)
キンミズヒキ	(バラ科)	スイバ	(タデ科)
クコ	(ナス科)	スギナ	(トクサ科)
クサイチゴ	(バラ科)	ススキ	(イネ科)
クサノオウ	(ケシ科)	スズダケ	(イネ科)
クサボタン	(キンポウゲ科)	スズメウリ	(ウリ科)
クズ	(マメ科)	スズメノエンドウ	(マメ科)
クヌギ	(ブナ科)	スズメノカタビラ	(イネ科)
クルマバナ	(シソ科)	スズメノテッポウ	(イネ科)
クロマツ	(マツ科)	スズメノヒエ	(イネ科)
クワ	(クワ科)	スズメノヤリ	(イグサ科)
ゲンゲ (レンゲ)	(マメ科)	セイヨウタンポポ	(キク科)
ゲンノショウコ	(フウロソウ科)	セリ	(セリ科)
コアカソ	(イラクサ科)	センニンソウ	(キンポウゲ科)
コウゾ	(クワ科)	ソクズ	(スイカズラ科)
コウヤワラビ	(オシダ科)	ソメイヨシノ	(バラ科)
コオニユリ	(ユリ科)	タケニグサ	(ケシ科)
コゴメウツギ	(バラ科)	タチイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
コセンダングサ	(キク科)	タチツボスミレ	(スミレ科)
コデマリ	(バラ科)	タニウツギ	(スイカズラ科)
コニシキソウ	(トウダイグサ科)	タネツケバナ	(アブラナ科)
コブナグサ	(イネ科)	チガヤ	(イネ科)
コマツナギ	(マメ科)	チカラシバ	(イネ科)
コマツヨイグサ	(アカバナ科)	チチコグサモドキ	(キク科)
コミカンソウ	(トウダイグサ科)	チヂミザサ	(イネ科)
サザンカ	(ツバキ科)	ツクシ	(トクサ科)
サトザクラ	(バラ科)	ツバナ	(イネ科)
シオザキソウ	(キク科)	ツユクサ	(ツユクサ科)
シダレモモ	(バラ科)	ツリガネニンジン	(キキョウ科)
シャガ	(アヤメ科)	ツルウメモドキ	(ニシキギ科)
ジュズダマ	(イネ科)	ツルフジバカマ	(マメ科)
シュロ	(ヤシ科)	ツルボ	(ユリ科)
シロザ	(アカザ科)	ツルマオ	(イラクサ科)

ツルヨシ	(イネ科)	ヒメジソ	(シソ科)
トウカイタンポポ	(キク科)	ヒメスイバ	(タデ科)
ドクダミ	(ドクダミ科)	ヒメムカシヨモギ	(キク科)
トコロ	(ヤマノイモ科)	ヒメヤブラン	(ユリ科)
トベラ	(トベラ科)	ヒルガオ	(ヒルガオ科)
ナガバカワヤナギ	(ヤナギ科)	ヒレハリソウ	(ムラサキ科)
ナズナ	(アブラナ科)	ヒラトツツジ	(ツツジ科)
ナワシロイチゴ	(バラ科)	フジアザミ	(キク科)
ナンバンハコベ	(ナデシコ科)	ヘクソカズラ	(アカネ科)
ニガイチゴ	(バラ科)	ベニバナボロギク	(キク科)
ニシキソウ	(トウダイグサ科)	ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)
ニワゼキショウ	(アヤメ科)	ホウキギク	(キク科)
ニワトコ	(スイカズラ科)	ホソバアキノノゲシ	(キク科)
ネズミノオ	(イネ科)	ポタンヅル	(キンポウゲ科)
ヌカキビ	(イネ科)	ホトケノザ	(シソ科)
ノイバラ	(バラ科)	マツヨイグサ	(アカバナ科)
ノキシノブ	(ウラボシ科)	ママコノシリヌグイ	(タデ科)
ノカンゾウ	(ユリ科)	マメグンバイナズナ	(アブラナ科)
ノコンギク	(キク科)	マユミ	(ニシキギ科)
ノダイオウ	(タデ科)	マンネングサ	(ベンケイソウ科)
ノビル	(ユリ科)	ミゾソバ	(タデ科)
ノブドウ	(ブドウ科)	ミツバアケビ	(アケビ科)
ノミノツヅリ	(ナデシコ科)	ミツバツチグリ	(バラ科)
ノミノフスマ	(ナデシコ科)	ミナモトソウ	(バラ科)
ハキダメギク	(キク科)	ミミナグサ	(ナデシコ科)
ハコベ	(ナデシコ科)	ムシトリナデシコ	(ナデシコ科)
ハゼ	(ウルシ科)	ムラサキサギゴケ	(ゴマノハグサ科)
ハタザオ	(アブラナ科)	メドハギ	(マメ科)
ハッカ	(シソ科)	メヒシバ	(イネ科)
ハルジオン	(キク科)	メマツヨイグサ	(アカバナ科)
ハルノノゲシ	(キク科)	メヤブマオ	(イラクサ科)
ヒイラギナンテン	(メギ科)	ヤエムグラ	(アカネ科)
ヒガンバナ	(ヒガンバナ科)	ヤノネグサ	(タデ科)
ヒメオドリコソウ	(シソ科)	ヤハズソウ	(マメ科)
ヒメクズ	(マメ科)	ヤブガラシ	(ブドウ科)
ヒメジョオン	(キク科)	ヤブジラミ	(セリ科)

ヤブヘビイチゴ	(バラ科)
ヤブマオ	(イラクサ科)
ヤブマメ	(マメ科)
ヤマノイモ	(ヤマノイモ科)
ヤマフジ	(マメ科)
ユウガギク	(キク科)
ユーカリ	(フトモモ科)
ユキノシタ	(ユキノシタ科)
ヨウシュヤマゴボウ	(ヤマゴボウ科)
ヨメナ	(キク科)
ヨモギ	(キク科)
リュウノヒゲ	(ユリ科)
レンリソウ	(マメ科)
ワスレグサ	(ユリ科)
ワラビ	(ウラボシ科)
ワレモコウ	(バラ科)



ユウガギク (キク科)



ノコンギク (キク科)

## 18 明星山の植物

明星山は富士宮駅の南約4 kmのところにある標高224.6 mの山である。周辺は「明星山公園」として整備され、市民の憩いの場として親しまれている。

公園内には遊歩道が設けられサクラ、ヒノキ、カエデ、クリ、スギ、シイなどの林の下で四季の野草が観察できる。

市内でも特異な存在としては、夏に淡紅色の花をつけるコガンピが見られる。また、以前は群生していたオキナグサも人の手により他の土地から移植されたと言う株が数本見られる。

以下、主な植物をあげる。

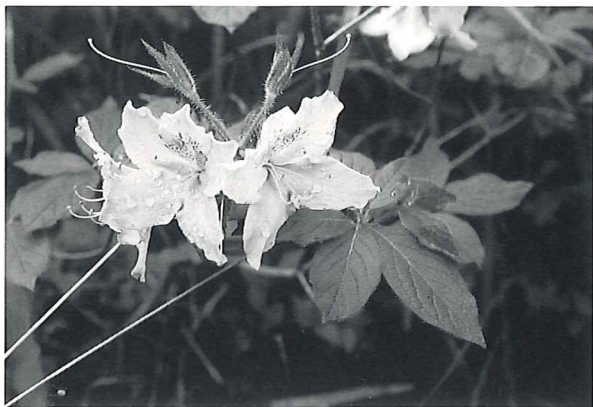
アカメガシワ	(トウダイグサ科)
アリノトウグサ	(アリノトウグサ科)
イカリソウ	(メギ科)
イヌザンショウ	(ミカン科)
オカトラノオ	(サクラソウ科)
オキナグサ	(キンポウゲ科)
オケラ	(キク科)
オトギリソウ	(オトギリソウ科)
オトコエシ	(オミナエシ科)
オドリコソウ	(オトギリソウ科)
オニタビラコ	(キク科)
オノオレ	(カバノキ科)
カタバミ	(カタバミ科)
ガマズミ	(スイカズラ科)
カラマツソウ	(キンポウゲ科)
カワラマツバ	(アカネ科)
キキョウ	(キキョウ科)
キジムシロ	(バラ科)
キランソウ	(シソ科)
キンラン	(ラン科)
クズ	(マメ科)
クマイチゴ	(バラ科)
クマヤナギ	(クロウメモドキ科)



クロモジ	(クスノキ科)	ハルジオン	(キク科)
コウリンカ	(キク科)	ヒトリシズカ	(センリョウ科)
コガンピ	(ジンチョウゲ科)	ヒメハギ	(ヒメハギ科)
コゴメウツギ	(バラ科)	フタバハギ	(マメ科)
コナスビ	(サクラソウ科)	フタリシズカ	(センリョウ科)
コマツナギ	(マメ科)	ヘクソカズラ	(アカネ科)
ゴンズイ	(ミツバウツギ科)	ホウチャクソウ	(ユリ科)
ササユリ	(ユリ科)	ボケ	(バラ科)
サルトリイバラ	(ユリ科)	ホタルブクロ	(キキョウ科)
サワフタギ	(ハイノキ科)	ミツバツチグリ	(バラ科)
シオデ	(ユリ科)	ミミナグサ	(ナデシコ科)
シラカシ	(ブナ科)	ムラサキシキブ	(クマツヅラ科)
シラヤマギク	(キク科)	モチツツジ	(ツツジ科)
スイカズラ	(スイカズラ科)	ヤクシソウ	(キク科)
スズメノヤリ	(イグサ科)	ヤブコウジ	(ヤブコウジ科)
センボンヤリ	(キク科)	ヤマハッカ	(シソ科)
ダイコンソウ	(バラ科)	ヤマツツジ	(ツツジ科)
タカトウダイ	(トウダイグサ科)	ヤマユリ	(ユリ科)
タガネソウ	(カヤツリグサ科)	リュウノウギク	(キク科)
タケニグサ	(ケシ科)		
タツナミソウ	(シソ科)		
タマアジサイ	(ユキノシタ科)		
タムラソウ	(キク科)		
タラノキ	(ウコギ科)		
チヂミザサ	(イネ科)		
ツリガネニンジン	(キキョウ科)		
ツルウメモドキ	(ニシキギ科)		
トウワタ	(ガガイモ科)		
ナワシロイチゴ	(バラ科)		
ニガイチゴ	(バラ科)		
ニガナ	(キク科)		
ノアザミ	(キク科)		
ノダケ	(セリ科)		
ノブドウ	(ブドウ科)		
ハナイカダ	(ミズキ科)		
バライチゴ	(バラ科)		



コガンピ (ジンチョウゲ科)



モチツツジ (ツツジ科)

## 19 貫戸東側の丘陵地の植物

高原は富士市へ向かう道路に沿って家並みがならぶ部落だが、茶畑が多くよく手入れされている。そんな中にスギ、ヒノキの小さな林や、雑木林をかかえる貫戸東側の丘陵地へ足を踏み入れてみた。種類は多くなかったがイカリソウが割り合いに多く目についた。

以下、主な植物をあげる。

アカネスミレ	(スミレ科)	キツネノアザミ	(キク科)
アマドコロ	(ユリ科)	キュウリグサ	(ムラサキ科)
イカリソウ	(メギ科)	クヌギ	(ブナ科)
イシミカワ	(タデ科)	クロモジ	(クスノキ科)
イチリンソウ	(キンポウゲ科)	コゴメウツギ	(バラ科)
イヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)	コナラ	(ブナ科)
ウマノアシガタ	(キンポウゲ科)	ゴズイ	(ミツバウツギ科)
ウラシマソウ	(サトイモ科)	サルトリイバラ	(ユリ科)
エゾノギシギシ	(タデ科)	シュンラン	(ラン科)
エノキ	(ニレ科)	ショカツサイ	(アブラナ科)
オオイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)	スミレ	(スミレ科)
オトコヨモギ	(キク科)	タチツボスミレ	(スミレ科)
オニタビラコ	(キク科)	タツナミソウ	(シソ科)
カキドオシ	(シソ科)	タネツケバナ	(アブラナ科)
カラスノエンドウ	(マメ科)	タラノキ	(ウコギ科)
カンゾウ	(ユリ科)	タンポポ	(キク科)
ギシギシ	(タデ科)	ツリガネニンジン	(キキョウ科)
		トウカイタンポポ	(キク科)
		トウゲシバ	(ヒカゲノカズラ科)
		ナズナ	(アブラナ科)
		ナルコユリ	(ユリ科)
		ナワシロイチゴ	(バラ科)
		ニンリンソウ	(キンポウゲ科)
		ニワゼキショウ	(アヤメ科)
		ノアザミ	(キク科)
		ノゲシ	(キク科)
		ノダイオウ	(タデ科)
		ハコベ	(ナデシコ科)
		ハナイカダ	(ミズキ科)
		ハナイバナ	(ムラサキ科)
		バライチゴ	(バラ科)
		ハリエンジュ	(マメ科)
		ハルジオン	(キク科)
		ハンカイソウ	(キク科)
		ヒサカキ	(ツバキ科)
		ヒトリシズカ	(センリョウ科)

ヒメウズ	(キンポウゲ科)
フタリシズカ	(センリョウ科)
ホオコグサ (ハハコグサ)	(キク科)
ボケ	(バラ科)
ホシダ	(ヒメシダ科)
ホトトギス	(ユリ科)
ホラシノブ	(ホングウシダ科)
マムシグサ	(サトイモ科)
マルバコンロンソウ	(アブラナ科)
ムラサキケマン	(ケシ科)
ヤブコウジ	(ヤブコウジ科)
ヤブタバコ	(キク科)
ヤブレガサ	(キク科)
ヤマルリソウ	(ムラサキ科)
リュウノウギク	(キク科)



ヒメウズ (キンポウゲ科)





## あ と が き

昭和 59 年に発足した富士宮市域自然調査研究会は、地形・地質部会 6 名、気象部会 4 名、陸生動物部会 5 名、水生動物部会 5 名、植物部会 5 名の計 25 名により組織されている。各調査研究員は、市内の小中学校に勤務する先生方が中心の、在野の自然科学者であり、調査研究は、仕事の合間を有効に利用して行われた。調査研究開始時は、広大な市域のどこから、何から手を付けるべきか等、当惑することが多く、素人調査と同様であったが、時を経るごとに体系的に進めることができた。

昭和 63 年の第一次自然調査研究報告において、多くの重要な結果を見い出せたことは、富士宮市の自然を科学的に究明するひとつのステップになると考える。

引き続いて、昭和 62 年からは第二次自然調査研究を始めた。この調査は、第一次自然調査研究で行った調査方法などを踏襲するとともに自然の移り変わりなどを主目的に調査を行った。

今後も、自然の実態を把握するうえで、継続してこのような調査を行うことを願うものである。

終わりに、調査研究にあたり積極的なご協力をいただいた市当局の方々、貴重な資料を提供して下さった皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 7 年 3 月

富士宮市域自然調査研究会 会長 佐 野 登

## 富士宮市域自然調査研究会研究員名簿

(○印 部会長)

会 長	佐 野 登		
副 会 長	日 原 章	加 納 實	
”	近 藤 朗	石 川 鐵 夫	
特 別 研 究 員	小 川 賢之輔		
顧 問	塩 川 隆 司		
地形・地質部会	○加 納 實	遠 藤 英 男	
	植 松 征 矢	惟 村 勝	
	小 林 睦	小 川 賢之輔	
陸生動物部会	○日 原 章		
	渡 辺 徳 重	影 山 秀 雄	
	阿 部 英 雄	城 内 博 司	
協力調査員	平 井 克 男	望 月 進	
	佐 野 雅 則		
水生動物部会	○石 川 鐵 夫		
	神 田 幸 作	山 本 満	
	石 川 邦 憲	遠 藤 茂 基	
気 象 部 会	○近 藤 朗	木 下 富 之	
	佐 野 幸 弘	久 高 知 博	
植 物 部 会	○佐 野 登		
	渡 辺 直 亨	朝 比 奈 典 夫	
	小 林 久 男	佐 野 光 雄	

# 富士宮市の自然

## 第二次富士宮市域自然調査研究報告書

---

発行 富士宮市

静岡県富士宮市弓沢町 150 番地

電話 <0544> 22-1111 (代)

監修 富士宮市域自然調査研究会

編集 富士宮市都市開発部水とみどりの課

印刷 黒船印刷株式会社  
〒422 静岡県静岡市登呂 2 丁目 4 番 25 号

---

発行日 平成 7 年 3 月 31 日

